栃木県埋蔵文化財調査報告第70集

一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鷹の巣前遺跡
本郷前遺跡
向野原遺跡

1985

栃木県教育委員会
財団法人　栃木県文化振興事業団

一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鷹の巣前遺跡
本郷前遺跡
向野原遺跡

栃木県教育委員会
財団法人　栃木県文化振興事業団

序

一般国道四号は，東京都中央区日本橋を起点とし，埼玉，茨城，栃木，福島，宮城，岩手の各県を通過し，青森市に至る我が国最長の国道でありますが，近年の産業・経済の発展，人口の集中等から交通量の伸びは著しく，混雑を極めることも多くなりました。このため一般国道四号の交通混雑の緩和をはかる目的のもとに昭和44年に新四号国道の建設が計画されました。

新四号国道は埼玉県越谷市から栃木県宇都宮市に至る約82kmに建設されることになり，本県内は，小山市，国分寺町，南河内町，上三川町，宇都宮市の二市三町を縦貫し，当該通過地内には埋蔵文化財の包蔵地がかなり認められるため，昭和44年より，その取り扱いについて建設省関東地方建設局，宇都宮国道工事事務所，栃木県教育委員会の三者による協議がなされ，栃木県教育委員会が発掘調査の主体者となり記録保存の調査を実施することとなり，現在までに南河内町所在の薬師寺南遺跡，宇都宮市所在の猿山遺跡の発掘調査，報告書作成が完了しております。

今回報告する，小山市所在の鷹の巣前遺跡，本郷前遺跡については昭和55年度に栃木県教育委員会が，向野原遺跡については昭和56年度に（財）栃木県文化振興事業団が発掘調査を実施いたしました。また，遺物整理，報告書作成については，上記３遺跡をまとめて同事業団が一括して行ない大きな成果をあげました。今般，ここにその発掘調査報告書が完成いたしましたので，各方面におかれまして御活用いただければ幸甚であります。

最後に発掘調査に際して終始御協力をいただきました。建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所，栃木県教育委員会，小山市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申しあげます。

昭和60年３月

財団法人 栃木県文化振興事業団
理事長 渡 辺 文 雄

例　言

1．本書は，一般国道４号（新４号国道）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち小山市域に所在する遺跡（鷹の巣前遺跡・本郷前遺跡・向野原遺跡）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は建設省関東地方建設局の委託を受け，昭和55年度は栃木県教育委員会が鷹の巣前・本郷前遺跡の発掘調査を実施し，昭和56年度からは栃木県教育委員会の指導を受け，財団法人栃木県文化振興事業団が，向野原遺跡の調査を実施した。

3．遺物整理は，建設省関東地方建設局の委託を受け，栃木県教育委員会の指導のもと，財団法人栃木県文化振興事業団が昭和58年度に実施した。

4．発掘調査から遺物整理・報告書作成費は全て，建設省関東地方建設局の負担による。

5．発掘調査・遺物整理・報告書作成は下記の職員がおこなった。

鷹の巣前遺跡・本郷前遺跡（昭和55年度）

川原由典（栃木県教育委員会文化課技師）

初山孝行（　〃　　〃　　〃　調査員）

芹澤清八（　〃　　〃　　〃　　〃　）

向野原遺跡（昭和56年度）

川原由典（（財）栃木県文化振興事業団技師）

藤田典夫（　〃　　〃　　〃　　〃　）

6．鷹の巣前遺跡・本郷前遺跡・向野原遺跡出土の遺物・図面等は（財）栃木県文化振興事業団で保管している。

7．発掘調査の実施にあたっては，建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所，小山市教育委員会，出井地区住民・中久喜地区住民の協力を得た。

8．本報告書は下記により分担執筆とした。

川原由典—Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ—１，２，３～イ(石製模造品)・ロ，４（石製模造品について・土壙について）

初山孝行—Ⅳ—３～ロ・ハ，４（歴史時代住居跡について）

芹澤清八—Ⅳ—３～イ，４（本郷前遺跡の先土器時代の遺物について）

藤田典夫—Ⅴ—３～イ（遺構・遺物），４（土器について）

目　次

序

例　言

Ⅰ　調査に至るまでの経過…… 1

Ⅱ　遺跡の環境…… 2

1．地理的環境…… 2

2．歴史的環境…… 3

Ⅲ　鷹の巣前遺跡の発掘調査……11

1．調査方法……11

2．調査日誌……11

3．まとめ……11

Ⅳ　本郷前遺跡の発掘調査……13

1．調査方法……13

2．調査日誌……13

3．遺構と出土遺物……22

イ．先土器時代……22

ロ．歴史時代……42

ハ．その他……51

4．まとめ……56

Ⅴ　向野原遺跡の発掘調査……67

1．調査方法……67

2．調査日誌……67

3．遺構と出土遺物……74

イ．古墳時代……74

ロ．土壙…… 109

4．まとめ…… 133

挿 図 目 次

鹿の巣前遺跡・本郷前遺跡・向野原遺跡

第１図　附近の遺跡と新４号国道関連遺跡……5

本郷前遺跡

第１図　本郷前遺跡地形図（折り込み）……15
第２図　本郷前遺跡全体図（折り込み）……17
第３図　先土器時代調査区及びブロック配置図……22
第４図　表土中出土石器……23
第５図　層位と文化層……24
第６図　石器分布図及び出土層位……26
第７図　第Ⅰブロック遺物分布図……30
第８図　第Ⅰブロック出土石器及び剥片（3/5）……31
第９図　第Ⅱブロック内出土石器分布図……33
第10図　第Ⅱブロック内出土石器(3/5)……34
第11図　第Ⅱブロック内出土石器(3/5)……35
第12図　第Ⅱブロック内出土石器(3/5)……36
第13図　破砕礫の分布及びその接合関係……38
第14図　１号住居跡実測図……42
第15図　１号住居跡カマド実測図……43
第16図　２号住居跡・１号遺構実測図……45
第17図　２号住居跡カマド実測図……46
第18図　２号住居跡出土遺物実測図……47
第19図　３号住居跡実測図……48
第20図　３号住居跡カマド実測図……49
第21図　３号住居跡出土遺物実測図……50
第22図　４号住居跡実測図……51
第23図　４号住居跡カマド実測図……52

第24図　1号土壙実測図……53
第25図　2号・3号土壙実測図……53
第26図　4号土壙実測図……54
第27図　各グリット・トレンチ内出土遺物実測図……55
第28図　本郷前遺跡出土石器……57
第29図　星の宮A・塙B遺跡出土石器……59
第30図　八幡根東遺跡出土石器……61

向野原遺跡

第1図　向野原遺跡地形図（折り込み）……69
第2図　向野原遺跡全体図（折り込み）……71
第3図　SI-01実測図……75
第4図　SI-01セクション・エレベーション実測図……76
第5図　SI-01炉跡実測図……77
第6図　SI-01出土遺物実測図……78
第7図　SI-01出土遺物実測図……79
第8図　SI-01出土遺物実測図（剣）……80
第9図　SI-01出土遺物実測図（剣）……81
第10図　SI-01出土遺物実測図（有孔円板）……82
第11図　SI-01出土遺物実測図（有孔円板）……83
第12図　SI-01出土遺物実測図（勾玉）……84
第13図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）……86
第14図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）……87
第15図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）……88
第16図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）……89
第17図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）……90
第18図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）……91
第19図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）……92
第20図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）……93
第21図　SI-01出土遺物実測図（管玉）……93
第22図　SI-01出土遺物実測図（砥石・不明石製品・土製品）……94
第23図　SI-01出土遺物実測図（剥片）……95
第24図　SI-01出土遺物実測図（剥片）……96

第25図　SI-01出土遺物実測図（剥片）……97
第26図　SI-01出土遺物実測図（剥片）……98
第27図　SI-01出土遺物実測図（剥片）……99
第28図　SI-02実測図……100
第29図　SI-02炉跡実測図……100
第30図　SI-02出土遺物実測図……101
第31図　SI-02出土遺物実測図……102
第32図　SI-02・04・05出土遺物実測図（臼玉・有孔円板・勾玉・砥石）……103
第33図　SI-02出土遺物実測図（原材）……104
第34図　SI-04実測図……105
第35図　SI-04炉跡実測図……105
第36図　SI-05実測図……106
第37図　SI-05炉跡実測図……107
第38図　SI-05出土遺物実測図……107
第39図　SI-06実測図……108
第40図　SI-06炉跡実測図……109
第41図　SI-06出土遺物実測図……109
第42図　土壙群全体図（折り込み）……111
第43図　SK-01・02・03A・04A・05実測図……110
第44図　SK-03B・04B・06・07・08・09・10・11実測図……114
第45図　SK-12・13A・13B・22・23・24・25・26・27実測図……115
第46図　SK-14・15・16・17・18・19・20・21実測図……116
第47図　SK-28・29・31実測図……119

写真図版目次

本郷前遺跡

図版1　1.本郷前遺跡土層位状況
2.先土器時代石器・剥片集中出

図版9　1.2号住居跡完掘状況
2.2号住居跡遺物出土状況

土区全景
図版２　1.先土器時代石器・剥片集中出土区（部分）
2.先土器時代石器・剥片集中出土区（部分）
図版３　1.先土器時代石器・剥片集中出土区（部分）
2.先土器時代石器・剥片集中出土区全景（上位遺物除去後）
図版４　1.先土器時代石器・剥片集中出土区（部分）
2.先土器時代石器・剥片集中出土区
図版５　1.石器出土状況
2.石器出土状況
図版６　1.石器出土状況
2.石器出土状況
図版７　1.１号・２号住居跡関連状況(手前が１号)
2.１号住居跡完掘状況
図版８　1.１号住居跡カマド完掘状況
2.　２号住居跡・１号遺構完掘状況（左が１号遺構）
図版10　1.３号住居跡完掘状況
2.４号住居跡完掘状況
図版11　1.１号遺構埋土状況
2.２号土壙完掘状況
図版12　1.２号土壙埋土状況
2.３号土壙埋土状況
図版13　1.２号・３号土壙完掘状況
2.４号土壙完掘状況
図版14　1.表土中出土石器
2.同裏面
図版15　1.第Ⅰ・第Ⅱブロック内出土石器
2.同裏面
図版16　1.第Ⅰ・第Ⅱブロック内出土石器
2.同裏面
図版17　1.第Ⅱブロック内出土石器
2.同裏面
図版18　1.破砕礫接合関係
2.同裏面
図版19　1.破砕礫接合関係
図版20　1.２号住居跡出土遺物
2.２号住居跡出土遺物
3.トレンチ内出土遺物
4.トレンチ内出土遺物

向野原遺跡

図版１　1.SI－01（後方）とSI－02（手前）
2.　2.SI－01遺物出土状況
図版２　1.南東コーナ附近出土遺物状況
2.SI－01の貯蔵穴と出土遺物状況
図版17　1.SK－04A・05完掘状況（手前が04A）
2.SK－04B完掘状況
図版18　1.SK－06完堀状況
2.SK－07完掘状況
図版19　1.SK－08完掘状況

図版3　1.SI-01の貯蔵穴と出土遺物状況
2.SI-01出土遺物状況
図版4　1.SI-01出土遺物状況（有孔円板）
2.SI-01出土遺物状況（勾玉・有孔円板）
図版5　1.SI-01出土遺物状況（剣）
2.SI-01出土遺物状況（勾玉）
図版6　1.SI-01出土遺物状況（勾玉）
2.SI-01出土遺物状況（剣）
図版7　1.SI-01の南壁沿い出土の粘土帯内の滑石片
2.SI-01南壁沿いの粘土帯
図版8　1.SI-01北壁沿いの焼土塊
2.SI-01の貼り床断面
図版9　1.SI-01の炉跡
2.SI-01全景（貼り床除去後）
図版10　1.SI-02内埋土状況
2.SI-02遺物出土状況
図版11　1.SI-02遺物出土状況
2.SI-02の貯蔵穴
図版12　1.SI-02の炭化材出土状況
2.SI-02炉跡
図版13　1.SI-02完掘状況
2.SI-04完掘状況
図版14　1.SI-05完掘状況
2.SI-06完掘状況
図版15　1.土壙群全景
2.SK-01完掘状況
図版16　1.SK-02完掘状況
2.SK-03A完掘状況
2.SK-09完掘状況
図版20　1.SK-10完掘状況
2.SK-11完掘状況
図版21　1.SK-13A・13B・16～21完掘状況
2.SK-14・15・16の切り合い状況
図版22　1.SK-22・23完掘状況(手前が23)
2.SK-24完掘状況
図版23　1.SK-25・26完掘状況(手前が26)
2.SK-27完掘状況
図版24　1.SK-28完掘状況
2.SK-29完掘状況
図版25　1.SK-03B完掘状況
2.SK-31完掘状況
図版26　1.SI-01出土土器
図版27　1.SI-01出土石製模造品(剣)
2.SI-01出土石製模造品（有孔円板）
図版28　1.SI-01出土石製模造品(勾玉)
2.SI-01出土石製模造品(臼玉)
3.SI-01出土石製模造品（上は管玉・下は不明品）
図版29　1.SI-02出土土器
図版30　1.SI-02出土滑石の原材
図版31　1.SI-02出土石製模造品（有孔円板・臼玉）
2.SI-04出土石製模造品（勾玉・臼玉）と砥石
3.SI-05出土石製模造品（有孔円板・臼玉）

Ⅰ　調査に至るまでの経過

一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴なう埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについての照会は，昭和44年７月７日に建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所から栃木県教育委員会になされたのが最初であった。この照会により，昭和44年７月～８月，昭和53年９月の２度にわたり新４号国道建設予定地内の埋蔵文化財の所在の有無について調査を実施した。その結果，宇都宮市地区に猿山遺跡・久部台古墳群，南河内町地区に薬師寺南遺跡，小山市地区に鷹の巣前遺跡・本郷前遺跡・向野原遺跡・八幡根東遺跡・中久喜遺跡・横倉宮内遺跡・谷中島遺跡・宿尻遺跡・長谷遺跡・西浦遺跡・東野田遺跡・六軒遺跡の都合15遺跡の所在が確認された。これらの遺跡の取り扱いについては建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所と栃木県教育委員会との度重なる打ち合せの結果，発掘調査は小山市地区と小山市地区以北に分割して小山市地区以北から調査を実施することとなった。この結果，宇都宮市地区の猿山遺跡・久部台古墳群については，昭和49年度から発掘調査に着手し，遺物整理・報告書作成がなされ，昭和56年３月刊の栃木県埋蔵文化財調査報告第39集「猿山遺跡付久部台古墳群」栃木県教育委員会として報告がなされ，南河内町地区の薬師寺南遺跡については，昭和48年度から発掘調査に着手し，遺物整理・報告書作成がなされ，昭和54年３月刊の栃木県埋蔵文化財調査報告書第23集「薬師寺遺道跡」栃木県教育委員会として報告がなされた。これらの３遺跡の発掘調査，遺物整理，報告書作成と並行して小山市地区内所在の12遺跡の取り扱いについても建設省関東地方建設局宇都宮国道事務所と協議を重さね，栃木県の県南を茨城県から群馬県に横断する一般国道50号を境に50号以北・50号以南とに分け，道路建設工事を優先させる50号以北の５遺跡（鷹の巣前・本郷前・向野原・八幡根東・中久喜）について発掘調査を実施することとなり，調査は昭和55年度から開始することとなった。これに伴ない調査経費の昭和55年度当初予算計上をおこない，鷹の巣前遺跡から発掘調査を行なうこととなった。昭和55年度は，昭和55年４月26日付け，文化第45号により委託契約名・鷹の巣前遺跡等発掘調査（委託期間・昭和55年４月４日～昭和56年３月31日）により鷹の巣前遺跡，本郷前遺跡，向野原遺跡（確認調査）に対して調査がなされた。

昭和56年度は，栃木県教育委員会にとって注目される年度となった。それまで調整，発掘調査，遺物整理，報告書作成の４つの大きな仕事を行なっていた栃木県教育委員会文化課文化財調査係が，昭和56年４月１日に発足した財団法人栃木県文化振興事業団と協力して埋蔵文化財の保護にあたることとなった。これにより，各種開発行為との調整は栃木県

教育委員会文化課文化財調査係が，発掘調査，遺物整理，報告書作成を，(財) 栃木県文化振興事業団文化財調査部が実施することとなった。これにより国，県，公団，公社等の発掘調査については，栃木県教育委員会の指導及び推薦をうけて当該機関と財団が直接に委託契約を締結する方向づけがなされた。これにともない，昭和56年度は，昭和56年５月12日付け，栃文事第25号により委託契約名・鷹の巣前遺跡等第二次発掘調査（委託期間・昭和56年４月10日～昭和57年３月31日）により，向野原遺跡（本調査），八幡根東遺跡（第一次調査）に対しての調査がなされた。

昭和57年度は，昭和57年４月20日付け，栃文事第51号により委託契約名・一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財（鷹の巣前遺跡等）の第三次発掘調査（委託期間・昭和57年４月20日～昭和58年３月31日）として，八幡根東遺跡（第二次調査），中久喜遺跡の調査が実施された。この間３年にわたる発掘調査の結果，一般国道50号以北の発掘調査については終了したが，出土遺物については未整理の状態であった。

昭和58年度からは３年間の発掘調査により出土した遺物整理をおこなった。まず昭和58年４月15日付け，栃文事第５号により委託契約名・一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財（鷹の巣前遺跡等）の第四次発掘調査（委託期間・昭和58年４月15日～昭和59年３月31日）として，昭和55年度，昭和56年度に発掘調査を実施した鷹の巣前遺跡，本郷前遺跡，向野原遺跡の遺物整理を行なった。

昭和59年度は，昭和59年４月11日付け，栃文事第46号により，委託契約名・一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財（鷹の巣前遺跡等）第五次発掘調査（報告書作成）として，鷹の巣前遺跡，本郷前遺跡，向野原遺跡の報告書作成をおこなった。

今後は昭和56年度，57年度に発掘調査を実施した八幡根東遺跡，中久喜遺跡の遺物整理，報告書作成を実施していく予定である。

Ⅱ　遺跡の環境

１．地理的環境（第１図）

鷹の巣前遺跡および本郷前遺跡は，小山市鉢形字鷹の巣前に，向野原遺跡は，小山市上野原・中久喜に所在し，南北に若干の距離をおいてに点々と位置する。

遺跡は，関東平野の一部を占める県中央部を南北に連なる台地と低地からなる中央部平地のうちの県南部に位置する。これらの台地，低地は，鹿沼台地の東に位置する県都宇都宮市から小山市南部にわたり，東西６～７kmの幅で分布しており宝木台地と呼称されるも

のである。台地面の高度は北高南低を呈し，台地面上には広い平坦面が残っている。台地は東縁を田川の低地に，西縁を思川の低地により境とされている。

遺跡はこの台地上を蛇行しながら南流する西仁連川（江川）により開析された台地上に点々と位置する。鷹の巣前遺跡，本郷前遺跡は侵食谷にはさまれた南北に走る幅約 400m の台地背部にあり，標高約44mで，水田面からの比高差 3 mである。また両遺跡を分ける様に東西に延びる浅い支谷によって融てられている。

向野原遺跡は，南に舌状に突出した台地の先端部から東端に沿って位置し，標高約41mで，水田面からの比高3～5 mを測る。

2．歴史的環境（第1図）

田川により東縁を，思川により西縁の境をもつ小山市域内の宝木台地及び，沖積低地には，旧石器時代から奈良・平安時代，中・近世に至るまでの数多くの遺跡が確認されている。特に鷹の巣前遺跡，本郷前遺跡，向野原遺跡の立地する台地は，蛇行しながら南流する西仁連川（江川）によって開折され，遺跡の立地に好条件を示す舌状の台地を作り出している。特に谷奥，台地縁辺，舌状台地先端にはその傾向が顕著に認められ，点々と列をなすがごとく遺跡の存在が知られている。しかし台地内部にゆくにつれて遺跡の分布密度は希薄になる傾向が認められる。

第1図は主として栃木県内を中心として発掘調査及び所在確認のなされているものをプロットしたものである。遺跡は旧石器時代から中・近世までの集落跡・城跡および散布地であり，古墳も含まれている。これらのうち，1・鷹の巣前遺跡，2・本郷前遺跡，3・向野原遺跡は今回報告するものである。

最初に上記1～3の遺跡の他に，新4号国道建設に伴ない発掘調査が実施された遺跡の概要から記すと，

4．八幡根東遺跡　第1次調査が昭和56年度に，第2次調査が昭和57年度に実施された。南北に舌状に突出する台地中央部から先土器時代の石器等集中地点9個所，弥生時代の住居跡2軒，古墳時代後半～奈良・平安時代の住居跡60軒以上の他に，掘立柱建物跡，土壙，井戸跡などが検出されている。特に先土器時代の石器等集中地点が9個所も同時に確認されたのは県内では初めてのことであり，今後の研究に寄与することは大である。

5．中久喜遺跡　9の八幡根遺跡を狭義の範囲（新4号国道建設予定地内のみ）としたもので，台地の東南端が半円状に突出する傾斜地に位置している。調査は昭和57年度におこなわれ，古墳時代中・後期，奈良，平安時代の住居跡が65軒余，井戸跡，土壙等が確

認されている。住居跡のうち古墳時代中期に属するうちの１軒は，向野原遺跡SI−01と同じ石製模造品を多量に出土しており，製作工房跡と考えられている。中久喜遺跡，向野原遺跡は直線距離にして約 1.5kmであり，同じ石製模造品製作工房跡が検出されたことは，この周辺における石製模造品製作遺跡の集中的分布が考えられるのではないかと思われる。

また栃木県内ではないが，新４号国道建設予定地内の茨城県において，中久喜遺跡よりさらに南へ約 1.2kmの結城市本田林地区の，57　本田遺跡[1]の調査が昭和57年度におこなわれ，古墳時代中期の住居跡１軒が検出されている。

以上が現在まで発掘調査がおこなわれているものであるが，この他に図示し得た範囲に遺跡の所在が確認されているものがある。これらを含めて周辺における遺跡分布の特徴と鷹の巣前遺跡，本郷前遺跡との関係を少し考えてみたい。

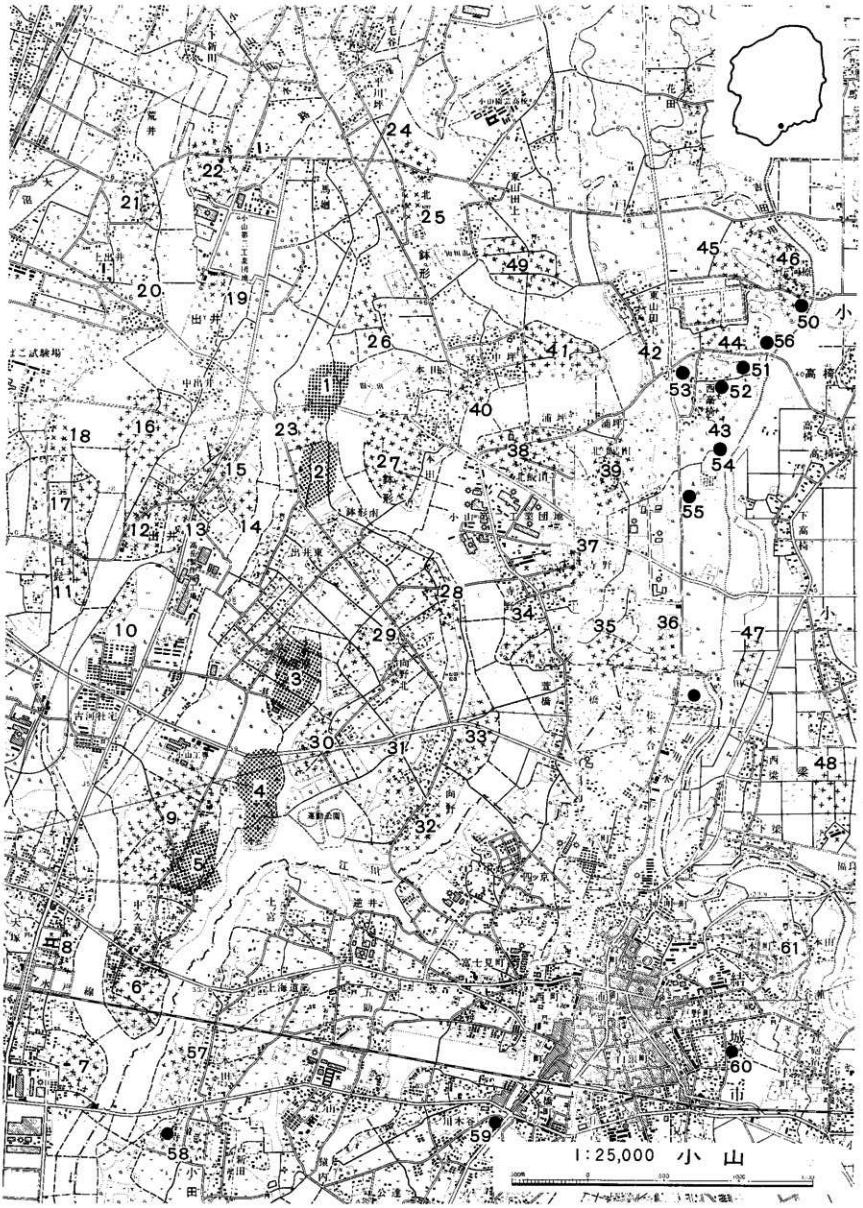
先土器時代についてみると，本郷前遺跡からは，槍，ナイフ，エンドスクレーパー，グレーバーなどの出土がある。４の八幡根東遺跡からは，ナイフ等の出土がある。また５の中久喜遺跡からはフレイク等が出土しており，広義の９の八幡根遺跡から先土器時代の遺物が出土する可能性は高い。16の本郷前遺跡[2]からはポイントが，19の本郷北浦遺跡からはナイフ，ブレイド等が，34の西野台遺跡からはポイントが出土しており，点々とではあるが遺跡が確認されており，今後も増加する地区とみられる。これらを考えた場合，遺跡の性格及び遺跡間の関連を考える上でより重要な資料を提供する地区と考えられる。

３の向野原遺跡の古墳時代中期より先行する遺物の出土のあるものは，12の明光Ａ遺跡，35の寺野遺跡から五領式期の土器片の散布があることが知られているにすぎない。その他に古墳時代中期の和泉式期の土器片の出土が知られている遺跡は，７の下犬塚遺跡，19の本郷北浦遺跡とこの時期のものはあまりその存在は確認されていない。

２の本郷前遺跡から検出された，奈良，平安時代に属する遺物の検出される遺跡は多く，地図上にプロットした中から万遍なく認められる。しかしこれらは全て発掘調査の手は加えられていない。４の八幡根東遺跡，５の中久喜遺跡から何軒か検出されているにすぎない。

この他に古墳などは西仁連川（江川）水系に沿っては確認されていないが，さらに東を南流する田川及び鬼怒川の沖積地を望む台地上には６世紀代に構築されたと考えられる絹４号墳や７世紀代に構築されたと考えられる高椅４号墳などを中心として１つの群集を形成している地区がある。

以上が栃木県内における歴史的環境の一部であるが，南流する西仁連川（江川）を県境として茨城県結城市と接している。結城市域の遺跡の分布についての詳細な資料がないため，図示し得たのは新４号国道の建設関連で調査された57の本田遺跡の他に58〜62の５遺



第1図　附近の遺跡と新4号国道関連遺跡

跡である。これらはいずれも古墳，城跡であり，集落跡ないし，散布地ではない。しかし私達が図示した1～5の遺跡の発掘調査期間中に附近を踏査したところでは，西仁連川(江川）に面する丘陵上にはかなりの遺物の散布がみとめられていることが明らかになっている。

周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	備考
1	鷹の巣前	散布地	奈・平	発掘
2	本郷前	集落跡	先・平	〃
3	向野原	〃	古	〃
4	八幡根東	〃	先・弥・古・奈・平	〃
5	中久喜	〃	古・奈・平	〃
6	中久喜城	散布地	縄～平・中世	
7	下犬塚	〃	縄・奈・平	
8	往還南	〃	弥・奈・平・中近世	
9	八幡根	集落跡	古・奈・平	中久喜遺跡の総称
10	西山	散布地	古～平	
11	下壱丁B	〃	弥～平	
12	明光A	集落跡	弥～五領	
13	明光B	〃	縄・弥～平	
14	東本郷	散布地	弥～中近世	
15	巽本郷	〃	奈・平	
16	本郷前	〃	弥～平	
17	下壱丁A	〃	〃 〃	
18	白打	〃	〃 〃	
19	本郷北浦	〃	縄～平	
20	古光	〃	弥～平	
21	神明	〃	古～平	
22	向田	〃	縄～平	
23	鷹の巣前	〃	〃 〃	
24	小金井道東A	集落跡	〃 〃	

番号	遺跡名	種別	時代	備考
25	小金井道東B	集落跡	縄～平	
26	上野原	〃	奈・平	
27	鉢形	〃	縄～平	
28	向野上野原A	〃	〃 〃	
29	上野原北	散布地	奈・平	
30	向野上野原B	集落跡	縄～平	
31	観音堂遺跡	〃	縄～平・中近世	
32	星の宮神社前	〃	〃 〃 〃	
33	諏訪下	〃	縄～平	
34	西野台	〃	弥～平	
35	寺野	〃	縄～平・中近世	
36	寺野泉	〃	〃 〃 〃	
37	六道	〃	弥～平	
38	小山添	〃	縄～平・中近世	
39	北飯田	散布地	縄～平	
40	小金井道東C	集落跡	〃 〃	
41	飯田裏	〃	縄	
42	東山田下	〃	縄～平	
43	西高椅	〃	〃 〃	
44	延島天神B	〃	〃 〃	
45	延島天神A	〃	〃 〃	
46	伝河原	〃	〃 〃	
47	西梁	散布地	古・中近世	
48	下梁	〃	平・中近世	
49	山田神社前	集落跡	縄～平	
50	絹1号墳	古墳	古	消滅
51	高椅1号墳	〃	〃	円墳
52	〃 2号 〃	〃	〃	〃
53	〃 3号 〃	〃	〃	〃
54	〃 6号 〃	〃	〃	〃

番号	遺跡名	種別	時代	備考
55	高椅4号〃	古墳	古	円墳
56	絹4号墳	〃	〃	前方後円
57	本田遺跡	集落跡	〃	調査済
58	小田林古墳群	古墳	〃	
59	和尚塚古墳	〃	〃	
50	曽我殿台古墳群	〃	〃	
61	結城城跡	城館	奈・平	
62	松木合古墳群	古	古	

注

① 「年報2　昭和57年度」　財団法人　茨城県教育財団　昭和58年

② 小山市文化財調査報告第4集「小山市遺跡分布図・地名表」小山市教育委員会　昭和53年　による市の地名表による遺跡名であり，建設省が計画した新4号国道建設予定地内に所在する本郷前遺跡とは異なり，まったくの別地点にある遺跡名である。

鷹の巣前遺跡

Ⅲ　鷹の巣前遺跡の発掘調査

1．調査方法

本遺跡の場合調査予定地区内はブッシュ，及び雑木林であったため人力による表土掘削が不可能であることなどより重機による表土掘削を行ない，次に作業員による精査をおこない遺構の確認を行なう方法をとった。

2．調査日誌

6月10日　発掘調査担当の川原・初山・芹澤の三名現場集合。ただちに道路建設予定地内に打ち込んであるセンター杭および，幅杭の位置に目印のポールを立て表土の削平を行なう。ブルトーザー使用。

6月11日　昨日に続いてブルトーザーによる表土削平。抜根に手まどり削平すすまず。

6月12日　ブルトーザーによる表土削平。ローム層上面まで浅いところで30～40cm深い部分（谷が入っていると思われる）で1～1.5mほどの表土がみられる。

6月13日　ブルトーザーによる表土削平。本日までの4日間の重機使用による表土削平でも出土遺物・遺構の存在が皆無であり，鷹の巣前遺跡そのものの範囲は東の台地縁辺部に存在する可能性が大である。

6月14日　ブルトーザーによる表土削平。本日も出土遺物・遺構の存在が皆無であるため今後とも出土遺物・遺構の存在を認めうるのか否かについて，調査担当である川原・初山・芹澤の三者により，種々検討の結果，今後これ以上の表土削平をおこなっても出土遺物・遺構の検出はできないものと考えられるとの結論を得たため，鷹の巣前遺跡の調査は本日をもって一応終了とすることにした。

3．まとめ

鷹の巣前遺跡については，遺物の散布は認められたもののその範囲については雑木林な

どが多い等の条件のため，その範囲は明確になされてはいなかった。このため遺跡所在の確認の意味もこめて重機による表土の掘削をおこなったところであるが，その結果，遺構の存在はないことが判明した。これにより，狭義の鷹の巣前遺跡（新4号国道関連遺跡名）は土器片（土師器）の散布が認められただけである。これよりすれば，広義の鷹の巣前遺跡（小山市遺跡分布図・地名表の遺跡名）の北限をおさえることができた意味は見い出せるところである。同時に広義の鷹の巣前遺跡に南北にトレンチを入れた結果となり，遺跡そのものが，表面調査で示されたよりも，さらに狭まい範囲にとどまり，かつ遺物の散布の割りには，遺構が粗であることも判明した。

本郷前遺跡

Ⅳ　本郷前遺跡の発掘調査

1．調査方法

本遺跡の発掘調査は，雑林，畑地，雑草地，表土が除去された地区などが，混ぜん一体となった現況を呈している。また遺跡の総延長も約500mと長いため，現況にあわせて重機使用，トレンチ，グリットなどを設定して調査を行なった。

調査は１号，２号住居跡などが検出された。901，902附近は，既に表土が持ちさられており，この部分は精査段階から調査に着手することができた。903～910までの地区のうち現道東側は雑草地となっており，この部分については刈払い後，国道のセンター杭を利用し，グリットによる調査をおこなった。グリットは市松模様に表土を除去し，遺構の確認を行なった。遺構等が検出された場合は随時，グリットの拡張を行ない，この結果，907～908にかけては，先土器時代の遺物集中地点が検出された。最小グリットは４ｍ×４ｍを基本とした。

トレンチ調査は，890～900にかけて実施した。グリットからトレンチ調査への変更は，グリット調査の結果，遺物，遺物の検出がはなはだ少ないため，作業能率を高める意味もある。トレンチは，幅１ｍのものを３ｍおきに10本設定した。長さは200ｍを基準としたが，その附近の遺構，遺物の検出，出土状況，及び現道（生活道路），表土置場の位置等によって臨機応変に対応した。この結果，３号，４号住居跡と土壙及び縄文土器が集中した個所を検出することができた。しかし縄文土器が集中して検出されたトレンチを精査するも，この集中する部分から，それに供なうと思われる遺構の検出はなかった。

この他に900～910にかけては現道の西側と910～916にかけては雑林等のため重機（ブルトーザー）による表土の削平を行なった。しかし遺構等の検出はなされなかった。

2．調査日誌

６月16日　鷹の巣前遺跡よりプレハブ移動，器材搬入。桑畑部分についてブルトーザーによる表土削平。畑地のうち表土が調査前に除去されていた地区の遺構確認の精査を行なう。住居跡検出。

６月17日　ブルトーザーによる表土削平。遺構確認の精査。

６月18日　遺構確認の精査。住居跡検出。グリット設定の基準杭の設置。

6月19日　遺構確認の精査。グリット設定。ブルトーザーによる表土削平。

6月20日　遺構確認の精査。グリット設定。ブルトーザーによる表土削平。

6月23日　遺構確認の精査。903－B－4・8・10・14・20・24，904－B－11，903－C－23・25グリット粗掘り。ブルトーザーによる表土削平。

6月24日　903－B－24，904－B－1・21・7，904－C－22グリット粗掘り。ブルトーザーによる表土削平。

6月25日　904－B－17・3・13・23・9・19・5・15・25，905－B－6・16・2・12グリットの粗掘り。ブルトーザーによる表土削平。グリット設定。

6月26日　904－C－24，905－B－4・8・10・14・18・20・22・24グリット粗掘り。ブルトーザーによる表土削平。PM2：00降雨のため作業中止。

6月27日　ブルトーザーによる表土削平。本日でブルトーザーによる表土削平終了。905－C－25・22，906－B－1・7・11・17・22グリットの粗掘り。

6月28日　906－B－3・13・9・19・5，906－C－24グリット粗掘り。

6月30日　グリット設定。907－C－21，906－B－15・25，907－B－2・6・12・16・22グリット粗掘り。

7月1日　907－C－23・25，907－B－4・8・10・14・18・20・24グリット粗掘り。907－B－18より石器剝片出土。907－C－25グリットのローム直上よりポイントの基部出土。

7月3日　907－B－18，907－C－25グリット出土の石器剝片およびポイントの出土状態写真撮影。908－B－1・3・7・9・11・13・17・19・21・23，908－C－22・24グリット粗掘り。

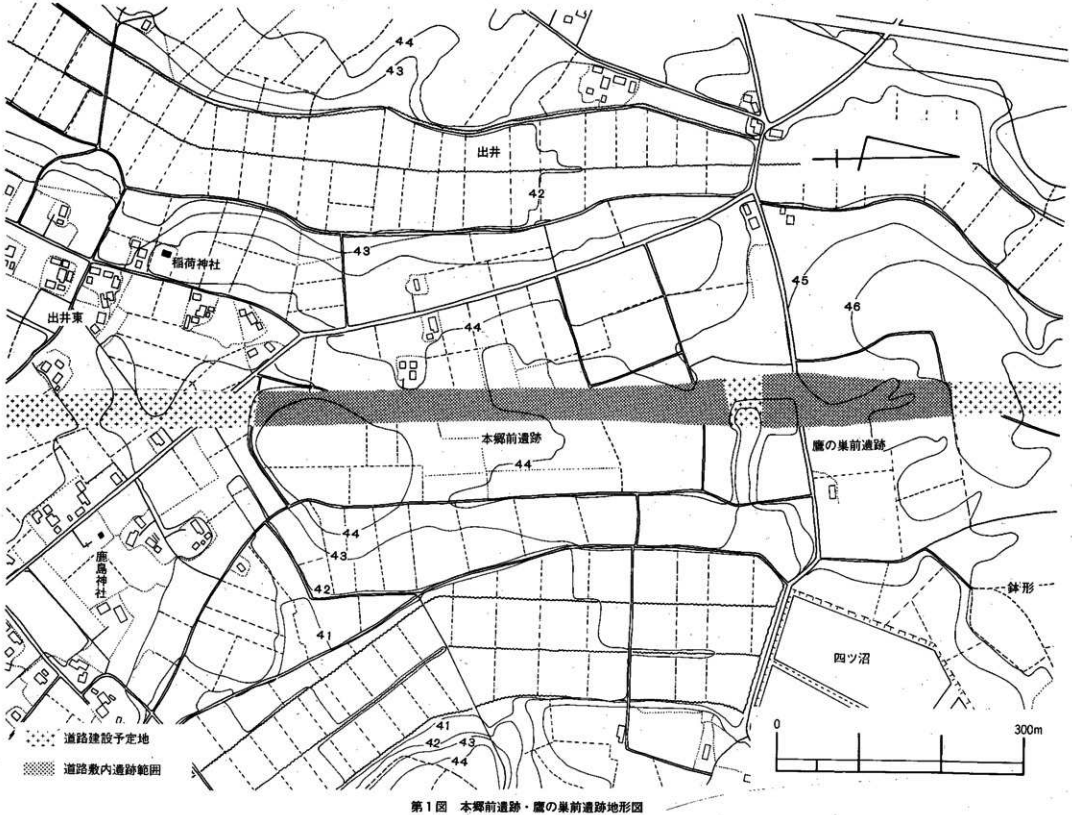
7月4日　908－B－25，909－B－10・14・16・18・20・22・24，910－B－3・7・11・13・17・19・21・23グリット粗掘り，溝状の遺構が検出される。

7月7日　910－B－5・9・15・25グリット粗掘り。石器剝片およびポイントが出土した周囲の残土の移動。PM2：00降雨のため作業中止。

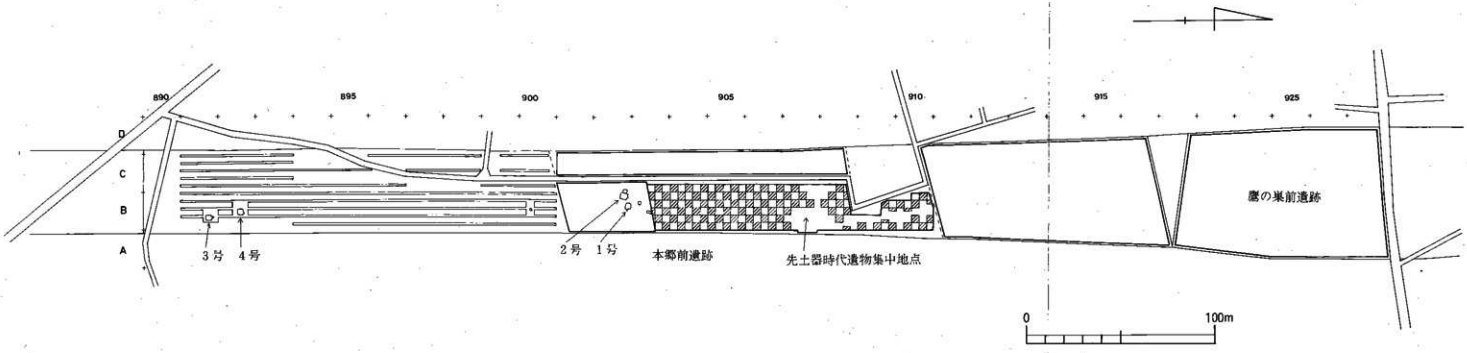
7月10日　907－B－5・13・17・19・23・25，908－B－20・24，909－B－17・19，907－C－21・24，908－C－21グリットの粗掘りおよび残土移動。

7月12日　909－B－21，910－B－12・14・10グリット上の残土移動。910－B－9・12グリット粗掘り。

7月14日　各グリットで断続的に検出されている溝状遺構を全面的に検出するために，907－B－23・25，908－B－20・22・24，909－B－15・17・19，910－B－12・16グリットの粗掘り。ブルトーザーにより表土削平を行なっ



第1図　本郷前遺跡・鷹の巣前遺跡地形図



第2図　本郷前遺跡全体図

た第1・2・3・4トレンチの全景写真撮影。

7月15日　石器剥片，ポイント出土の周囲の908－C－21，907－C－24，907－B－5・13・17・19・23・25グリットの粗掘り。住居跡プラン検出状況写真撮影準備。

7月16日　1号・2号住居跡，1号・2号・3号土壙の検出状況写真撮影。1号・2号・3号土壙についてセクションベルト設定後遺構内精査を実施。

7月17日　1号・2号・3号土壙についてセクション図，平面図作成。全景写真撮影。1号・2号住居跡についてセクションベルト設定後遺構内精査を実施。

7月18日　1号住居跡セクション図作成後ベルト除去し全景写真撮影。2号住居跡セクションベルト写真撮影。

7月21日　1号住居跡遺物出土状況写真撮影およびカマドの調査。2号住居跡セクション図作成。遺物出土状況写真撮影。

7月23日　1号住居跡カマドセクション図作成及び写真撮影，全景写真撮影。2号住居跡カマドの調査。

7月24日　1号住居跡エレベーション図作成。2号住居跡カマド調査。907－B－18グリットのソフトローム10～12cm前後掘り下げる。石器・剥片等の出土皆無。

7月25日　1号住居跡カマドの袖を除去後写真撮影。カマド平面図作成。2号住居跡カマド写真撮影。カマド平面図作成。エレベーション図作成。907－B 18・13グリットのローム掘り下げ。チップ，フレイクの出土をみる。

7月26日　1号住居跡，2号住居跡全景写真撮影。907－B－13・18・8グリット内精査。907－B－18・8グリットよりフレイク出土。

7月28日　907－B－13・18・23グリットの精査。1号，2号住居跡の平面図作成の遣り方設置。

7月29日　907－B－18・19・23グリットの精査。907－B－18グリットよりフレイク出土（基部に2次調整あり）。907－B－23グリットより礫出土。1号・2号住居跡の平面図作成

7月30日　1号・2号・3号土壙，1号溝平面図作成。907－B－19・24・20グリットの精査。

7月31日　1号・2号住居跡，1号・2号・3号土壙，1号溝の清掃を行ない完掘状況写真撮影。907－B－19・20グリットの精査。19と20グリットにかけ

てブロックが存在すると考えられる。907－B－20グリットからナイフ形石器出土。

8月1日　907－B－20・25グリット精査。ナイフ形石器2点出土。

8月5日　907－B－18・19・20・23・24・25グリットの清掃。全景写真撮影と各グリット毎の写真撮影。907－B－5，907－C－25グリットの精査。

8月6日　907－B－18・23・24グリット内出土石器，剥片の出土位置平面図作成。石器，剥片出土状態写真撮影。907－B－5，907－C－25グリットの精査。

8月7日　907－B－18・23・24グリット内出土石器，剥片の出土位置平面図作成。出土遺物のナンバーリング，レベリングののち取りあげる。さらに下位のローム層内精査。

8月8日　907－B－18・23・24グリットの精査。23グリットにテストピットを掘り土層柱状図の作成を行なう。

8月9日　907－B－18・23・20・25グリットの精査。

8月11日　石器，剥片の出土位置平面図作成。新しくトレンチを設定し調査を行なう地区の草刈り。

8月12日　幅1m，長さ40mのトレンチを道路幅と併行に6本設定し粗掘りを行なう。東から第1トレンチ，第2トレンチ～第6トレンチと呼称する。

8月13日　明日より盆休みのため，各遺構にグランドシートによりおおいをおこない遺構の養生をする。

8月18日　第3・4・5・6トレンチの粗掘り。第4トレンチより縄文前期・第6トレンチより縄文後期初頭の土器片出土。第1より第6トレンチの粗掘り終了。精査するも遺構検出できず。

8月19日　第7～第12トレンチ設定。第7トレンチから粗掘り開始。

8月20日　第7～9トレンチ完掘。新しく第10～12トレンチに入る。

8月21日　第1～第12トレンチをさらに延長するために道路センター杭No－896～No－898の間の草刈りを行なう。

8月22日　道路センター杭No－896～No－898の間の草刈り。

8月23日　道路センター杭No－896～No－898の間の草刈り。

8月25日　道路センター杭No－896～No－898の間の草刈り。

8月28日　今年は天候不順のため降雨が多い。先土器時代の遺物出土の907－B－19・23・18のセクションベルト除去。ナイフ形石器出土。第1～第6トレ

ンチの粗掘り。

8月29日　第1トレンチ～第6トレンチ粗掘り完了。907－B－19・23・18グリットのセクションベルト内出土石器の写真撮影・平面実測・レベリングののち遺物取りあげ。第1～第12トレンチをさらに延長するため道路センター杭№－891～893の間にトレンチ設定。

8月30日　第6トレンチ粗掘り。

9月1日　第7～第10トレンチ粗掘り。

9月2日　第7～第10トレンチ粗掘り。

9月3日　第1～第10トレンチ粗掘り完了。さらにトレンチを延長するため草刈りを行なう。第1～第10トレンチを40m延長する。907－B－19グリット土層図作成のため表土から2mの深さまで掘り下げる。

9月4日　第1～第6トレンチの粗掘り。907－B－19グリットの土層図作成。

9月5日　本郷前遺跡の調査終了を9月19日とし，次に調査（遺構確認）予定地の向野原遺跡のセンター杭・幅杭の位置確認を行なう。

9月8日　第7～第10トレンチ粗掘り。

9月9日　第7～第10トレンチ粗掘り。

9月10日　第1～第6トレンチ精査。第1トレンチから3号住居跡，第3トレンチから4号住居跡を確認。

9月11日　3号・4号住居跡遺構全体確認のため第2・第3トレンチの拡張を行なう。

9月12日　3号・4号住居跡遺構全体確認のため第2・第3トレンチの拡張を続いて行なう。

9月13日　3号・4号住居跡の遺構確認面での写真撮影。東西にセクションベルトを残し，遺構内精査に入る。2軒の住居跡とも小形のプランである。

9月16日　3号・4号住居跡遺構内精査終了。セクション写真・セクション図作成。向野原遺跡へプレハブ，器材の一部移動。

9月17日　3号・4号住居跡全景写真撮影。3号住居跡平面図作成。3号住居跡カマド切開。4号住居跡カマド切開。セクション図作成。

9月18日　3号住居跡のカマドセクション写真，・セクション図，・カマド平面図作成。4号住居跡平面図及びエレベーション図作成。カマド切開。カマドセクション写真・平面図・セクション図作成。

9月19日　3号・4号住居跡カマド全体写真撮影。本郷前遺跡全景写真撮影。本日

をもって本郷前の調査終了。

9月20日　一部残しておいたプレハブ・器材を向野原遺跡へ搬出する。

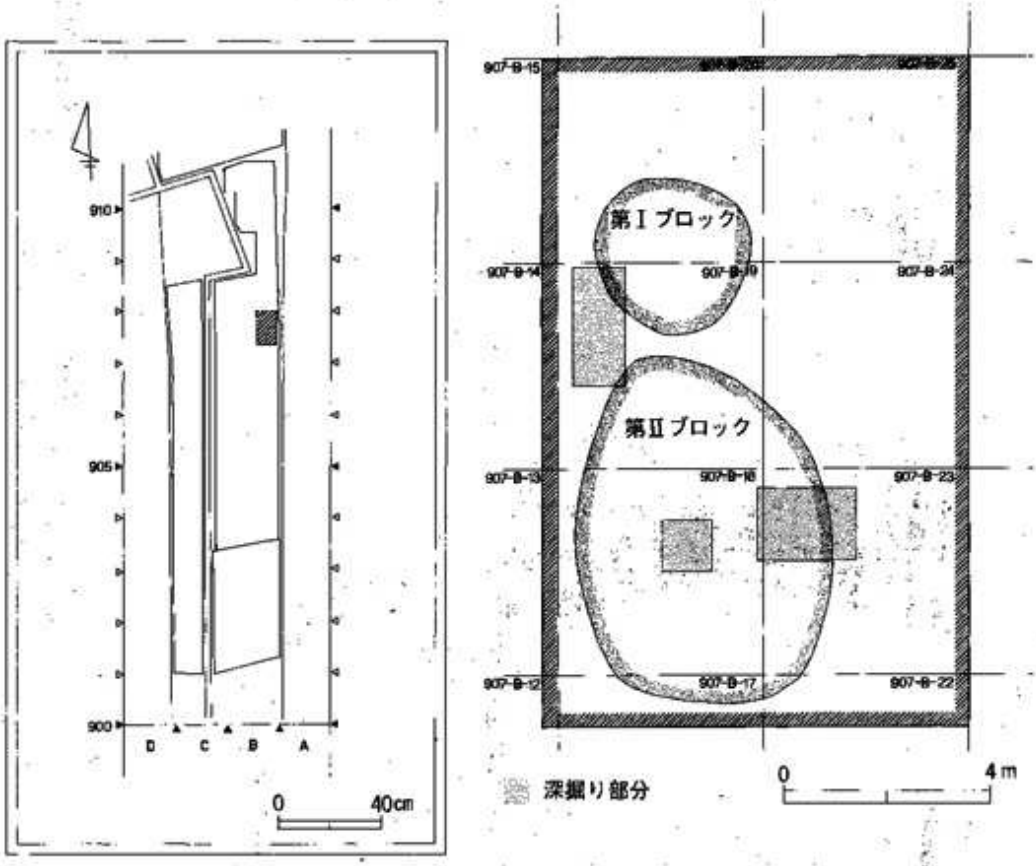
3．遺構と出土遺物

イ．先土器時代

1　調査区の概括（第3図）

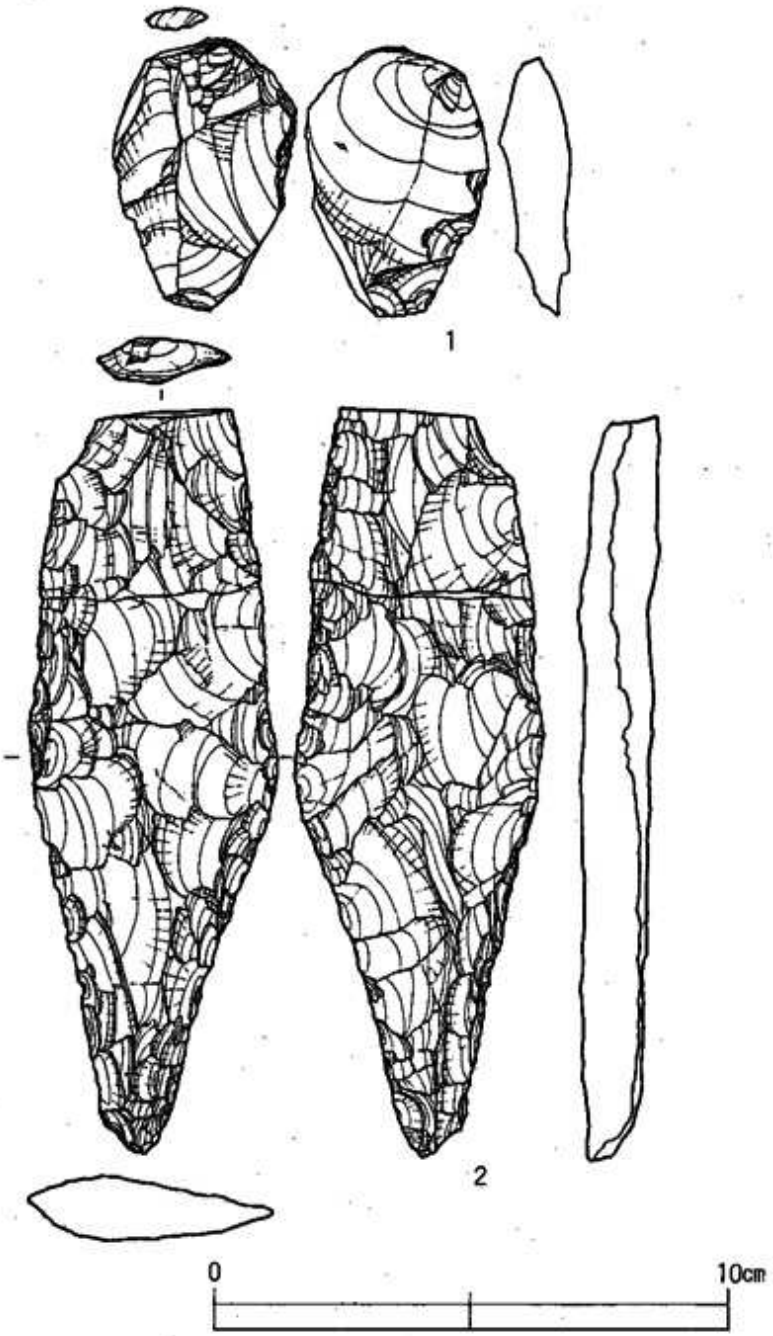
本遺跡の調査方法については前章で述べたとおりであり，ここで改めて述べるまでもないが，先土器時代の調査についてだけ取り上げて記述する。

分布調査及び発掘調査頭初より，本遺跡から先土器時代の遺物が出土することなど予想にもなかったことである。全体の調査方法によりグリッドを市松状に掘り上げ，遺構確認を進めていったわけであるが，907－B－18より第4図1が，907－C－25より2が破損した状態で表土中より出土したことが発端である。本格的な調査は，1・2が出土した地点



第3図　先土器時代調査区及びブロック配置図

を中心に拡張を行なった。1の掻器が出土した907－B－18付近からは，拡張の結果2箇所の遺物集中地点（ブロック）を確認することができた。2つのブロックだけが存在したとは考えられず，調査区内において拡張を行なったがこれに関連する遺物等は全く検出され



第4図　表土中出土石器

ず，先土器時代の遺物の広がりは調査区外の東側にあると推定される。また，２の木葉形の大形尖頭器の出土した907－Ｃ－25付近からは遺物は一点も確認されなかった。

２　表土中出土遺物について（第４図１・２，図版14）

１　掻器　907－Ｂ－18出土　やや部厚い縦長剝片を素材とし，上端から右側縁にかけて裏面から急角度のスクレイパーエッヂが入る。また先端には表面から裏面にかけて緩かな剝離が入る。石質はケイ化木，重量は41.5g 。

２　木葉形尖頭器　907－Ｂ－25出土　先端部を欠損する大形の尖頭器である。平担で大きな剝離を施した後に，周辺部に浅い加工を連続的に表裏に加える。断面はレンズ状を呈するが，基部は表・裏面の右側縁部に主要剝離を加えるため断面は変形菱形状を呈する。残存長は14.5cm，推定長 18cm，厚さ1.4cm，重量93g を測る。石質は流紋岩。

３　層序及び文化層（第５図）

本郷前遺跡は，海抜43m から44mの平担な台地上に位置する。台地上の起状はわずかであり，ほぼ平担といって良いが，調査区東端と先土器時代の遺物が検出された面との比高差は約１ｍを測る。ここに図示する層序は，先土器時代確認箇所の層位を基本層序とした。

Ⅰ層：表土層である。黒褐色の土層で，水田として利用されていたためかややしまった層で10cm～15cmを測る。Ⅱ層と接する面には，鉄分の付着がみられる。

Ⅱ層：漸移層。暗褐色土層であり，やわらかく粘性はない。

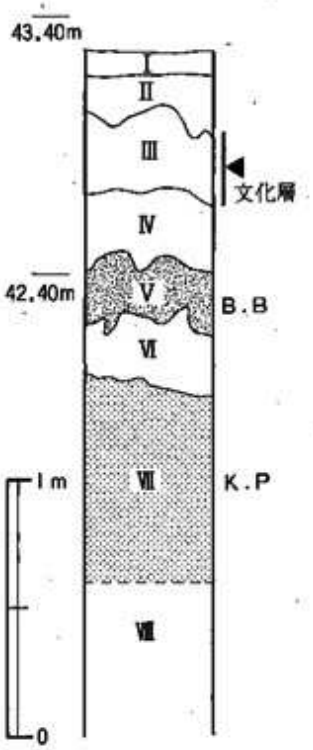
Ⅲ層：黄褐色軟質ローム層，所謂ソフトローム層である。かなり軟性に富み，炭化物を少量含む。Ⅲ層の上面には今市パミスが若干見られる。

Ⅳ層：黄褐色硬質ローム層，ここからはロームが硬くなるためハードロームと呼称する。Ⅴ層との境界は不連続である。

Ⅴ層：黒褐色土層，所謂黒色帯（Ｂ・Ｂ）である。パミス・スコリア等の混入物はない。

Ⅵ層：明褐色ローム層。Ⅳ層と同様な堅さをもつ。少粒の黒色スコリアが含まれ，また下面には鹿沼パミスが含まれる。

Ⅶ層：黄褐色土。鹿沼パミス（Ｋ・Ｐ）層である。粘性・しまり等は全くなく，３mm～５mmの粒



第５図　層位と文化層

の集合層である。

Ⅷ層：黄褐色硬質ローム，Ⅷ層下にはハードロームが堆積し，境界は不連続である。水が湧き出るため下面までの確認はできなかった。

以上のような堆積層序である。栃木県ではⅤ層（黒色帯）上面までが田原ローム，それ以下が宝木ロームと呼称され，武蔵野台地でいう立川ロームに対比されるものとして田原ロームとされている。しかしＡＴが田原ロームでは黒色帯直上，立川ロームではⅥ層にみられることや，堆積年代（鹿沼軽石層は赤城山起源で３万年前）にも矛盾が生じる。立川ロームⅩ層に対比されるものは宝木ローム中の鹿沼軽石層直前段階付近に相当するのではなかろうか。

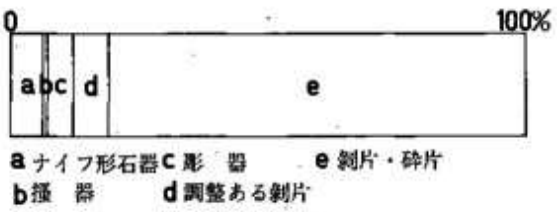
本遺跡から検出された文化層は僅かに１枚である。検出層位はⅡ層下面からⅥ層上面にわたり，最大40cmの上下幅をもつ。遺物集中地点（ブロック）は12m×8mの範囲に２箇所検出し，各ブロックにはナイフ形石器，彫器，掻器等の石器・剥片及び破砕礫を含め203点の遺物を確認した。

4　遺物の遺存状況

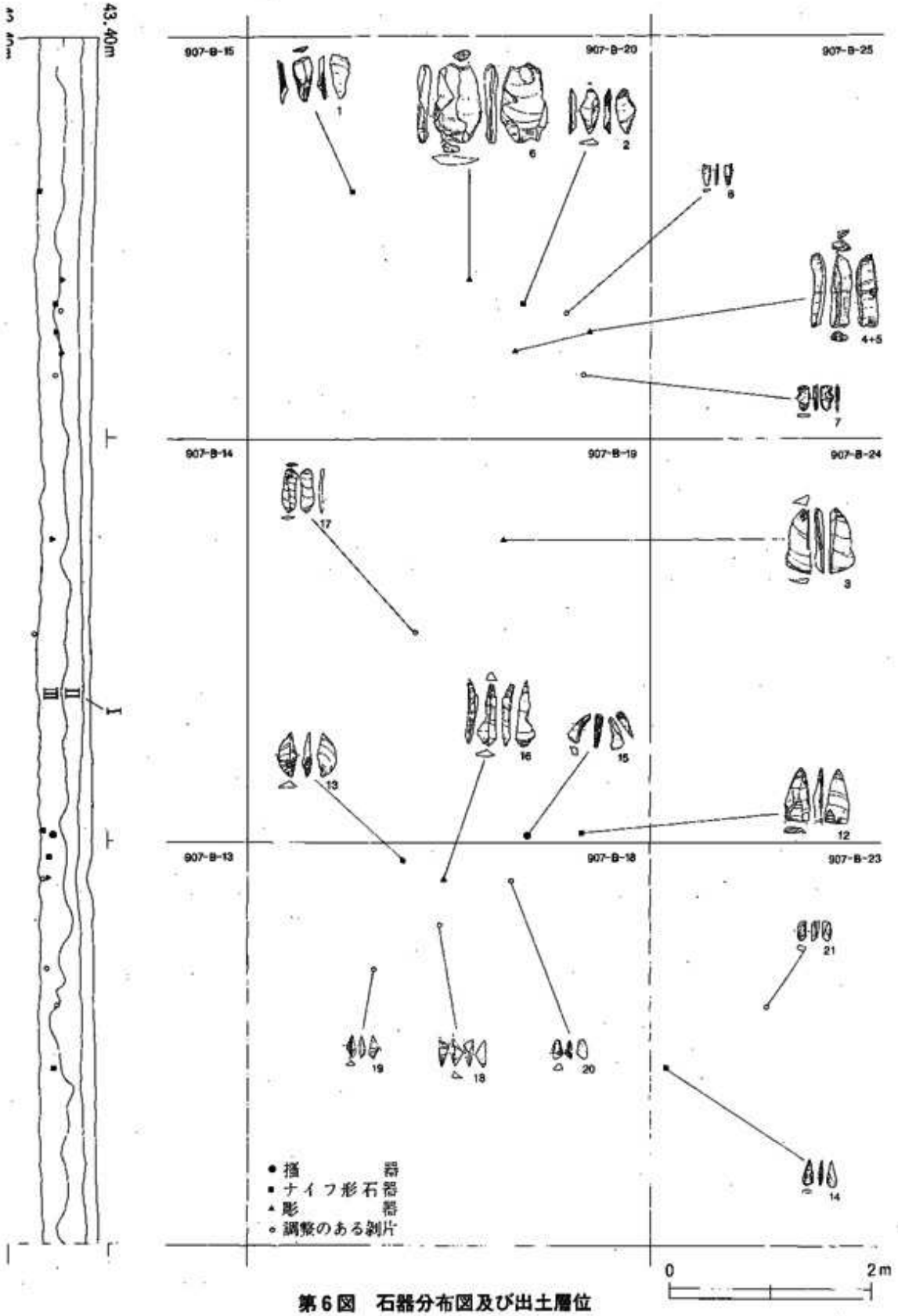
(a) 遺物の遺存状態

検出した遺物の総数は203点である。これらの分布状況をみると，平面的に南北２箇所の集中部が認められる（第３図）。これを第Ⅰブロック（北側集中区），第Ⅱブロック（南側集中区）と呼称する。ブロックが南北２箇所あることは，石器及び剥片の出土分布図（第６図）及び破砕礫出土分布図（第13図）によって確認することができる。

ここでは，第Ⅰ，第Ⅱブロックの遺物出土状態の概要を記すとともに，各ブロックの特徴及び相異点について述べたい。



第１表　第Ⅰ及び第Ⅱブロック出土遺物数量表



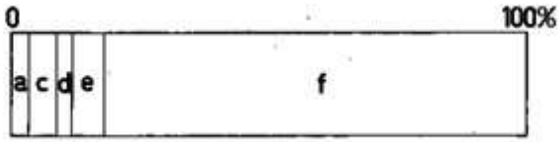
第6図　石器分布図及び出土層位

○第Ⅰブロック

当該石器集中分布地点は,907－B－19及び907－B－20グリッド内に水平分布300cm前後の円形の分布形態をもち，垂直分布約40cmの帯状分布をとっている。これらの分布形態から１つのブロックのほぼ全容を把握することができたものと考える。

検出資料の総数は62点で，石器及び剝片からみたその構成はナイフ形石器２点（第８図－１・２),彫器３点（第８図－３・４＋５・６),調整のある剝片２点（第８図－７・８),剝片３点（第８図－９・10・11),上記の他に実測不可能な砕片が１点あり総計11点を数えるにすぎない。石質には流紋岩（ハリ質）９点，ケイ化木２点の２種類がみとめられる。これらの石器及び剝片の出土量は，出土分布図から一見して第Ⅱブロックより少量であることが理解できる。全体の出土量から比較すれば，僅か14.1%にすぎず，第Ⅱブロックにおけるそれよりかなり低い。なお，これらは同ブロック内及び第Ⅱブロックとの接合関係はない。

礫は全て何らかの目的か乃至は影響において熱を受けており，人為的破砕もしくは自然破砕したものである。出土点数は50点で全体の42.4%であり，第Ⅱブロック内出土破砕礫と量的にはほぼ等しい。破砕礫は同ブロック内で４例の個体別接合がみられ，また第Ⅱブロックとでは２例接合する。

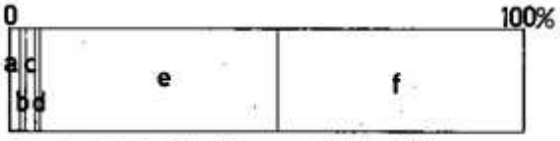


a ナイフ形石器　c 彫　器　　e 剝片・砕片
b 掻　器　　d 調整ある剝片　f 破砕礫

第２表　第Ⅰブロック出土遺物数量表

○第Ⅱブロック

当該石器集中分布地点は，907－B－17～19及び907－B－22～24の６つのグリッド内に遺物分布が検出され，水平分布東西450cm，南北600cmの南北にやや長い楕円形の分布形態をもち，垂直分布約40cmの帯状分布をとっている。第Ⅰブロックと同様に１つのブロック



a ナイフ形石器　c 彫　器　　e 剝片・砕片
b 掻　器　　d 調整ある剝片　f 破砕礫

第３表　第Ⅱブロック出土遺物数量表

を完掘できたものと考えられる。

検出資料の総数は141点で全体の70.5%を占め，その構成は石器・剥片及び砕片が74点(全体の85.9%)，破砕礫68点（全体の57.6%）である。石器の器種構成はナイ形石器３点（第10図12～14)，掻器１点（第８図15)，彫器１点（第10図16)，調整ある剥片５点（第10図18～21）であり，剥片は44点（第10図22～60・74～76，第12図１・２)，砕片は13点（第11図61～73）の他に実測不可能な８点を加え21点を数える。石質からみた構成は流紋岩31点，ケイ化木34点，黒曜石３点，珪質流紋岩２点，石英２点，チャート１点，頁岩１点の６種類の石質からなる。破砕礫は68点で，破砕礫全体からみれば57.6%，第Ⅱブロック内出土遺物からでは48.3%を占める。接合関係は第Ⅰブロック内から出土している破砕礫と２例みられる。

第Ⅰ・第Ⅱブロック間の相違点

第Ⅰ・第Ⅱブロック間の遺存状況について以下の点に相違をみることができる。

①出土遺物の垂直分布（第６，７，９，13図）

第６図の堆積土層断面図における遺物の垂直分布の状況をみると，それぞれの基準層位に差異がみられる。つまり第Ⅰブロックでは基準層位はⅡ層下面からⅢ層上面にあり，第ⅡブロックのそれはⅢ層の上面から下面にかけて認められる。しかし，出土層位を考慮しないで定規をあてれば，ほぼ水平に分布していることがわかる。第Ⅰ及び第Ⅱブロックでの各々最大垂直幅は40cmであることから一定の面に分布していることが伺える。

第Ⅰ及び第Ⅱブロック破砕礫の接合資料の分布（第13図)，また同一母岩から作出されたと考えられる石器及び剥片が検出されたことなどから同時間内に存在していたものと考えられる。

②出土遺物の量的相違

前節において量的な問題について若干述べたが，いかなる理由によりこのような分布を示すのかは不明である。単に石器及び剥片の量的相違からみれば，第Ⅰブロックでは石器６点，剥片６点，第Ⅱブロックでは石器５点，剥片62点を数える。石器はほぼ同数にもかかわらず，剥片の量は１：９の割合である。また破砕礫は50，68点出土し割合は４：６の比率でほぼ同数である。以上のごとく剥片の出土量に極端な差違がみられる。

③遺物の遺存状態の示すもの

以上の遺物の遺存状態について次のようにまとめることができる。

１．本遺跡では南北２つのブロックが検出された。

２．これらの２ブロックは，破砕礫の接合関係及び同一母岩から作出されたと考えられる石器等から同時的に残されたものである。

３．遺物はⅡ層下面からⅣ層上面にかけて包含されていたが，その基準層位となる文化層

面はⅢ層中位と考えられる。

4．両者のブロックを比較すると，第Ⅱブロック中より剥片が多出することから，第Ⅱブロックは石器製作の場とし，第Ⅰブロックは持ち出された場として把えることができる。

5．第Ⅰ，第Ⅱブロックは，それぞれ別々に形成されたが，ひとつの有機的な関係をもつものとして把握できる。

5　出土遺物

遺物は南北方向に第Ⅰ・Ⅱの2箇所の集中部をもって検出された。この両者のブロックは先述のとおり同時的に存在していたものである。従って出土遺物については，第Ⅰ及び第Ⅱブロックをとりまとめて記述すべきではあるが，両者のブロックが明確に分離できることが可能であり，また出土遺物から性格の相違が認められることなどから分けて記述することにする。

今回検出した遺物総数は203点を数える。これらについて器種毎に大別すれば次のとおりとなる（石器の種類及び石質について，各々の全体数に占める割合は第1表に掲載した）。

○ナイフ形石器－5点　　○彫器－4点　　○調整のある剥片－6点

○掻器－1点　　○剥片及び砕片－69点　　○破砕礫－118点

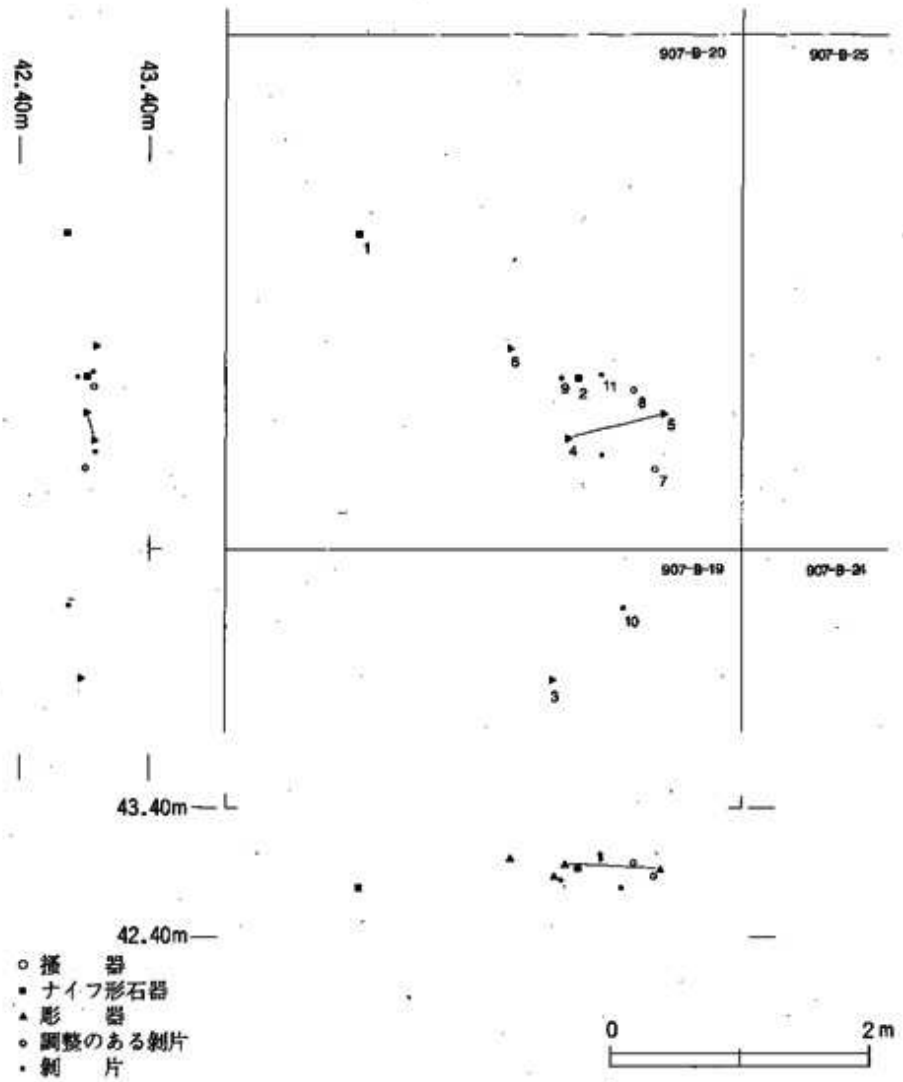
第Ⅰブロック出土遺物

第Ⅰブロック内からは，ナイフ形石器2点，彫器3点，調整ある剥片2点，剥片及び砕片4点，破砕礫50点の計61点が検出された。これは全体の出土量からみれば30%を僅かにこえた点数であり，また石器及び剥片に関しては6%に満たない。

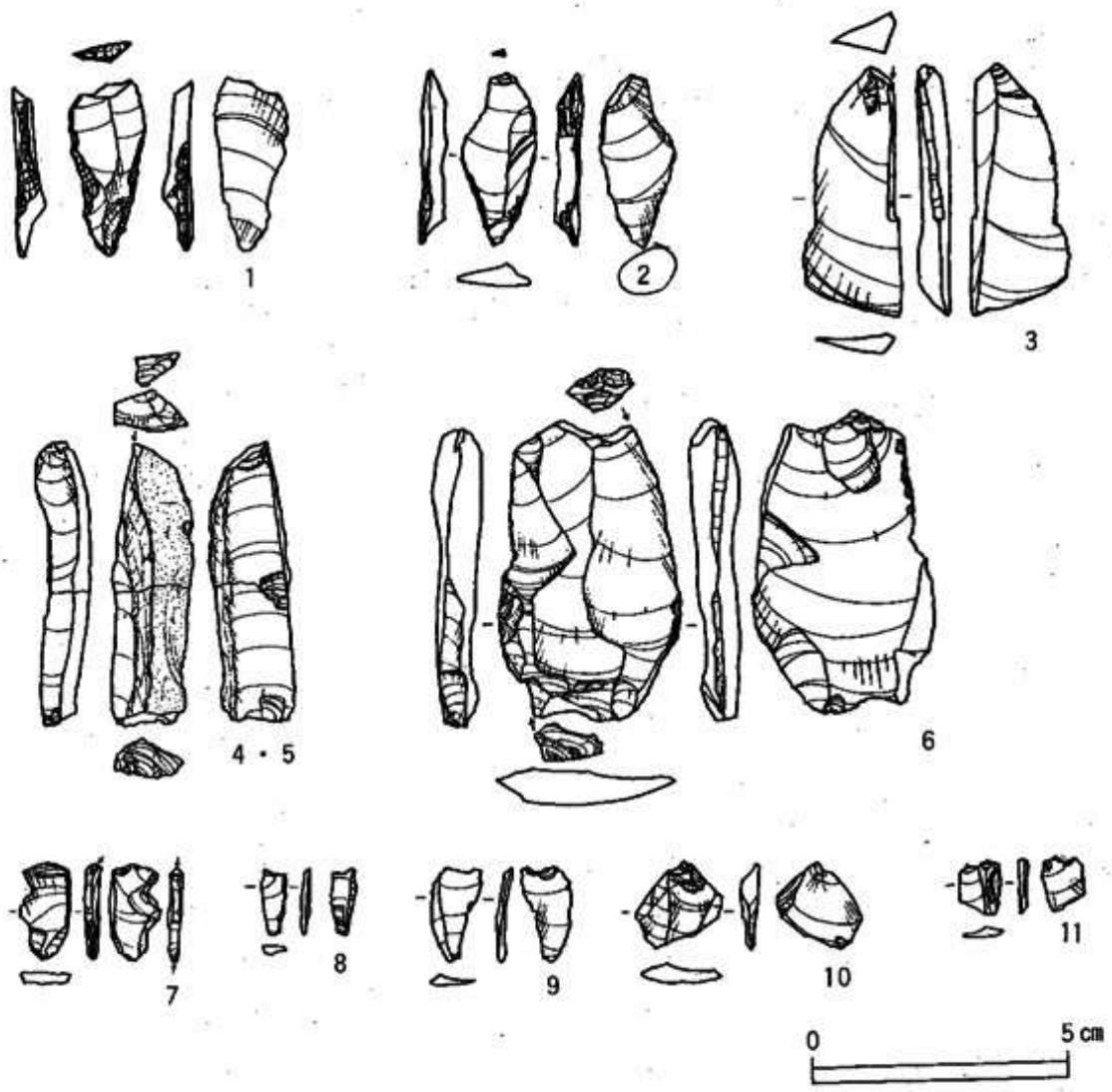
ナイフ形石器（第8図1・2，図版15）

1．流紋岩を素材とし，縦長剥片の打面・打瘤を除去して，基部から両側縁部に細かい刃潰し加工によりナイフ形石器としている。また，先端部は意識的に折断し，一部分に調整を行なっている。

2．ケイ化木を素材とする。打面部を先端に設定しており，刃部作出の際に打面・打瘤を除去し，基部から両側縁部に細かい刃遣し加工をおこなう。先端の右側縁部には，刃遣し加工後に再度調整が加えられる。



第7図　第Ⅰブロック遺物分布図



第8図　第Ⅰブロック出土石器及び剥片（2/3）

彫器（第8図3～5，図版15）

3．縦長剥片を素材として，打面から左側縁にかけて1回の樋状剥離を施す彫器である。右側縁部には小剥離痕が認められるが，これは摩滅状態からみて使用による歯こぼれかと思われる。石質は流紋岩。

4．表面に大きく礫面を残す縦長剥片を素材とし，打面とは逆の先端左側縁にかけて1回の樋状剥離を施す彫器である。主要剥離剥面との角度は90°に近い。背面の中央にみられる剥離は，破損した際に生じたものである。石質は流紋岩。

5．ブロック内出土中最大の彫器で，縦長剥片を素材とし，両端に打面調整を行う。打面調整によって打面及び打瘤は除去される。素材の打面部を上端に設定した際，上部から

右側縁にかけて1回，下端から左側縁に2回，同右側縁に1回の樋状剝離が入っている。右側縁に入る樋状剝離前には，裏面から表面にかけて調整が行なわれた痕跡がのこる。左側縁の上方部には小剝離痕が認められるが，これは3と同様に使用による歯こぼれかと思われる。石質は流紋岩。

調整のある剝片（第8図7・8，図版15）

7・8　調整のある剝片としたもので，ともに小形の剝片の右側縁部に細かい調整を裏面から表面にかけて施す。7には上方より樋状剝離的なものを加える。石質は7が流紋岩，8はケイ化木である。

剝片（第8図9～11）

9～11は剝片である。打面調整及び剝片作出の際に剝されたものである。この他に実測不可能な砕片が1点ある。

第Ⅱブロック出土遺物

第Ⅱブロック内からは，ナイフ形石器3点，掻器1点，彫器1点，調整のある剝片4点，剝片及び砕片65点，破砕礫68点の計142点が検出された。これは全体の出土量からみれば70％に及ぶ点数である。石器及び剝片に関しては36.5％の出土量があり，第Ⅰブロックの6％とは比較にならない出土量である。

ナイフ形石器（第10図12～14，図版15）

12．打面部を欠損するためどちらが先端か不明であり，また欠損部裏面には2次加工が施されるため，尖頭器ともみられるが，他のナイフ形石器の刃潰し方法と同一的要素を持っている点などからナイフ形石器とした。縦長剝片を使用し，打面部を先端部に設定して，基部から両側縁には細かな刃潰し加工を施している。左側縁の上半には刃部が作出される。切断もしくは欠損した後裏面に2次加工が入る。石質は流紋岩。

13．縦長剝片の打面部を基部に設定し，切断することにより半月形に整形する。刃潰し加工は，基部周辺及び左側縁に入り，打面及び打瘤は除去される。石質はケイ化木。

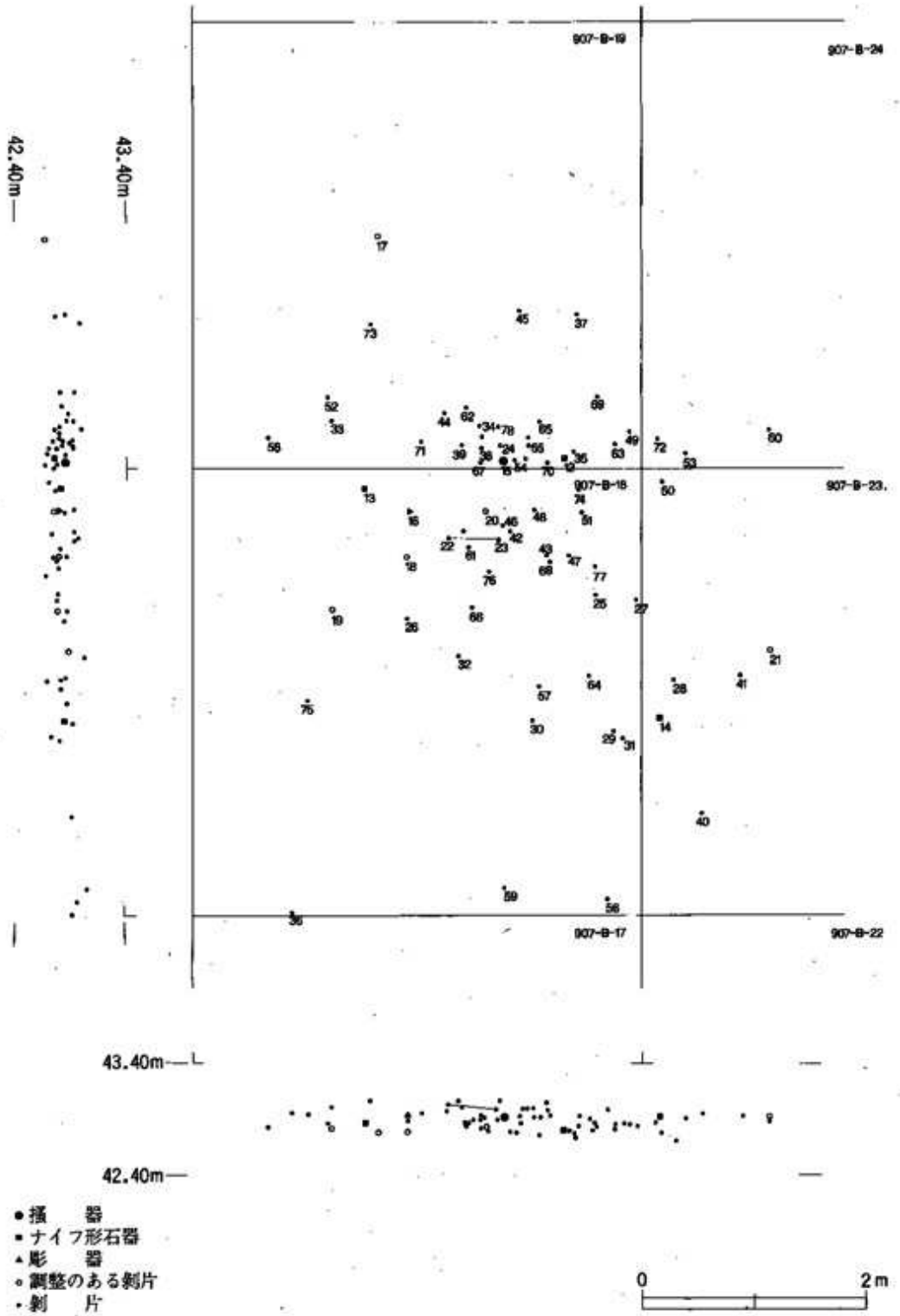
14．縦長剝片を素材とした小形のナイフ形石器で，打面部を基部に設定し基部及び右側縁にそれぞれ刃潰し加工を施している。石質は流紋岩

掻　器（第10図15，図片15）

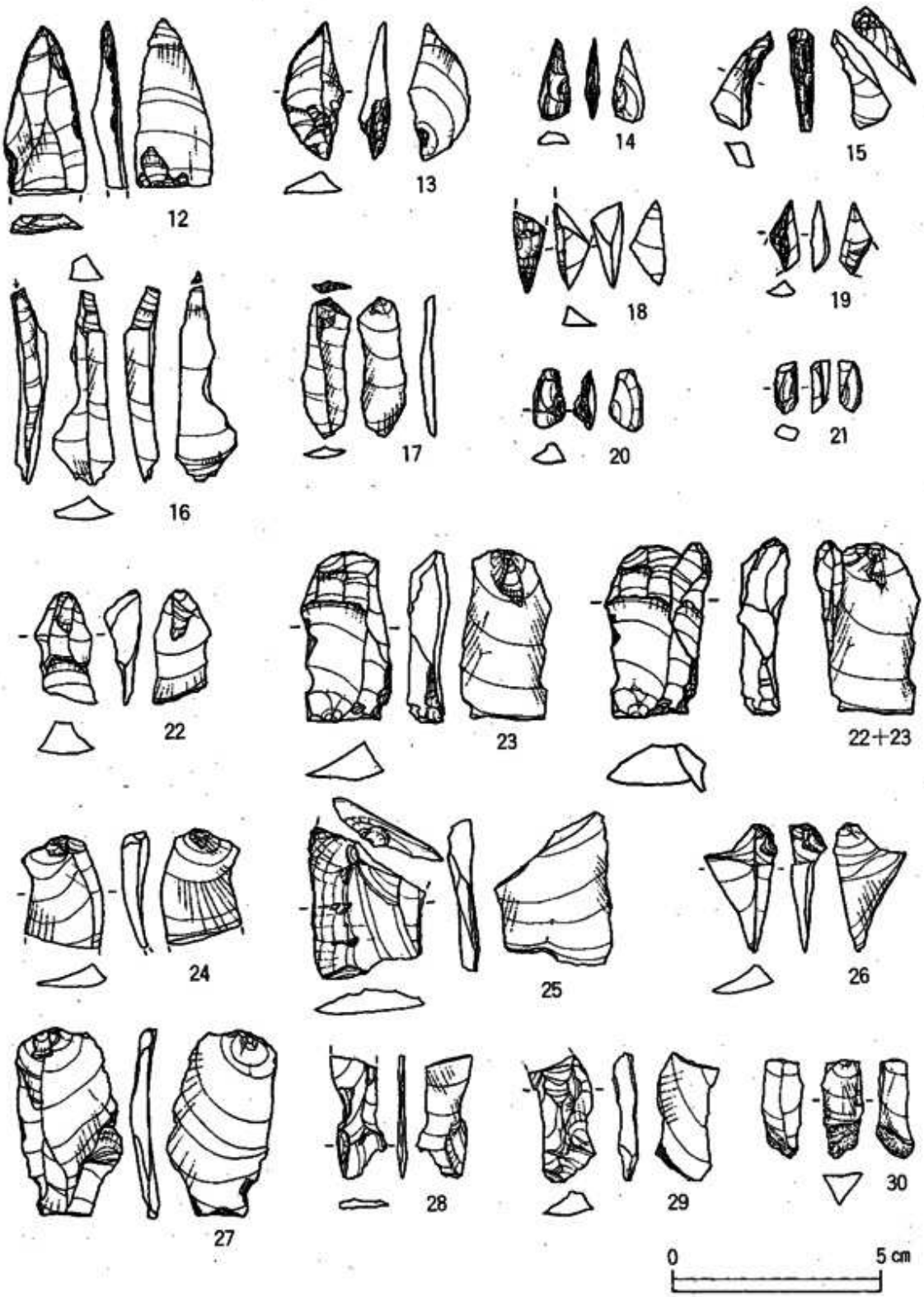
15．縦長剝片を素材としているが，切断することにより形状を大きく変える。左側縁のみにスクレイパーエッヂを施す。石質はケイ化木。

彫　器（第10図16，図版15）

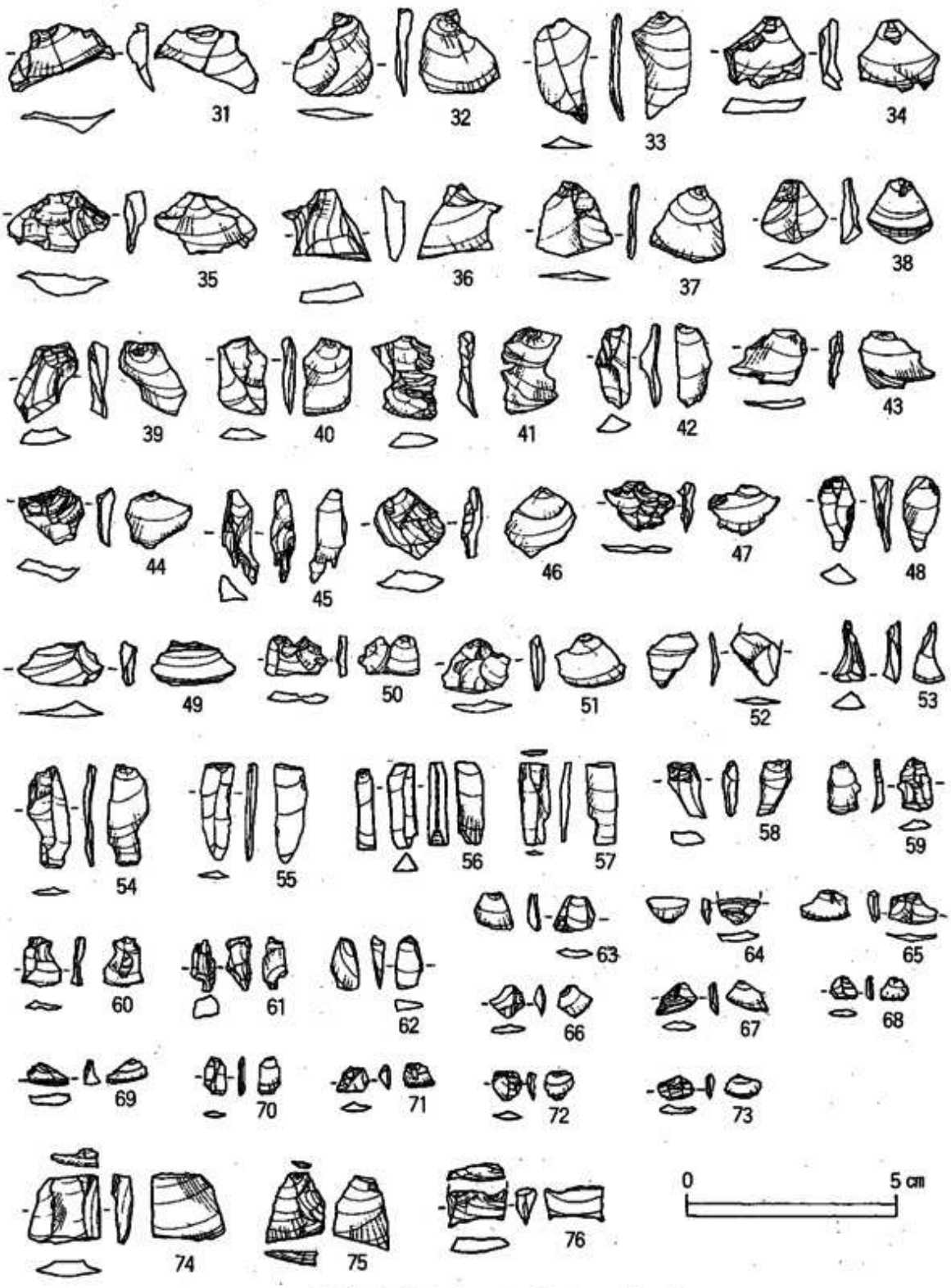
16．縦長剝片を素材とする。打面及び打瘤を打面作出のために除去し，左側縁に上部か



第9図　第Ⅱブロック内出土石器分布図



第10図　第Ⅱブロック内出土石器(2/3)



第11図　第Ⅱブロック内出土石器(2/3)

ら樋状剥離を施す。第Ⅰブロック出土－3と形態的及び技法的に一致する要素をもつ。石質は流紋岩。

調整ある剥片（第10図17～21，図版16）

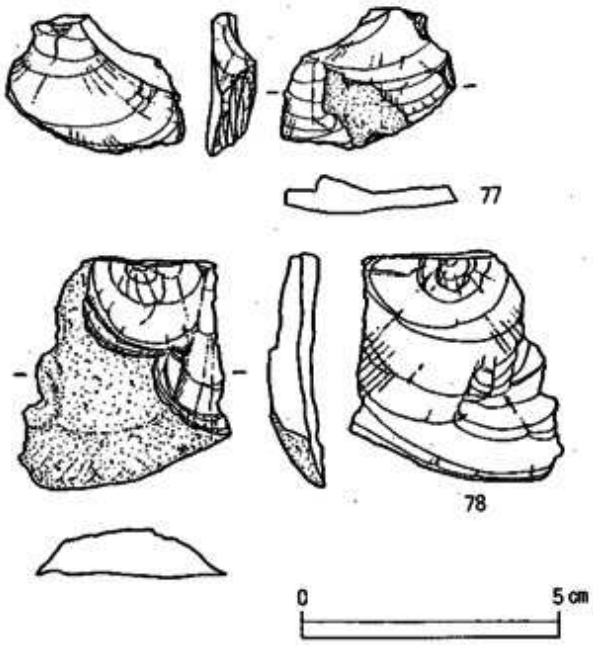
17．縦長剥片の打面部に裏面から細かい調整が入る。両側縁には小剥離が確認できるが，これは，摩滅状態からみて使用痕と考えられる。石質は黒曜石。

18・19．共に断面が三角形を呈し，一面だけに調整がみとめられる。打面及び打瘤はみられず，調整はナイフ形石器の刃潰し加工にも類似する。これらのことから石器製作中に偶発的に作出されたものと思われる。18は流紋岩19はケイ化木である。

20・21．裏面から表面にかけて右側縁に調整が施される。打点が調整部横位裏面にみられることから，18及び19と同様に，石器製作中に折れたものかもしれない。18～21の4点はそれ自体が一個体の製品とは考えられない。20・21については，ナイフ形石器として呼称する研究者もいるが，ここでは調整ある剥片とする。20・21の石質は流紋岩。

剥　片（第10図22～30，11図31～76，12図77・78）

本ブロック内から看取された剥片は全て，剥片作出における調整剥片・打面調整剥片及び石器作製時における砕片に大別される。



第12図　第Ⅱブロック内出土石器(2/3)

22～30，77・78は，剥片作出のための調整剥片と考えられるもので，剥片自体も他の剥片と比較すると，大きくまた礫面を残すものがある。これらの中には石器として使用できる剥片はなく，目的的剥片として剥離されたものはない。22・23は，出土遺物中唯一の接合資料で，23の下端には打面調整が施され，上端から最終的剥離が行なわれる。

31～76は打面調整及び石器製作における調整剥片と考えられるもので，石器自体に直接使用される剥片（目的的剥片）は一片もない。54～57には，細石刃とも思われる小形の縦長剥片が確認できるが，4片という僅かな出土量，また石核が存在しないことからここでは剥片として取り扱うことにした。

破砕礫（第13図，図版18，19）

２つのブロック内からは自然礫の出土は一点もなく，全て熱により赤色化しこの影響もしくは人為的（破砕行為だけをいう）により破砕されたものばかり118点検出された。各ブロックからは，それぞれ第Ⅰ－50，第Ⅱ68点の出土量で，石器のそれと比較すれば均一な出土量である。

○出土状態

各ブロックの破砕礫の平面及び垂直分布の状態をみると，平面分布は石器の分布より若干大きな範囲で分布することがわかる。第Ⅰブロックについては，石器の出土量が少ないことから，石器分布地点を中心にそれを取囲むような分布のしかたを示す。第Ⅱブロックについても同様な事が伺えるが石器分布よりやや南の位置にずれた地点を中心に南東及び南西方向に広がる。垂直分布は石器の出土位置と同様なことを示す。

○破砕礫の状態

前述したように全て熱を受け赤化している。火熱による礫面の変化の１つと考えられるが赤味の濃さの度合いの違いが，火熱の強さによるものか，回数によるものかはっきりしない。赤味の色調を次のように分類して観察してみると，

A　自然の色に近い赤色（礫全体が変色しているのではなく，一部分が多い）

B　AとCの中間の赤色（礫は全体的に変色しており，自然面及び割れ口面は原形を保っている。）

C　真赤に赤化して赤色（礫は全体的に変色し，礫面はボロボロになっている。）

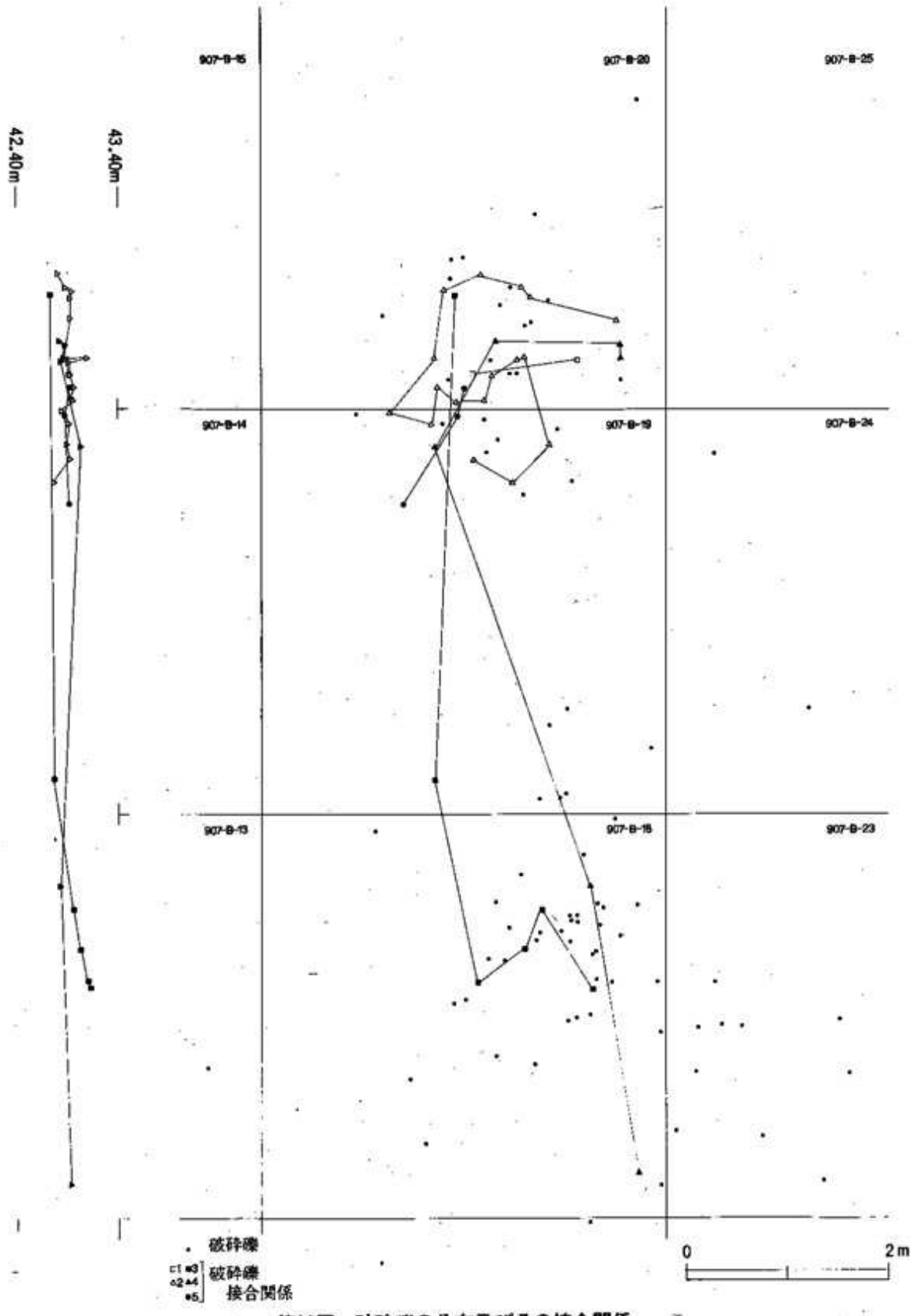
以上の分類の中で，A及びBに分類されるものが最も多い。Cに分類される礫はほんの一部である。

○付着物

礫の洗浄の際に表面などを細かく観察したが，タール状物質（光沢のある黒色の付着物）スス状物質（光沢の無い黒色の付着物）・黒点（黒い点状の付着物）などの付着物はみられなかった。

○接合関係（第13図）

破砕礫は118点中34点が接合した。第Ⅰブロック内では50点中26点が接合する。△２は約¾個体分が復元でき17点の接合をみた。これは赤化A類に含まれる。この１点だけが他の礫と違い破砕状態が熱によるものではなく，人為的に打点を移動しながら割られている。打面調整は行なわれず，目的的剝片に関連するものもない。また，出土石器中にこれと同一石材がないことから単に打ち割られた礫と考えられる。●５は，かなり赤化が激しく，また礫自体もボロボロとなっていることからC類に含まれる礫である。３個の接合関係が



第13図　破砕礫の分布及びその接合関係

認められる。□1は2個接合し，分類ではB類に属する。

第Ⅱブロック内自体では接合関係はないが，第Ⅰブロック内出土礫と接合するものがある。■3・▲4である。この2例は石質等から同一個体であるが両者は接合関係にない。両者は第Ⅱブロック内において節理面で割れ，その後第13図のような移動が行なわれたと考えられる。

出土遺物番号表(1)

No.	器種	ブロック	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	遺存状態	掲載図	掲載図版	備考
1	掻器	／	51	35	14	41.5	ケイ化木	完形	第4図	図版14	
2	木葉形尖頭器	／	145	47	14	(93.0)	流紋岩	先端部欠損	〃	〃	表土中より出土接合アリ
1	ナイフ形石器	Ⅰ	34	14	5	2.2	〃	完形	第8図	図版15	
2	〃		34	14	4	1.8	ケイ化木				
3	彫器					4.1	流紋岩				使用痕アリ
4	〃		(27)	14	8	10.2					接合
5	〃		57 (30)	15	8						
6	〃		59	35	8	20.2					
7	調整ある剥片		18	11	3	0.7				図版16	
8	〃		14	5	2	0.2	ケイ化木				
9	剥片		18	9	2	0.3	〃				
10	〃		17	17	3	0.75	流紋岩				
11	〃	↓	11	8	2	0.2		↓	↓	↓	
12	ナイフ形石器	Ⅱ	40	19	4	(4.6)	↓	約½を欠損	第10図	図版15	
13	〃		32	15	8	1.8	ケイ化木	完形			
14	〃		20	8	3	0.4	流紋岩				
15	掻器		24	9	6	1.1	ケイ化木				
16	彫器		47	15	6	2.8	流紋岩				
17	調整ある剥片		34	10	3	0.8	黒曜石	不明		図版16	使用痕アリ
18	〃		21	8	8	0.4	〃				
19	〃		17	6	5	0.3	ケイ化木				
20	〃		14	8	4.5	0.2	流紋岩				
21	〃	↓	12	6	3	0.25	〃	↓		↓	

出土遺物番号表(2)

No.	器種	ブロック	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	遺存状態	掲載図	掲載図版	備考
22	剥片	Ⅱ	27	13.5	9	(2.2) 11.15 (8.95)	石英		第10図	図版16	接合資料
23	↓	↓	40.5	19.5	9	↓	〃	↓	↓	↓	打面調整アリ
24			27	18	6	2.75	流紋岩				
25			37.5	27	7.5	5.55	↓				
26			30	16.5	7.5	1.2					
27			45	24	7.5	4.15					
28			30	12	1.5	0.5	ケイ化木				
29			31.5	13.5	6	1.4	〃				
30			24	10.5	7.5	1.75	流紋岩				
31			16.5	22.5	4.5	0.6	ケイ化木		第11図		礫面アリ
32			21	19.5	3	0.65					
33			25.5	13.5	3	0.45					
34			16.5	19.5	4.5	0.95				図版17	
35			15	24	4.5	0.75	流紋岩				
36			18	19.5	4.5	1.4	〃				
37			18	18	1.5	0.45	ケイ化木				
38			15	13.5	4.5	0.55	〃				
39			18	12	4.5	0.75	流紋岩				
40			18	10.5	3	0.5	ケイ化木				
41			19.5	13.5	4.5	0.6	流紋岩				
42			19.5	7.5	4.0	0.3					
43			13.5	16.5	3	0.4					
44			13.5	15	3.3	0.3	ケイ化木				
45			21	6.5	6	0.65	流紋岩				
46			16.5	15	6	0.65	〃				
47			10.5	16.5	1.5	0.2	ケイ化木				
48			18	9	4	0.3	〃				
49			10.5	21	1.5	0.45	流紋岩				
50	↓	↓	9	14	2.0	1.5	ケイ化木		↓	↓	

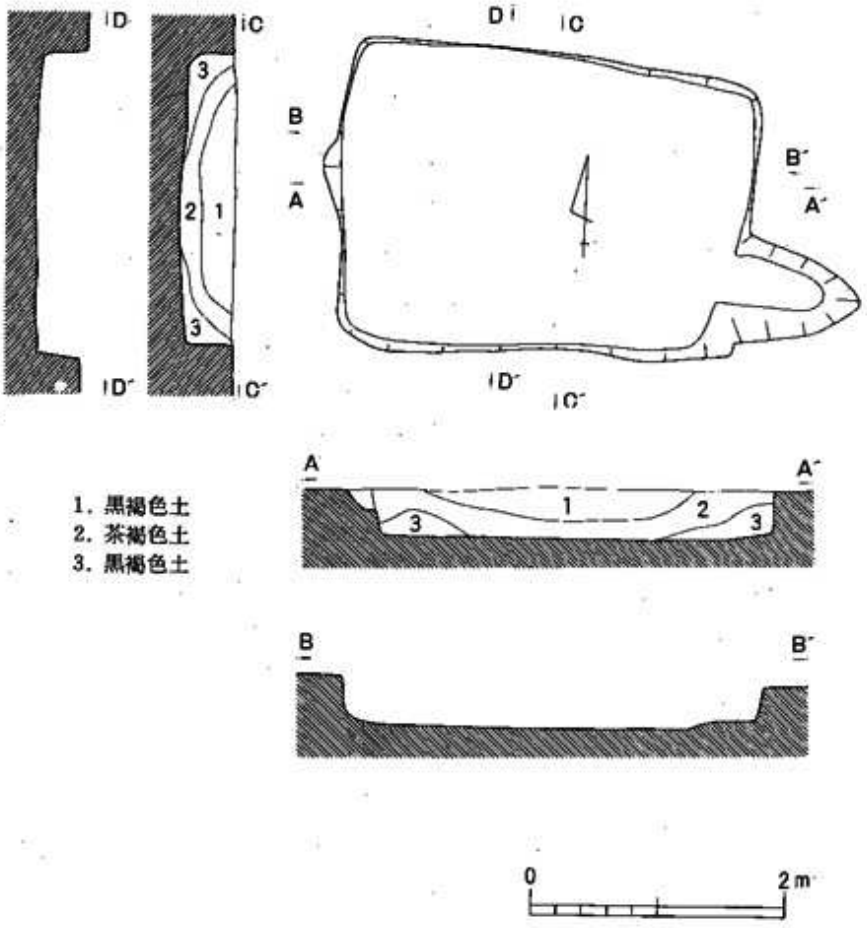
出土遺物番号表(3)

No.	器種	ブロック	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	遺存状態	掲載図	掲載図版	備考
51	剥片	Ⅱ	12	15	5	0.4	ケイ化木		第11図	図版17	
52	〃	〃	12	9	1.5	0.1	流紋岩	〃	〃	〃	〃
53	〃	〃	15	7.5	4.5	0.1	ケイ化木	〃	〃	〃	〃
54	〃	〃	24	9	1.5	0.25	流紋岩	〃	〃	〃	〃
55	〃	〃	22.5	5.5	1.5	0.3	〃	〃	〃	〃	〃
56	〃	〃	19.5	6	2	0.4	〃	〃	〃	〃	〃
57	〃	〃	19.5	7.5	4.5	0.2	〃	〃	〃	〃	〃
58	〃	〃	13.5	9	2	0.2	〃	〃	〃	〃	〃
59	〃	〃	12	7.5	1.5	0.1	ケイ化木	〃	〃	〃	〃
60	〃	〃	12	9	1.5	0.1	〃	〃	〃	〃	〃
61	砕片	〃	12.2	6	6	0.3	流紋岩	〃	〃	〃	〃
62	〃	〃	12	6	2.3	0.15	〃	〃	〃	〃	〃
63	〃	〃	9	9	1.5	0.1	〃	〃	〃	〃	〃
64	〃	〃	6	9	1.8	0.1	〃	〃	〃	〃	〃
65	〃	〃	7.5	12	1.5	0.1	ケイ化木	〃	〃	〃	〃
66	〃	〃	7.5	8.5	1.5	0.09	流紋岩	〃	〃	〃	〃
67	〃	〃	7.5	8	2	0.09	ケイ化木	〃	〃	〃	〃
68	〃	〃	6	7	1.5	0.08	〃	〃	〃	〃	〃
69	〃	〃	4.4	9	3	0.09	〃	〃	〃	〃	〃
70	〃	〃	9	5	1	0.09	〃	〃	〃	〃	〃
71	〃	〃	6	7.5	1.8	0.09	〃	〃	〃	〃	〃
72	〃	〃	6.2	7.5	1.6	0.09	流紋岩	〃	〃	〃	〃
73	〃	〃	5.2	9	1.6	0.09	ケイ化木	〃	〃	〃	〃
74	剥片	〃	15	13	3	1.0	黒曜石	〃	〃	〃	裏面に削痕アリ
75	〃	〃	17	13	3	0.7	〃	〃	〃	〃	〃
76	〃	〃	9	14	4	0.4	チャート	〃	〃	〃	〃
77	〃	〃	27	34	9	4.9	珪質流紋岩	〃	第12図	〃	礫面アリ
78	〃	〃	45	40	9	16.6	〃	〃	〃	〃	礫面アリ 77と同一母岩

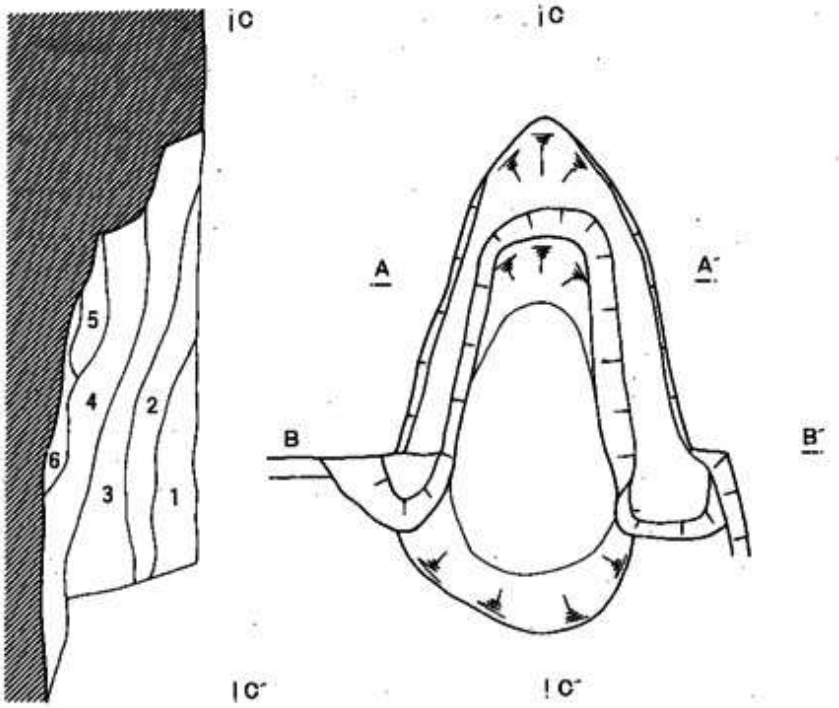
ロ．歴史時代

1号住居跡（第14図，図版7）

本住居跡は900－B－2グリッドに位置する。また約2m西側から2号住居跡が検出されている。本住居跡は東西3.3m×南北2.3mの平面形が東西方向に長い方形を呈する。小形の住居跡である。カマドは東壁の中央から南に寄った位置に構築されている。壁は確認面よりほぼ垂直に掘り込まれており，壁高は0.4mを測る。覆土は1層～3層が自然堆積を示し，カマドの北側で東壁ぎわの3層上面より焼土が多量に出土した。他に北壁きわの1層中と床面直上より鉄製品の小破片が出土した。床面はローム面で踏み固められているが，やや凹



第14図　1号住居跡実測図



1. 黒褐色土（ローム粒子含む）
2. 〃　（焼土・ローム粒子含む）
3. 〃　（　〃　）
4. 茶褐色土（　〃　）
5. 〃　（焼土・ローム粒・粘土含む）
6. ローム（壁）
7. 粘土（袖部）

第15図　1号住居跡カマド実測図

凸をもつ。周溝はなし。柱穴は住居跡内と住居跡周囲の確認面で検出作業を行なったが検出されなかった。

カマド（第15図，図版８）

カマドは東壁の中央よりやや南側に構築されている。確認面では東壁を約１ｍと大きく「U」字状に掘り込んでいるが，深さ約0.1ｍの所では段をもち方形の掘り方となる。煙道が長く，また壁高が約0.4ｍ～0.5ｍと深いことよりか，焚口部は僅かに窪む程度で掘り込みは認められなかった。袖部は残存状態が悪く，僅かに砂粒を含む白色粘土が方形の掘り方に取り付くような形で検出された。天井部も白色粘土であったと思われるが，カマド覆土５層に若干粘土が認められるだけで住居跡の覆土にもカマド構築に使用したと思われる粘土は検出されなかった。

２号住居跡・１号遺構（第16図，図版８・11）

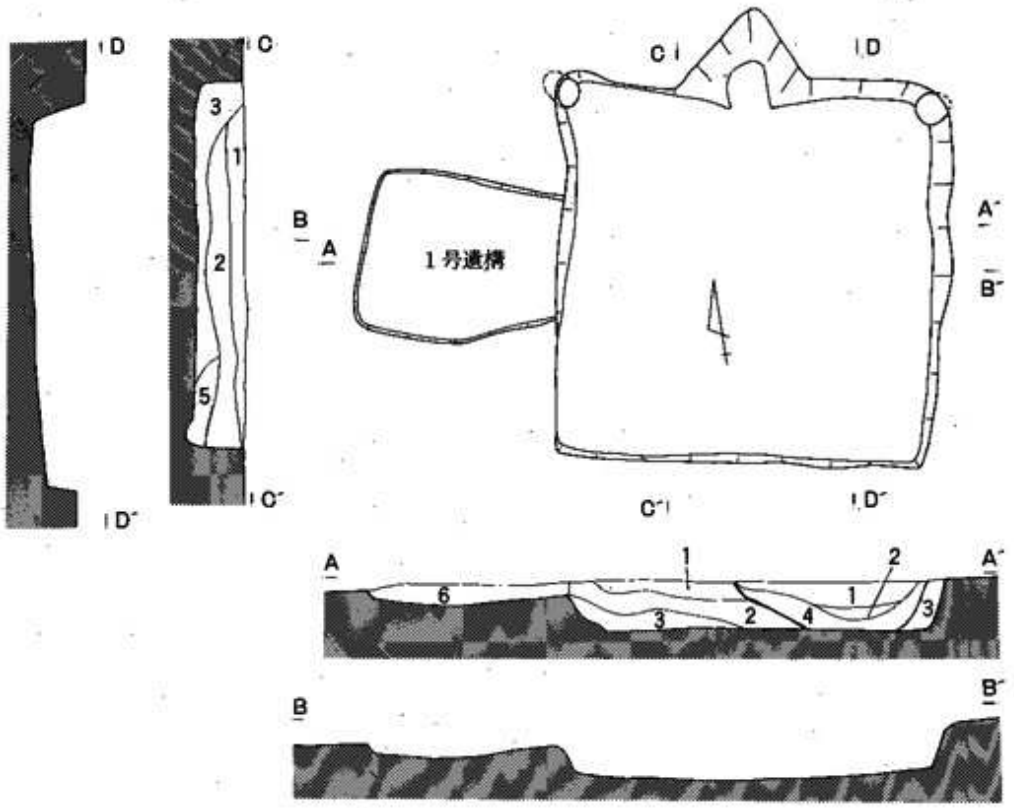
本住居跡は900－B－１グリッドに位置する。また約２ｍ東側から１号住居跡が検出されている。本住居跡は１辺約3.6mの平面形が方形を呈し，西壁で１号遺構と重復している。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。壁は確認面よりほぼ垂直に掘り込まれており，壁高は約0.45ｍである。覆土は１層～３層・５層が自然堆積と思われるが，住居跡中央から東壁きわにかけて攪乱を受けている。遺物は第18図－２の杯が東壁きわの３層中で床面より約10m浮きの状態で出土し，３の甕がカマド前面の２層中より出土した。床面はローム面で踏み固められているがやや凹凸を示す。周溝はなし。柱穴は住居跡の内外で検出できなかったが，住居跡の北東コーナーと北西コーナーより壁を斜めに掘り込んだピットが２基検出された。北東コーナーのピットは径約28cmで外側へ約34cm掘り込んでおり，北西コーナーのピットは径約24cmで外側へ約28cm掘り込んでいる。この２基のピットは壁柱穴の可能性ものこる。

重複関係は１号遺構が本住居跡西壁と重複している。１号遺構は東壁が不明なため全形を知ることができないが，南北1.55ｍで深さ約0.2mの東西に長い方形を呈していたと思われる。壁は確認面より斜めに掘り込まれ，底面はローム面であるがやや凹凸を呈す。覆土は６層の黒色土１層で，出土遺物はなし。２号住居跡との新旧関係は，住居跡覆土が１号遺構を切っているため，２号住居跡の構築時期の方が新しい。

カマド（第17図，図版９）

カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。北壁を約0.85ｍと大きく「U」字状に掘り込んでおり，比較的緩やかな煙道としている。焚口部は煙道が長くまた壁高が約0.5ｍと深いことよりか床面が僅かに窪む程度である。袖部は砂粒を含む白色粘土であるが残存状態が悪く僅かに煙道部に取り付くように検出された。火床はカマド掘り方に４層の黒

褐色土を埋め戻してカマド底面を作っているため3層下面から4層上面である。また4層の上面より第18図－4の礫が直立して出土した。支脚に使用したものと思われるが，この礫の上より第18図－1の杯を伏せた状態で出土した。



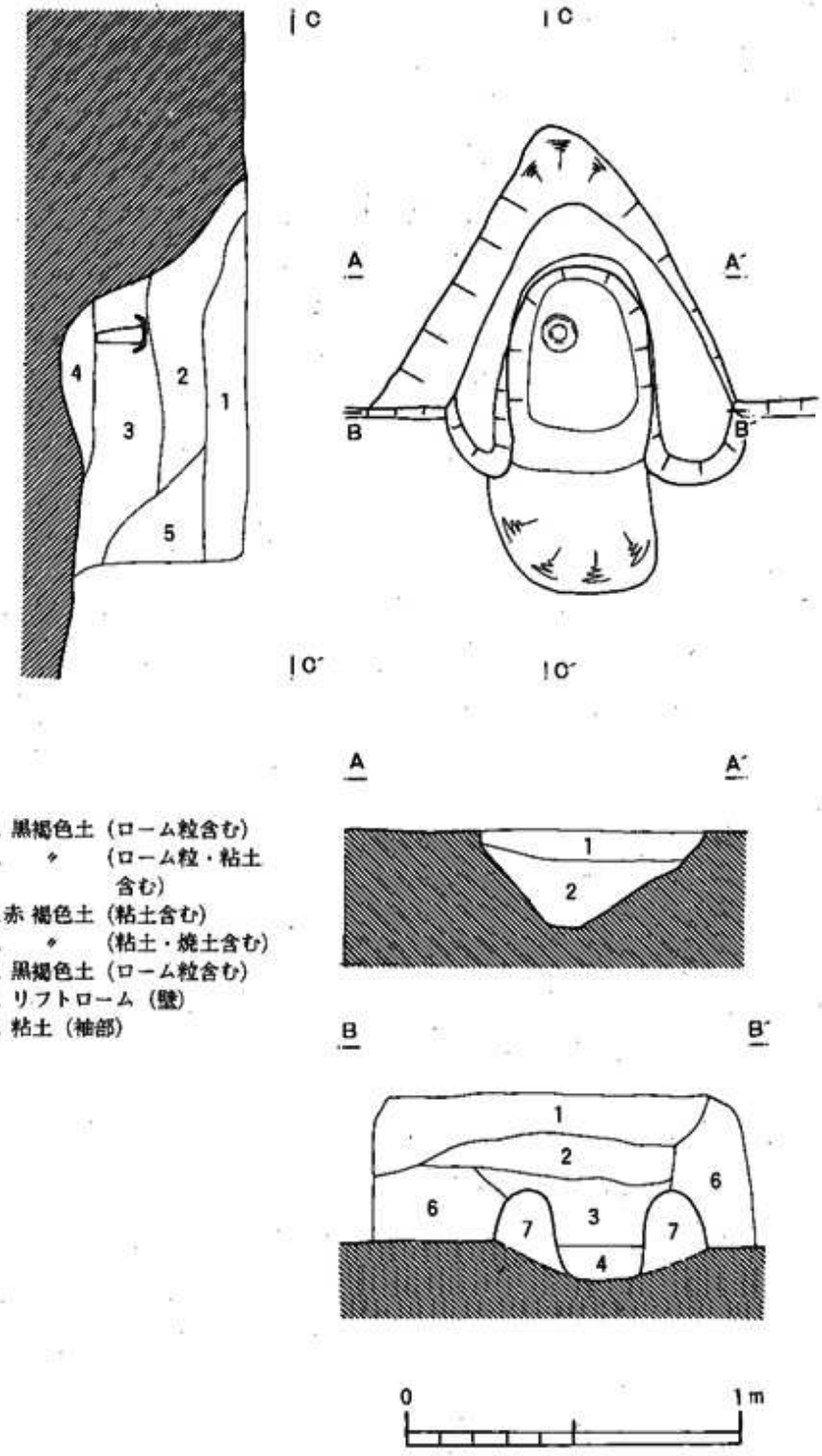
1. 黒褐色土（やや茶色をおびる）―かくらん
2. 黒色土（ローム粒含む）―かくらん
3. 黒褐色土（ロームブロックを含む）―かくらん
4. 茶褐色土―かくらん
5. 黒色土
6. 黒色土

0　2m

第16図　2号住居跡・1号遺構実測図

遺　物（第18図，図版20）

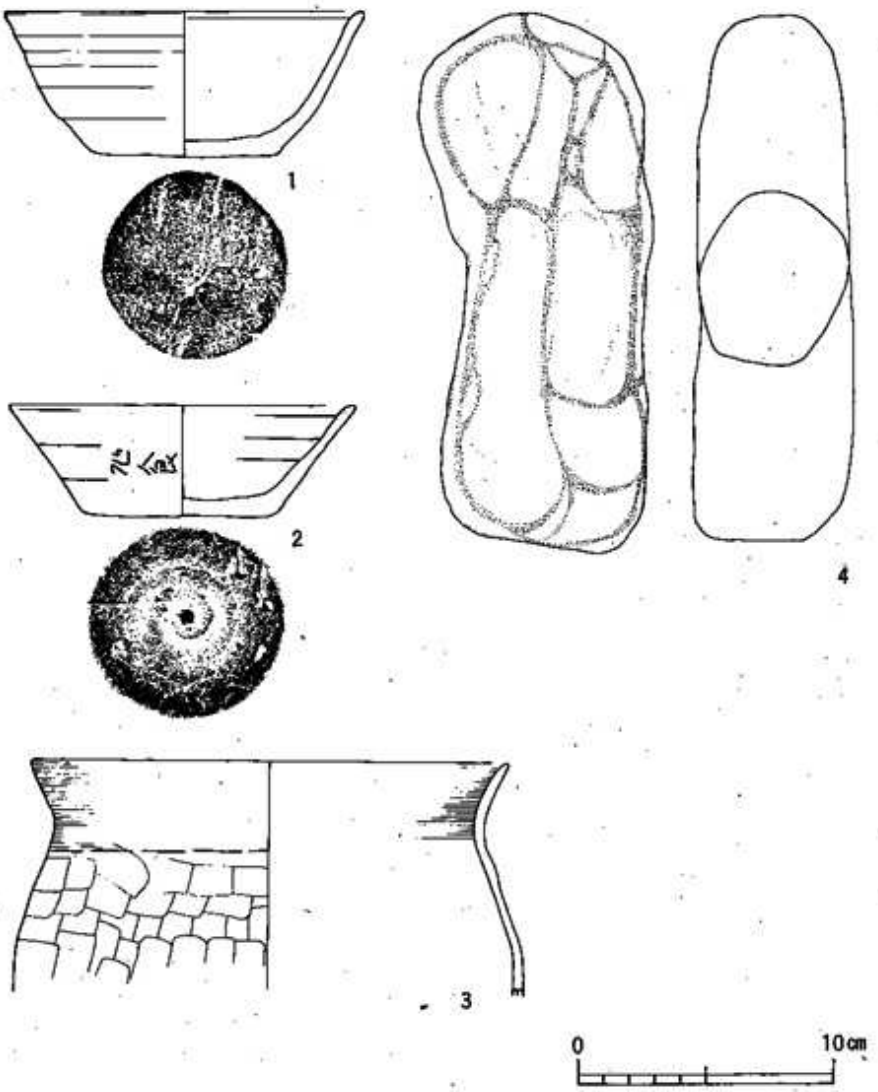
検出された住居跡の中で遺物が一番多く出土した住居跡である。出土遺物のうち図示し得たのは土師器杯形土器・須恵器杯形土器・土師器甕形土器各1点と支脚に使用されていた礫1点である。



1. 黒褐色土（ローム粒含む）
2. 〃　（ローム粒・粘土含む）
3. 赤褐色土（粘土含む）
4. 〃　（粘土・焼土含む）
5. 黒褐色土（ローム粒含む）
6. リフトローム（壁）
7. 粘土（袖部）

第17図　2号住居跡カマド実測図

1は土師器杯形土器である。外面にロクロ痕を残し，器形は底部より内湾気味に開く。底径は口径のほぼ2分の1である。内面はヘラ磨きされ，底部は手持ちのヘラ削り調整を受けている。胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈す。2は須恵器杯形土器である。器形は底部より直線的に開く体部で，底径は口径の2分の1よりも小さい。調整はロクロ成形で，底部は回転ヘラ切り離しである。胎土は微砂粒を多く含み，焼成はやや不良である。色調は灰色白を呈す。また体部外面に「□」と「食」と思われる墨書が横位に施されている。前者は墨が薄く不明である。



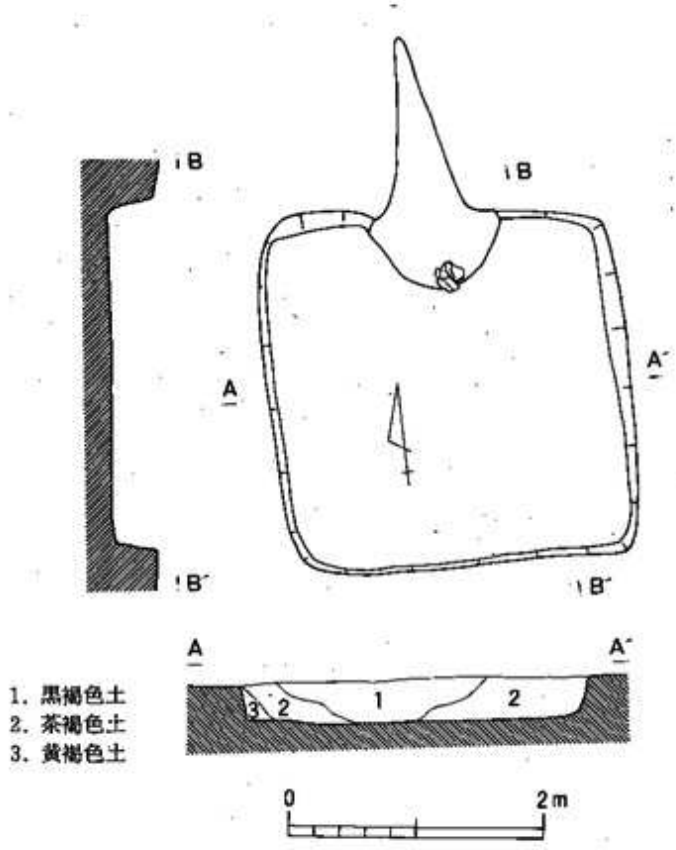
第18図　2号住居跡出土遺物実測図

3は土師器甕形土器である。器形は口縁部がゆるく「く」の字に外反し，頸部に僅かに綾をもつ薄手の土器である。調整は口縁部内外面横なでで，体部外面は上位が横位の中位が縦位のヘラ削りである。胎土は微砂粒を多く含み，焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。4はカマド支脚に使用されていた礫で，砂岩である。全面火を受けたと思われ，外面は薄く赤褐色に変色している。

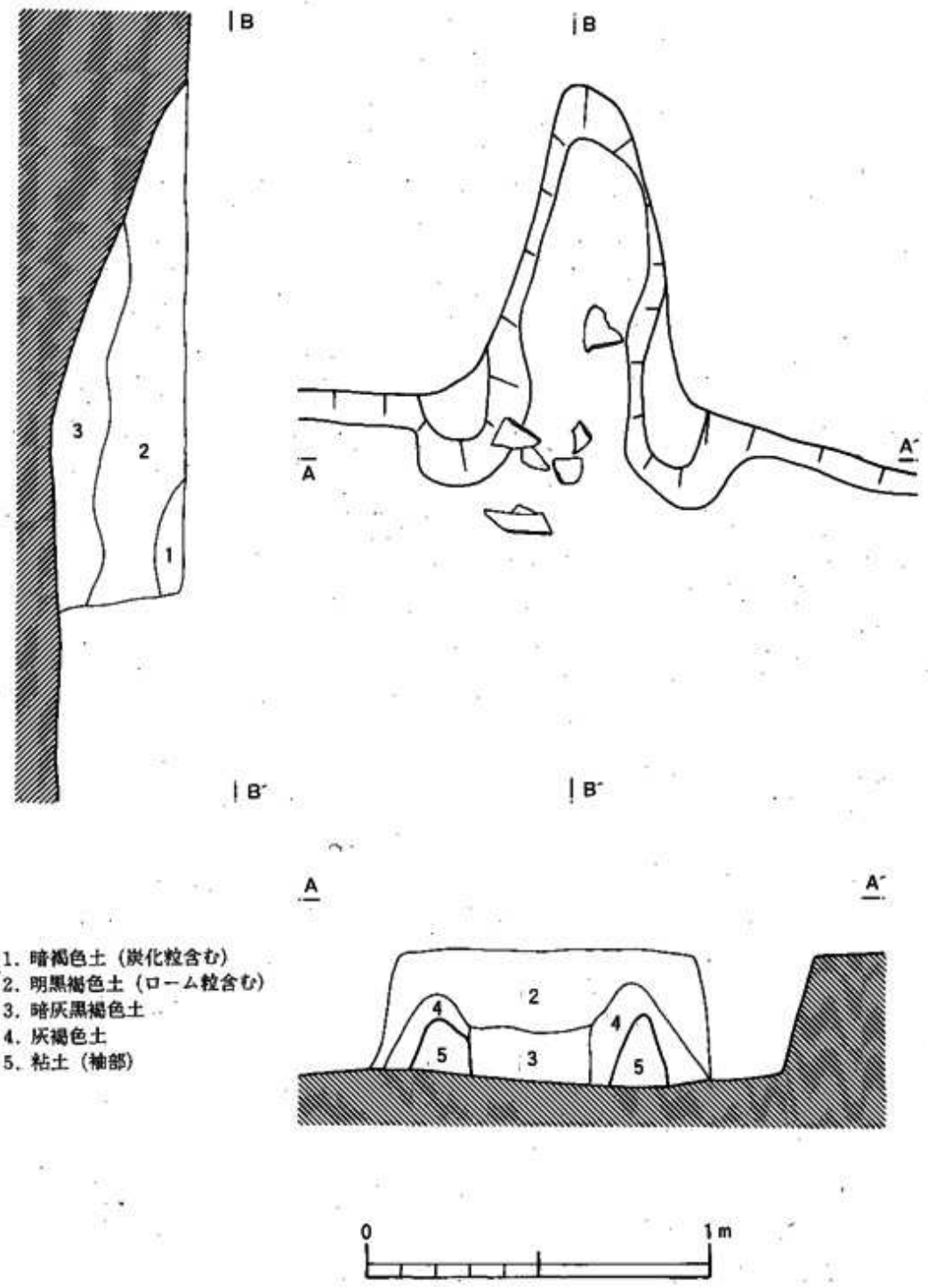
以上1～3の出土遺物の特徴を考えると，これらの出土遺物は9世紀後半代の所産ではないかと思われる。

3号住居跡（第19図，図版10）

本住居跡は 891－B－19グリッドで，調査区南端に位置する。また約12m北側より4号住居跡が検出されている。本住居跡は東西2.8m×南北 2.8mの平面形が方形を呈する小形の住居跡である。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。壁は確認面よりほぼ垂直に掘り込まれており，壁高は約0.35mを測る。覆土は1層～3層が自然堆積を示し，1層・2層に炭化物が多く含まれている。床面はローム面で踏み固められているがやや凹凸をもつ，周溝はなし。柱穴は住居跡内と住居跡周囲で確認作業を行なったが検出されなかった。



第19図　3号住居跡実測図



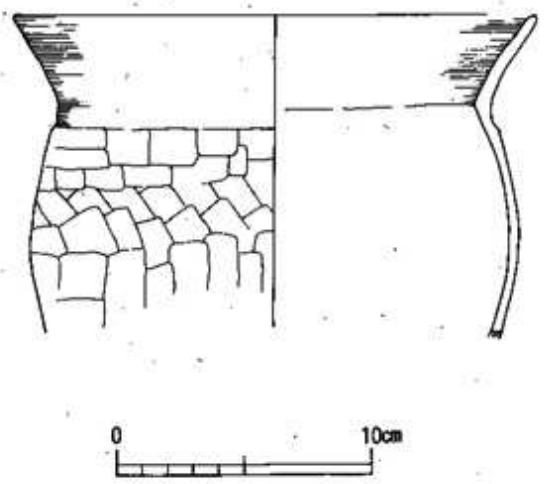
第20図　3号住居跡カマド実測図

カマド（第20図）

カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。壁を約１ｍと大きく幅の狭い「U」字状に掘り込んで緩やかな煙道部としている。焚口部はローム面で掘り窪められていない。カマド覆土1層・2層は住居跡覆土と同じ土層である。3層上面は天井部崩落のものと思われる粘土が中心で，下面は火床と天井部内側の焼けた焼土であろうが区別することができなかった。袖部は残りが良い方で，５層の灰色粘土を中心に壁より作り出されている。またカマド前面の１層中より第21図の甕形土器が出土した。

遺　物（第21図）

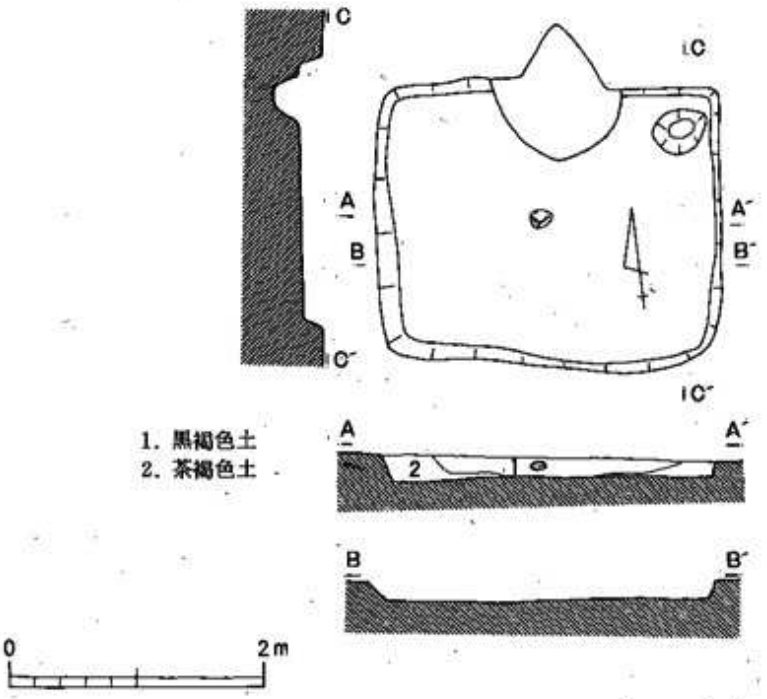
本住居跡出土遺物で図示し得たのはこの土師器甕形土器１点であった。器形は口縁が「く」の字状に外湾し，頸部外面に稜をもつ薄手の土器である。また体部は丸味をもち台付甕になることも考えられる。調整は口縁部内外面横なでで，体部外面は上位が横位の中位以下が斜位のヘラ削りである。胎土は微砂粒を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈し，器面全体にススが付着している。土器の特徴より９世紀後半代の所産のものと思われる。



第21図　３号住居跡出土遺物実測図

４号住居跡（第22図・図版10）

本住居跡は892－B－13グリッドで，調査区南端近くに位置する。また約12ｍ南側より３号住居跡が検出されている。本住居跡は東西2.7ｍ×南北2.2ｍの東西にやや長い方形を呈する小形の住居跡である。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。壁は確認面より垂直に掘り込まれており，壁高は約0.15ｍを測る。覆土は１層・２層が自然堆積を示し，１層中には炭化物が多く含まれる。床面直上から炭化材が出土している。床面はローム面であるが，踏み固められた所がなくやや軟らかい。周溝はない。柱穴は北東コーナーより径45cm×35cm・深さ約30cmのものが１基検出されたが，他に柱穴と思われるものは住居跡内外より検出されなかった。



第22図　4号住居跡実測図

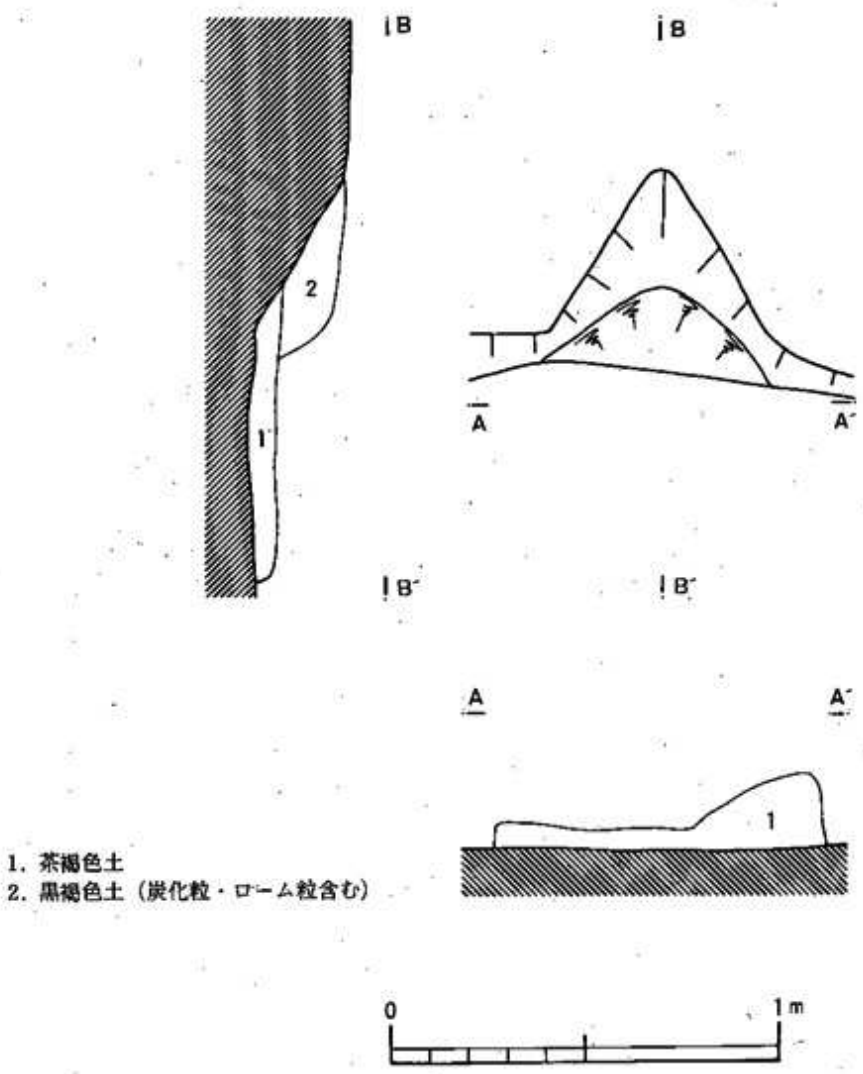
カマド（第23図）

カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。壁を約 0.5m掘り込んで緩やかな煙道部としている。焚き口部は床面上で掘り窪められていない。カマドの覆土は1層・2層とも住居跡覆土と同じであり天井部崩落の粘土や焼土が検出されなかった。また袖部は残存せず袖部に使用したであろう粘土も住居跡覆土に見られなかった。このため住居跡廃棄時には崩されていたのではないだろうか。

ハ．その他

1号土壙（第24図，図版11）

調査区のほぼ中央903－B－6グリッドに位置する。また本土壙の南側約4mから2号住居跡が，東側約 4.5mから2号・3号土壙が検出されている。本土壙はローム層上面で確認され平面形はほぼ円形を呈する。大きさは上面径が長径1.9m×短径1.85m・底面径が長径1.75m×短径1.63mで，深さは約0.3mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており，断面形は鍋底状を呈す。底面はやや凹凸を示している。覆土は3層（黒褐色土－ローム粒を多量に含む）と4層（黄褐色土－ロームブロック）が堆積した後1層・2層がレンズ状堆積しているため自然堆積と思われる。出土遺物はなく時期は不明である。

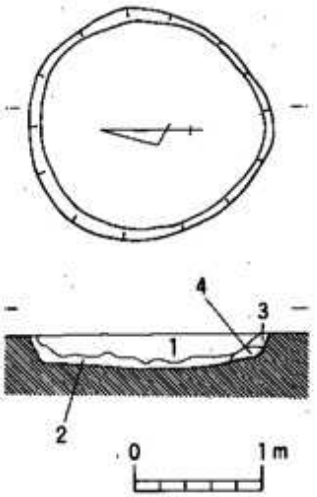


第23図　4号住居跡カマド実測図

2号土壙（第25図・図版12・13）

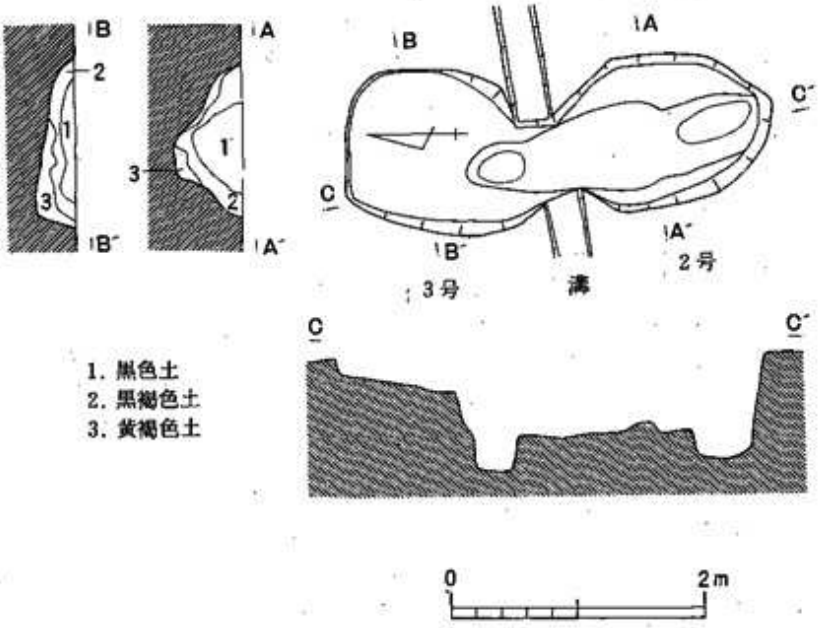
調査区のほぼ中央903—B—18グリッドに位置する。また本土壙の南側約8mから1号住居跡が，西側約4.5mから1号土壙が検出されている。本土壙はローム層上面で確認され平面形は南北に長い長円形を呈する。しかし土壙北側は溝状遺構・3号土壙と重複しており全形は不明であった。大きさは上面径が長径約1.8m×短径1.2mで，底面は溝状に狭くなる。このため断面形は深さ0.56mを測る「V」字状を呈する。覆土は1層（黒色土—砂質の黒色土にローム粒を含む。）2層（黒褐色土—多量のローム粒を含む。）3層（黄褐色土—ロームブロック。）の土層がレンズ状堆積を示すため自然堆積と思われる。次に南壁下の底面より径 0.6m×0.25m・深さ0.25mの小ピットが検出された。小ピットの覆土は主に2層

であり本土壙に共うものと考えられる。出土遺物はなく時期は不明であった。最後に溝状遺構と3号土壙との重複関係は，本土壙が溝状遺構に切られているが，3号土壙底面からも本土壙覆土が検出された。このことより古い順に3号土壙－2号土壙－溝状遺構と言える。



1. 黒色土
2. 黒褐色土
3. 〃
4. 黄褐色土

第24図　1号土壙実測図



1. 黒色土
2. 黒褐色土
3. 黄褐色土

第25図　2号・3号土壙実測図

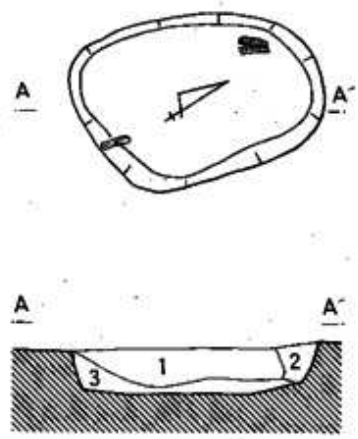
3号土壙

調査区のほぼ中央903－B－18グリッドに位置する。また本壙南側は2号土壙・溝状遺構

と重複して検出された。本土壙はローム層上面で確認され平面形は南北に長い不整形を呈する。大きさは上面径が長径1.5m×短径1.3mで，底面形は長径1.4m×短径1.2mである。深さは0.34mを測り断面形は土壙西側がやや深い皿状を呈す。底面はやや凹凸を示す。覆土は1層（黒色土ーローム粒を若干含む。）2層（黒褐色土ー多量のローム粒を含む。）3層（黄褐色土ー黒色土とロームブロックの混土層。）の土層であり，レンズ状堆積を示すため自然堆積と思われる。次に2号土壙と同じ様に南壁下の底面より径0.55m×0.35m・深さ0.25mの小ピットが検出された。小ピット覆土は主に2層であるため本土壙に共うものと思われる。出土遺物はなく時期不明。2号土壙・溝状遺構との重複関係は，覆土より両者に本土壙が切られているため，古い順に3号土壙ー2号土壙ー溝状遺構と言える。

4号土壙（第26図，図版13）

調査区の中央からやや南側の 900ーBー8グリッドに位置する。本土壙はローム層上面の黒色土中で検出され，平面形は南北に南い楕円形を呈する。大きさは上面径が長径1.32m×短径0.88mで，底面径は長径1.2m×短径 0.8mである。深さは0.22mと浅く断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平らである。覆土は1層（黒褐色土ー黒色土を主体にしまりが悪い。）2層（褐色土ー黒色土とローム土の混土層。）3層（黄褐色土ーローム土を多量に含む。しまり悪い。）土層で，ほぼレンズ状堆積を示しており一時期に埋め戻された感じはない。出土遺物は土器等の出土遺物がなく時期不明であるが，北壁きわの1層中より獣骨（馬歯）と思われるものが一括出土した。



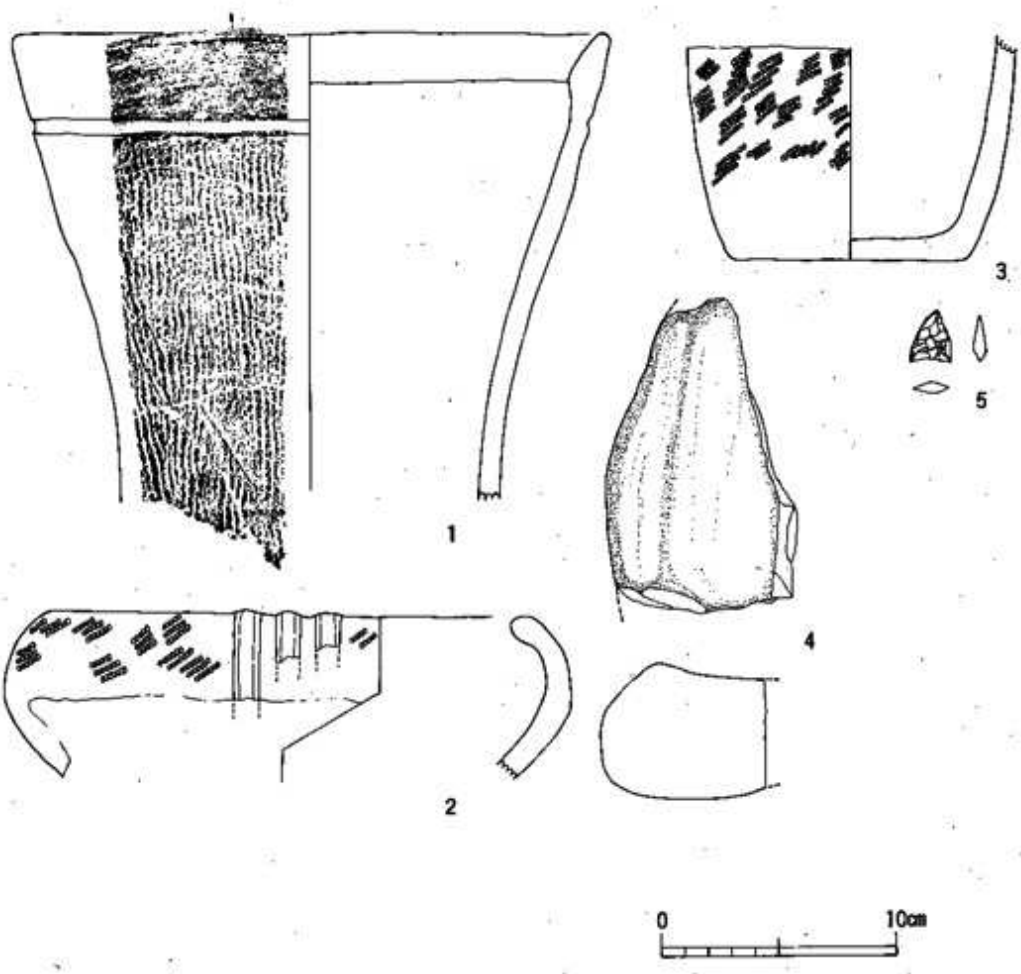
第26図　4号土壙実測図

トレンチ内出土遺物（第27図，図版20）

1は底部よりゆるやかに立ち上る深鉢形土器である。口縁部内面に稜をもち，外面は口縁部の下に太い沈線を廻らし口縁部文様帯と胴部文様帯に分けている。口縁部文様帯は無文であり，胴部は全面縦位に撚糸文を施している。胎土は白色砂粒を多く含み，色調は赤

褐色を呈す。焼成は良好である。2は口縁部が内湾しキャリパー状を呈す深鉢形土器と思われる。地文に縄文を施した後，口縁部に太い隆帯を3本垂下させている。胎土は砂粒を多く含み，色調は褐色を呈す。焼成はやや不良である。3は深鉢形土器底部である。底部のやや上位まで全面縄文が施してある。胎土は砂粒を多く含み，色調は褐色を呈す。焼成は良好である。4は内面を使用した石皿の破片で，安山岩を使用している。5は基部が直線的な無茎の石鏃である。

以上1～3は縄文時代中期中葉から後葉のものと思われるが，1は撚糸文を地文にした南関東的な土器であろう。しかし1・2共に本県ではあまり例を見ない土器であり，今後注目したい。



第27図　各グリット・トレンチ内出土遺物

3. まとめ

本郷前遺跡の先土器時代の遺物について

本遺跡から出土した遺物について若干の検討を加え，遺跡の性格及び遺物の編年上の位置づけについて述べてみたい。

出土遺物は全体で20点（表土中出土の掻器も含める）であり，その内訳けはナイフ形石器5・彫器4・掻器2・調整ある剥片6・剥片76・破砕礫118点である。この出土遺物中本遺跡の主要な石器[註1]と考えられるナイフ形石器及び彫器についてまとめてみたい。

○ナイフ形石器（第28図1～4）

ナイフ形石器は第1ブロックから2点，第2ブロック内から3点の都合5点が出土している。これは石器全体の約30%にあたる。この5点のナイフ形石器のうち図示した1～4について特徴を簡単にまとめてみたい。

1～4は，全て縦長剥片を用いた小形のものであることがいえる。計測値は，1～3が最大長3.0～3.5cm，最大幅1.5cm内外である。4については破損，若しくは意図的に折断を行なったのか不明であるが，現状では最大長4cm，最大幅1.9cmを測る。形態は，1～3には明確に折断技法が用いられており，頭初の剥片の形状から変化していることが伺える[註2]。

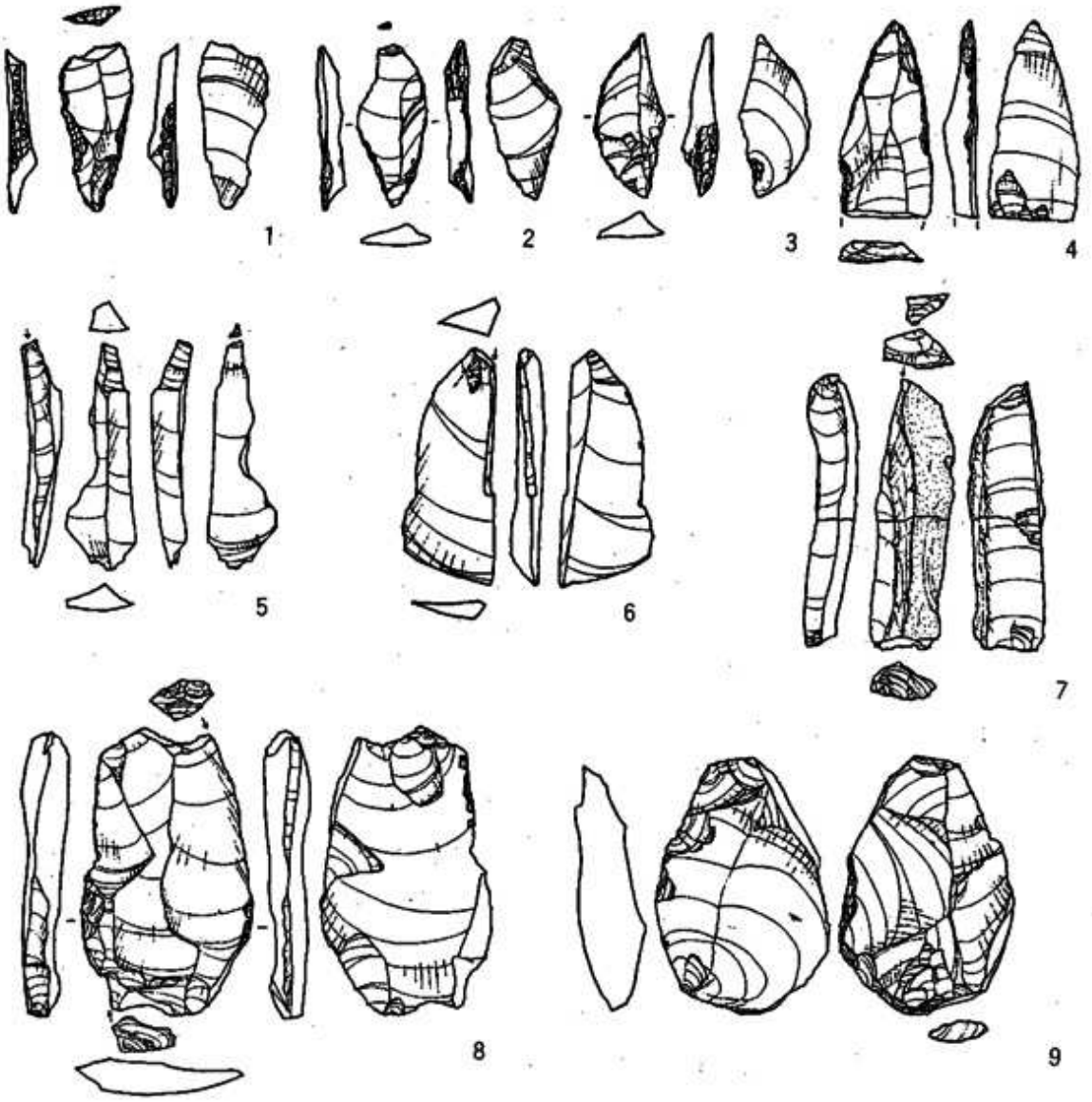
調整剥片の部位は，1・2が基部及び基部から両側縁にかけて，3は基部及び一側縁に集中的に認められる。これは白石氏の行なったナイフ形石器の型式の中での1・2はB類、3はA類に含まれるものと思われる[註3]。4については，ナイフ形石器，尖頭器または出居氏のいうナイフ状尖頭器として研究者の意見が分かれる石器と思われる[註4]。ここでは先端の両側縁に調整が施されるナイフ形石器としておく（4については上述したが，破損か折断かが明確でないし，またその後の裏面への2次的加工が問題となる）。これら1～4の石器は一応茂呂系ナイフ形石器の中に含まれるものと思われる。編年上の時間的位置づけについては，先土器時代の石器群について数多くの遺跡を調査し，その先後関係を明確に把握できる武蔵野台地においてこれらのナイフ形石器を対比させてみたい。本遺跡出土のナイフ形石器は，石刃技法を用いた縦長剥片の小形なものであること、先端部に刃部を作出することにより切出形ナイフともみられる点，また伴出石器には彫器がみられるが柳葉状の尖頭器が伴出しないことなどから考え合わせれば，第Ⅱb亜文化期に対比することができる[註5]。類例としては，鈴木遺跡第4Ⅳ上層の石器が好例である[註6]。

○彫　器（第28図５～８）

彫器は，第１ブロック３点，第２ブロック１点の都合４点が検出された。これは出土石器の25％を占めるものである。

４点の彫器は彫刻刃面の作出箇所及びその打面の調整によりＡ・Ｂ・Ｃの３分類が可能と思われる。

Ａ類：５・６　剥片の基部から先端に向かって左側縁に彫刻刃面が作出されるもので，打面調整は行なわれない。



第28図　本郷前遺跡出土石器（¾）

B類：7　剝片の先端から基部に向かって左側縁に彫刻刀面が作出されるもので，打面調整が行なわれる。

A・B類ともに彫刻刀面の打角は90°に近く，剝片の陵線とほぼ平行に走る。

C類：8　ファシットは，正面図右上及び左下の2箇所に作出され，両端には打面調整と思われる択入状の剝離が裏面より行なわれる。

これらの類例について明確にするには不安が残るが，A・B類のように主要剝離面に対し直角に刻む角形彫刻刀，またB類のように上端右肩に数回の打撃を加えたものなどは東北地方で見られる彫刻刀と思われる。遺跡名を記すならば金谷遺跡及び山屋遺跡出土のものに類似するものではなかろうか。C類についても同様な地域で類似が求められ，先端部に大きく択入部を作り，右あるいは左側辺に彫刻刀面を作出しているものは，山形県の横道遺跡及び東山遺跡において出土している石器に類似する。

9は表土中出土の掻器であるが，出土地点はレベル的に若干高いものの位置的理由から第Ⅱブロック出土石器と考えてよいと思われる。最大長5.3cm，最大幅3.5cmと比較的大きく剝片の基部に調整が施こされる。武蔵野台地での第Ⅳ層中にみられる石器と考えられる。

本郷前出土石器についてまとめてみると，当遺跡の主要な石器であるナイフ形石器は南関東的であるのに対し，彫器は東北的な影響をもとにして作出されたものと考えられる。これらの石器文化の様相が明らかにされた現在，本県の位置的な問題また当時の文化の流入経路等をふまえて，県内の石器を新ためて，再考する必要があると認められる。

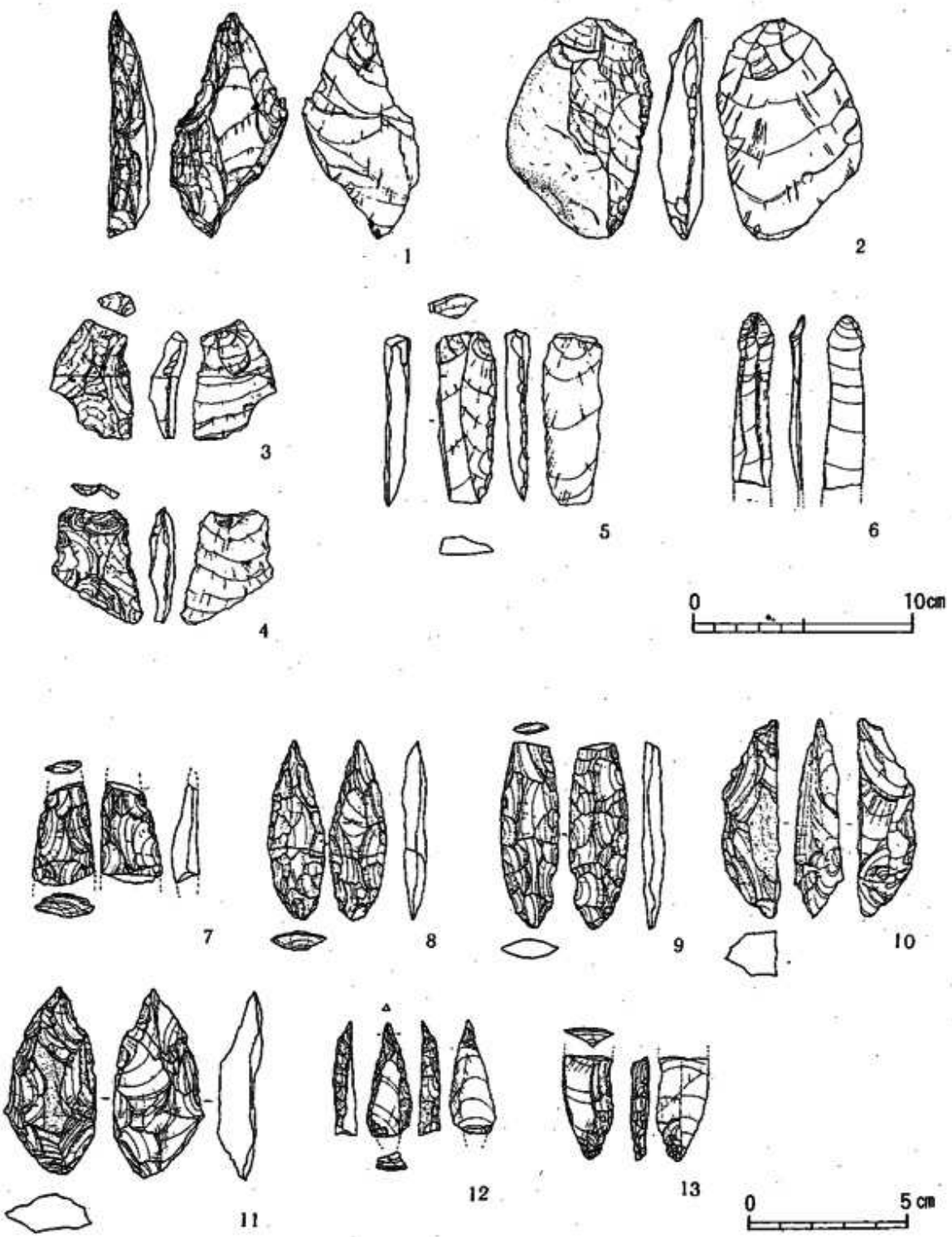
県内でのソフトローム層中出土石器について

栃木県内においてこの時期に限り，また発掘調査により明確な出土層位を把握した遺跡は，本郷前を含め星の宮A・塙B遺跡の3遺跡に過ぎない。これらの遺跡より出土した石器について図示し，石器群の様相・性格及び時間的変遷について武蔵野台地に類例を求め検討を加えてみたい。本県での他の時期については，矢島俊雄，岩上照朗両氏の詳細な研究があり，そちらを参照されることにより県内での遺物産出層位及び出土石器については理解することができよう。(註7)

○星の宮A遺跡(註8)（第29図1～6）

当遺跡からは削器7・石刃1・細石刃3点が出土しておりナイフ形石器の出土はない。この中で本遺跡の主体を占める石器である削器を5点図示し，形状及び技法等について述べてみたい。

削器は大形の剝片を素材としたもの(1・2)，石刃状の縦長の剝片を素材としたもの(5)，横長の剝片を素材としたもの（3・4）の3種に大別される。これらの石器の形態



第29図　星の宮A・塙B遺跡出土石器

及び剥片作出における形状から類推すると3種類の方法があったと岩上氏（岩上・1981）は述べている。

- 大形の剥片剥離（石核の形状は不明）
- 石刃技法的な整備された剥離方法（獲得される剥片は，3・4のように縦長で背面に同方向のネガティブな剥離面をもち両側縁が鋭利なもの）
- それ程整備された剥片剥離方法はなく，円礫から任意に剥片を剥離させていく方法（獲得される剥片は横長不定形で，背面に残えるネガティブな剥離痕の方向は不定であるものが多い）

以上の3種類が認められるとのことである。石質は，珪質流紋岩・安山岩が多く使用されている。遺物の出土層位は，若干の高低差はあるもののソフトローム層中の中位から下位にある。

星の宮A遺跡の石器を大略して記述すると，第1にナイフ形石器を伴なわないこと，第2に大形の削器（1・2はともに最大長10cm以上を測る）が存在する。第3に図示しなかったが細石刃が伴出していることなどが特徴として明記できる。これらの事実をふまえて立川ローム層中に類例を求めれば，武蔵野公園遺跡第Ⅲ層中の石器が同様な石器組成を持つものと思われる。(註9)

○塙B遺跡(註10)（第29図7～13）

当遺跡からは尖頭器5・錐器1・ナイフ形石器1点の計7点が出土している。石質はチャート，ホルンフェルスが主体をなす。

尖頭器は下記のようにA・B2分類することができる。

A類：7～9　柳葉形をしており，長軸・短軸の比が3：1以上である。周縁に細かい調整がみられ，自然面は残らない。

B類：10・11　A類と比較してやや大形であり厚みもある。長軸・短軸の比が2：1以内であり，周縁にはA類よりやや大きな剥離がみられる。片面に自然面が残る。

以上のように2分類したが，これは特に形状により分類を行なったものであり技法的な面からみればほぼ同様な石器として大過ないと考えられる。

錐器（12），**ナイフ形石器**（13）

ともに縦長剥片を素材とし，錐器は打面部を基部として両側縁に調整を施し，先端に刃部を作出する。ナイフ形石器は約½を欠損し基部のみが残る。打面部を基部とし右側縁に調整加工が施される。

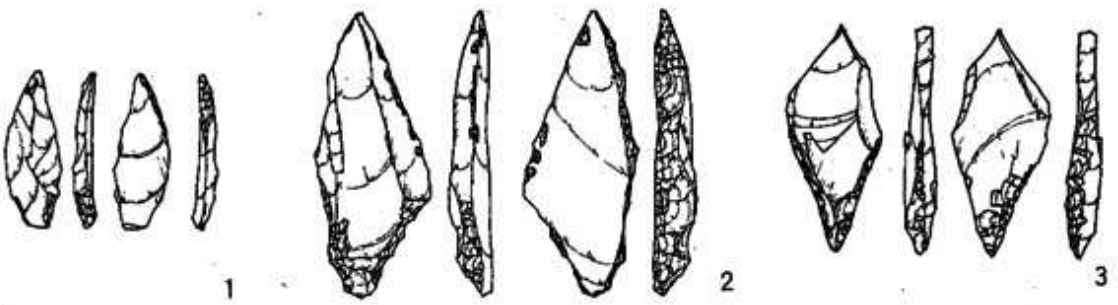
塙B遺跡出土の石器について類例を求めることについて問題が残るのは，当遺跡出土の尖頭器とナイフ形石器の伴出である。ナイフ形石器の形状だけを取り上げて類例を求める

と，本郷前遺跡出土のものよりも前出的な形態であり，立川ローム層中の第Ⅳ層中に一般的に出土するナイフ形石器の形態を維持している。[註11] 反面，尖頭器だけを取り上げて類例を求めると，これら5点の石器が遺跡出土石器の約8割を占めること，また両面加工という形態が定着していることを考え合わせれば，立川ローム第Ⅳ層上面～Ⅲ層出土石器として対比することができよう。[註12] 当遺跡では他に伴出した別器種の石器が存在しなかった点，また整理途中であることなどから，一応現時点では尖頭器の時期に主眼を置き，立川ローム第Ⅳ層上面～Ⅲ層対比としておく。

各遺跡の時間的変遷

前項において，県内の3箇所の遺跡出土の石器の様相について述べたが，各遺跡での主体となる石器が大きく異なることが言える。つまり本郷前では小形のナイフ形石器と彫器星の宮Aでは大形と小形の削器，塙Bでは尖頭器が石器組成の主体をなす。これを編年的な時間枠で大きくみれば，小田静夫氏の言う第Ⅱb亜文化期内に収まるものとされよう。また，前述したような石器の形状及び技法等を考慮して先後関係を記するならば，本郷前→塙B→星の宮Aとなることが想定されよう。[註13] また，本郷前と塙Bを時間的には同時期に考え，石器組織や遺跡の位置的な影響を踏まえて本郷前・塙B→星の宮Aという流れも考えられる。

これら上記の3遺跡の他に八幡根東遺跡がある。[註14] 現在八幡根東遺跡は、整理作業中であるため明確には把握し得ないが，9箇所のユニット，石器は多器種にわたり30点ほど出土している。第30図に図示した石器はその一部である。



第30図　八幡根東遺跡出土石器（½）

1・2はナイフ形石器，3は彫器である。全て石刃技法を用いた縦長剥片を使用し，基部周辺及び一側縁に入念な調整加工を施こす。2・3には折断技法を用いている。1～3や他の石器を検討すれば，これらは立川ローム第Ⅳ層中～上層出土の石器に対比でき，類例を求めるならば，前原遺跡第Ⅳ中1層石器が好例と思われる。これらのことから，八幡

根東遺跡は時間的な流れからみれば本郷前の前段階に位置づけられよう。

石器の出土層位は，調査者によるとソフトローム層中であるという。つまり本県におけるソフトローム層中には，少くなくとも4形態の石器文化が存在するわけであり，立川ロームに対比すれば，第Ⅳ層中もしくは上層～Ⅲ層中位にかけての石器文化の流れが，本県では1枚のローム層中に濃縮されているわけである。

今後これらの石器群の変遷を明らかにするとともに，各遺跡での層位対比の把握が重要なポイントとなろう。現在，先土器時代の発掘調査の際には，ソフトローム層中の小川ヌコリア層，今市軽石層を鍵層として層位的に直接対比しているわけであるが，これをもって県中南部と県北部を対比するには多少の不安が残る。県内全域をカバーできる模式的な標準土層図の作成が望まれるものである。

〈註〉

註1 「主要な石器」として取り上げた意味については，本遺跡内で石器として認定することができ，比較的出土量が多いものを指す。

註2 「折（切）断技法及び手法」とよばれる加工方法の定義については，鈴木次郎・矢島國雄両氏の見解と一致するものである。両氏の定義は下記の内容である。

『……素材を折断した後に調整剥離を施す場合と，素材を折ることなく調整剥離を集中的に施した結果，あたかも折（切）断したような調整剥離面を形成する場合がある……（中略）……ともに「折断手法」とよぶことにする。』

註3 白石浩之氏は，調整の位置により5型式，(白石 1973)，また7型式(白石 1978)に分類されている。

註4 出居　博氏は，「佐野市下林遺跡採集の先土器時代資料」(1981．10) においてナイフ状尖頭器という言葉を使用している。出居氏と筆者とではこの言葉について異なった理解をしているかもしれない。

註5 小田静夫氏の作成された編年による。

註6 鈴木遺跡第Ⅳ層上層から検出された石器群の中には，切出形を呈するものが以外に多出しており，本郷前出土の1～3が特にこれと類似性が認められる。

註7 両氏により県内のローム層の対比，また出土石器の先後関係が明確にされている。

註8 星の宮A遺跡は，栃木県の南東部の芳賀郡益子町に位置する。昭和54年に栃木県教育委員会が調査する。

註9 特に星の宮A遺跡出土1は，武蔵野公園遺跡での第10図6のスクレイパーとしたものと形状が類似している。

註10 塙B遺跡は，星の宮A遺跡と同様に芳賀郡益子町に所在する。両遺跡は小貝川右岸の洪積台地（字都宮周辺の宝木面相当）の東縁にある。益子町教育委員会が調査し報告書は未刊。

掲載した図面は「栃木の遺跡案内」による。

註11　立川ローム第Ⅳ層中のナイフ形石器に類似するもので，ひろく同様な形態をもつ石器が各遺跡にみられる。

註12　両面加工の尖頭器の出現，ナイフ形石器との共存などについては種々な意見がある。塙B遺跡では，技法的にみて確立されたものであると考えられるためⅣ層上面～Ⅲ層とした。

註13　矢島俊雄・岩上照朗両氏は，本郷前と星の宮Aの関係について，産出層位から星の宮Aを古く位置づけた。

註14　昭和57年度に栃木県文化振興事業団が調査を行なった。現在整理中であり，ここに掲載した図面は「小山市史」によるものである。

〈参考文献〉

出居　博　1981「佐野市下林遺跡採集の先土器時代資料」唐澤考古1

稲田孝司　1982「旧石器時代」日本の美術No188

岩上照朗　1981「国道等道路改良事業地内遺跡発掘調査報告書，星の宮A遺跡，星の宮B遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告40集

「先土器時代，星の宮A，塙B遺跡」『栃木の遺跡案内』栃木県考古学会編

小田静雄・C．T．Keally　1973「第Ⅲ章先土器時代　第三節編年」武蔵野公園Ⅰ

1974「平代坂・七軒家」小金井市文化財調査報告書3

織笠　昭　1979「ナイフ形石器と切出形石器－東京都における武蔵野台地第Ⅳ層の例から－」神奈川考古第7号

織笠　昭・田中英司　1980「ナイフ形石器文化終末期の再検討」『ナイフ形石器文化終末期の問題（Ⅱ）』神奈川考古第8号

鈴木次郎・矢島國雄　1978「先土器時代の石器群とその編年」日本考古学を学ぶ(1)

〃　〃　1979「相模野台地におけるナイフ形石器文化終末期の様相」神奈川考古第7号

中村喜代重　1980「尖頭器の共存について」『ナイフ形石器文化終末期の問題(Ⅱ)』神奈川考古第8号

中村紀男　1980「栃木県内出土のナイフ形石器をめぐる二・三の覚え書き」栃木県考古学会誌第5集

福田定信　1981「第5節西仁連川（江川）流域の遺跡，四鷹ノ巣前遺跡」小山市史史料編

〃　1984「第1章　狩猟・採集の時代　3先土器時代の栃木県南部」小山市史通史編Ⅰ自然，原始・古代，中世

矢島俊雄・岩上照朗　1981「栃木県先土器時代遺物の産出層位とその検討」栃木県考古学会誌第6集

山形県教育委員会　1964「山形県の無土器文化」山形県文化財調査報告書第14集

歴史時代住居跡について

本遺跡より検出された住居跡は4軒である。以下これらの住居跡について二，三問題を考えてみたい。

住　居　跡　一　覧　表

住居跡	形　状	規　模(m)	カマドの方位	主柱	枝柱	周溝	備　考
1号住居跡	隅丸長方形	3.3×2.3	N－90°－E	－	－	－	覆土中より鉄製品の小破片出土
2号住居跡	方　形	3.6×3.6	N－10°－E	－	2	－	土師器・須恵器杯各1点 土師器甕形土器1点
3号住居跡	〃	2.8×2.8	N－ 2°－W	－	－	－	土師器甕形土器1点
4号住居跡	隅丸長方形	2.7×2.2	N－ 8°－E	1	－	－	

最初に検出された住居跡の特徴を上げると

1) 4軒とも一辺が4m以下の小形住居跡である。特に3号・4号住居跡は一辺3m以下の小形住居跡である。

2) 1号・3号住居跡は無柱穴住居跡である。また2号住居跡からは壁柱穴と思われるものが2基，4号住居跡からは柱穴と思われるものが1基検出されたが，4本の柱穴を配するものはない。なお遺構確認面でも住居跡に関係すると思われる遺構は検出されていない。

3) 1号・2号住居跡が台地平坦部より，3号・4号住居跡が台地南端部より2軒ずつ近接して検出された。出土遺物より2号・3号住居跡は9世紀後半の時期であろう。また1号・4号住居跡も住居跡形態より2号・3号住居跡に近い時期と思われる。しかし1号・2号住居跡は2mという至近距離であるため上屋構造を考えると同時期存在とは考えられない。

本遺跡の住居跡については以上のことが考えられたが，次にそれぞれの問題について若干触れ，今後の調査課題としたい。

まず歴史時代の小形住居跡の本県における検出例を見てみると，一つには本遺跡のように単独または数軒しか検出されない遺跡がある。これには山向遺跡(註1)が上げられる。他に遺跡の広がりは不明だが小形住居跡が検出されている例として壬生銭渕遺跡(註2)・島田遺跡(註3)が現在知られる。これに対し小形住居跡が多数検出される遺跡として井頭遺跡(註4)，寺之後遺跡(註5)，乙女不動原北浦遺跡(註6)などが上げられる。前者は季節的な作業小屋や工人の作業小屋等が考えられている(註7)。これに対し後者は「郷」などの集落が考えられている。本遺跡の場

合は前者であるが住居跡内より多量の鉄滓，焼土等が検出されないため小鍛治場跡のような作業小屋ではないであろう。ただ一家族から多くても二，三家族が短期間に生活した場であると思われるが性格は不明である。

次に，歴史時代には一辺が4m以下の小形住居跡が多くなる傾向は上記のように本県にも数多く見られる。この小形住居跡について，竪穴住居跡の小形化を土間が竪穴化し居間部分は平地化したと考える(註8)説もある。しかし本遺跡において住居跡の周囲より柱穴，炉址，遺物等は検出されず竪穴外の生活空間を確認することはできなかった。今後竪穴住居跡が高床式に変化することも考え，住居跡外の遺物出土状況にも注意を払い調査することが必要であろう。

〈註〉

註1　海老原郁雄・他　1977「山向遺跡」上河内村教育委員会

註2　橋本　澄郎・他　1978「壬生銭渕遺跡」栃木県考古学会

註3　秋元　陽光　1981「島田遺跡Ⅰ」上三川町教育委員会

註4　大金　宣亮・他　1974「井頭」栃木県教育委員会

註5　青村　光夫　1984「田沼町史資料編2」第五章　古墳時代以降の遺跡　田沼町

註6　内山　謙治　1984「小山市史　通史編Ⅰ」第四章・六　平安時代の小山　小山市

註7　中山　吉秀　1976『離れ国分考』「古代第61号」　早稲田大学考古学会

註8　柿沼　幹夫　1979「下田・諏訪」埼玉県教育委員会

〈参考文献〉

笹森　建一・他　1978「川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡」上福岡市教育委員会

橋本　澄郎・他　1978「薬師寺南遺跡」栃木県教育委員会

海老原郁雄　1981『奈良土遺跡』「栃木県埋蔵文化財保護行政年報」　栃木県教育委員会

木村　等　1981「辻の内遺跡」栃木県教育委員会

海老原郁雄・他　1981『大郷戸南遺跡』「県営圃場地内遺跡発掘調査報告書」　栃木県教育委員会

橋本　澄郎・他　1982「向北原南遺跡」栃木県教育委員会

駒見　和夫　1984『古代における炉とカマド』「信濃第36巻第4号」　信濃史学会

向野原遺跡

V　向野原遺跡の発掘調査

1．調査の方法

遺跡地は当初は良好な畑地であったため作業員による表土除去をも考えていたが，用地買収完了から発掘調査着手までの期間が長期になったため荒地となってしまい，篠竹，雑草が背たけ以上も繁茂しており，刈払い等に多大な労力と期間を必要とすることが考えられ，また，遺物の散布が全体的に希薄なことと，調査対象面積が広大（ 25,100㎡）なため重機により表土の除去を行なうこととした。表土の除去は昭和55年度に確認調査として実施し，一部地区については遺構の精査確認もおこなっている。昭和56年度に調査対象地区全体を精査し，遺構の検出をおこなった。

2．調査日誌

向野原遺跡の調査は，昭和55・56年度の２ヶ年度に渡って実施された。昭和55年度は，確認調査として遺跡範囲全面にわたって重機による表土の削平をおこなっている。表土の削平は，昭和55年９月17日～10月８日までの約20日間実施した。表土削平面積は25,100㎡である。本調査は，昭和56年度におこなった。調査日誌は本調査をおこなった昭和56年８月24日～11月13日の期間分について記述する。

８月24日　作業員募集のため，小山市教育委員会の協力により，地元中久喜公民館で発掘調査について説明会を開く。

８月25日　現場事務所設営。

８月27日　発掘器材搬入。

９月１日　本日より作業員による現場作業を開始する。諸注意事項の説明ののち，調査区の除草作業に入る。

９月２日　除草作業と併行して遺構検出作業。方形の落ち込みを３個所で確認。

９月３日　遺構検出作業。土壙状の落ち込みを確認。

９月４日　遺構検出作業。

９月７日　遺構検出作業。SI－01～03の遺構確認写真撮影。

９月８日　SI－01の遺構内埋土除去作業。各遺構の測量基準杭設定。

９月９日　SI－01の遺構内埋土除去作業。埋土から滑石の剝片等が多く出土し，作業

の進捗がおそい。埋土を後日ふるいかけするため1個所に集積を開始す。

9月10日　SI-01の遺構内埋土除去作業。滑石製模造品の剝片，未製品，製品の出土が多々ある。

9月11日　SI-01の遺構内埋土除去作業。

9月16日　SI-01のセクションベルトの土層図作成。セクションベルト写真撮影。セクションベルトの除去作業。SI-02，03の遺構内埋土除去作業。

9月17日　SI-01のセクションベルト除去完了。出土遺物の原位置での写真撮影を行なう。SI-02のセクションベルトの土層図作成。セクションベルト除去後遺構の全景写真，遺物出土状況写真撮影。SI-03の遺構内埋土除去作業。SX-01の遺構内埋土除去作業。

9月18日　SI-01の出土遺物の位置の実測，レベリングののち遺物の取りあげ。SI-02の遺構平面図作成。SI-03は後世の掘り込みと判明したため遺構番号を欠番とする。SX-01の遺構内埋土作業。

9月21日　SI-01の床面精査，柱穴検出。SI-02のエレベーション図作成。炉跡写真撮影。SX-01全景写真撮影。SK-01～05内の埋土除去作業。

9月22日　SI-01の平面図作成。SK-01～05の全景写真撮影。遺構検出作業。

9月24日　SI-01遺物出土状況，エレベーション図作成。SK-01～05平面図作成。遺構検出作業。

9月28日　SI-01の貼り床除去作業。SK-01，03エレベーション図作成。遺構検出作業。

9月29日　SI-01の貼り床除去作業。SK-02，04，05エレベーション図作成。

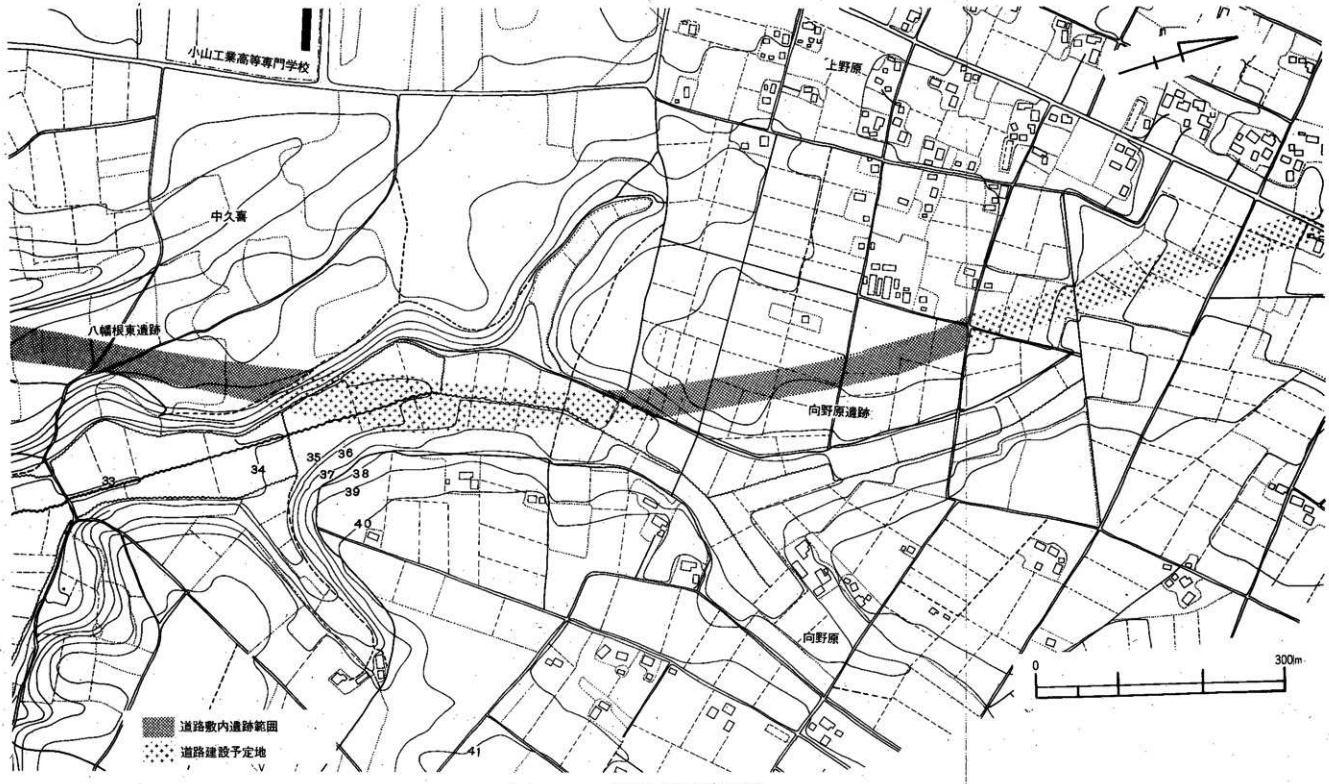
10月2日　SI-01の貼り床除去作業。貼り床にもかなりの模造品等が混入している。遺構検出作業により確認した遺構SI-04，05とSX-02，03，ピット群の確認状況写真撮影。

10月5日　SI-04，05，SK-02，03の埋土除去作業。確認調査時点で残土置場とした地区の残土を移動し，その部分の表土除去を重機により行なう。

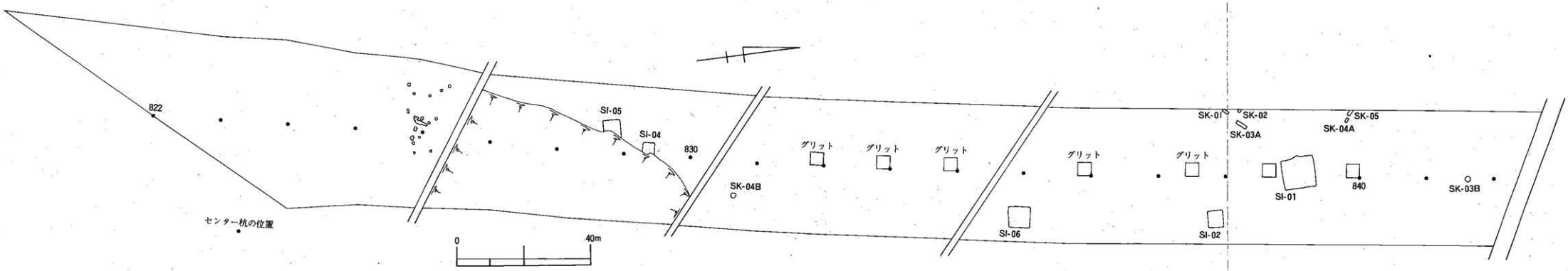
10月6日　SI-04のセクション図作成。写真撮影。SI-05埋土除去。残土の移動。SI-01の炉跡平面，セクション図作成。写真撮影。貼り床除去作業。

10月7日　SI-01の貼り床除去作業。SI-04の全景，遺物出土状態写真撮影。SI-05セクション図作成。

10月12日　残土除去地区の遺構検出作業。SI-01平面図作成。埋土のふるいかけ。全図作成のための測量基準杭設定。



第1図　向野原遺跡地形図



第2図　向野原遺跡全体図

10月13日　遺構検出作業。SI-01埋土のふるいかけ。SI-04平面図作成。SI-05全景写真撮影。平面図作成。

10月14日　遺構検出作業。SX-04とSI-06の各遺構を検出。SI-06確認写真撮影。SI-05の炉跡セクション，平面図作成。

10月15日　SI-06埋土除去。セクション図作成。写真撮影。SI-05炉跡写真撮影。SX-05～07，SK-30確認状態写真撮影。

10月16日　SX-05～07埋土除去。SI-01埋土のふるいかけ。SI-06セクション図作成。SK-30埋土除去，セクション図作成。写真撮影。

10月19日　SI-01，06，SK-30全景写真撮影。

10月20日　SI-06平面，エレベーション図作成。炉跡平面，セクション図作成。SI-01埋土のふるいかけ。

10月21日　SK-30平面図作成。SI-01埋土ふるいかけ。各地点の土層図作成のためグリフトを設定し坪掘りを行なう。

10月23日　土層図作成のためのグリット坪掘り。

10月26日　土層図作成のためのグリット坪掘り。SI-01の埋土のふるいかけによる遺物の選別。

10月27日　SI-01平面図追加。埋土のふるいかけによる遺物の選別。土層図作成のグリットの坪掘り。

10月28日　土層図作成のグリット坪掘り。土層図作成。SI-01埋土のふるいかけによる遺物の選別。

10月29日　土層図作成のためのグリット坪堀り。SI-01埋土のふるいかけによる遺物の選別。

10月30日　土層図作成のためグリット坪掘り。土層図作成。SI-01埋土のふるいかけによる遺物の選別。

11月4日　SK-06～13，22～29の埋土除去。SI-01埋土のふるいかけによる遺物の選別。

11月5日　SK-06～13，22～29のセクション図作成。写真撮影。SI-01埋土のふるいかけによる遺物の選別。

11月9日　SK-06～11，22～29の全景写真撮影。SK-14～21の遺構内埋土除去作業。セクション写真撮影。SI-01埋土のふるいかけによる遺物の選別。

11月10日　SK-14～21のセクション写真撮影。平面図作成。SI-01埋土のふるいかけによる遺物の選別。

11月11日　SK -06～29までの土壙群の全体写真撮影。SK-16～21の全景写真撮影。SK-31埋土除去，セクション図作成。SI-01埋土のふるいかけによる遺物の選別。

11月12日　SK-06～13，22，23平面図作成。SK-31完掘写真撮影。SI-01埋土ふるいかけによる遺物の選別。

11月13日　SK-14～21，24～29，31の平面図作成。土層図作成のためのグリットの埋戻し作業。

11月16日　向野原遺跡の調査を終了し，現場事務所を次の調査地である八幡根東遺跡に移動する。

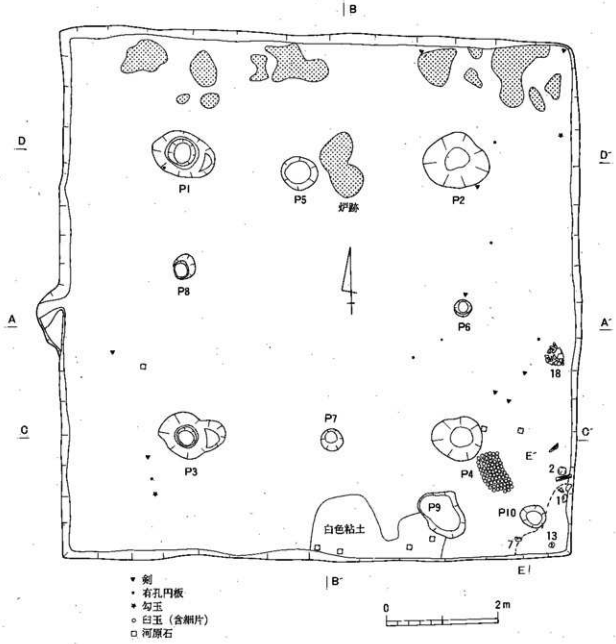
3．遺構と出土遺物

イ．古墳時代

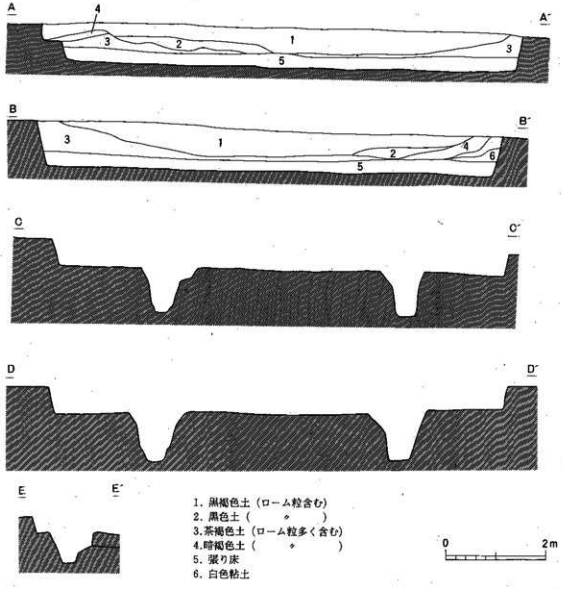
SI－01

遺　構（第3～5図，図版1～9）

SI-01は調査区の北側にあり，住居跡の中では最北端に位置する。地形的には，南に舌状に延びる低台地の平坦部にあり，後述するSI-02，06も同様の立地である。プランは一辺がほぼ9mの整美な正方形を呈する大形のもので，床面積（以下柱穴・貯蔵穴等を含めた床面全体とする）は約77.5㎡。主軸（以下磁北に対し炉を通る中軸線とする）はN-2°-Eとほぼ南北にとる。各コーナーは明確な角をもっており直角をなす。西壁中央に張り出し状のものがみられ，南から北へ提状にロームを掘り残している。セクションで見る限り，覆土第4層の埋没状態が不自然で遺構に伴なうかどうかは断定できない。壁の遺存状態は良好で，確認面から床面までは約40cm，75～80°の傾斜で立ち上がる。周溝は貼床を除去したにもかかわらず認められなかった。柱穴は8本検出された。そのうち4本(P_1～P_4)は主柱穴，他の4本(P_5～P_8)は補助柱穴と考えられる。主柱穴はプランのコーナー対角線上に正確にのり，対角線の交点からの距離も等しくまた各柱穴間の長さも一定しており，非常に規格的に掘り込まれている。深さは80cm～1mで底部にあたる部分（柱が接する部分）に，褐色土，黒色土，ロームを混ぜたものを固くつきかためている。補助柱穴の4本は主柱穴間に設けられるが主柱穴ほどの規格的な配置はないようである。径は30cm前後，深さは約40cmを測る。なおP_5・P_7・P_8は貼床除去後に確認された。床は踏み固め等は認められず軟弱である。全面にわたってロームを主体とする土で約20cmほど貼床しており，掘

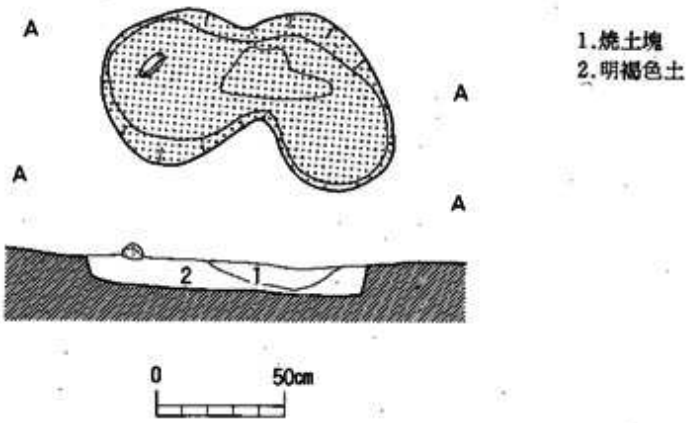


第3図　SI-01実測図



第4図　SI-01セクション・エレベーション実測図

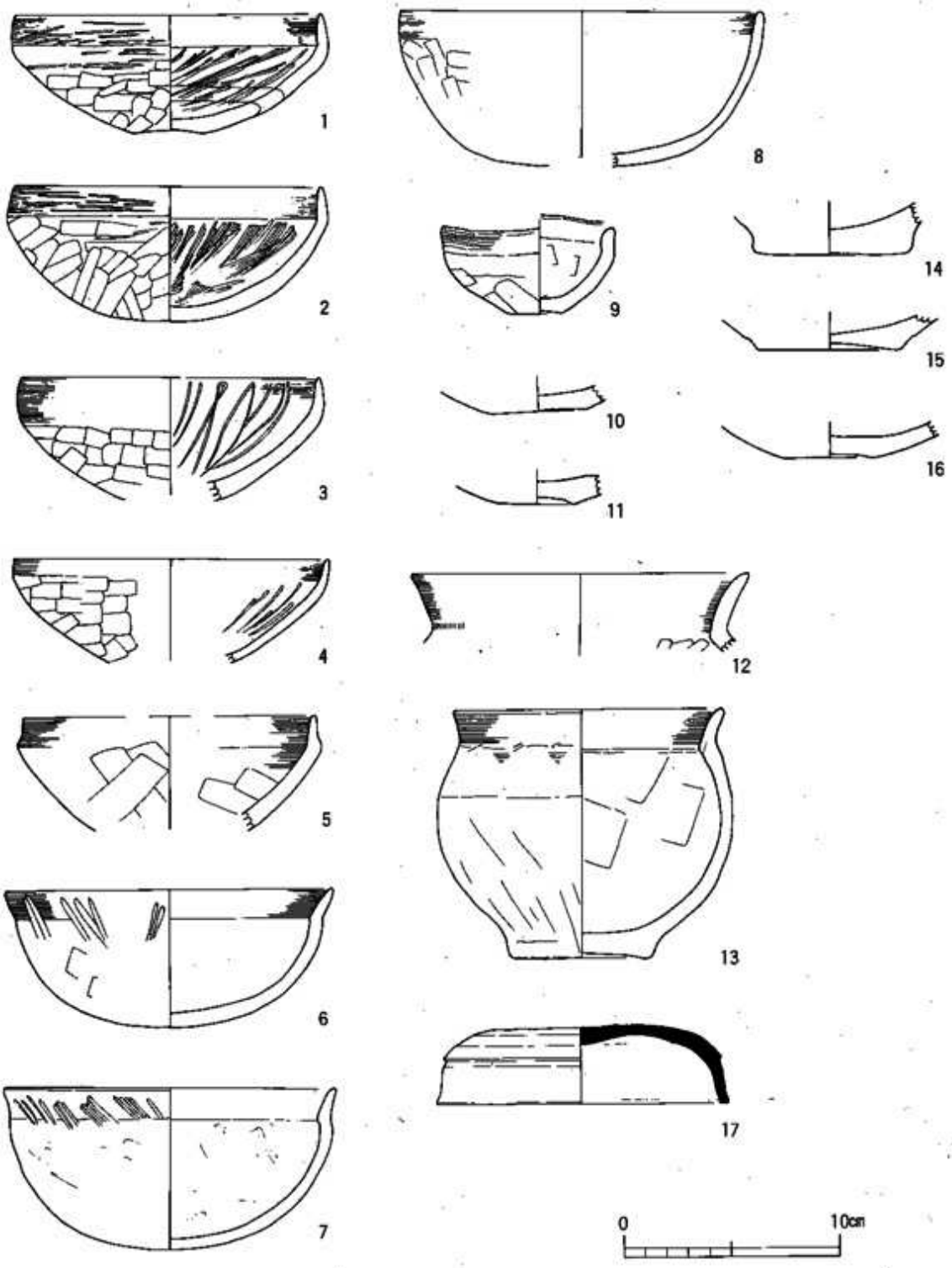
り方面は水平をなす。南北コーナーを狭むように「L」字状にベッド状の高く固い部分が認められる。炉は北壁寄り，主柱穴P_1・P_2間，P_5の東に設けられる。南北に長い楕形で長軸1.1m。南側に長さ13cm，幅5cmの河原石を1個配する。掘り込みは約10cmで炉床は固くしまり，凹凸が激しい。中央部では40cmの範囲で焼土ブロックが顕著に認められる。貯蔵穴は南東コーナー部に位置する。径45cmの円形で，深さは約60cmを測る。出土遺物はない。また貼床除去後にP_4南側で不整形のピット（P_9）が検出された。深さは掘り方面から約20cm。杯形土器が出土している。このピットの上には床面レベルで白色粘土の広がりがみられた。この付近は石製模造品や屑片が多量に出土し，工作に関わる特殊なものと考えられる。



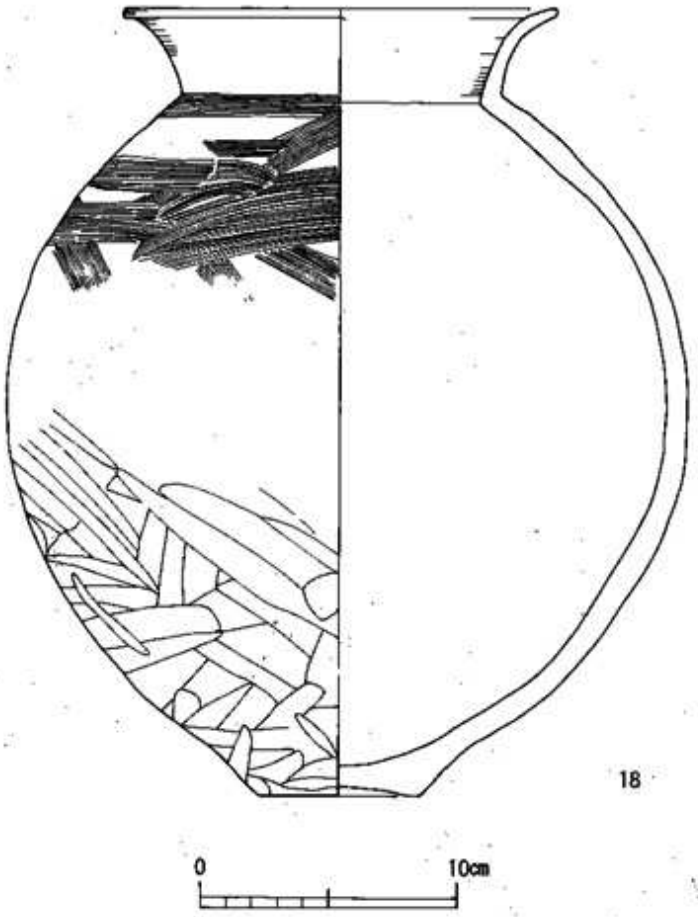
第5図　SI-01炉跡実測図

遺物（第6～27図，図版26～28）

本跡から出土した遺物は，土師器，須恵器，石製模造品である。土器では，完形もしくは復元可能なものは10余点である。出土位置をみると南西コーナー付近に集中する。2は完形の杯形土器で倒立，1も同様の出土状態，体部½を欠損する。13の小形甕形土器，7の椀形土器ともに斜位で出土した。これら4点は，前記のコーナーを挟む「L」字状の高まりから検出されており，ここがある一定の機能をもっていたらしいことが想定される。8は東壁ぎわの床面で潰れた状態で検出されたが完形に復元できた。その他の土器は覆土中あるいは床面に近いレベルで認められた。なお17の須恵器蓋形土器は炉近辺から破片で出土したもので，床面出土のものが多い。土器に較べ多量に検出されたものは石製模造品



第6図　SI-01出土遺物実測図



第7図　SI-01出土遺物実測図

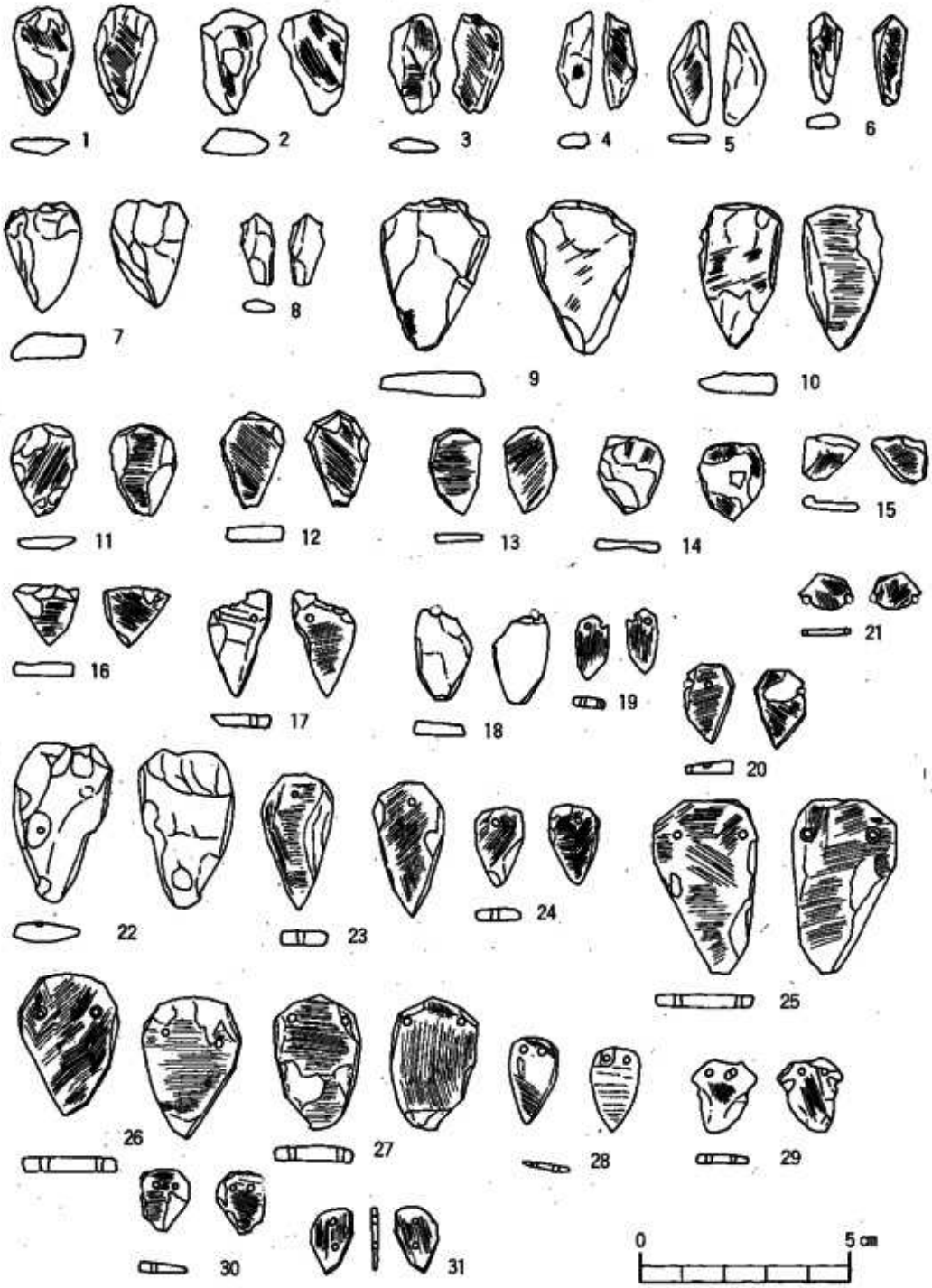
類である。内訳は剣形40個（うち未製品17個），有孔円板36個（未製品8個），勾玉形8点（未製品4個），臼玉854個（未製品456個）の他，原石，屑片等である。出土状態で特筆すべきは，土器同様南西コーナー付近に多くみられることで，特にP_4の南西では臼玉を含む屑片多数が床面に密着した状態で認められた。またP_9，白色粘土中からも出土した。

剣形模造品（第8・9図，図版27）

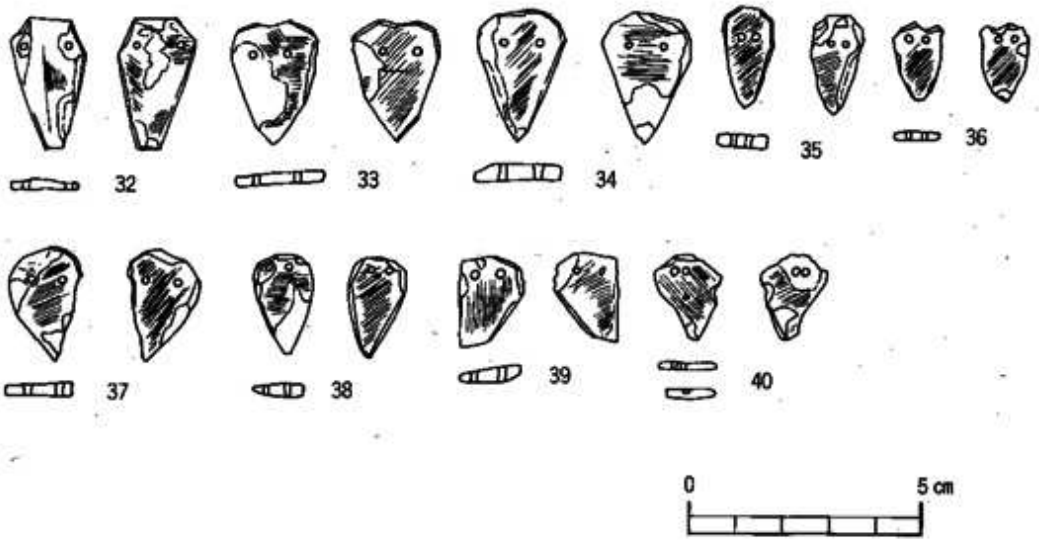
剣形模造品と考えられるものは，未製品，破損品，完成品の全てを含めて40個出土している。内訳は未製品17個，破損品5個，完成品28個である。以下そのそれらを細かく観察しその製作法をみてみたいと思う。

1～16はまだ柄部に穿孔のなされていないものである。1～4は磨きは両面のみで，側面はなされていない。5は片面のみに，6，7は片面の他に側面が磨かれている。8，9は両面のみ磨かれているが，10～16は両面と側面が磨かれており，磨きの最終段階のものと考えられる。

17～21は破損品である。いずれも柄部に2孔の穿孔がなされたものと考えられるが，17，18には1孔が認められるだけであるが，片側を穿孔中に破損したものと言える。17の上側面に工具による削り痕が認められる。あるいは剣形模造品を製作中に破損したため，勾玉形模造品に転用する意識があったかもしれない。20は当初柄部に2孔の穿孔を考えていた



第8図　SI-01出土遺物実測図（剣）



第9図　SI－01出土遺物実測図（剣）

が，1孔と穿孔した段階で破損したため，柄部の中心に1孔を穿孔する方向に変更した様相が伺える。このため未だ穿孔が完了していない。その他22は未製品の中に含めてよいと考えられるものであるが，刃に近い位置に穿孔痕が認められる。

23～40は，完成品と考えられるものである。23，24は柄部に1孔が，32～40は柄部の左右に1孔づつ2孔が穿孔されている。40は，柄部に2孔の穿孔がなされた他に鋒に穿孔途中の孔を持つ。完成品の穿孔の方法をみてみると，その穿孔は片面のみからおこなっているものがほとんどであり，両面から穿孔をおこなっているものは認められない。検形模造品における穿孔方法の1つの特徴かもしれない。

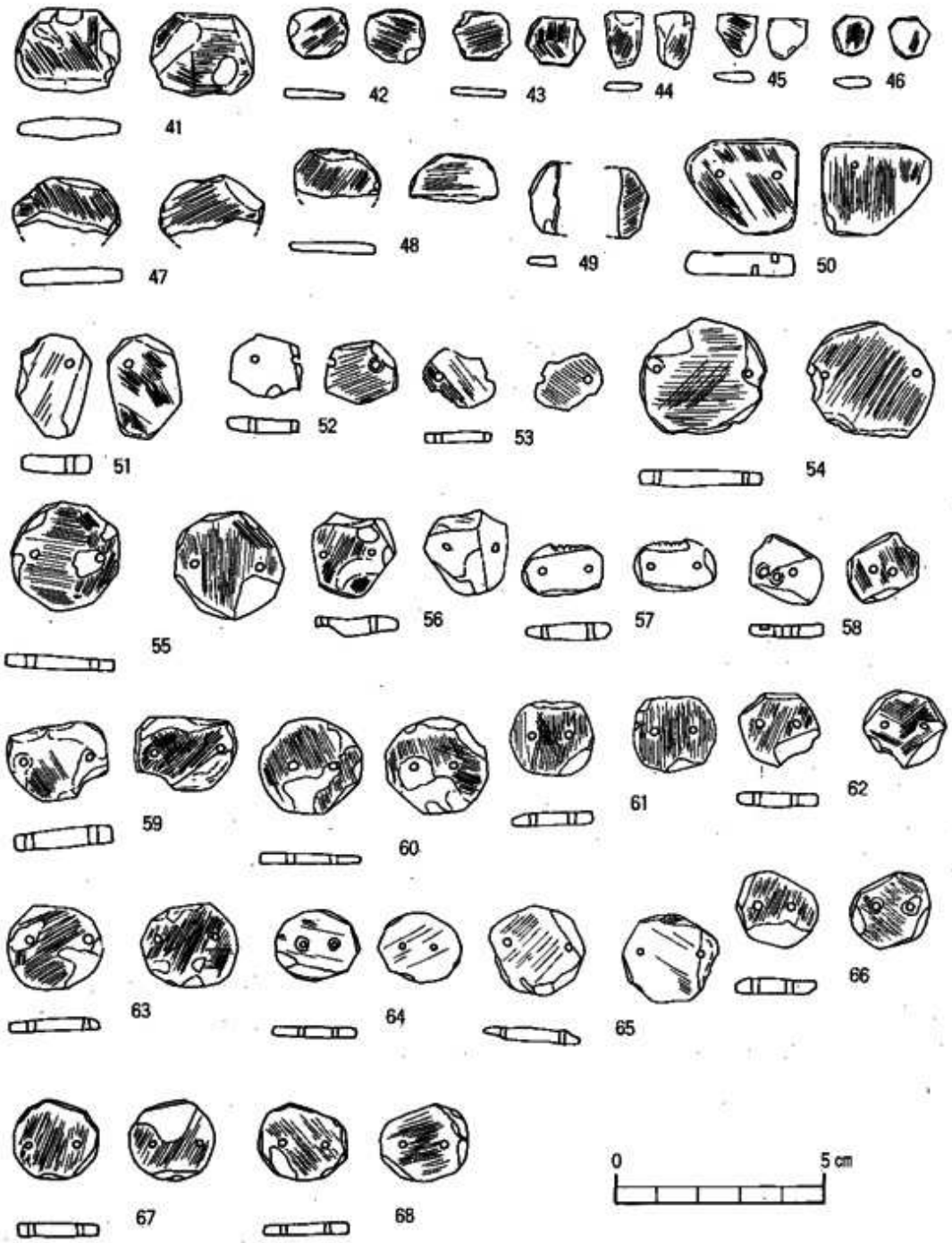
完成品28個は，大形，中形，小形の形状の差はあるものの，三角形状を呈し，柄部に穿孔されるのを基本としている。

柄部における穿孔孔数のちがいにより二つに大別できる。

Ⅰ類—柄部に1孔のみが穿孔されるもので，23，24の2個がこれにあたる。

Ⅱ類—柄部に2孔の穿孔がなされるもので，25～40の26個がこれにあたる。

Ⅱ類としたものは穿孔される位置によってさらに二種に分けられる。まず柄部に左右対称に穿孔するものA種と，柄部に上下に穿孔されるものB種である。A種としたものは25～30と32～40の計25個であり，数量的には絶対数を占める。B種としたものは31の1個のみである。これをみてみるとⅡ類B種が最も多く出土しており，当該住居跡における剣形

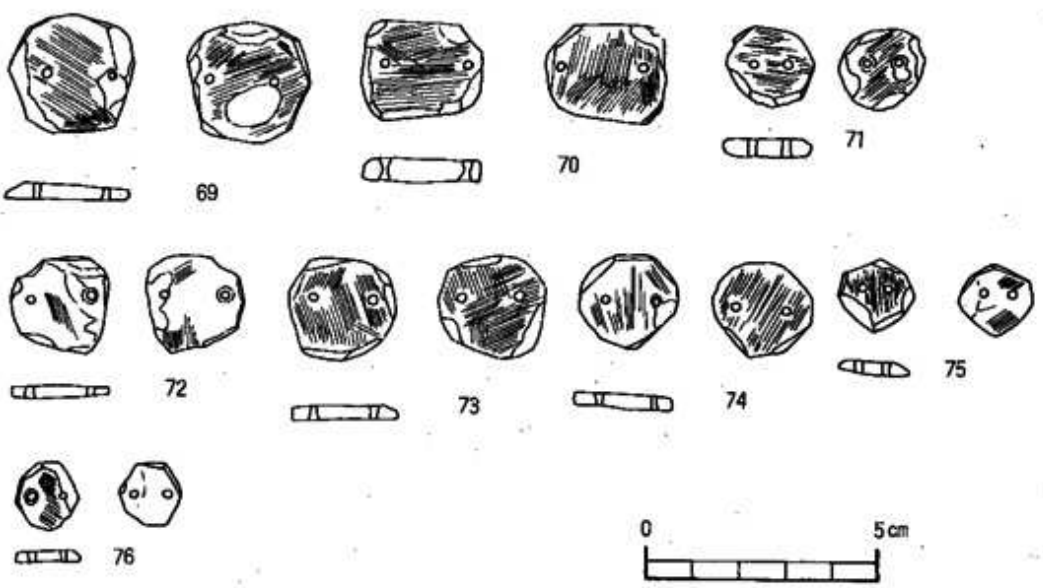


第10図　SI－01出土遺物実測図（有孔円板）

模造品の中心的製作がⅡ類B種であったと考えられる。

有孔円板形模造品（第10・11図，図版27）

有孔円板形模造品と考えられるものは，未製品，破損品，完成品を含めて36個出土している。内訳は，未製品８個，破損品５個，完成品23個である。これらを細かく観察し，その製作法をみてみると，41～49はまた穿孔がなされず，磨き段階のものである。磨きは，両面と側面になされており，磨きがかなり進んでいる状態を示している。47～49は破損品としているが，あるいは勾玉形模造品の製作途中の可能性も考えられるかもしれない穿孔については不明である。50は穿孔が片面に２孔，片面に１孔の都合３孔認められるがいずれも貫通はしていない。51は穿孔が１孔のみ認められるものである。52，53は破損品である。１孔については穿孔が貫通しているが，他の１孔の部分より破損してしまっている。この２個は他のものと磨き方が異なり，両面のみ磨きがなされ，側面については磨きは認められない。54～76の23個体は全て完成品であり，いずれも両面および側面に磨きがなされ，孔が２個所に穿たれる共通性を有しているが，２孔の穿孔の方法に４種類の穿孔方法を用いていることが知れる。まず第１の方法は，２孔の穿孔を片面のみからおこなう方法で58～68がこれにあたる。第２の方法は，１孔は片面から穿孔を貫通させるが，残りの１孔は両面から穿孔してゆき途中でドッキングさせる。69がこれにあたる。第３の方法は，



第11図　SI－01 出土遺物実測図（有孔円板）

2孔とも両面から穿孔してゆき途中でドッキングさせるもの。70，71がこれにあたる。最後の第4の方法は，1孔を片面から穿孔してゆき貫通させると，残りの1孔は残りの片面（逆の面）から穿孔貫通させる方法である。72～76がこれにあたると思われる。これらのことなりは時間的な差や技術の優劣によるものであるとは考えられない。

完成品23個をその平面状のちがいにより二大別できる。

Ⅰ類一平面形状が不整長方形を呈するもの。57，59，70がこれにあたる。

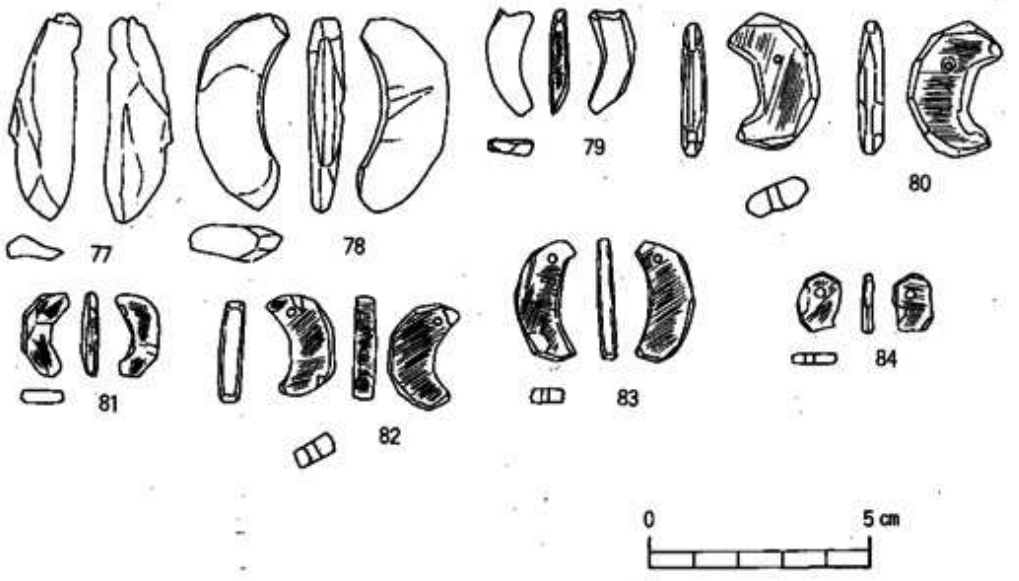
Ⅱ類一平面形状が円形ないし，楕円形を呈するもの。54～56，58，60～69，71～76がこれにあたる。

Ⅰ類，Ⅱ類ともに大きさにより大，中，小の3段階に分けられるが，2孔が穿孔されるという他には，大，中，小の各段階の孔間距離，径，厚みにも，孔間距離比，径比にもまったく共通性が認められない。

勾玉形模造品（第12図，図版28）

勾玉形模造品と考えられるものは，未製品，破損品，完成品を含めて8個体検出されている。内訳は，未製品4個，破損品1個，完成品5個である。以下勾玉形模造品を細かく観察し，その製作法をみてみたいと思う。

77は原材から割り出された縦長の素材で磨きなどはまだおこなわれていない。78，79，81は腹部が挟り込まれ，78，79は磨きがまだ全体にはおよんでいない。81は磨きが78，79よりはより進んでいる。80，82～84は磨きおよび頭への穿孔が完了したものである。頭へ



第12図 SI－01出土遺物実測図（勾玉）

の穿孔をみてみると，80は磨きは穿孔する前なされているが，82～84は穿孔後に磨きがなされたと考えられる。84は腹部より折れてしまった半損品である。未製品，完成品はいずれも扁平板状を呈し，頭と尾の大きさの差があまりなく，上下が対称的になる。また腹の挟りも浅い。

臼　玉（第13～20図，図版28）

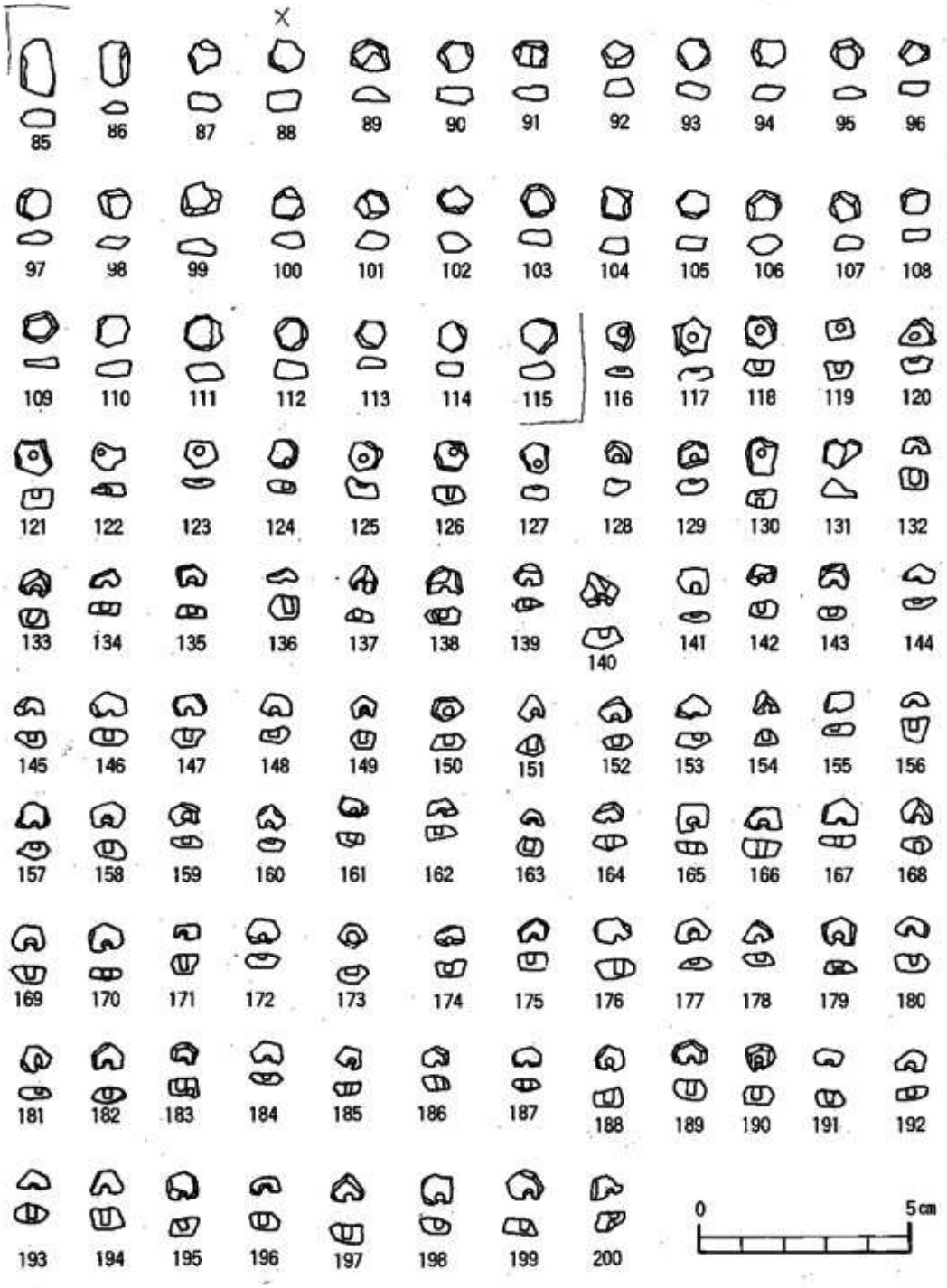
臼玉形模造品と考えられるものは，未製品，破損品，完成品を含めて854個体出土している。内訳は，未製品456個，破損品338個，完成品60個である。出土した854個の臼玉形模造品の製作方法をみてみたいと思う。

85～86は原材より割り出された状態のものである。形としてはいくぶん長めである。87～115は臼玉としての形が割り出された段階のものであり。まだ穿孔はなされていない。87～98は両面，側面とも打ち欠いて割り出されたもので，磨きは認められない。99～101は形を作り出すのをかんたんにするために，工具により切り込み痕を入れた痕跡が側面に「L」字状に残っている。これはある深さまでは切り込みを入れ，その後折り切った時点で残ったものと考えられる。102～115は形を作り出すために切り込み痕なのか，磨きによるものなのか明瞭になし得ないが，側面に擦痕が認められる。113～115にはその擦痕が両面の他に側面にも存在する。側面に擦痕が認められるものは，あるいは，99～101で形を作り出す時点で，側面に「L」字状に残るものの片割れのものではないかと考えることもできる。116～417は穿孔がおこなわれる段階のものであり，穿孔未了及び終了寸前のものを含む。116～131は穿孔途中のものであり，116～122は両面，側面とも形が割り出された状態のままである。穿孔方法は，122は穿孔は両面からなされ途中でドッキングした状態が認められるが，その他は全て片面からの穿孔の仕方である。

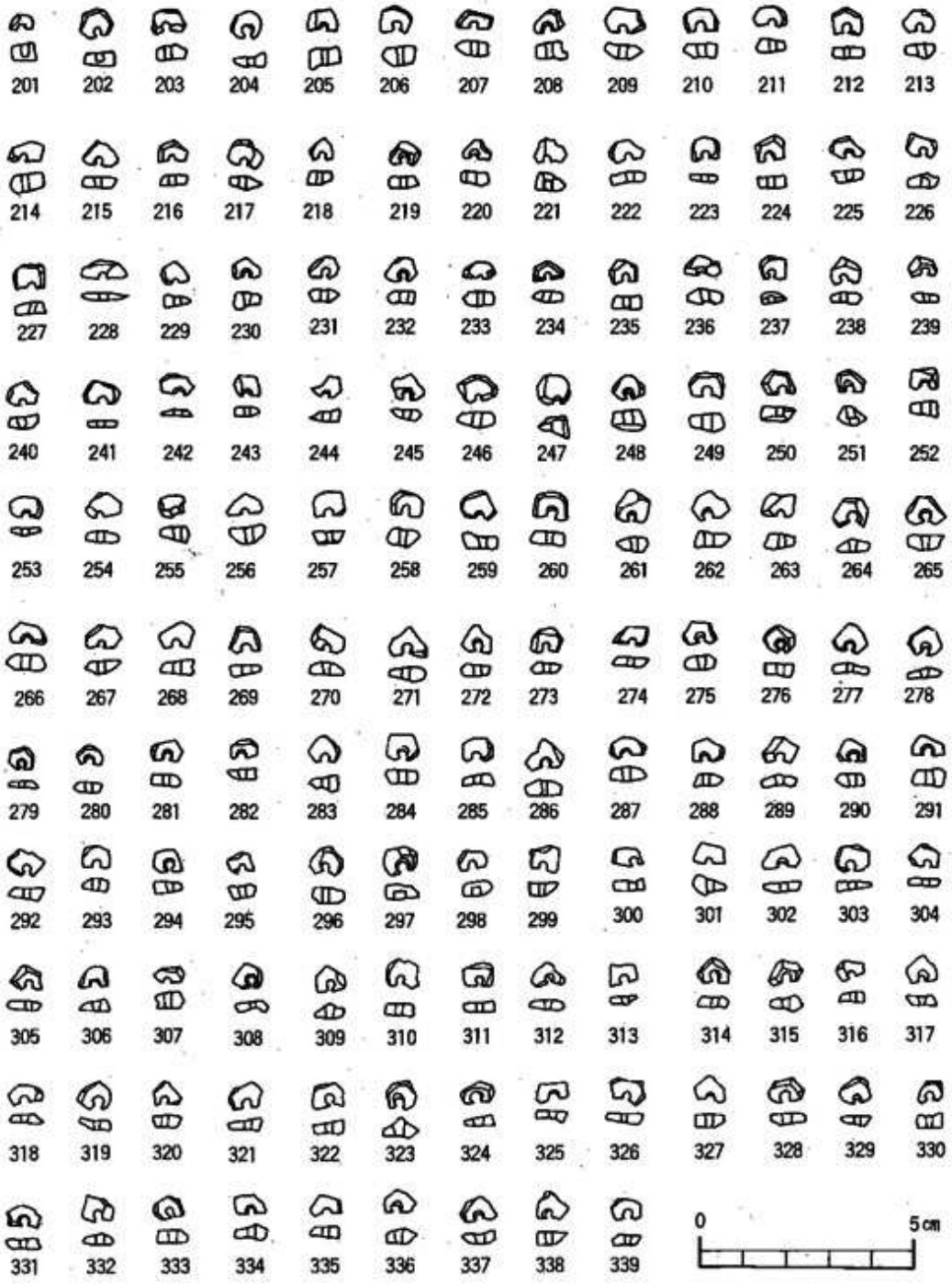
418～805は穿孔が完了したものである。これらは418～643の様に両面，側面も形が割り出された状態を示すものや，644～478の様に両面は割り出しのままであるが，側面の磨きなのか，切り込み痕なのか判別できない擦痕を持つものもある。749～792は，両面，側面とも形が割り出されたままの状態を示すが，側面の一部に切り込みがなされた痕跡が認められる。793～805は両面は形の割り出し状態を示すが，側面の一部に切り込みが認められ，側面に「L」字状の段を残す。

806～878は，研磨中のものである。このうち806～857は研磨中に破損したと考えられるものである。858～865は両面および，側面も研磨がゆき届いているが，866は側面はまだ一部が研磨されているにすぎない。また867～878は，両面は未研磨であるが，側面はその一部ないし，全体に研磨が認められる。

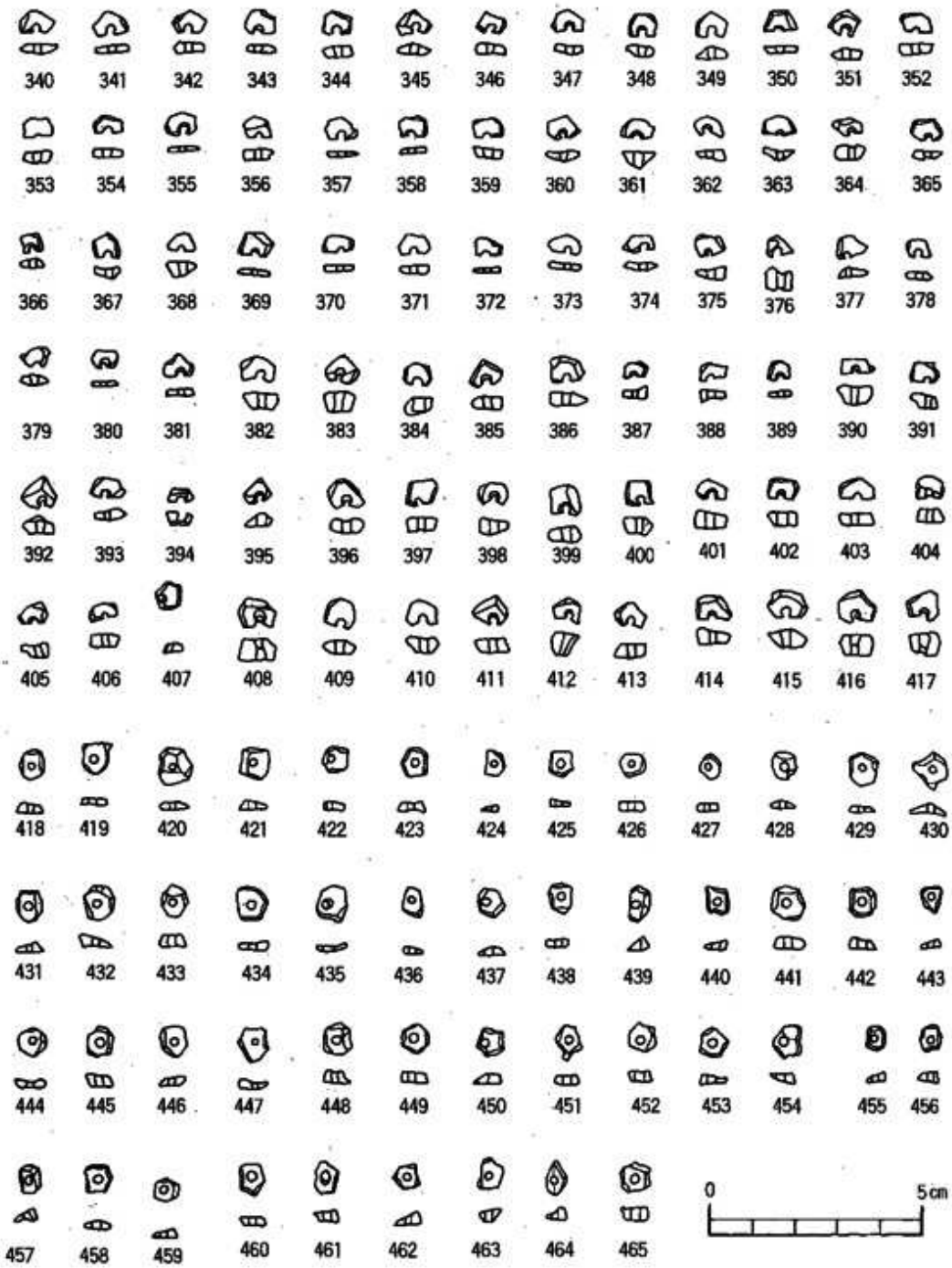
879～938は完成品とみることができるものである。これらの完成品をみてみると，両



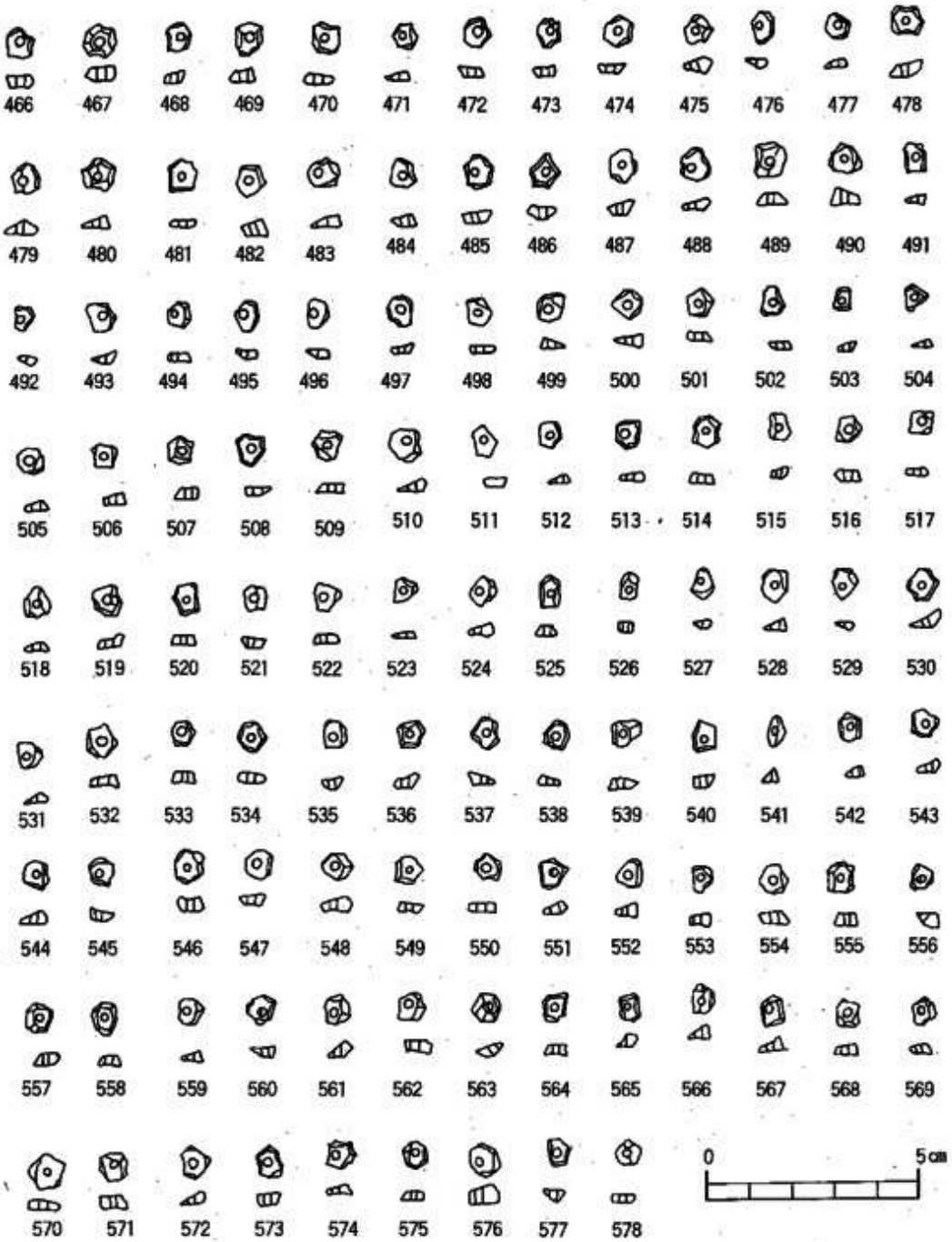
第13図　ＳＩ－01出土遺物実測図（臼玉）



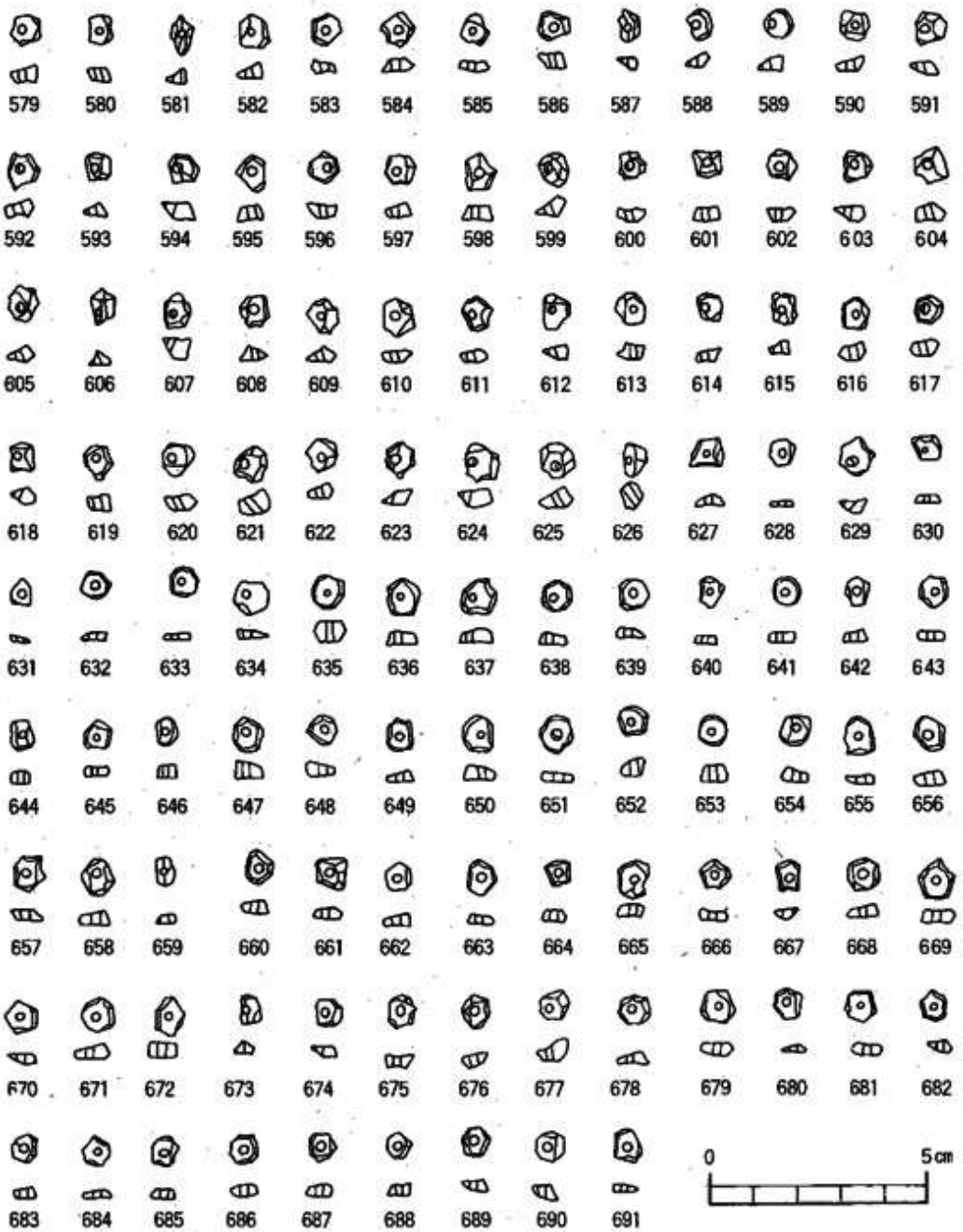
第14図　S I－01 出土遺物実測図（臼玉）



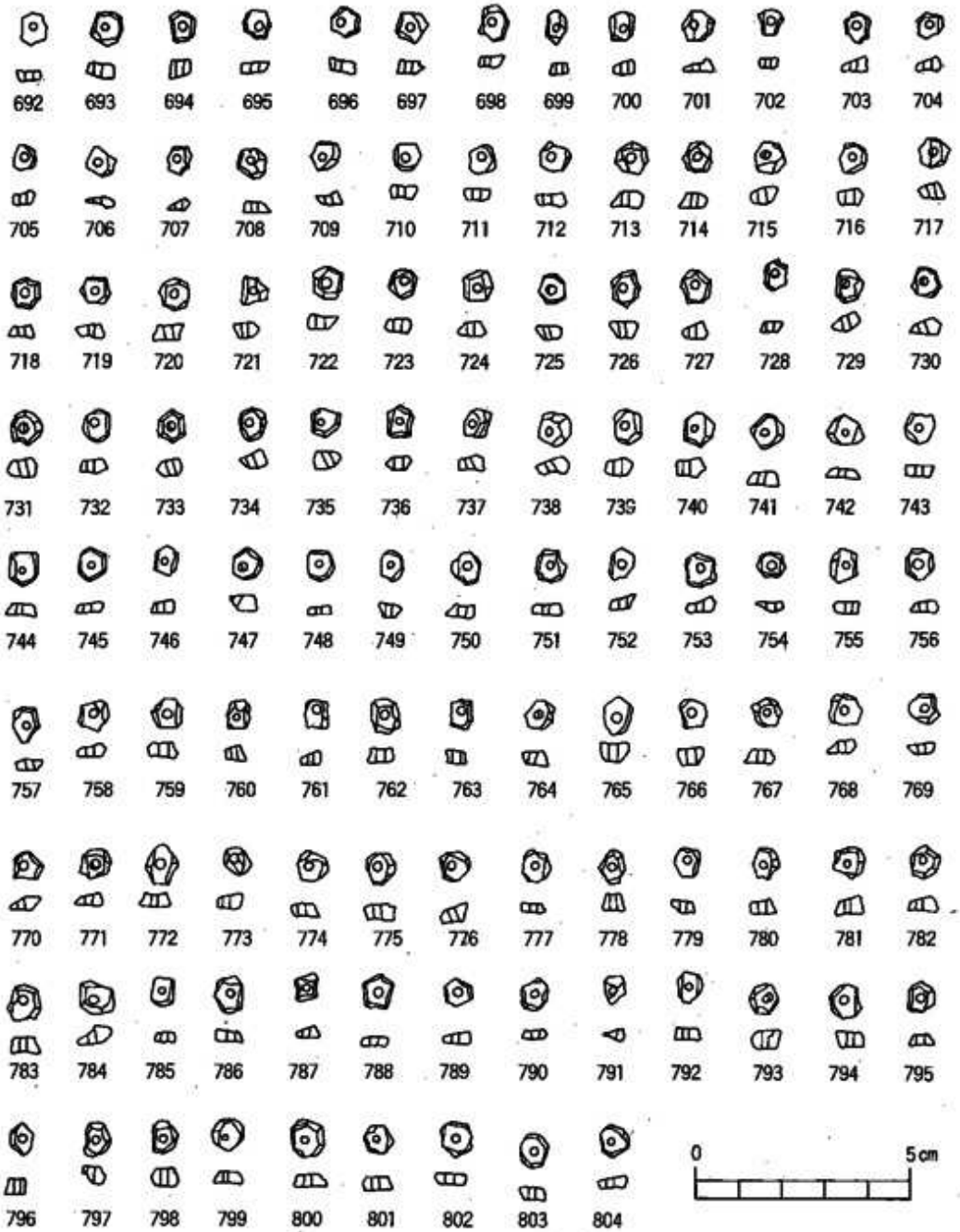
第15図　SI－01出土遺物実測図（臼玉）



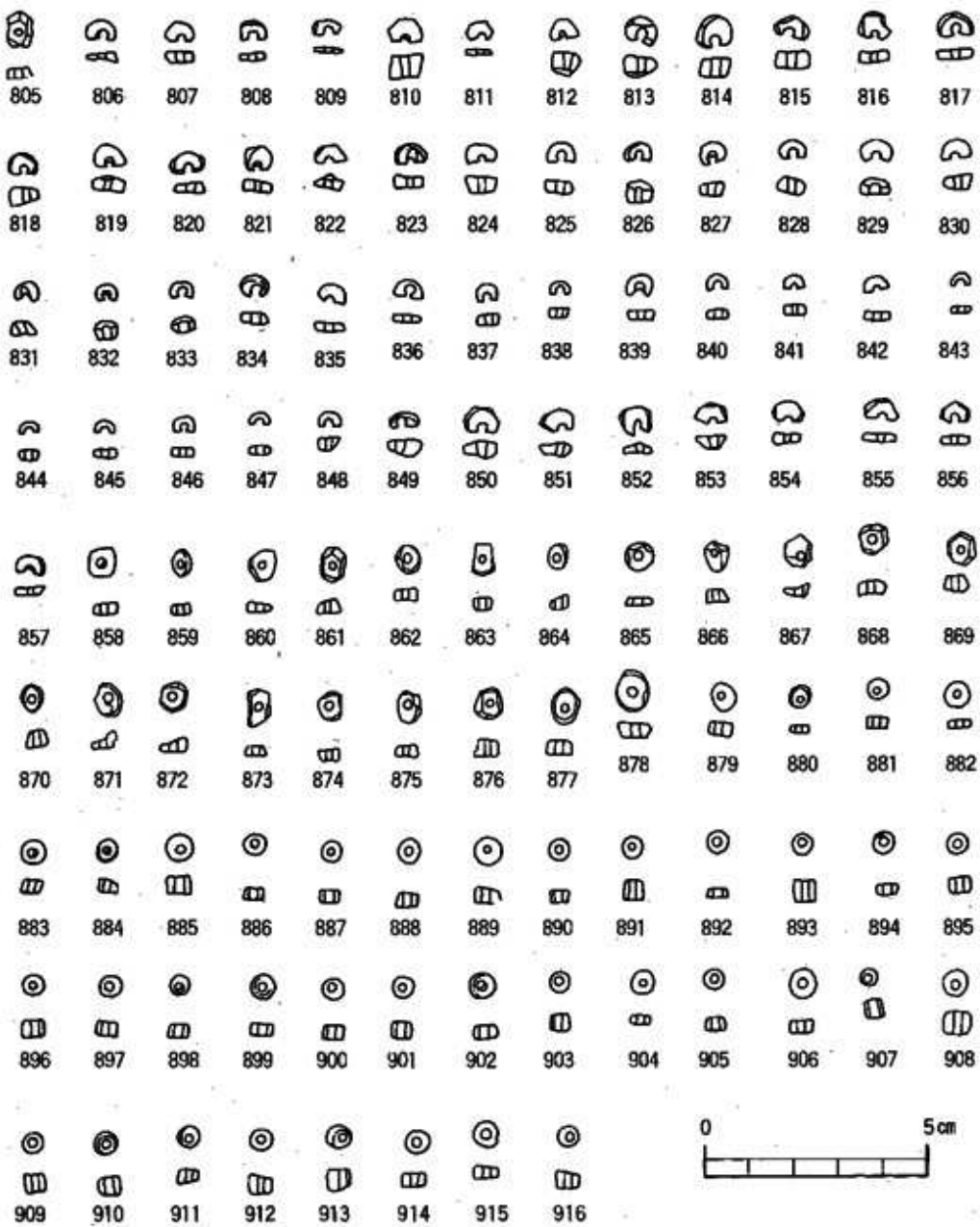
第16図　SI－01出土遺物実測図（臼玉）



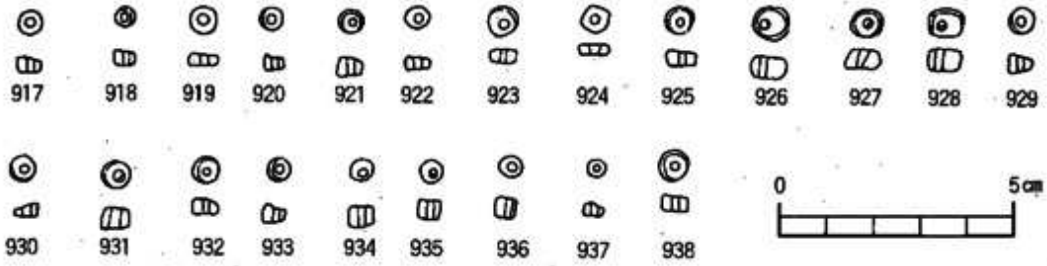
第17図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）



第18図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）



第19図　SI-01出土遺物実測図（臼玉）

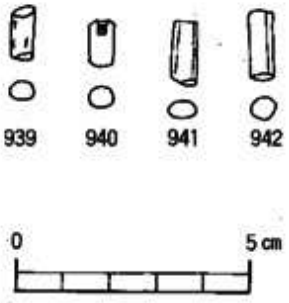


第20図　SI－01出土遺物実測図（臼玉）

面は形を割り出す段階での凹凸を修正するだけのわずかな磨きがおこなわれているだけで，平滑に磨かれるのは数が少ない。側面は平滑なほど磨かれている。

管　玉（第21図，図版28）

4点が検出されている。939，941，942はいずれも側面は円柱状に形が整えられ，磨きは完了している。940は穿孔が中途までなされている。穿孔は2度にわたっておこなわれており，1度穿孔をおこない，2度目の穿孔が位置をずらした状態でなされている。穿孔→切断，穿孔→切断をくり返しおこない，臼玉を作成した可能性がある。



第21図　SI－01出土遺物実測図（管玉）

砥　石（第22図）

943の1点が検出されている。荒砥ぎ段階のものではなく，仕上げ砥段階のものと考えられる。

不明石製品（第22図，図版28）

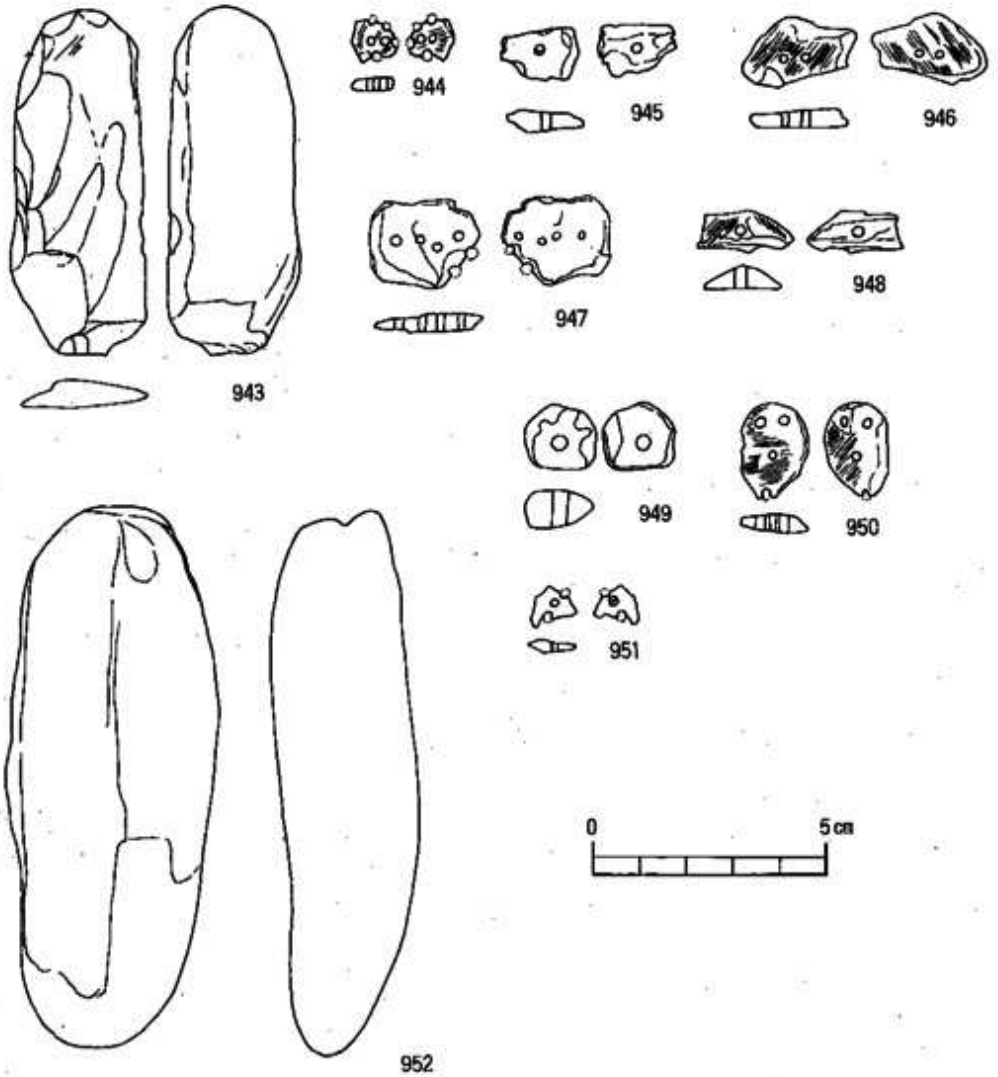
944～948，950，951がこれにあたる。偏平な石材1個に1孔～6孔の穿孔痕が残っている。その用途はいかなるものなのか明確になし得ない。

土製品（第22図）

949の1点のみである。長径1.5cmの楕円形を呈し，中央に径0.3cmの穿孔がなされている。用途については不明である。

原　材（第23図）

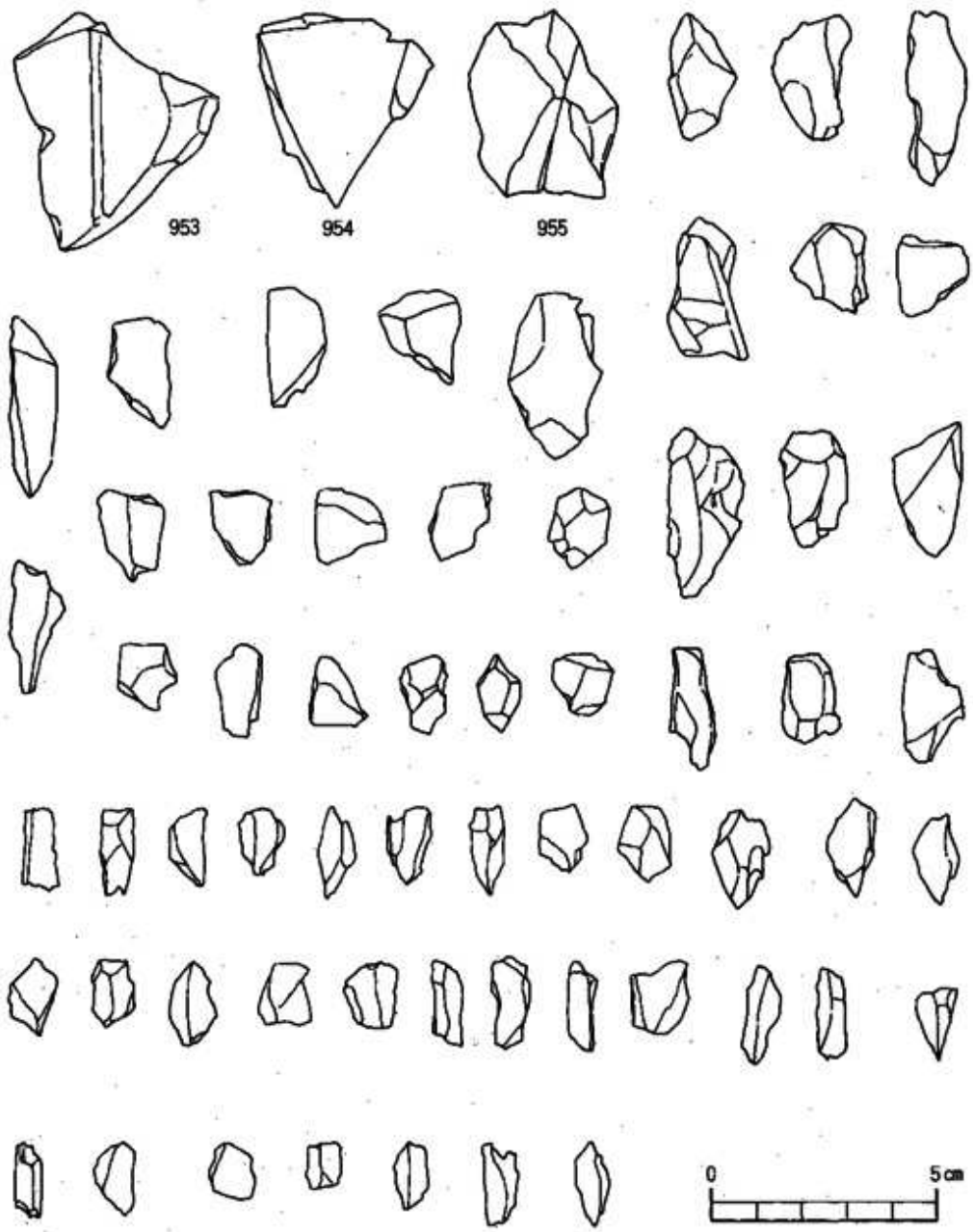
953～955がそれにあたると思われる。全て打割痕のみられるもので，一種の石核と考えてよいものである。



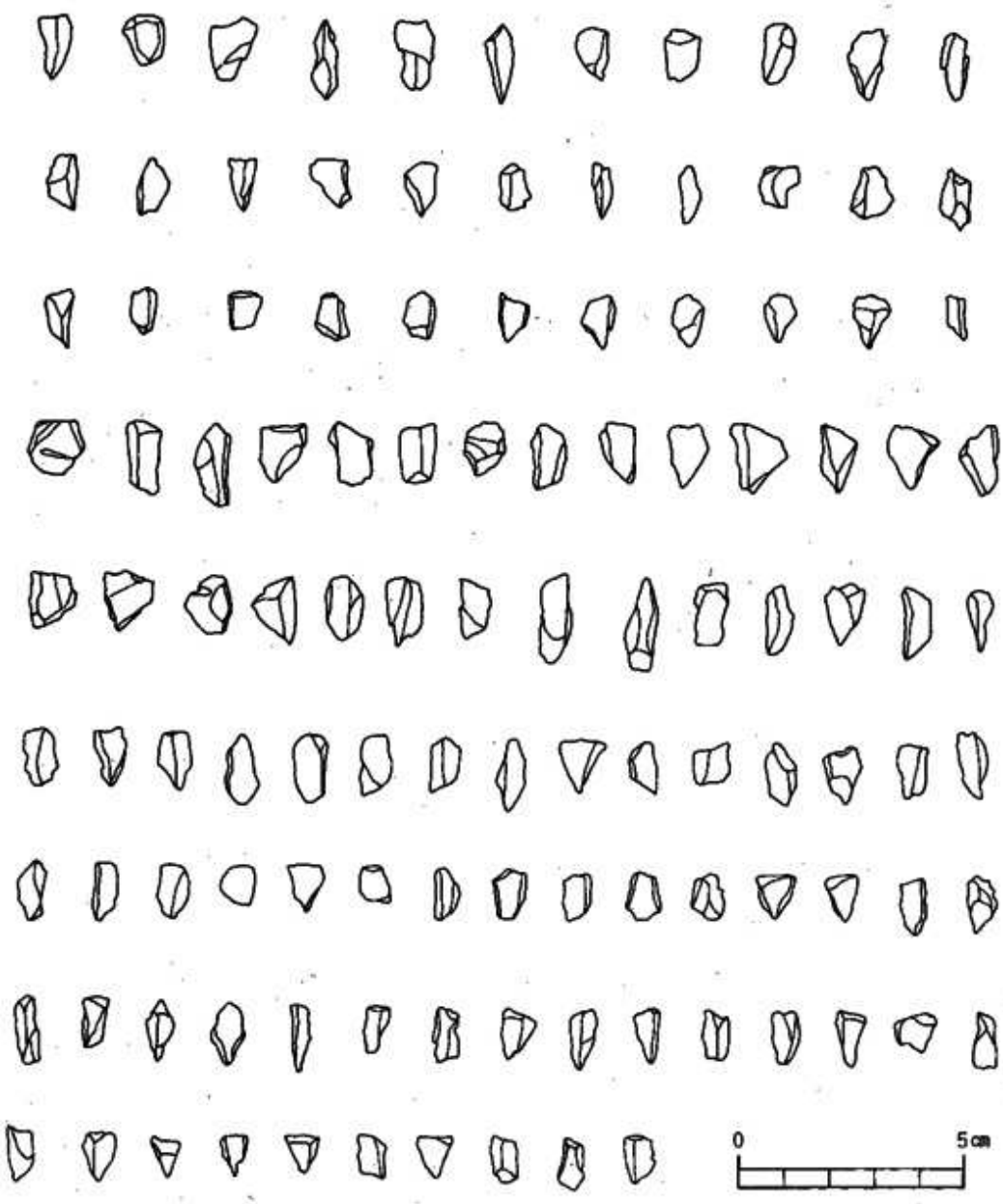
第22図　SI－01出土遺物実測図（砥石・不明石製品・土製品）

剝　片（第23～27図）

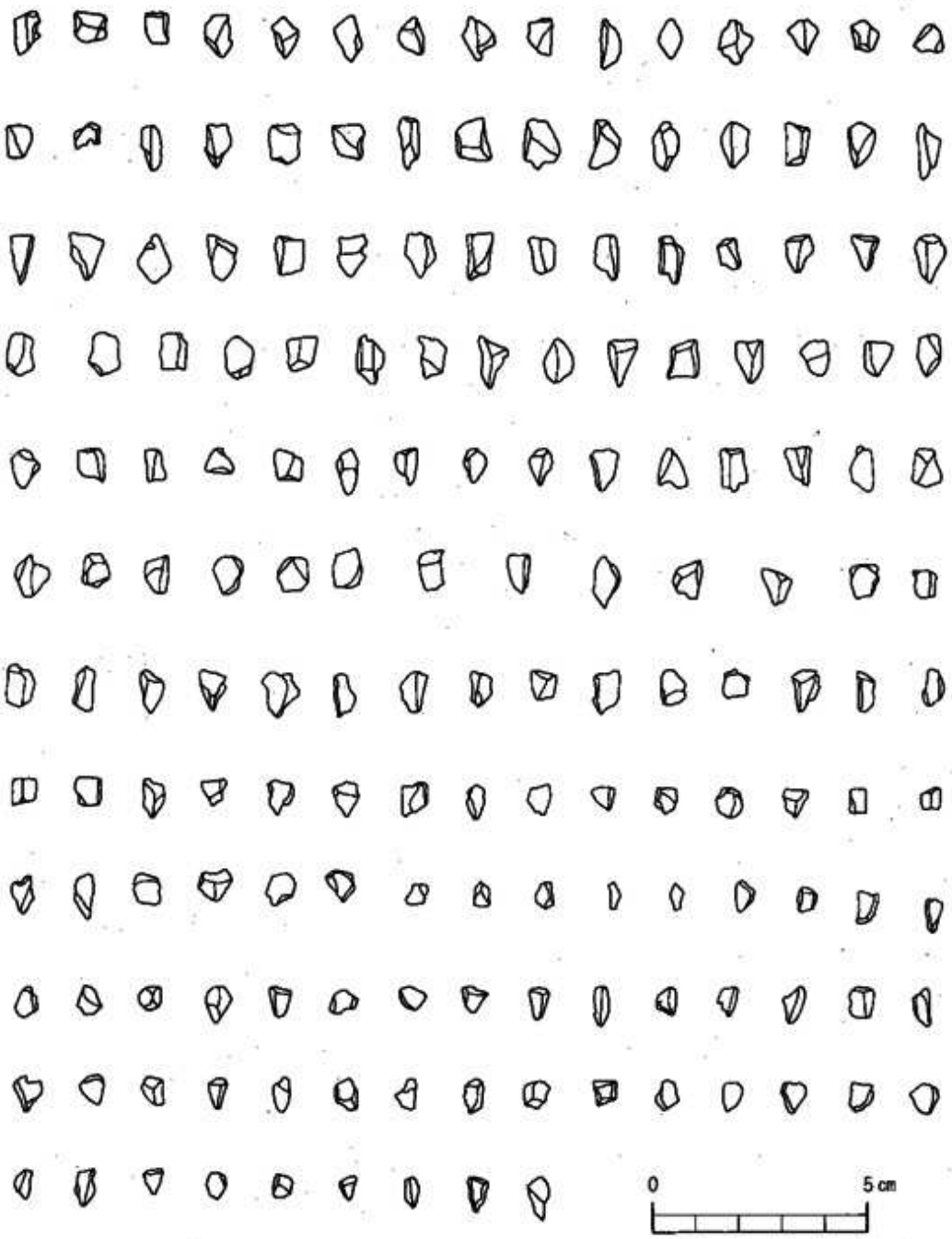
多数の剝片が出土している。これらは，大，中，小，横長，縦長，不整形などバラエティーにとんでいるが，概ね厚みはない。このバラエティー差は，用途のちがいによるものかもしれない（図示したものはその一部である）。



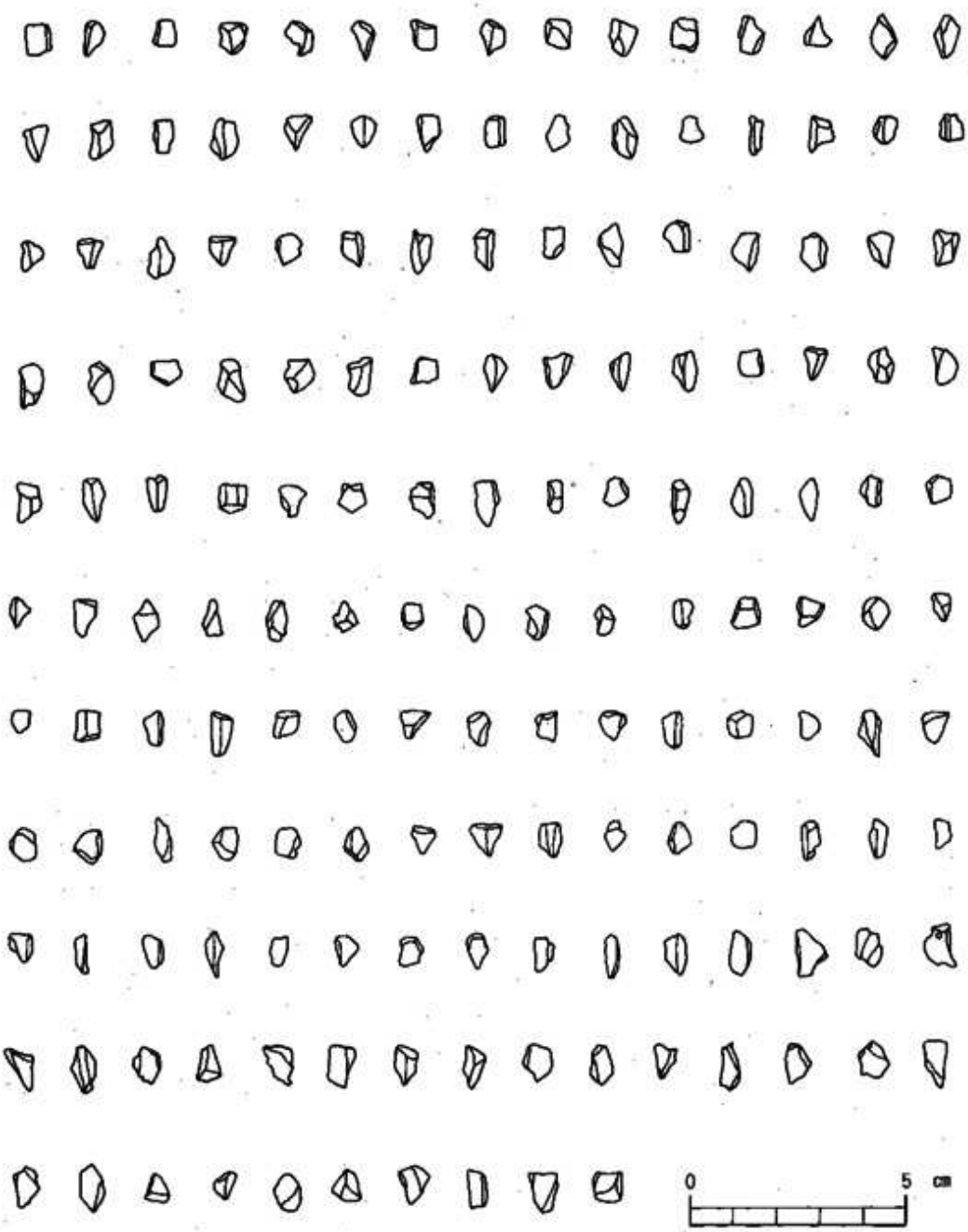
第23図　SI-01出土遺物実測図（剥片）



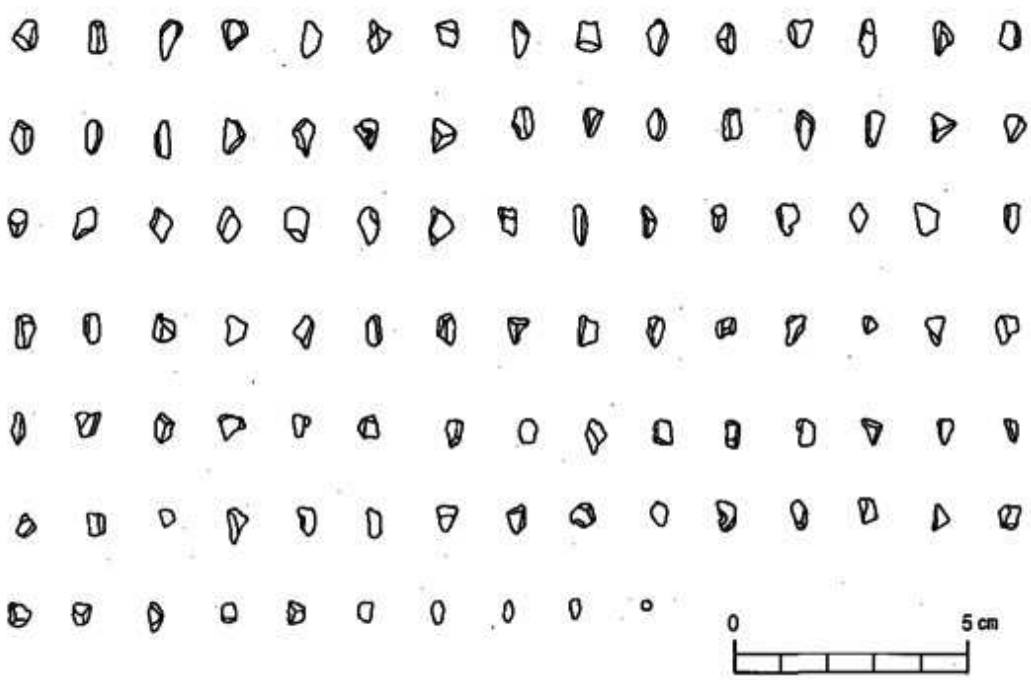
第24図　SI-01 出土遺物実測図（剥片）



第25図　SI－01出土遺物実測図（剝片）



第26図　SI-01出土遺物実測図（剝片）

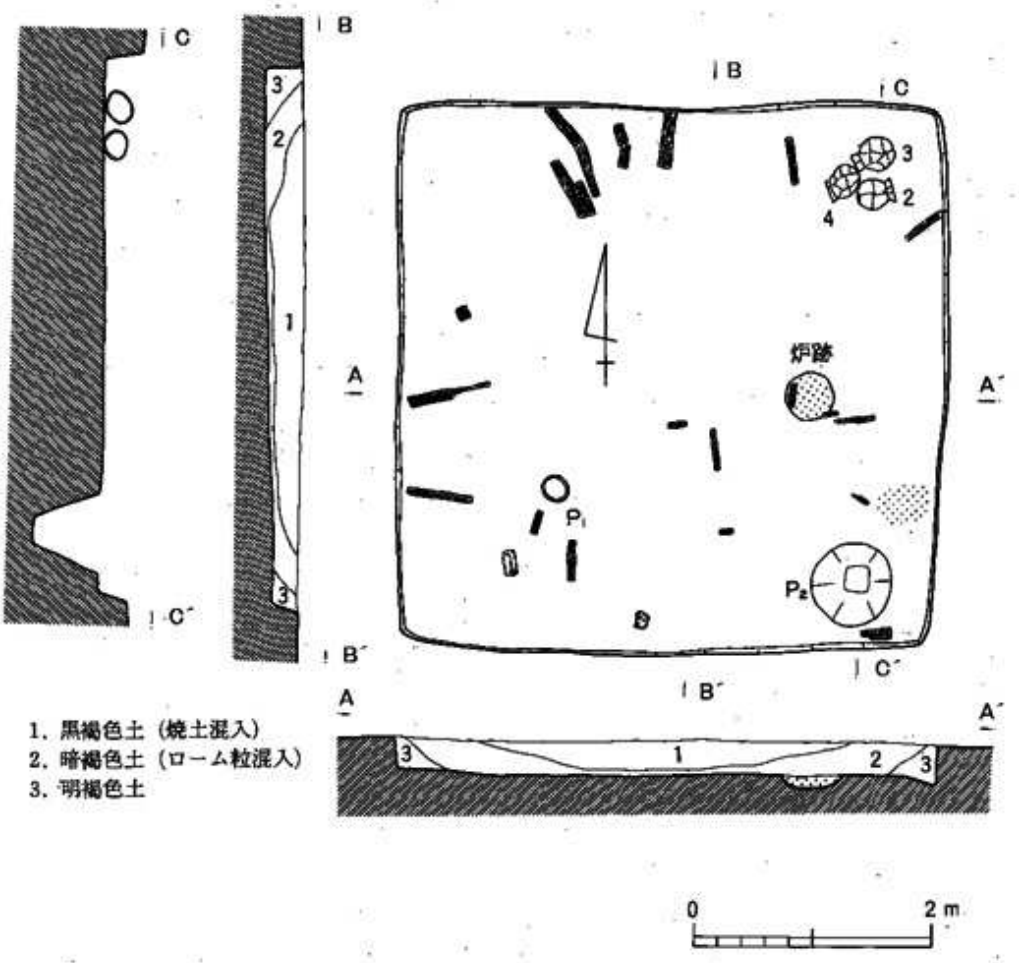


第27図　SI－01出土遺物実測図（剥片）

SI－02

遺　構（第28・29図，図版10～13）

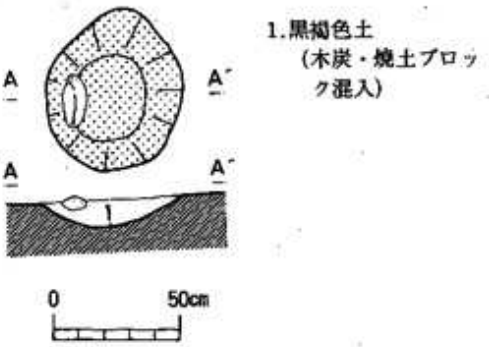
SI－02はSI－01の南南西約20mに位置する。一辺が4.5mで均整のとれた正方形プランを呈する。床面積は20.3㎡。主軸はN－91°－Eでほぼ東西にとる。なお炉を考慮に入れず，プランの傾きのみからみるとSI－01と同一方向となる。壁の遺存状態は良好で，80°強の傾きで立ち上がる。確認面からの掘り込みは25～30cm。覆土は3層に分かれレンズ状堆積をなす。各層とも炭化粒を多く含むが，特に第2層にその混入が著しい。周溝は検出されない。床面はほぼ平坦で，炉周辺から住居中央及び貯蔵穴周辺にかけては踏み固めが認められる。床からはやや浮いて炭化材が放射状に遺存している。ピットは2本検出された。P_1はコーナー対角線上にのり位置的には柱穴と考えられるが，径・深さともに20cmほどで規模の小さいものである。P_2は南東コーナー部に設けられる貯蔵穴で径70cmの円形プランであるが，底面は方形となる。鹿沼軽石層上面まで掘り込まれ深さは56cmを測る。覆土中には滑石屑片が少量含まれる。炉は中央部東壁寄りに検出された。径60cmの楕円形プランで舟底状に約10cm掘り込まれる。南側には長さ20cmの河原石が置かれる。炉床，セクションを見る限りではさほど焼けた状態を示さない。



第28図　SI－02実測図

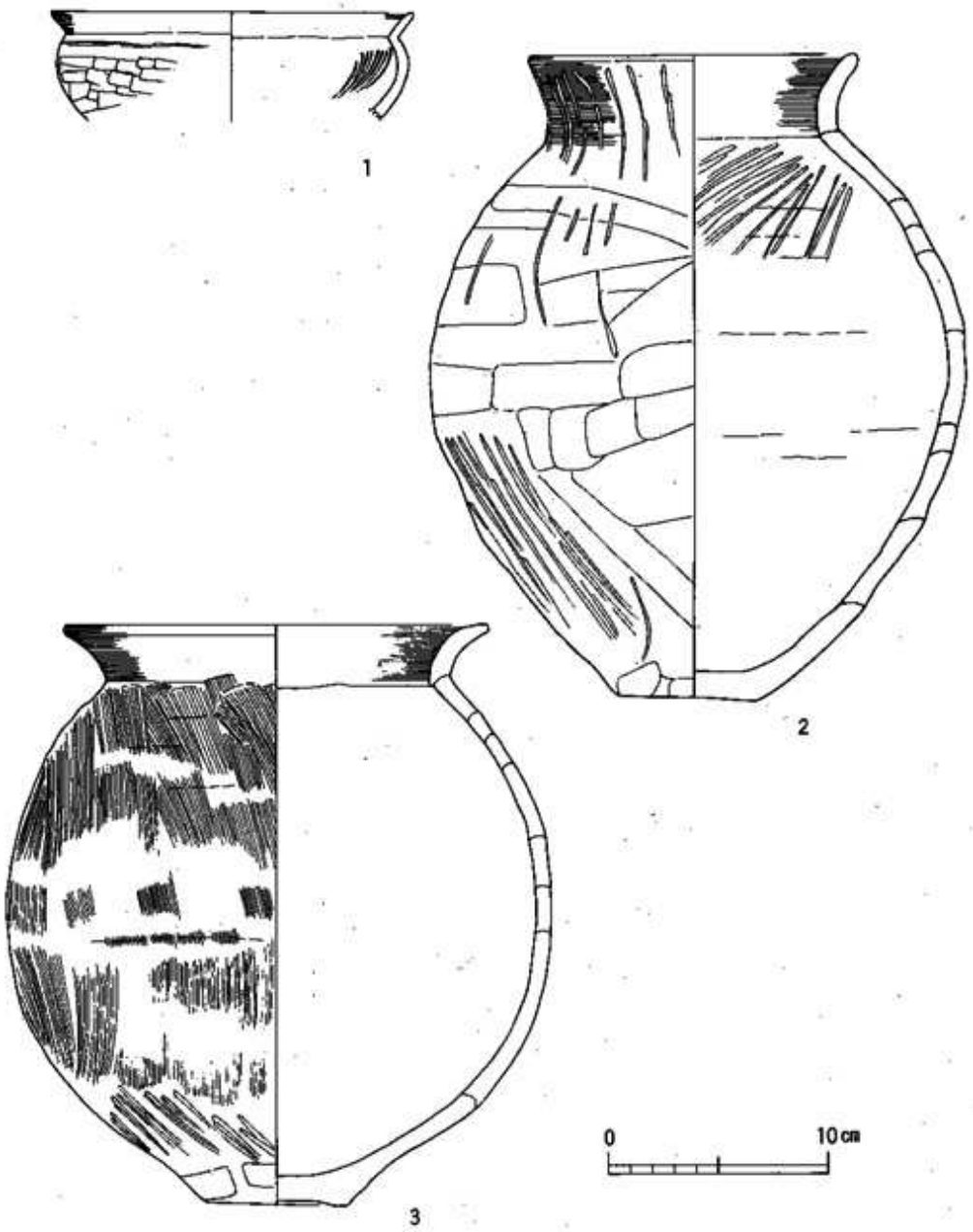
遺　物（第30～32図，図版29～31）

本跡から検出された土器は完形３点と復元可能な２点である。２の壺形土器、３の甕形土器，及び４の甑形土器は，北東コーナーで近接し横転の状態で出土した。すべて床面である。１の椀形，５の甑形は覆土中からの出土である。土器以外では滑石の原石が検出されている。長さ 15.4 cm，幅７cm，厚さ２cm

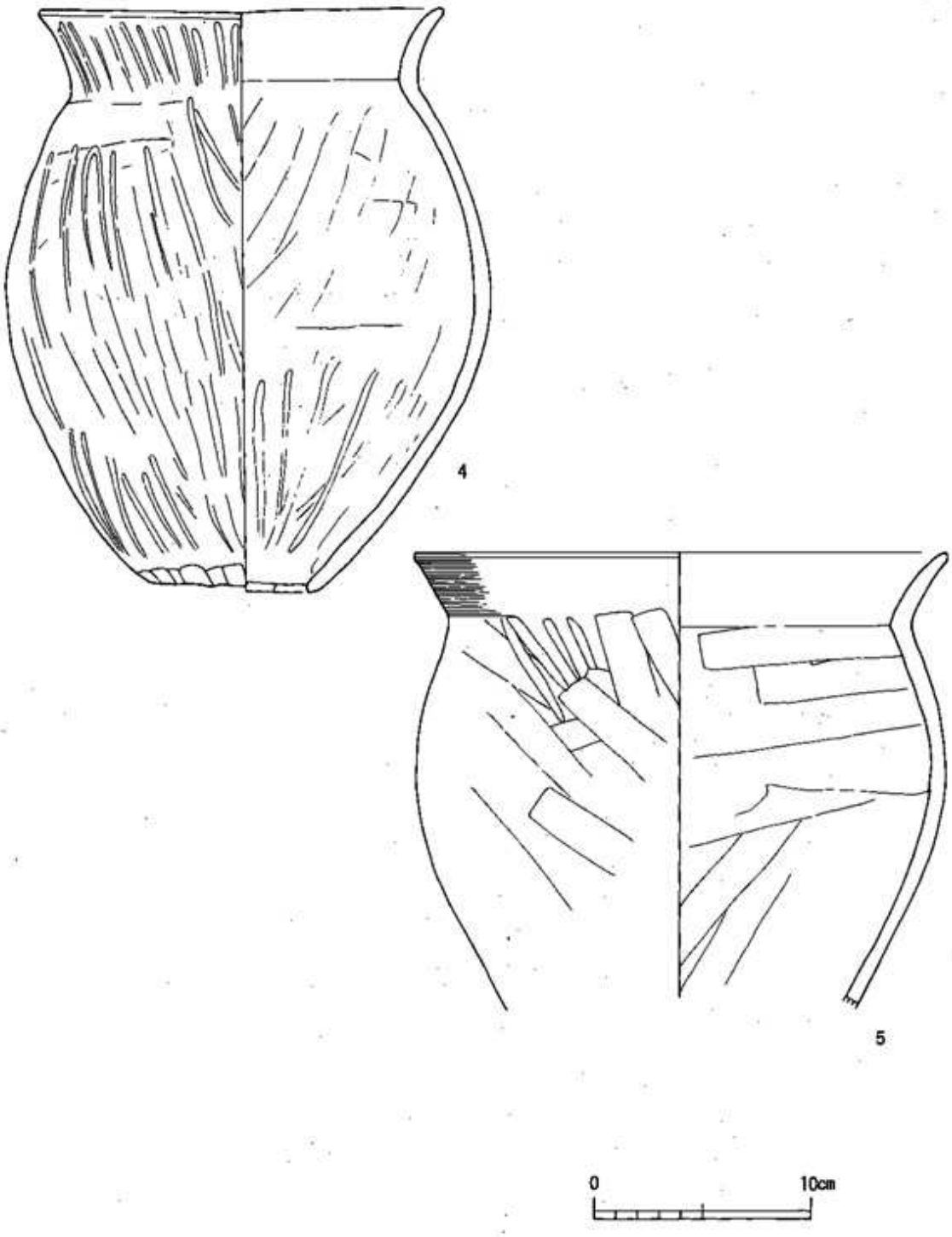


第29図　SI－02炉跡実測図

の扁平な長方形のものである。穿孔の跡が3ヶ所で認められる。覆土中からの出土である。また臼玉，有孔円板の出土もある。



第30図　SI-02出土遺物実測図



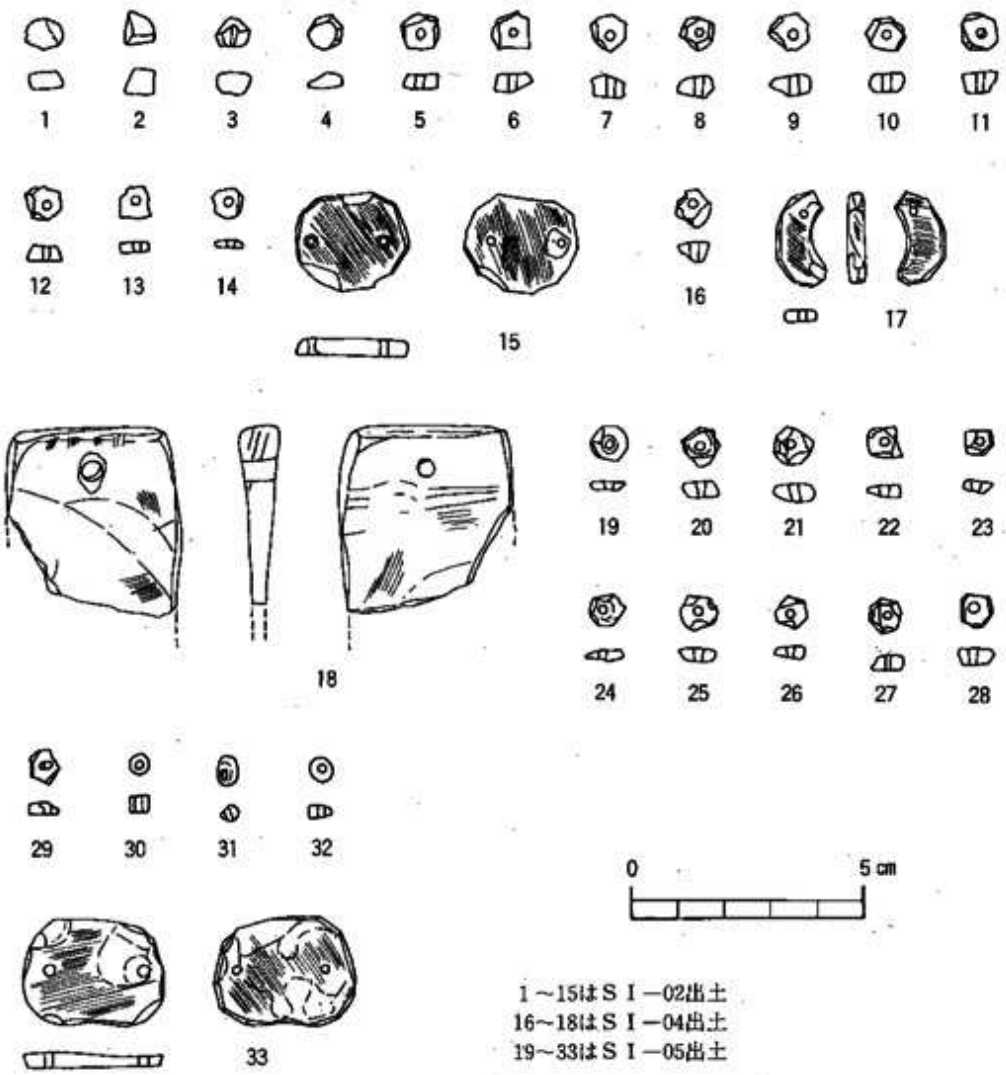
第31図　SI－02出土遺物実測図

石製模造品（第32図１～15，図版31）

模造品としては，臼玉14個，有孔円板１個の合計15個の出土がある。臼玉は１～４は形が割り出された段階のものである。５～14は穿孔が完了したものであり，完成品は認められない。15の有孔円板は完成品である。両面，側面とも磨かれ，穿孔も２ヶ所になされている。

原　材（第33図，図版30）

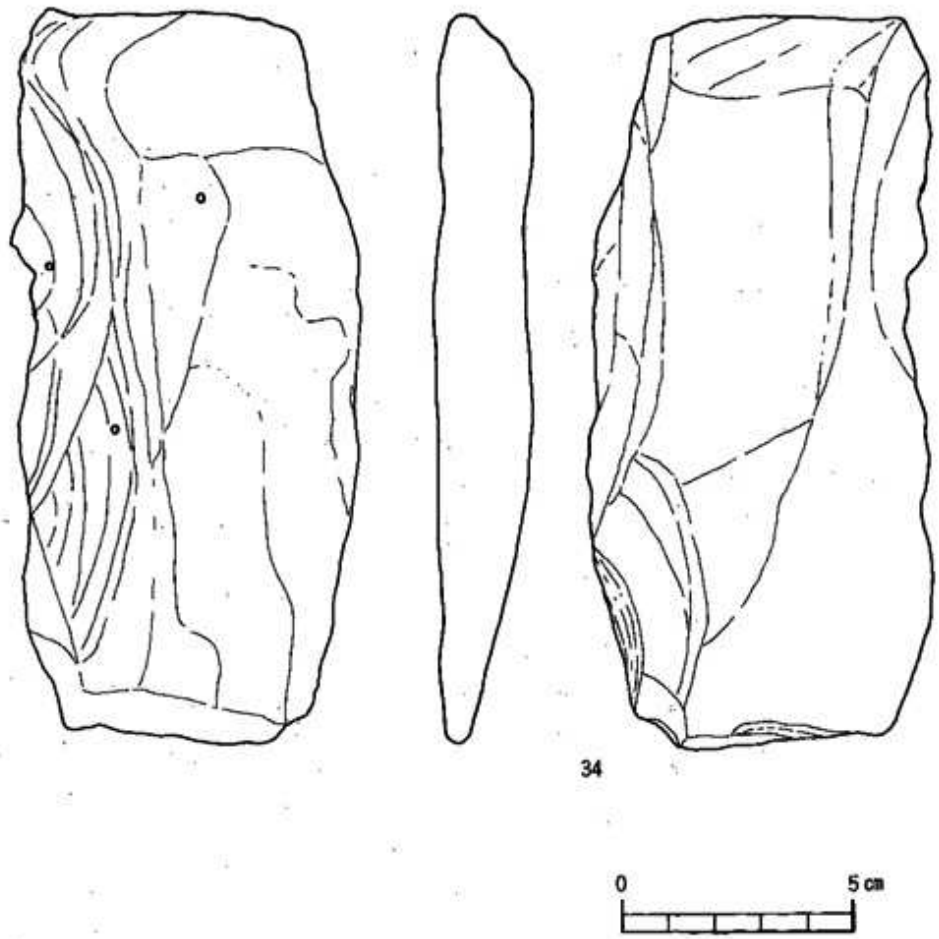
長方形を呈し，厚みのあるものである。片面の３個所に小孔の穿孔痕が認められる。小孔は途中までであり，この原材の大きさのものをそのまま加工して完成品として使用する



１～15はＳＩ－02出土
16～18はＳＩ－04出土
19～33はＳＩ－05出土

第32図　SI－02・04・05出土遺物実測図（臼玉・有孔円板・勾玉・砥石）

ための孔ではなく，剥片を作り出すために，原材が割れやすくなる様にする為に用いた孔かもしれない。



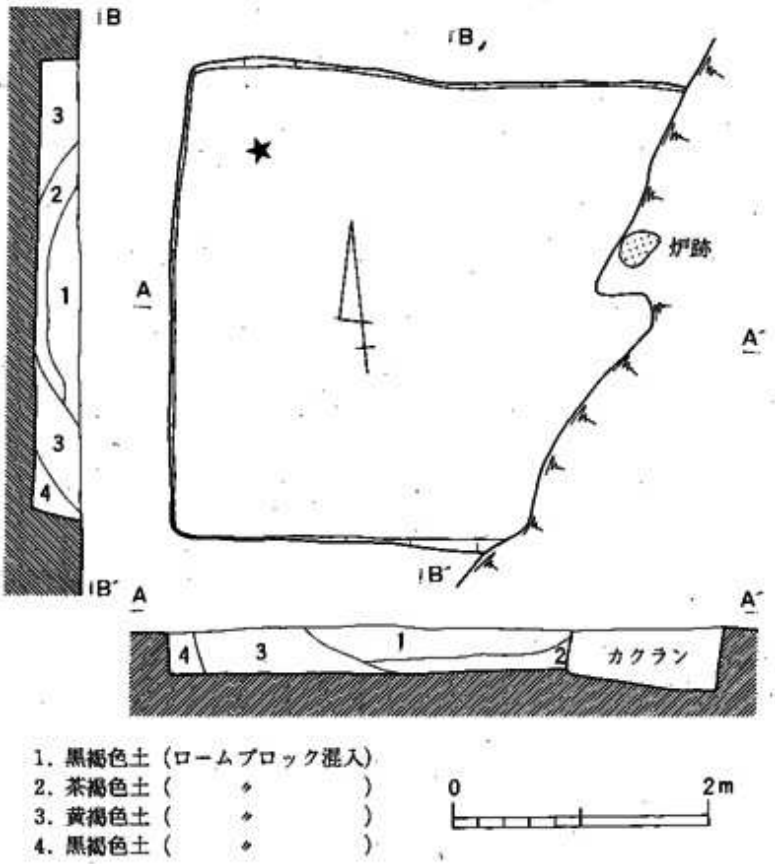
第33図　SI－02出土遺物実測図（原材）

SI－04

遺　構（第34・35図，図版13）

SI－04は，SI－06の南東約100ｍの位置にあり舌状低台地の平坦部南端にあたる。調査区中この付近は，すでに東側が削平されていてSI－05同様遺構の全容は明らかにできなかった。プランは西辺が3.7ｍで他は不明，東西に長い長方形を呈する。壁の遺存状態は良好で垂直に近い立ち上がりを示す。確認面からの掘り込みは30～40cmを測る。覆土は四層に分かれレンズ状堆積を示し自然埋没と考えられる。周溝は検出されない。床面は平坦で，全

面にわたって踏み固めが認められる。柱穴，貯蔵穴等は全く検出されない。東側カッティングされた部分で炉の痕跡がみられた。削平面からは約5cmで炉床に達する。



1. 黒褐色土（ロームブロック混入）
2. 茶褐色土（　〃　）
3. 黄褐色土（　〃　）
4. 黒褐色土（　〃　）

0　2m

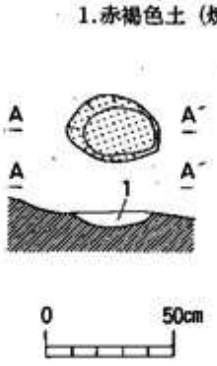
第34図　SI－04実測図

遺　物（第32図，図版31）

本跡からの出土遺物は，土師器片，河原石，滑石製勾玉，臼玉，屑片等であるが量的には極めて少ない。臼玉，勾玉のみが図示し得た。

石製模造品（第32図16・17，図版31）

模造品としては，臼玉1個，勾玉1個の合計2個の出土がある。臼玉は穿孔は終了しているが，まだ研磨はなされていない。勾玉は完成品で，研磨及び穿孔もなされている。



第35図　SI－04炉跡実測図

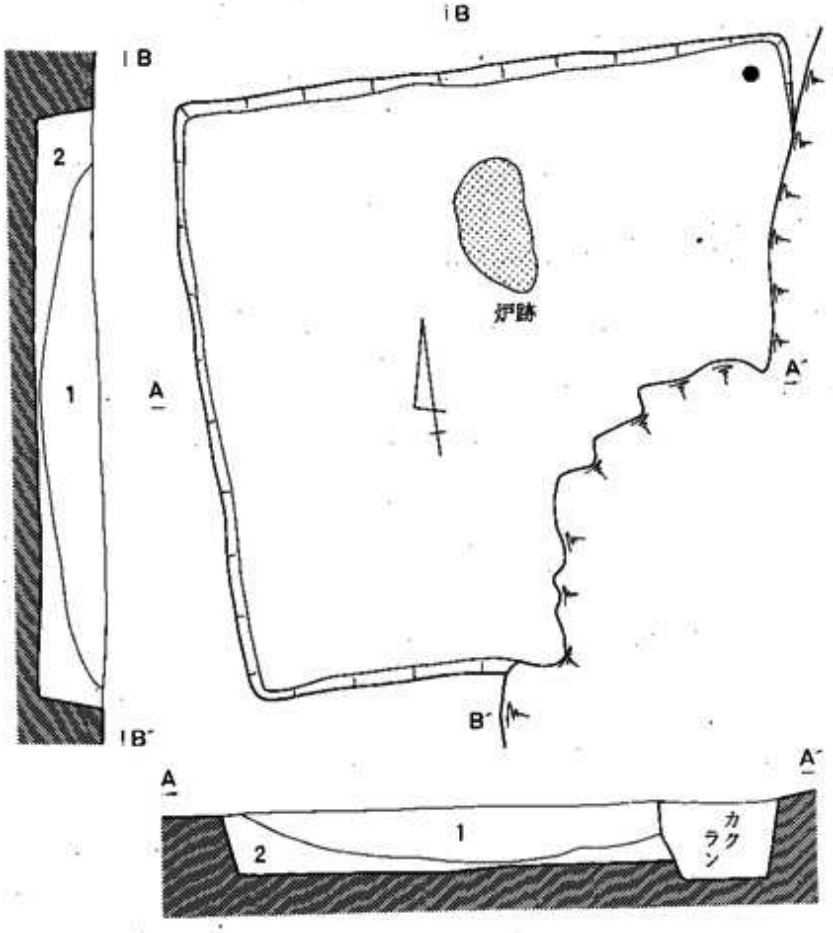
砥石（第32図18，図版31）

1点出土している。1部欠損しているが長方形を呈しているものと考えられる。両面のみに研磨痕が認められる。かなり使用されたためかかなり凹彎している。両面に数条の溝などがみられることなどから石製模造品の研磨ではなく，金属利器の研磨に使用されたものと考えられる。

SI-05

遺構（第36図37図，図版14）

SI-05はSI-04の南西約7mにあり，住居跡では最も南に位置する。SI-04同様東側が削平されているが，南東部を除くコーナーは検出されたため，おおよそのプランは5.2mの



1. 黒褐色土（ローム粒含む）
2. 暗褐色土（　〃　）

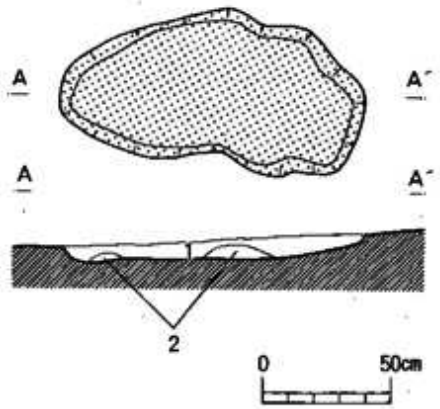
0　2m

第36図　SI-05実測図

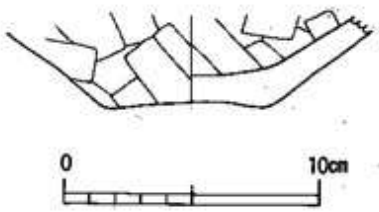
方形を呈するものと考えられる。主軸はほぼ南北にとる。壁の立ち上がりは75～80°で，確認面からの掘り込みは50cmである。覆土は二層に分かれ自然堆積の状況を示す。周溝は検出されない。床面は平坦で全面的に踏み固めが認められる。柱穴・貯蔵穴等は調査部分では検出されなかった。炉は北壁寄り中央部に設けられる。長径1.2m，短径50cmで5cmほど掘り込まれる。炉床は焼土ブロックが認められ，固く焼きしまる。炉からは滑石製臼玉、屑片が出土した。

遺物（第38図，図版31）

本跡からの出土遺物は極めて少なく土師器片数点と滑石製模造品（臼玉，有孔円板）原石，屑片等である。有孔円板は北東コーナー部，原石は住居南側よりいずれも床面での出土である。



第37図　SI-05炉跡実測図



第38図　SI-05出土遺物

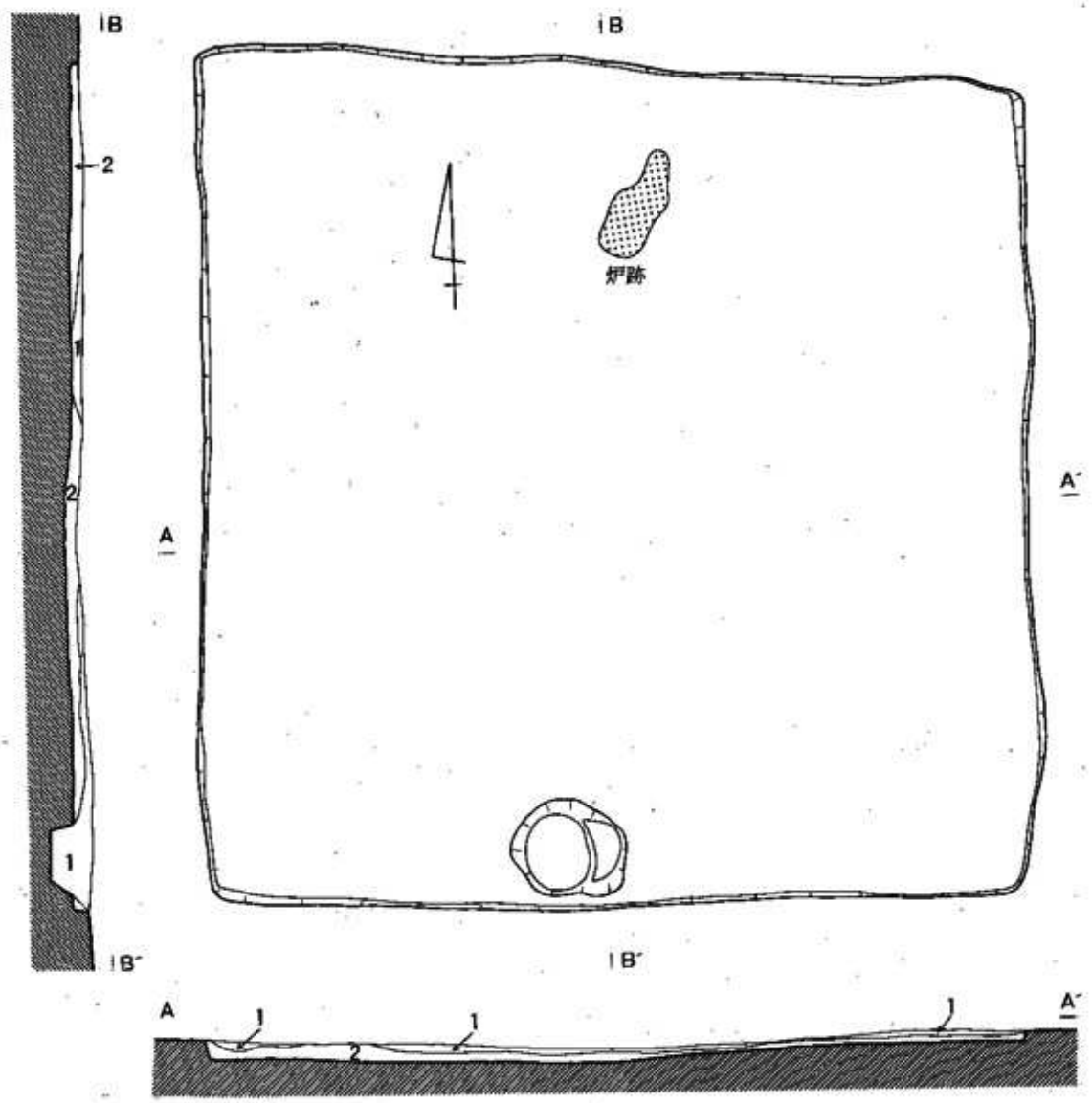
石製模造品（第32図19～33，図版31）

模造品としては，臼玉14個，有孔円板1個の合計15個出土している。19～29の臼玉は穿孔が終了はしているがまだ研磨はおこなわれていない。30～32は穿孔，研磨も完了した完成品である。33の有孔円板も，両面，側面とも研磨が終了し，穿孔もなされた完成品である。

SI-06

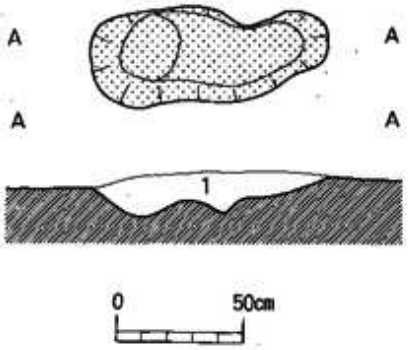
遺　構（第39・40図，図版14）

SI-06はSI-02の南方約50mに位置する。一辺が6.5mの方形プランを呈するが，西辺と北辺がいくぶん長い。床面積は43.5㎡。主軸はN－1°－Eと，SI-01同様ほぼ南北にとる。確認面からの掘り込みは10～15cmと浅く，遺構の遺存はよくない。壁立ち上がりは垂直に近い。覆土は2層に分かれ，上層は焼土，炭化材を含む。周溝は検出されない。床は平坦で，踏み固め等は認められない。柱穴は精査したが検出されない。南壁ぎわには貯蔵穴と思われるピットが検出された。長径95cm，短径70cmの楕円形で，東側に段をもつ。深



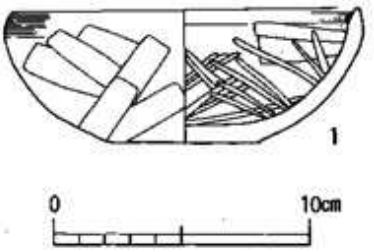
第39図　SI-06実測図

い方で40cmを測る。炉は北壁寄り中央部に設けられる。長軸93cm，短軸37cmの長方形に近いプランである。径15cmほど堀り込まれ底面は凸凹する。焼土を多量に含む。



1．黄褐色土（焼土ブロック
焼土粒混入）

第40図　SI-06炉跡実測図



第41図　SI-06出土遺物実測図

遺　物（第41図）

本跡からの遺物は極めて少なく，図示しうるのは一点である。他には数片の土師器とごく少量の滑石屑片が認められた。

1は杯形土器で，覆土中からの出土である。口縁部がわずかに内彎し，明確な平底である。

ロ．土　壙

SK-01（第43図，図版15）

長径2.35m，短径0.68mの長方形を呈している。掘り込みは最深で15cmと浅い。壁の立ちあがりはしっかりしており，床面も平担である。

SK-02（第43図，図版16）

調査区外の部分がある。長径0.9m以上，短径0.95mで長方形を呈するものと考えられる。掘り込みは最深で9cmと浅い。壁の立ちあがりはしっかりしており，底面も平担である。出土遺物はない。

SK-03A（第43図，図版16）

長径3.3m，短径0.85mのほぼ長方形を呈す。掘り込みは最深で28cmである。壁の立ちあがりはしっかりしており，底面も平担である。出土遺物はない。

SK-04A（第43図，図版17）

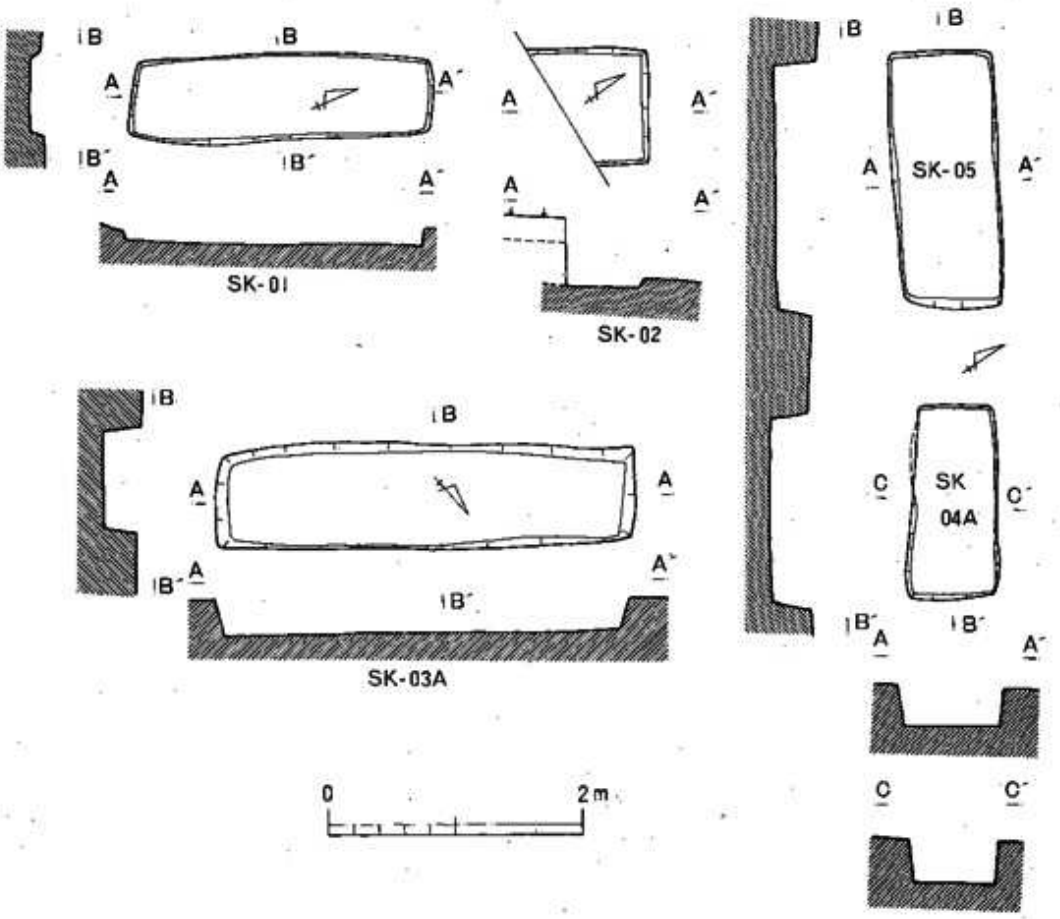
長径1.53m，短径0.66mの長方形を呈し，壁の一部がオーバーハングする。掘り込みは最深で30cmである。壁の立ちあがりもしっかりしており，底面も平担である。

SK-03B（第44図，図版25）

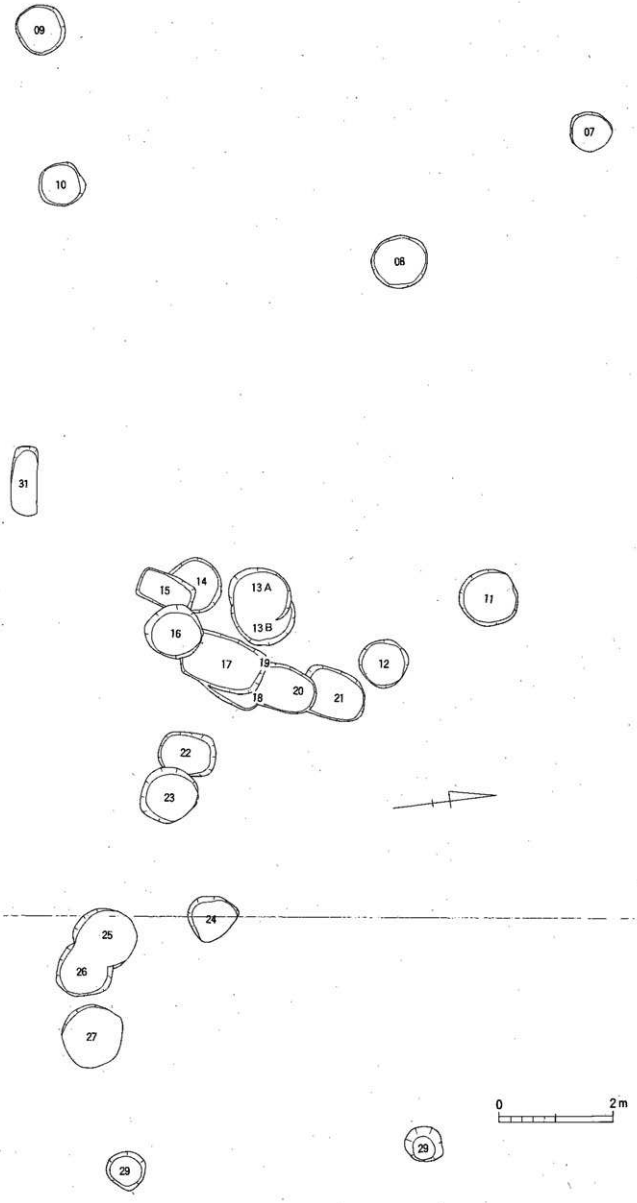
長径1.75m，短径1.5mの楕円形を呈する。掘り込みは最深で55cmと比較的深い。壁の立ちあがりはしっかりしており，底面も平担である。埋土は壁沿いに黄褐色土が見られ，中央部分に茶褐色土の2層である。出土遺物はない。

SK-04B（第44図，図版17）

長径1.6m，短径1.45mのほぼ円形を呈する。掘り込みは最深で60cmと深い。壁の立ちあがりはなだらかに立ちあがり，断面逆台形を呈する。底面は平担である。埋土は5層に分かれ，1層・黒色土，2層・褐色土，3層・褐色土（ローム粒混入），4層・黒褐色土，5層・黄褐色土である。出土遺物はない。



第43図　SK-01・02・03A・04A・05実測図


09
06
07
10
08
31
15
14
13A
13B
16
17
19
18
20
21
12
11
22
23
24
25
26
27
29
29
0
2m

第42図　土壙群全体図

SK-05（第43図，図版17）

長径 2.0 m，短径0.85m の長方形を呈する。掘り込みは最深で40cmと比較的深い。壁の立ちあがりは比較的しっかりしている。底面は平坦である。出土遺物はない。

SK-06（第44図，図版18）

直径 0.9 m のほぼ円形を呈する。掘り込みは最深で15cmと浅い。壁の立ちあがりはしっかりしているが一部なだらかな傾斜を持つ。底面は若干湾曲している。埋土は 1 層で黒褐色土である。出土遺物はない。

SK-07（第44図，図版18）

直径約 0.7 m のほぼ円形を呈する。掘り込みは最深で13cmと浅い。壁は底面から丸味をもってたちあがり，一部はオーバーハングしている。底面は比較的平坦である。埋土は 1 層で明るい黒褐色土である。出土遺物はない。

SK-08（第44図，図版19）

直径0.95m のほぼ円形を呈する。掘り込みは最深で15cmである。壁は底面から丸味をもちなだらかに立ちあがっている。底面は平坦でなく若干湾曲している。埋土は 1 層で，明るい黒褐色土である。出土遺物はない。

SK-09（第44図，図版19）

直径 0.9 m のほぼ円形を呈する。掘り込みは最深で13cmと浅い。壁は底面よりなだらかに立ちあがる。底面は比較的平坦である。埋土は 1 層で暗褐色土である。出土遺物はない。

SK-10（第44図，図版20）

長径 0.8 m，短径0.75m のほぼ円形を呈する。掘り込みは最深で 9 cmと浅い。壁の立ちあがりはしっかりしている。底面は東側壁沿いに向って傾斜をもつ。埋土は 1 層で黒褐色土である。出土遺物はない。

SK-11（第44図，図版20）

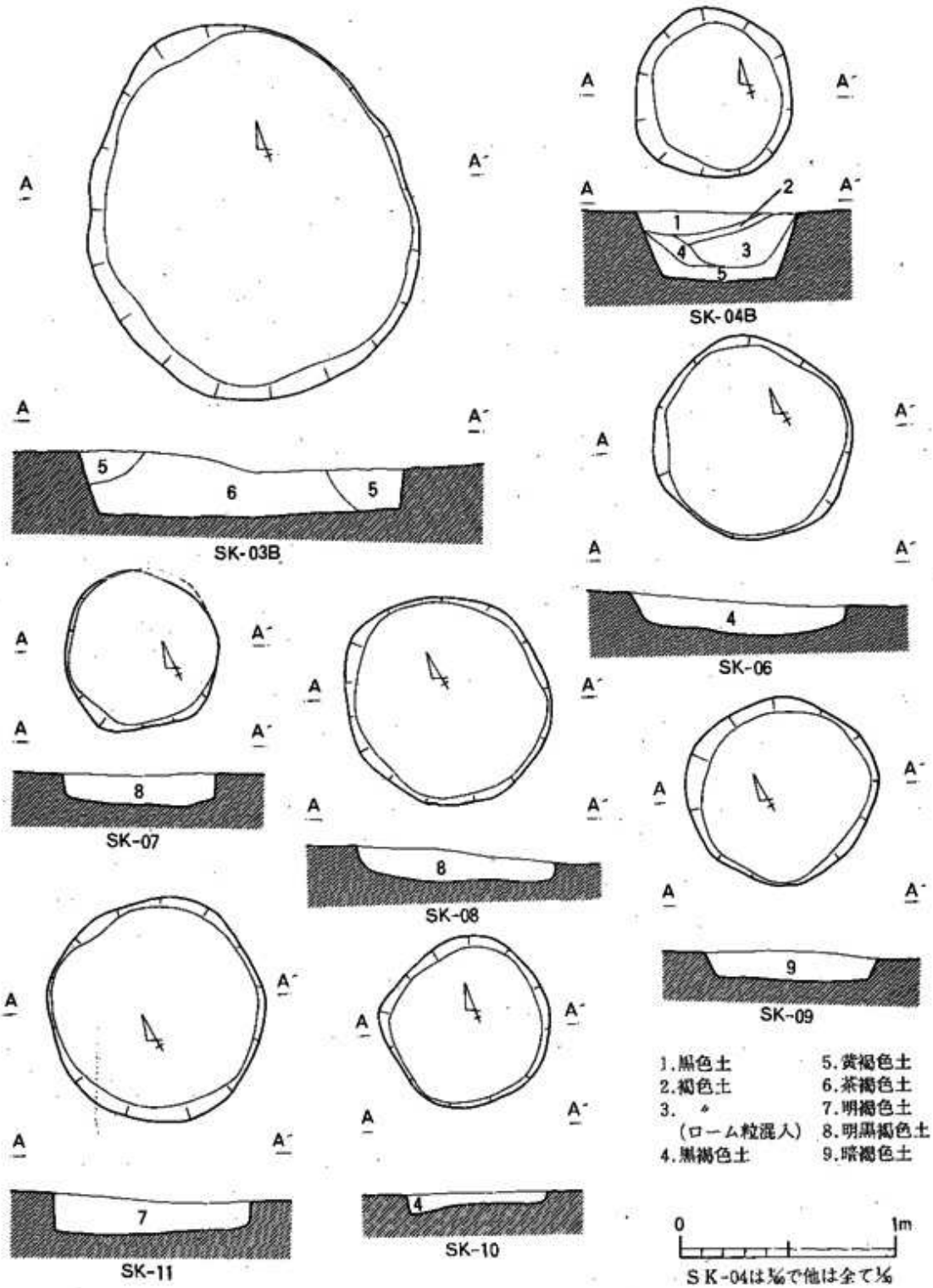
直径1.05m のほぼ円形を呈する。掘り込みは最深で16cmである。壁は底面から垂直ぎみに立ちあがる。底面は平坦である。埋土は 1 層で明るい褐色を呈す。出土遺物はない。

SK-12（第45図）

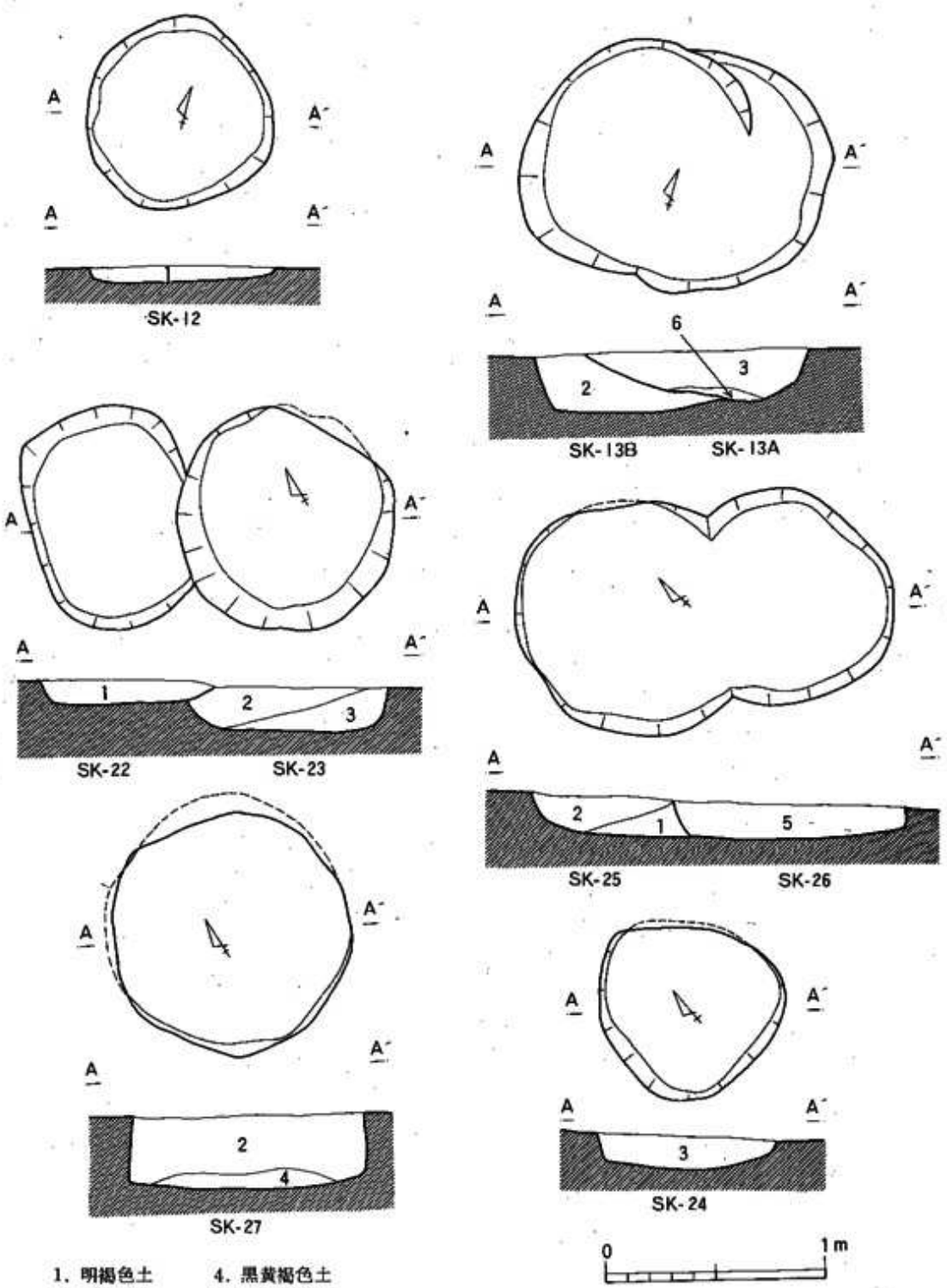
直径 0.9 cm前後のほぼ円形を呈する。掘り込みは最深 7.7 cmと浅い。壁は底面よりなだらかに立ちあがる。底面は平坦である。埋土は 1 層で明るい褐色土である。出土遺物はない。

SK-13A（第45図，図版21）

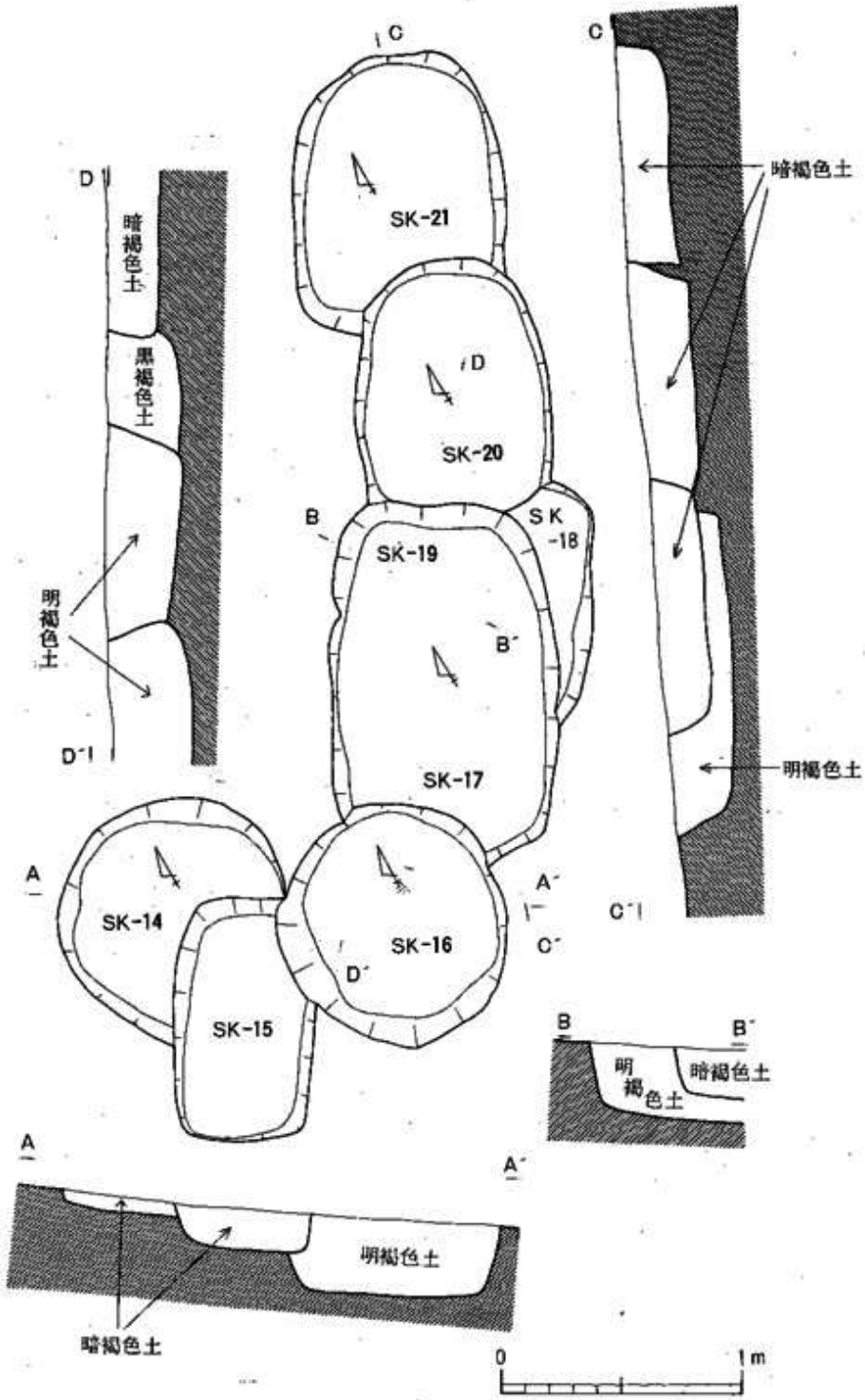
SK-13Bと重複している。新旧関係はSK-13B→SK-13Aである。直径 1 m 前後のほぼ円形を呈すると考えられる。掘り込みは最深で24cmである。壁は底面からゆるやかに立



第44図　SK-03B・04B・06・07・08・09・10・11実測図



第45図　SK-12・13A・13B・22・23・24・25・26・27実測図



第46図　SK-14・15・16・17・18・19・20・21実測図

ちあがる。埋土は2層で1層・暗褐色土，2層・黄褐色土である。出土遺物はない。

SK-13B（第45図，図版21）

SK-13Aと重複している。新旧関係はSK-13B→SK-13Aである。直径1.1m前後のほぼ円形を呈すると考えられる。掘り込みは最深で25cmである。壁は底面より丸味をもって立ちあがる。底面はほぼ平坦である。埋土は1層で黒褐色土である。出土遺物はない。

SK-14（第46図，図版21）

SK-15, 16と重複している。新旧関係はSK-16との間はSK-15により切られてしまって不明であるがSK-15とはSK-14→SK-15である。直径1m前後のほぼ円形を呈すると考えられる。掘り込みは最深で6cmと非常に浅い。壁の立ちあがりはしっかりしており，底面も平坦である。埋土は1層で暗褐色土である。出土遺物はない。

SK-15（第46図，図版21）

SK-14, 16を切って掘り込まれている。長径2m，短径1.15mの隅丸長方形を呈する。掘り込みは最深で33cmである。壁は底面からゆるやかな傾斜をもって立ちあがる。底面はほぼ平坦である。埋土は1層で暗褐色土である。出土遺物はない。

SK-16（第46図，図版21）

SK-14, 15, 17と重複している。SK-14との新旧関係は不明であるが，SK-15, 17との新旧関係は土層などよりSK-16→SK-17→SK-16と考えられる。直径1m前後の円形を呈す。掘り込みは最深で32cmと比較的深い。壁は底面からしっかりと立ちあがっている。底面は平坦である。埋土は1層で明るい褐色土である。出土遺物はない。

SK-17（第46図，図版21）

SK-16, 18, 19と重複関係にある。SK-16とはSK-17→SK-16の新旧関係である。SK-16, 18との新旧関係はSK-19→SK-17→SK-18となる。長径0.9m以上，短径0.9mの不整形に近い形と考えられる。掘り込みは最深で30cmである。壁はゆるやかに立ちあがり，底面も平担となっている。埋土は一層で明るい褐色土である。出土遺物はない。

SK-18（第46図，図版21）

SK-17, 19, 20と重複関係にある。SK-17, 19, 20→SK-18の新旧関係になる。長径1.05m，短径0.35m以上を測る。底面はほぼ平担で壁はゆるやかなカーブを描いて立ちあがる。掘り込みは最深で20cmである。埋土は1層で暗褐色土である。出土遺物はない。

SK-19（第46図，図版21）

SK-17, 18, 20と重複しており，土層によってその存在が判明したためその形状等については不明であるが，新旧関係については，SK-18とはSK-19→SK-18, SK-17とはSK-19→SK-17, SK-20とはSK-19→SK-20との関係が判明したのみである。底面は

ほぼ平坦でSK-17の底面と同一レベルである。埋土は1層で黒褐色土である。出土遺物はない。

SK-20（第46図，図版21）

SK-18，19，21と重複している。新旧関係は，SK-18→SK-20，SK-19→SK-20，SK-21→SK-20である。長径1m以上，短径0.8mの不整楕円形を呈する。掘り込みは最深で25cmである。壁は平坦な底面よりゆるやかな傾斜をもって立ちあがる。埋土は1層で暗褐色土である。出土遺物はない。

SK-21（第46図，図版21）

SK-20と重複している。新旧関係はSK-21→SK-20である。長径1.15m，短径0.88mの不整長方形を呈する。掘り込みは最深で20cmである。壁は底面から垂直ぎみに立ちあがる。底面は壁沿いが低く，中央部が盛りあがる。埋土は1層で暗褐色土である。出土遺物はない。

SK-22（第45図，図版22）

SK-23と重複関係にある。新旧関係はSK-23→SK-22である。長径1m，短径0.75mの不整楕円形を呈する。掘り込みは最深10cmと浅い。壁は平坦な底面よりゆるやかにたちあがる。埋土は1層で明るい褐色土である。出土遺物はない。

SK-23（第45図，図版22）

SK-22と重複関係にある。新旧関係はSK-23→SK-22である。直形約1mのほぼ円形を呈する。掘り込みは最深19cmである。壁は平坦な底面より丸味をもって立ちあがる。一部オーバーハングする部分もある。埋土は2層で1層・黒褐色土，2層・暗褐色土である。出土遺物はない。

SK-24（第45図，図版22）

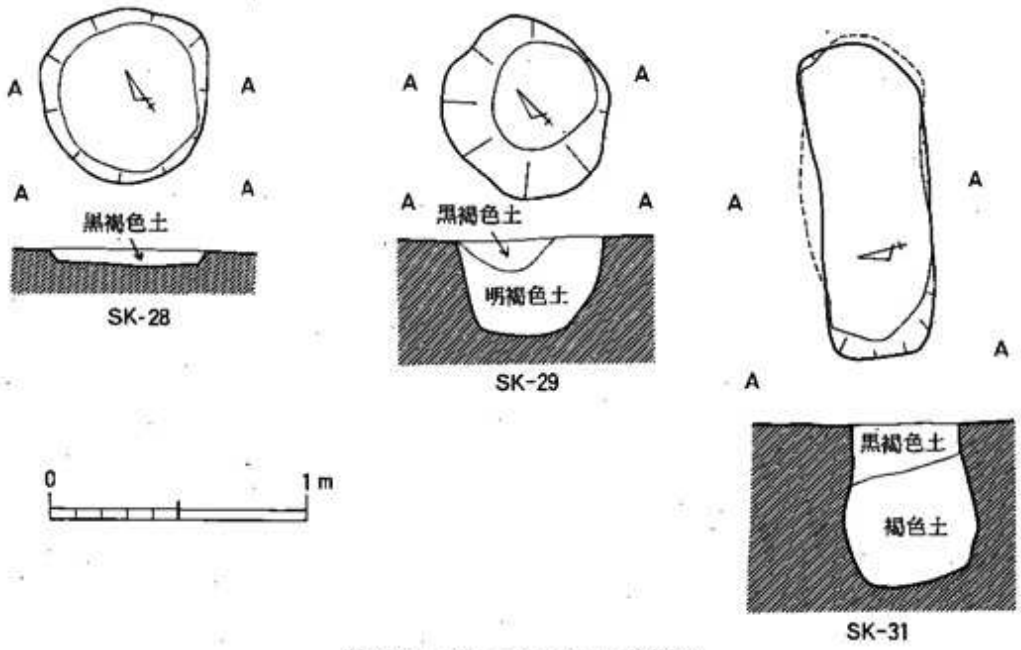
長径0.85m，短径0.8mの不整円形を呈する。掘り込みは最深で15cmである。壁は若干湾曲した底面よりゆるやかに立ちあがる。一部オーバーハングする部分がある。埋土は1層で暗褐色土を呈す。出土遺物はない。

SK-25（第45図，図版23）

SK-26と重複関係にある。新旧関係はSK-25→SK-26である。直径1.1m前後のほぼ円形を呈する。掘り込みは最深で15cmである。壁は湾曲している底面からゆるやかなカーブを持って立ちあがる。底面レベルはSK-26と同一レベルとなってしまっている。埋土は2層に分けられ1層・黒褐色土，2層明るい褐色土である。出土遺物はない。

SK-26（第45図，図版23）

SK-25と重複関係にあり，新旧はSK-25→SK-26である。直径約1mのほぼ円形を呈



第47図　SK-28・29・31実測図

し，壁はほぼ平坦な底面より垂直ぎみに立ちあがる。掘り込みは最深15cmである。埋土は1層で明るい黄褐色土である。出土遺物はない。

SK-27（第45図，図版23）

直径1.1mのほぼ円形を呈する。壁はほぼ平坦な底面より内傾気味に立ちあがり，全体の半分程度がオーバーハングする。このため断面をみると一部袋状を呈する。掘り込みは最深35cmと深い。埋土は2層に分けられ，1層・黒褐色土，2層・黒茶褐色土である。出土遺物はない。

SK-28（第47図，図版24）

直径0.7mのほぼ円形を呈する。壁はほぼ平坦な底面よりゆるやかに立ちあがる。掘り込みは最深7cmである。埋土は1層で黒褐色土である。出土遺物はない。

SK-29（第47図，図版24）

直径0.7mの楕円形を呈し，断面が鍋底状を呈する。掘り込みは深く37cmである。壁は湾曲しながらゆるやかに立ち上がる。底面は比較的平坦である。埋土は2層に分けられ，1層・黒褐色土，2層・明褐色土である。出土遺物はない。

SK-31（第47図，図版25）

長径1.22m，短径0.42mで1辺のコーナーがかなりカットされた様な不整長方形を呈する。掘り込みは深く63cmである。壁は湾曲して立ちあがり，断面袋状を呈す部分もある。埋土は2層に分けられ，1層・黒褐色土，2層・褐色土である。出土遺物はない。

土 器 観 察 表

○土器番号は捜図番号と一致する。

○法量のうち口は口径，高は器高，底は底径，胴は胴部あるいは体部最大径を表す。

（ ）は推定，単位はセンチメートル

S I - 0 1

土器番号	器形	法 量	器形の特徴	成・整形の特徴	色調・焼成・胎土	遺存度	出土レベル	備 考
1	杯	口：14.1 高： 5.5 底： 3.4 胴：14.6	口縁部は内傾ぎみに立ち上がる。口縁部と体部の境にわずかに稜をもつ。平底。	外面：口縁部～体部上半ヘラミガキ，以下ヘラケスリ，底部はケズリにより上げ底風の平底をつくる。 内面：口縁部横ナデ，体部ヘラミガキ。	赤褐色 良好 微砂粒混入，精選される。	完形	南東コーナーテラス	
2	杯	口：14.2 高： 6.3 胴：14.8	口縁部は内傾ぎみに立ち上がる。口縁部と体部の境にわずかに稜をもつ。	外面：口縁部ヘラミガキ，以下ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ，体部ヘラミガキ。	赤褐色，一部黒斑 良好 砂粒を多く含む	完形	〃	
3	杯	口：(16.6)	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境にわずかに稜をもつ。底部不明。	外面：口縁部横ナデ，体部ヘラケズリ。 内面：口縁部～体部粗いヘラミガキ。	淡赤褐色 良好 砂粒を含む，精選される	½	覆土	
4	杯	口：(14.6)	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。底部不明。	外面：口縁部横ナデ，体部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ，体部ヘラミガキ。	赤褐色 良好 砂粒を多く含む	⅓	〃	
5	杯	口：(13.4) 胴：(14.0)	口縁部は段をもって垂直に立ち上がる。	外面：口縁部横ナデ，体部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ，体部ナデ。	赤褐色 良好 白色砂粒を多く含む	⅙	〃	
6	埦	口：(15.2)	口縁部はわずかに外反する。内面の稜は明瞭。丸底。	外面：口縁部～体部ヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ後ヘラミガキ，以下不明	赤褐色 普通 白色砂粒を含む	⅓	〃	内外面磨滅が著しい。
7	埦	口：15.4	口縁部はわずかに外反する。内面の稜は明瞭。丸底。	外面：口縁部横ナデ後ヘラミガキ，体部ヘラケズリの後粗いヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ	赤褐色 良好 小砂粒を多く含む	完形	南東コーナーテラス	内面磨滅が著しい。

土器番号	器形	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	色調・焼成胎土	遺存度	出土レベル	備考
8	碗	口：(16.8) 高：(7.2)	半球状を呈す。口縁部はなだらかに立ち上がる。丸底と思われる。	外面：口縁部横ナデ，体部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ，体部は剥落が著しく整形不明。	褐色 良好 砂粒を多く含む	¼	覆土	
9	杯	口： 8.0 高： 4.5 底 2 2.5	口縁部は垂直に立ち上がる。平底。	外面：口縁部横ナデ，底部付近ケズリ。 内面：口縁部横ナデ，体部ナデ。	黒褐色 良好 小砂粒を多く含む	完形	床面	手づくね
10	杯	底： 4.4	平底。	外面：ヘラケズリ， 内面：ナデ後ヘラミガキ。	淡黄褐色 良好 小砂粒をわずかに含む	図示部完存	覆土	
11	杯	底： 3.5	平底。わずかに凹む。	外面：口縁部横ナデ，頸部ハケメ。 内面：口縁部横ナデ，頸部ヘラケズリ。	褐色 良好 微砂粒を多く含む	図示部完存	〃	
12	甕	口：(15.6)	口縁部「ハ」の字に開く。	外面：口縁部横ナデ，体部はケズリの 内面：口縁部横ナデ，頸部ヘラケズリ。	黒褐色 良好 微砂粒を含む	¼	〃	
13	小形甕	口：12.5 高：11.5 底： 3.4 胴：13.7	口縁部は「ハ」の字に開く。胴部は球形。底部は安定した平底。わずかに上げ底。	外面：口縁部横ナデ，体部はケズリの後粗いヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ，体部ナデ。	黒褐色 良好 小砂粒を多く含む	完形	南東コーナーテラス	
14	甕	底：(6.8)	平底。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	暗黄褐色 良好 砂粒を多く含む	図示部の½	覆土	
15	甕	底：(6.6)	平底（上げ底）。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	黒褐色 良好 小砂粒を少量含む	図示部の½	〃	
16	甕(?)	底：44.2	平底（わずかに上げ底）。	外面：ナデ。 内面：ヘラミガキ。	黒褐色 良好 小砂粒を少量含む	図示部完存	〃	
17	蓋	口：13.5 高： 3.5	天井部は平ら，立ち上がり部はわずかに開く，体部と立ち上がり部の境は明確な稜。端部は面をもち水平。	マキアゲ→ミズビキ成形 外面：天井部ヘラケズリ（左方向）ロクロの回転は右。 内面：凸凹が激しい。	暗褐色 良好 小砂粒を少量含む。堅緻	立ち上がり部½欠	床面	須恵器 天井部自然釉がかかる

SI-02

土器番号	器形	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	色調・焼成胎土	遺存度	出土レベル	備考
1	壺	口：(16.3)	口縁部は「く」の字に外反，体部は丸味をおびる。	外面：口縁部横ナデ，肩部約1cm幅でヘラミガキ，体部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ，体部ヘラミガキ。	黒褐色 良好 小砂粒を含む	図示部の½	覆土	
2	壺	口：14.9 高：29.3 底：6.5 胴：24.2	口縁縁部わずかに開く。体部はやや長胴化の傾向をみせる球形平底。	外面：口縁部横ナデの後ヘラミガキ，体部はヘラケズリの後，ヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ，肩部ヘラミガキ，体部ナデ。	赤褐色 良好 小砂粒を含む	完形	床面	
3	甕	口：19.3 高：26.3 底 6.5 胴：24.6	口縁部は大きく「く」の字に外反，体部は球形，上げ底の底部。	外面：口縁部横ナデ，体部タテハケメ，胴下部ヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ，胴部ナデ。	赤褐色 良好 小砂粒を含む	完形	床面	胴中央部カーボン付着
4	甕	口：18.6 高：26.7 底：7.2 胴：22.2	口縁部「ハ」の字に開く。頸部でくびれて胴部に最大径をもつ。底部は筒抜け。	外面：全面にわたってヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ，胴上部ナデ，胴下部ヘラミガキ。	赤褐色 良好 小砂粒を多く含む	完形	床面	
5	甕	口：(24.5)	口縁部「ハ」の字に開く。頸部はくびれる。	外面：口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ，胴部ナデ。	黒褐色 良好 白色砂粒を含む	図示部の½	覆土	
	甕	口：16.7 高：31.7 底：6.2 胴：26.5	口縁部「ハ」の字に開く。球形の胴部，平底（上げ底）	外面：口縁部横ナデ，肩部ナデ（ハケメに近い）胴下部ヘラケズリの後粗いヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ，胴部ナデ。	黒褐色 良好 白色砂粒を含む。堅緻。	完形	床面	胴中央部カーボン付着

SI-06

土器番号	器形	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	色調・焼成胎土	遺存度	出土レベル	備考
	杯	口：(13.5) 高：5.2 底：5.9 胴：14	口縁部は内彎，口径直下に最大径，底部は平底。	外面：口縁部ナデ，体部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ，体部ヘラミガキ。	赤褐色 良好 白色砂粒を含む	½	覆土	

土器について

SI-01，02から検出された土師器は，甕形，小形甕形，壺形，椀形，杯形，甑形，手づくねなどの器種が認められる。土器各々の詳細は観察表に譲るが，特徴的な器種についてのみ再述する。

○甕形土器……胴中央部に最大径をもち，整美な球形の体部をなす。頸部は屈曲が強く，大きく外反する口縁部に至る。底部はわずかに上げ底となる。外面には刷毛目を残す。

○壺形土器……甕形に較べ長胴化の傾向にある。口縁部は直立ぎみに開く。全体的に「厚手」の印象を受ける。

○椀形土器……便宜的に比較的深めのものを指す。半球状を呈し頸部でくびれゆるく外反するタイプと，まったくの半球状のタイプがある。

○杯形土器……椀形に較べより浅いものを指す。口縁部の形態には微妙な違いはあるが，共通要素として明確な稜をもたず内彎ないしは内傾する点があげられる。平底・丸底の両者とも存在する。

○甑形土器……SI-02から二例検出されている。大形で胴中央部に最大径をもち，頸部でくびれ外反する口縁部に至る。筒抜けの底部である。

これらの土器群を従来の型式観でみると，まず甕形土器の形態，即ち球胴と急激にくびれる頸部は，和泉式的手法の中で捉えられる。また椀形，特に頸部でくびれる前者のタイプは，古くは五領式の段階から系譜のたどりうる器形で，平底から丸底化，器高の減少，などの変化がみられ，鬼高式の古い段階まで残る。その中でも和泉式末～鬼高式初頭にかけて特徴的に認められる。さらに杯形土器は，平底も存在し，口縁形態でも和泉式の特徴を示す。しかし一方で，壺形土器における厚手で粗雑なヘラケズリ技法や口縁形態，整形技法，あるいは甑形の大形化，筒抜けの底部などは鬼高式的な様相とみることができる。

総じて言えば，本遺跡の土師器には和泉式的伝統を多分に残す一群と，新出的な鬼高的様相をすでに備えた一群が存在するということになる。

次にSI-01から出土した須恵器について，簡単に器形，成・整形の特徴を述べる。本土器は蓋形を呈し，口径13.5cm，器高 3.5cmを測る。口径に較べ器高が低く，天井部が扁平な点が大きな特徴である。稜の作りはシャープで直下が凹線状にくぼみ，やや外反ぎみに口縁部に至る。口唇端部は幅 3 mm強の平担面をつくる。成形はマキアゲ→ミズビキ手法によると思われる。整形は天井部の約¾まで，上からみて左方向の回転ヘラケズリ，内面は回転ナデがみられる。色調は淡灰色，外面¾ほど自然釉がかかる。遺存度は全体の約¾である。

この土器の出土位置をみるならば，炉周辺，床面近くの破片が接合しており，遺構および他の土師器との共伴と認めてよく，同時期存在の蓋然性が高い。

では須恵器自体の編年ではどの辺に置かれようか。まず共伴する土師器から初期須恵器の段階であることに異存はない。田辺氏・中村氏の陶邑編年（註1）に充てるならば，Ⅰ期あるいはⅠ型式の中で理解されるだろう。両氏の型式認定の方法は異なるが，土器の変遷は概ね一致する。蓋形土器に限れば，つまみの付く段階から天井部が扁平な段階を経て天井部が丸くなっていくとされる。その中で本土器は，天井部が扁平な段階にあたる。また口唇端部が明確な平坦面をなすことも段階的には矛盾しない。これらの特徴は，田辺氏のＴＫ208式，中村氏のⅠ型式３段階に比定することができる。

県内において和泉末から鬼高初頭にかけての住居跡は，鹿沼市三軒屋遺跡１号住(註２)，野木町篠山遺跡１号住（註３），真岡市井頭遺跡８区８号住（註４），宇都宮市権現山北遺跡２，７，16号住（註５），同聖山公園１号住（註６），などが著名である。このうち三軒屋，篠山以外では須恵器が伴出している。

権現山北２号住では土師器は高杯形，坩形などを伴い，埦形，杯形がともに平底である。須恵器は受部をもつ杯身で，体部に波状文が施文されⅠ型式でも古い段階に置かれるという(註７)。概して本遺跡よりは古い様相と考えられる。一方同じ権現山北16号住，聖山公園１号住の土師器杯形はすでに明確な須恵器模倣杯が主体となっており，和泉式からの伝統的な要素は消失している。伴出須恵器はいずれもＴＫ23ないし47式に比定され，本遺跡よりは新しい様相を示している。残る三軒屋，篠山，井頭，権現山北７号住（註８）は刷毛目を残す球胴の甕形，大形で頸部でくびれる甑形，和泉式の伝統をもつ埦形，杯形など本遺跡と最も近い時期に位置付けられるものと思われる。なおそれら４遺跡と本遺跡を含めた時間的な差も当然考えられようが，ここでは，前記したように和泉的な一群と鬼高的な一群が存在する段階として包括しておく。

以上，本遺跡出土土器について述べてきたが，結論としてあえて型式に帰属させるなら新しい様相を示す一群の存在から鬼高式それも最も古い段階として捉えておきたい。実年代としては須恵器より判断して５世紀後半と推定される。

なお本遺跡出土の土器については，橋本澄朗・橋本博文・田熊清彦・梁木誠の各位から御教示をうけたことを記して謝意を表します。

〈註〉

註１　田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ

中村浩・他　1978　『陶邑Ⅲ』　大阪府教育委員会

註２　辰己四郎・他　1972　「三軒屋遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』

日本道路公団東京支社・栃木県教育委員会

註3　竹澤謙・他　1974　「篠山遺跡」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』　日本国有鉄道東京第三工事局・栃木県教育委員会

註4　大金宣亮・他　1974　『井頭』　栃木県教育委員会

註5　久保哲三・他　1979　『権現山北遺跡』　宇都宮市教育委員会

註6　梁木誠・他　1983　『聖山公園遺跡Ⅰ』　宇都宮市教育委員会

註7　梁木誠氏の御教示による。

註8　未発表であるが，本跡からＴＫ208段階の須恵器が出土しているとのことである。梁木誠氏の御教示による。

石製模造品について

本遺跡からの石製模造品および原材，剝片などは，SI-01，02，04，05の４軒の住居跡から認められる。これらの住居跡から出土したものは，臼玉811個，剣形模造品40個，勾玉９個，有孔円板37個，管玉４個，剝片多数（図示したものはその一部），原材３個，その他(名称不明のもの)７個の多数にのぼる。これらを４軒の住居跡別にみてみると，SI-01では，臼玉782個，剣形模造品40個，勾玉８個，有孔円板35個，管玉４個，剝片，その他７個，原材３個。SI-02からは，臼玉14個，有孔円板１個，原材１個。SI-04からは，臼玉１個。SI-05からは，臼玉14個，有孔円板１個であり，SI-01出土の石製模造品がその全てのものといってよいほどの出土量をほこっている。剝片にいたってはその全数をほぼ出土しており，このことをみても，SI-01がこの集落跡でおかれた位置がどの様なものであったかは推定できるのではないだろうか。

SI-01出土の石製模造品は，その製作工程の一部を理解できるものを多数に含んでいる。ここではそのSI-01出土のものを中心として石製模造品の製作工程の復元を考えてみたいと思う。

剣形模造品

本遺跡出土の剣形模造品は，未製品，破損品，完成品を含めて総数40個の出土がある。これらはすべてSI-01からの出土であり，他の住居跡からの出土は皆無である。出土している40個の未製品，破損品，完成品の剣形模造品は次の様に３分類できる。

第Ⅰ類

研磨がなされているものがこの類に含まれる。１～16がこれにあたる。研磨の順序につ

いては，側面からなのか，両面からなのか明確でない。そのため1～16の剣形模造品をみてみると，側面だけ研磨されているもの，片面だけ研磨されているもの，両面だけ研磨されているものなどが雑多に認められている。

第Ⅱ類

穿孔がなされているものがこの類に含まれる。17～22がこれにあたる。17～21は穿孔中に破損してしまっている。22への穿孔は柄部近くになされず，身の部分になされている。あるいは第Ⅰ類に含まれるのかもしれないが，穿孔があることより，本類に含めた。

第Ⅲ類

全て完成品である。23～40がこれにあたる。柄部に2孔の穿孔を持つもの，柄部に1孔，身に1孔の穿孔を持つもの，柄部に1孔穿孔されるものが認められる。平面形状は，剣形模造品と認識できるものの，かなり形のくずれたものも認められる。研磨をみても，打ち割り痕が明瞭に識別できる程の雑な研磨である。

以上のように第Ⅰ類 ～ 第Ⅲ類に分けられた。これらはおのおの，現在まで考えられている剣形模造品の製作工程にあてはめて考えてみれば，第Ⅰ類，研磨未製品段階のもの，第Ⅱ類は，穿孔未製品段階のもの，第Ⅲ類は，完成品となる。

これらから考えられる剣形模造品の製作工程は，1.原材採取――2.荒割未製品作製――3.形割り未製品作製――4.研磨未製品作製――5.穿孔未製品作製――6.完成品の工程をへて製作されるものと考えられる。この製作工程は後述する有孔円板の製作工程とまったく同一の製作工程であることが判断できた。

有孔円板

有孔円板の出土は，SI-01から未製品，破損品，完成品を含めて36個が，SI-02から1個，SI-05から1個の合計38個が本遺跡からの出土総数である。これらのうちSI-01からの36個の未製品，破損品，完成品をみてみると，その製作工程の一部を伺い知ることができる。SI-01出土の有孔円板を分類すると次の三つに分けられる。

第Ⅰ類

第Ⅰ類に含まれるのは比較的多く9個を数える。いずれも両面および側面が研磨されている。しかし研磨はあまりきめ細かくはなされていなく，所々に打ち割り痕が認められる。41～46は完形品，47～49は破損品である。47～49の破損品は勾玉の未製品の可能性もあるが，製作工程の異なりより，有孔円板とした。

第Ⅱ類

2個が出土しているのみである。50，51がこれにあたる。50には片面に2孔，片面に1

孔の合計3孔の穿孔がなされているが，いずれも貫通していない。51は1孔のみが貫通しているだけである。

第Ⅲ類

形の大中小等の差はあるものの，いずれも2孔の穿孔痕を持つ。54～76がこれにあたる。58には3つの穿孔が認められるが，1孔は未貫通である。

以上のように分類できたが，これらの製作工程を考えると，第1類は，研磨未製品段階のもの，第Ⅱ類は，穿孔未製品段階のもの，第Ⅱ類は，完成品となる。第Ⅰ類～第Ⅲ類は有孔円板の製作工程の1部分にしかすぎない。

本遺跡出土の有孔円板をみてみた場合，その製作工程は，神坂峠で述べられているものと基本的には同一の製作工程をとるものと言える。とすれば，1.原材採取——2.荒割未製品作製——3.形割り未製品作製——4.研磨製品作製——5.穿孔未製品作製——6.完成品の工程を踏んで製作されたものと考えられる。

勾　玉

本遺跡出土の勾玉は，未製品，破損品，完成品を含めて9個の出土がある。これらはSI-01から8個，SI-04から1個である。勾玉は，本遺跡出土の石製模造品の中では数量的には少ないが，その製作工程の一部を伺い知ることができる。SI-01出土の8個の勾玉を分類すると次のようになる。

第Ⅰ類

この段階のものとしては，77がそれにあたる。腹部の〝えぐり〟と思われるくの字状の切り込みが若干認められる。

第Ⅱ類

この段階のものは3個認められる。78，79，81がこれにあたる。側面，両面とも研磨がなされているも雑な研磨である。頭と尾がほぼ同じ大きさにつくられており，この段階では，頭と尾の区別はなかったものと考えられる。

第Ⅲ類

80，82～84の4個がこれにあたる。頭部に穿孔がなされている。84は腹部から尾にかけて欠損している。

以上の様に第Ⅰ類～第Ⅲ類に分けることができた。これらは現在までの考えられる製作工程にあてはめて考えてみると，第Ⅰ類は，形割り段階のもの，第Ⅱ類は，研磨段階のもの，第Ⅲ類は，完成品となる。つまり勾玉の製作工程としては，1.原材採取——2.荒割り未製品作製——3.形割り未製品作製——4.側面打製未製品作製——5.研磨未製品作製

6.穿孔未製品作製---7.完成品の順序で製作されるものと考えられるが，本遺跡出土の第Ⅲ類としたものの中に，5.研磨未製品作製——6.穿孔未製品作製——7.完成品の順序をとらないものがある。6.穿孔未製品作製と7.完成品の間に再度の研磨をなすものである。とすれば前述した1～7の工程を経て作製されるものと，1.原材採取——2.荒割り未製品作製--- 3.形割り未製品作製---4.側面打製未製品作製---5.研磨未製品作製——6.穿孔未製品作製---7.研磨未製品作製——8.完成品の製作工程をとるものの2つの工程を考えることができる。また2.荒割り未製品段階に類するものは出土していないが，剥片の中に認められる縦長で半月状のものがこの段階のものとしてよいかもしれないが，判別はかなり困難である。勾玉の場合は，その製作工程を明確に把握できるのは，4.側面打製未製品作製の段階からと思われる。

臼　玉

臼玉は，SI-01からはもっとも多くの出土があり，他の石製模造品の勾玉等にくらべてもその数量は群をぬいており，782個を数える。本遺跡全体では811個となる。これらの未製品，破損品，完成品をみてみると，その製作工程の一部を伺い知ることができる。出土した臼玉は，次の様な5類に分けることができる。

第Ⅰ類

原材から素材として荒割りされたものである。85，86がこれにあたる。この他にも剥片の中にかなりの荒割り未製品としてよいものが含まれていると考えられるが，その判別は非常に困難である。

第Ⅱ類

荒割りされたものをさらに割り出し，より形状を臼玉に近い段階まで整形したもので，5角形から8角形に近い形となっている。側面の一部に切断痕ではないかと考えられる擦痕を有するものも認められる。穿孔はまだなされていない。87～115がこれにあたる。

第Ⅲ類

第Ⅱ類のものの中央部に穿孔を行なっているものである。116～130は穿孔が途中までしかなされていない。穿孔は，122，130は片面からの穿孔でなく両面からおこなわれている。131～202は穿孔中に破損してしまったものである。203～417は穿孔が完了してから破損したものである。408，416，417は穿孔が両面からなされている。418～805は穿孔が完了したものである。418～805の中には両面は全て形割りのままであるが，側面に研磨痕なのか，切断痕なのか判断できない擦痕が認められるものが一部に存在する。

第Ⅳ類

研磨が一部に対しておこなわれているものである。研磨の初期の段階で破損するものや，研磨がかなり進んだ段階で破損したものなど種々認められている。806～857がこれに含まれる。858～878は破損はなく現在研磨中のものである。前述した様に研磨が終了に近ずいたものや，一部の研磨を初めたばかりのものなど種々雑多ではあるが，完成品に比較して全体的に角などがみとめられ，丸味が少ない感じである。

第Ⅴ類

研磨がきめこまかくおこなわれ，完成品となったものであ。879～938がこれにあたる。以上のように5つの類に大別することができる。

臼玉の製作については，従来から次の4つの製作技法においてなされたと考えられている。

A．平板石に基盤目状に直交する溝を入れ，各々の中央に穿孔し，チョコレートの様に割るもの――築前宗像沖の島遺跡等。

B．扁平長方形の細長い板材を次々と切断し，正方形の材をつくり，整形，穿孔するもの――出雲東忌部中島玉作遺跡等。

C．板状の扁平石を原材として，1個づつ割り出してゆくもの――下総夏見台遺跡例等。

D．管玉を切断するもの

以上の4つの製作技法を取るものとされている。本遺跡出土の臼玉を上記のA～Dの製作技法にあてはめてみた場合，AとBの技法によったものと思われるものは確認できていない。Dの製作技法をとったと考えられる臼玉の出土も確認できなかったが，管玉の穿孔に切断，穿孔をくり返したのではないかと考えられる技法がみられるが，断定はできていない。現状においてはCの製作技法により製作されたものがもっとも多いと考えられる。

Cの製作技法により製作されたものとしては，下総夏見台遺跡，下総八代・大和田玉作遺跡，神坂峠などが知られている。

この板状の扁平石を原材として1個づつ割り出されたものの，その後の製作工程についても，上記の下総夏見台遺跡，下総八代・大和田玉作遺跡，神坂峠などで述べられている。

本遺跡出土の臼玉の未製品，破損品，完成品等をみてみても，その中で論じられている製作工程と大差ないものと考えられる。これらの製作工程から考えると本遺跡出土の臼玉のうち，第Ⅰ類としたものは，荒割り未製品段階のもの，第Ⅱ類は，形割り未製品段階のもの，第Ⅲ類は，穿孔未製品段階のもの，第Ⅳ類は，研磨未製品段階のもの，第Ⅴ類は，完成品とすることができる。これらから推定する本遺跡出土の臼玉の製作工程は，1.原材採取――2.荒割り未製品作製――3.形割未製品作製――4.穿孔未製品作製――5.研磨未製

品作製——5.完成品となると言える。これらの判別が可能になるのは，形割り未製品が作製された段階以後であり，それ以前については困難であると言える。

以上のような製作工程は，白玉の大部分に対しておこなわれたと考えられるが，その他に外原遺跡で考えられている別な製作工程に関係するのではないかと思われる遺物の出土がある。この製作工程については，外原遺跡で指適されており，「石塊に小孔が穿ってあるものがあり，その部分近くに打撃を加えて，剝片をとった形跡があり，その穴のあるものをさらに細かく打ち割って小玉類を作ることも考えられる」としているものに類似している。本遺跡では，SI-02出土の石塊（第33図34）に小孔が穿ってある。しかし，この別な工程を想起させる石塊については，夏見台（第4次）の報告の中で，「石塊からとった穿孔されている剝片が出土していないこと」「剝片をとる時に孔の部分で割れた剝片の出土していないことが疑問である」との指適がなされている。この指適にある「石塊からとった穿孔されている剝片」と「剝片をとる時に孔の部分で割れた剝片」が本遺跡のSI-01から出土（第22図944～948，950，951）している。これよりすれば，外原遺跡で想定された小玉類の製作工程のひとつの手法が存在したと想定できる。しかし，これら穿孔のある石塊と穿孔のある剝片が接合する例はなく，また剝片にみられる穿孔痕は，石塊にある穿孔痕の孔径より大きいことが認められるのみである。穿孔された剝片に，孔を中心とし打ち割りによって小玉類を作ることは，孔そのものの部分から割れてしまう確率が高く，破損品を多く出す結果を招く。打ち割りでなく，孔を中心として剝片を切断する方法がより破損品を少なくするものと思われる。しかし，本遺跡出土の孔のある剝片には切断痕や切断途中痕があるものが認められない現状では，別な製作工程を考えるには疑問点が多すぎると言わざるを得ない。

参考文献

「神坂峠」　阿智村教育委員会　昭和44年

「後張」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第26集　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XV　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983年

「夏見台（第4次）」　船橋市夏見台（第4次）遺跡調査団　1981年

「下総国の玉作遺跡」　千葉県教育委員会　1973年

「外原」　—古墳時代集落址・滑石工房址の発掘調査—　船橋市教育委員会　1972年

土壙について

向野原遺跡からは，総数33基の土壙が検出されている。33基の土壙はその平面形状から考えれば，第Ⅰ類・長方形のもの，第Ⅱ類・円形のもの，第Ⅲ類・隅丸長方形のものに三大別することができる。

第Ⅰ類としたものには，SK-01，02，03A，04A，05の５基が含まれる。これらは長径については短かいものでも1.5m，長いものは３mを越えるなど差異はあるものの，短径については0.7m～1m以内とかなりの近似値数をもつ。また各コーナーは直角に曲がっており，壁も垂直気味に立ちあがる共通性をもつ。さらに遺構の分布も調査区の北に集中して検出されている。

第Ⅱ類としたものには，SK-03B，04B，06，07，08，09，10，11，12，13A，13B，14，16，22，23，24，25，26，27，28，29の21基が含まれる。これらの土壙は細かくみてみると，長径の長短により細かく分けることができる。SK-03B，04Bの様に長径が 1.5mを越えるものA種（２基）と，SK-06，13Bを代表とする短径が0.7mから１m前後に集中するものB種（19基）である。これら２種に分かれる遺構は，それぞれの検出される調査区の位置にもちがいがある。A種に含まれる２基の土壙は単独で検出される傾向があるのに対して，B種に含まれる19基の土壙は，調査区の南端に集中して検出されている。さらにB種は，SK-13A，13BやSK-25，26，SK-14，16の様に重複するものも存在する。

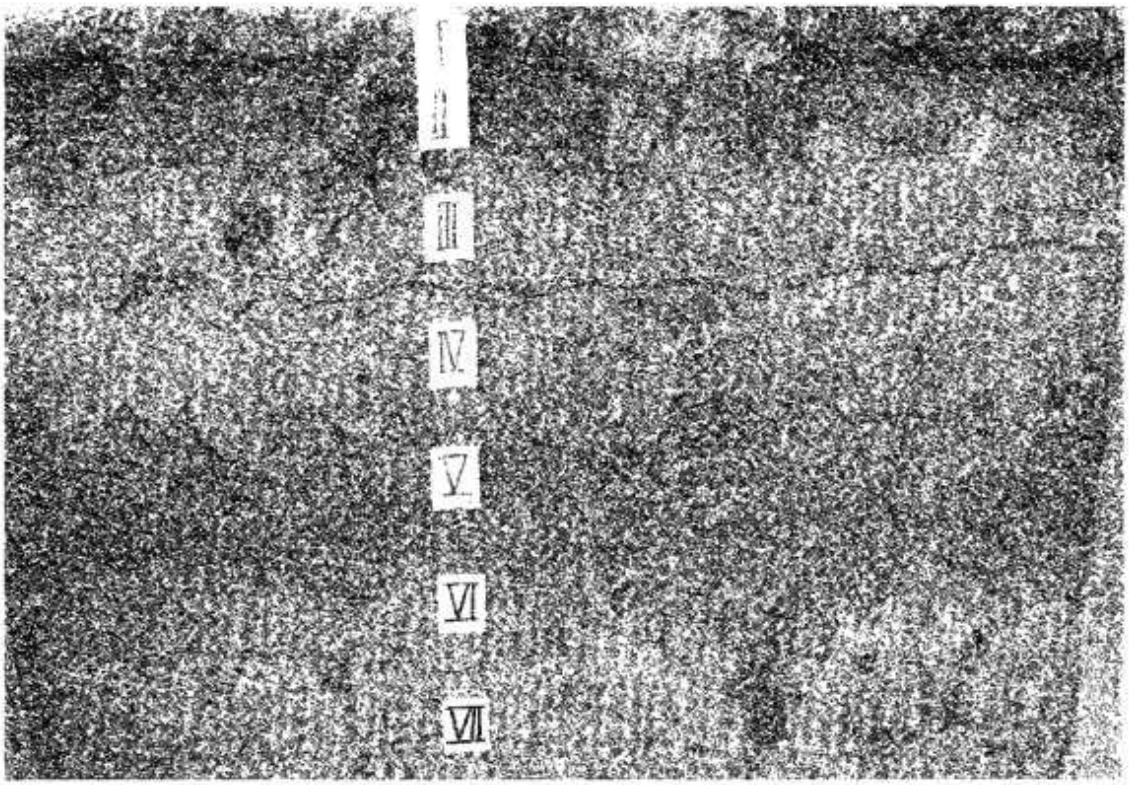
第Ⅲ類の隅丸長方形に含まれるものはSK-15を代表として７基を数えることができる。これらはさらに，壁の立ちあがりや，掘り方の深さにより細分が可能である。SK-31の様に掘り込みが深く，壁の立ちあがりが内彎曲するものA種（１基）と，SK-15に代表される様に掘り込みが浅く，壁がゆるやかに立ちあがるB種（６基）である。これらのA種，B種はともに近接はしているものの重複はみとめられない。しかし，B種のうちSK-22を除く６基は複雑な重複関係を呈している。

この様に32基の土壙はⅢ類４種に分けられたが，いずれの土壙内からも出土遺物が皆無のため，その時期を決定する手段を持たない。各類種間の重複状態をみてみると，Ⅱ類B種間，Ⅱ類B種とⅢ類B種，Ⅲ類B種間と３つの場合があるが，同類種間以外の重複はⅡ類B種とⅢ類B種に認められるだけである。この重複関係をみてみると，Ⅱ類B種がⅢ類B種に切られる場合と，Ⅲ類B種がⅡ類B種に切られる場合との２者があり，各類種間の前後関係も的確にすることも少し無理がある。埋土の状態をみてみても，Ⅰ類とⅡ類A種とⅡ類B種・Ⅲ類では差異があるものの，Ⅱ類B種とⅢ類の間では同一の埋土としてもさしつかえないものであり，時間的にそれ程の差がなく構築されたことだけは判明する。

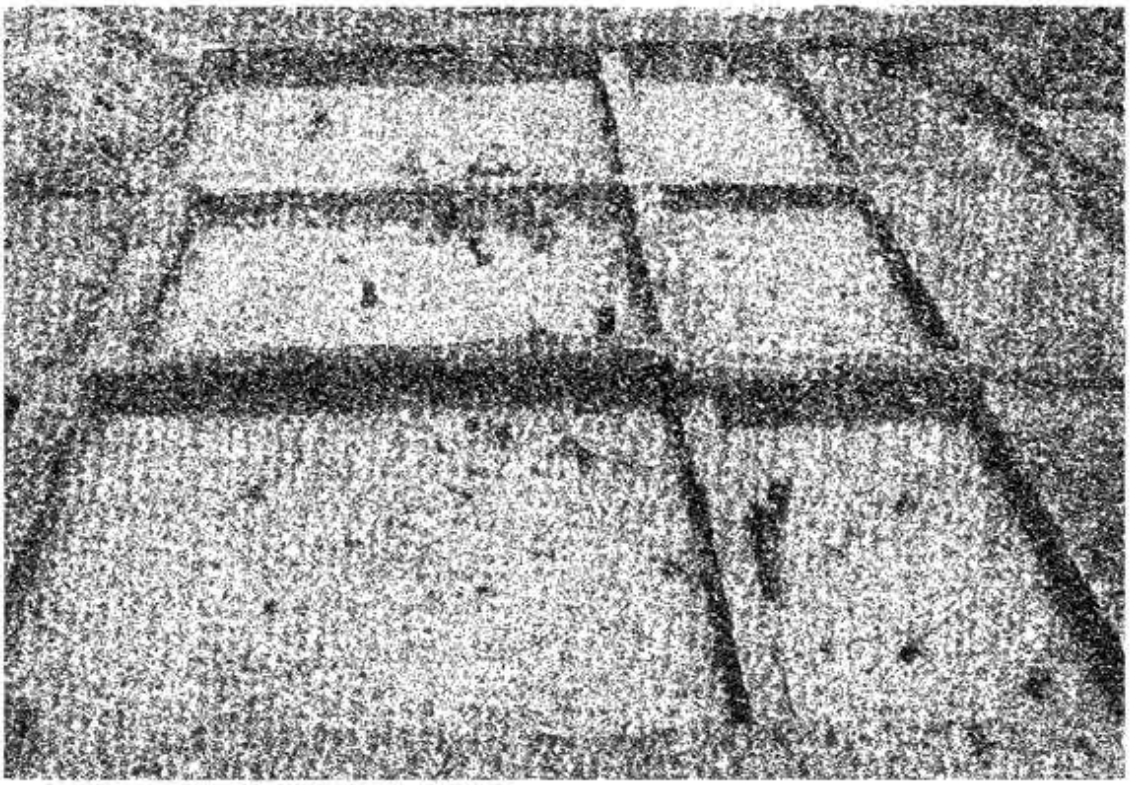
以上の様に遺構の時期については決定する手がかりはまったくない。しかし，Ⅰ類とⅡ類B種，Ⅲ類B種は群在して1つの〝場〟を持つことだけは指適できうるのではないだろうか。

写真図版

本郷前遺跡

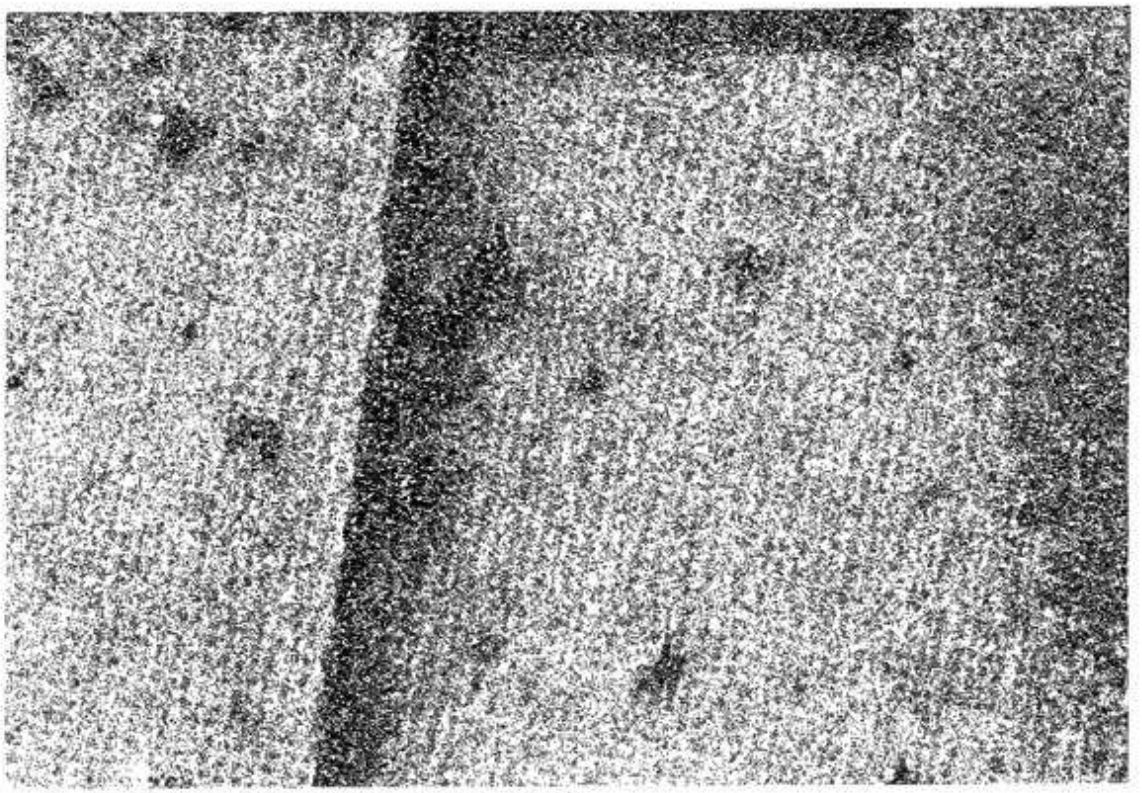


1．本郷前遺跡土層位状況

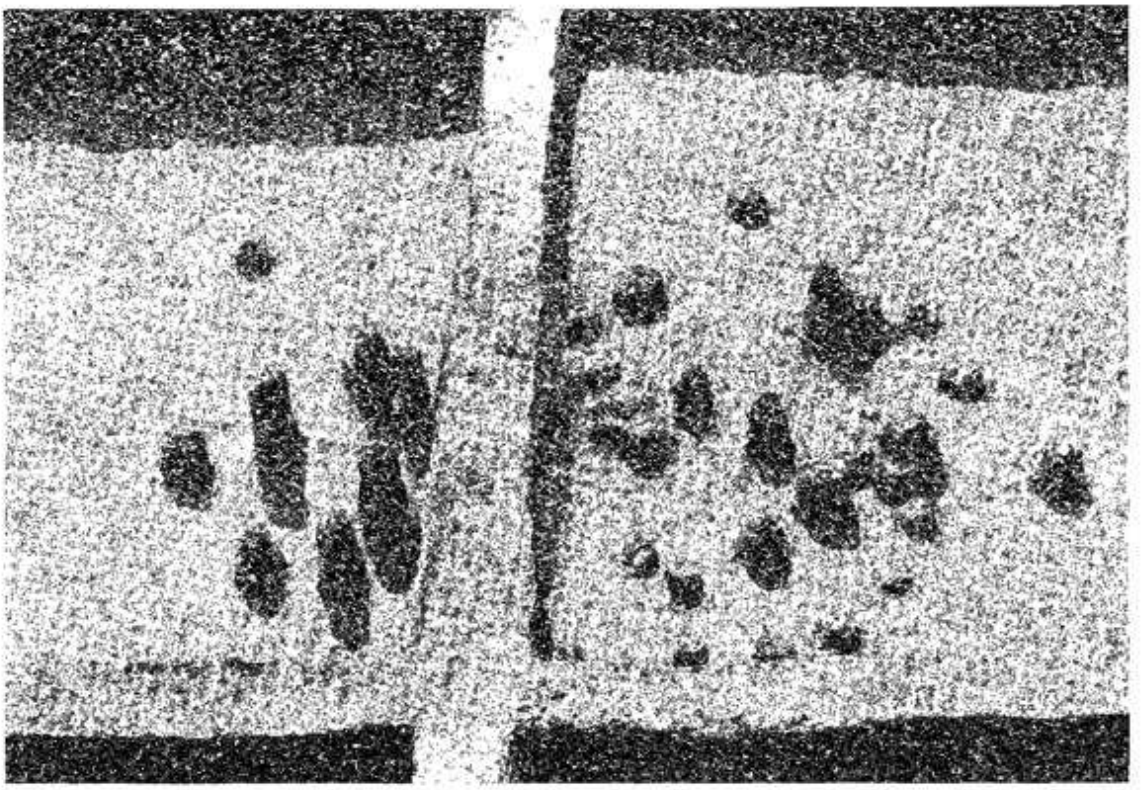


2．先土器時代石器・剥片集中出土区全景

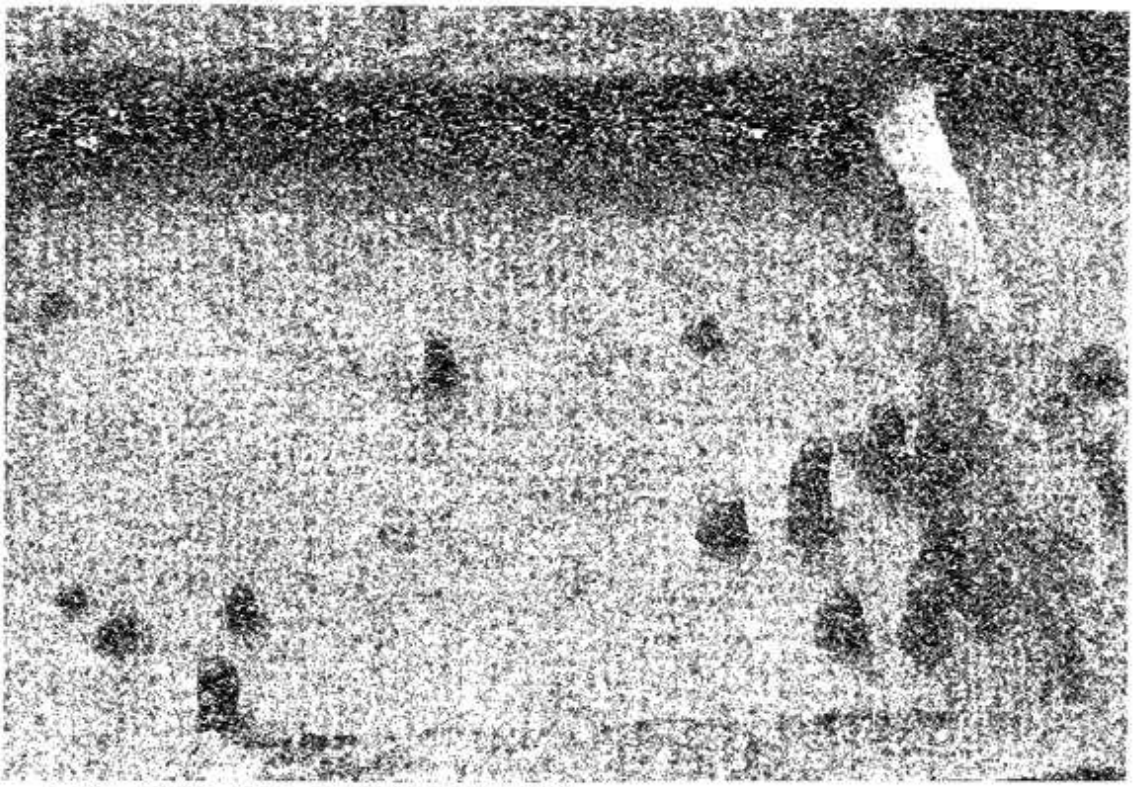
図版2



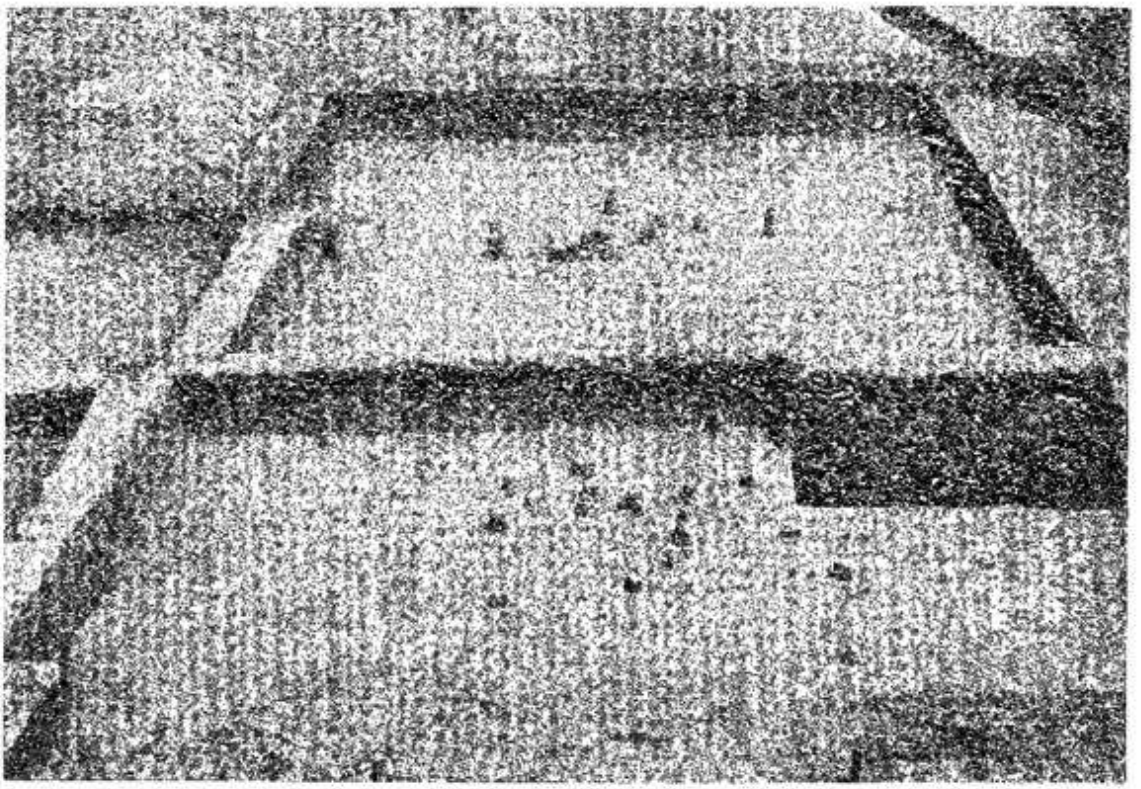
1．先土器時代、石器・剝片集中出土区（部分）



2．先土器時代、石器・剝片集中出土区（部分）

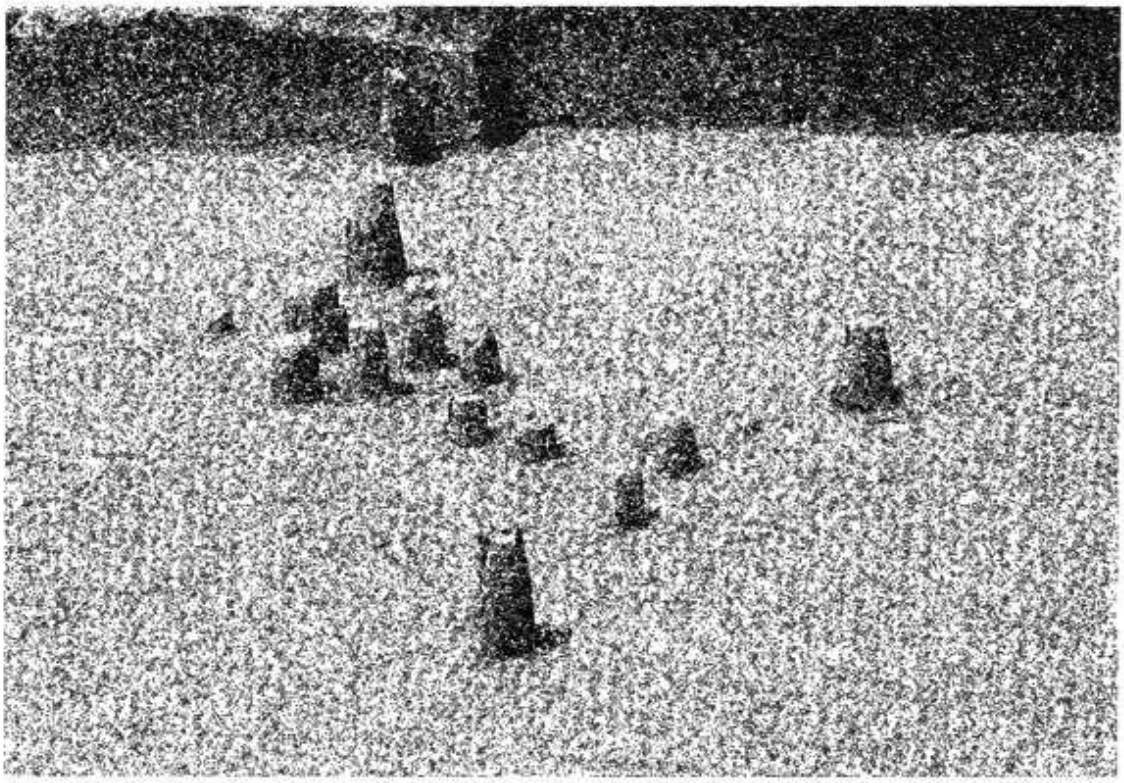


1．先土器時代、石器・剝片集中出土区（部分）

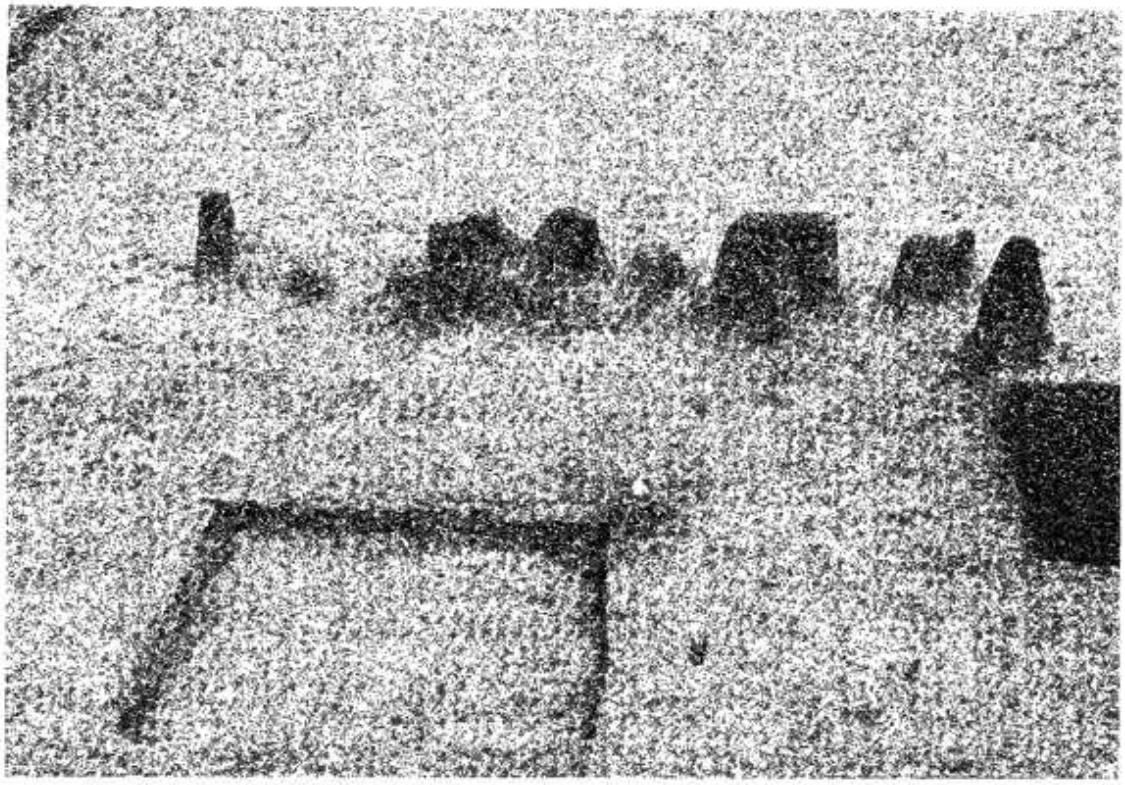


2．先土器時代、石器・剝片集中出土区全景（上位遺物除去後）

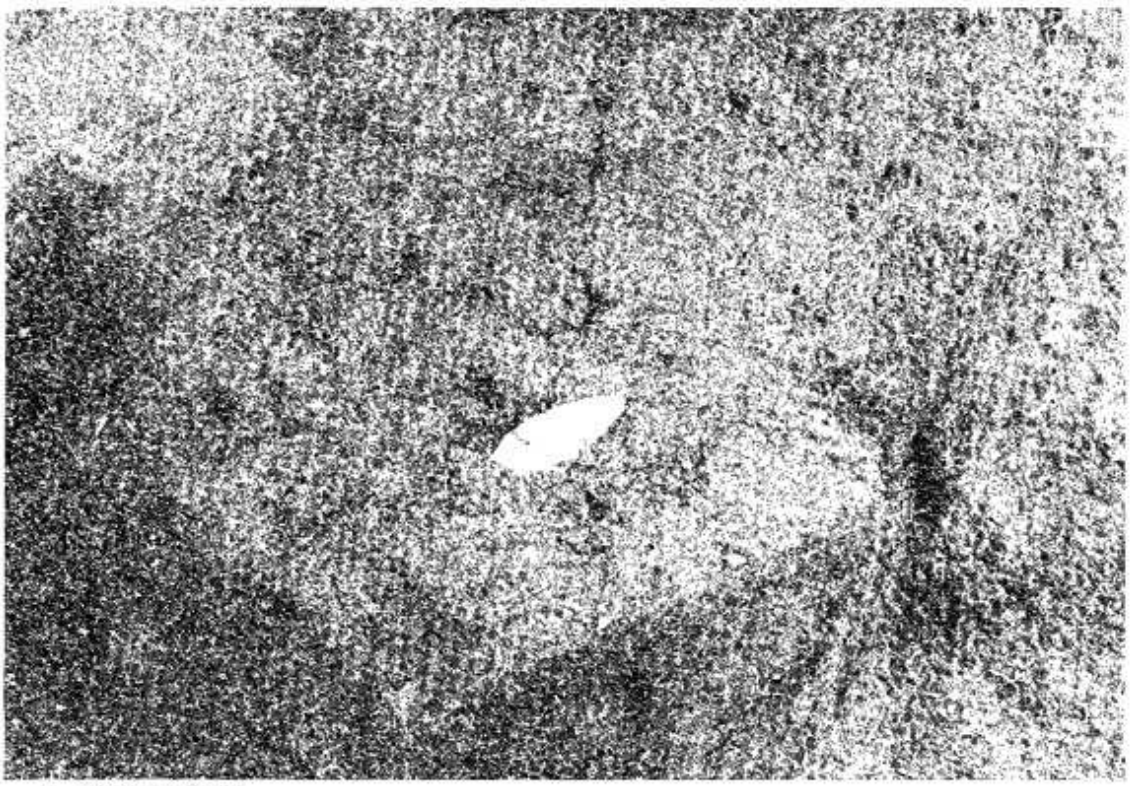
図版4



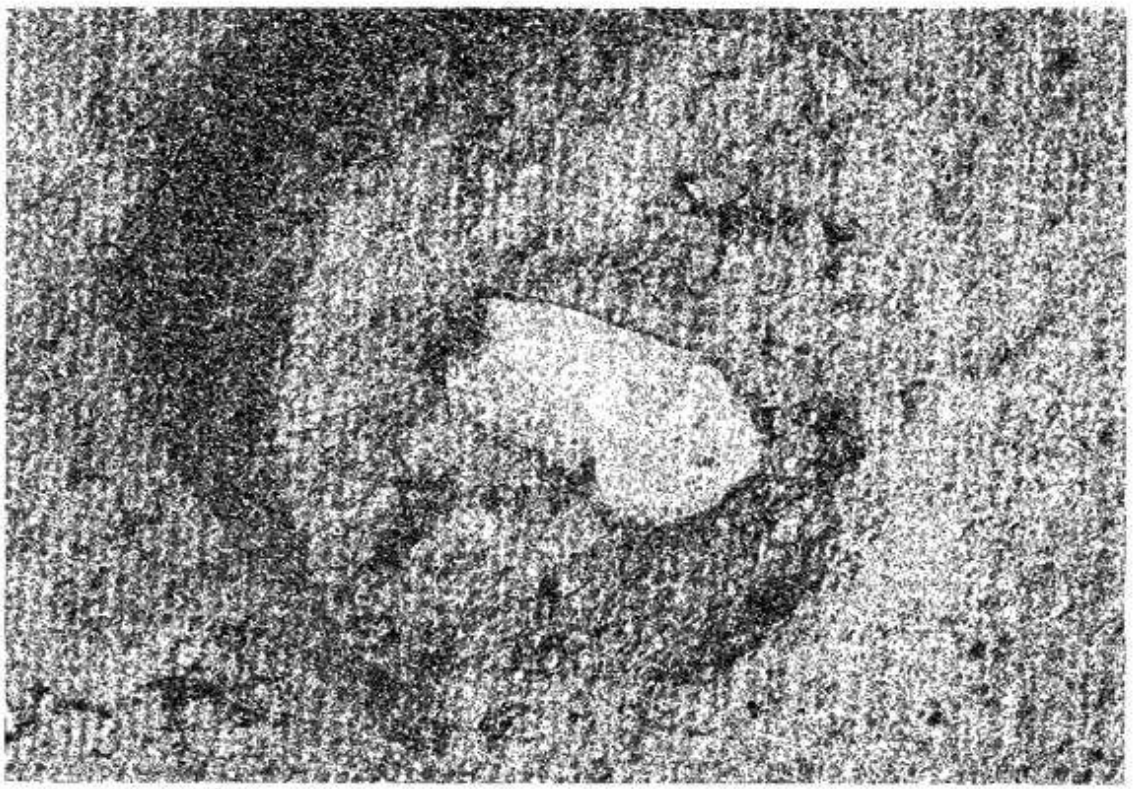
1、先土器時代石器・剝片集中出土区（部分）



2、先土器時代石器・剝片集中出土区

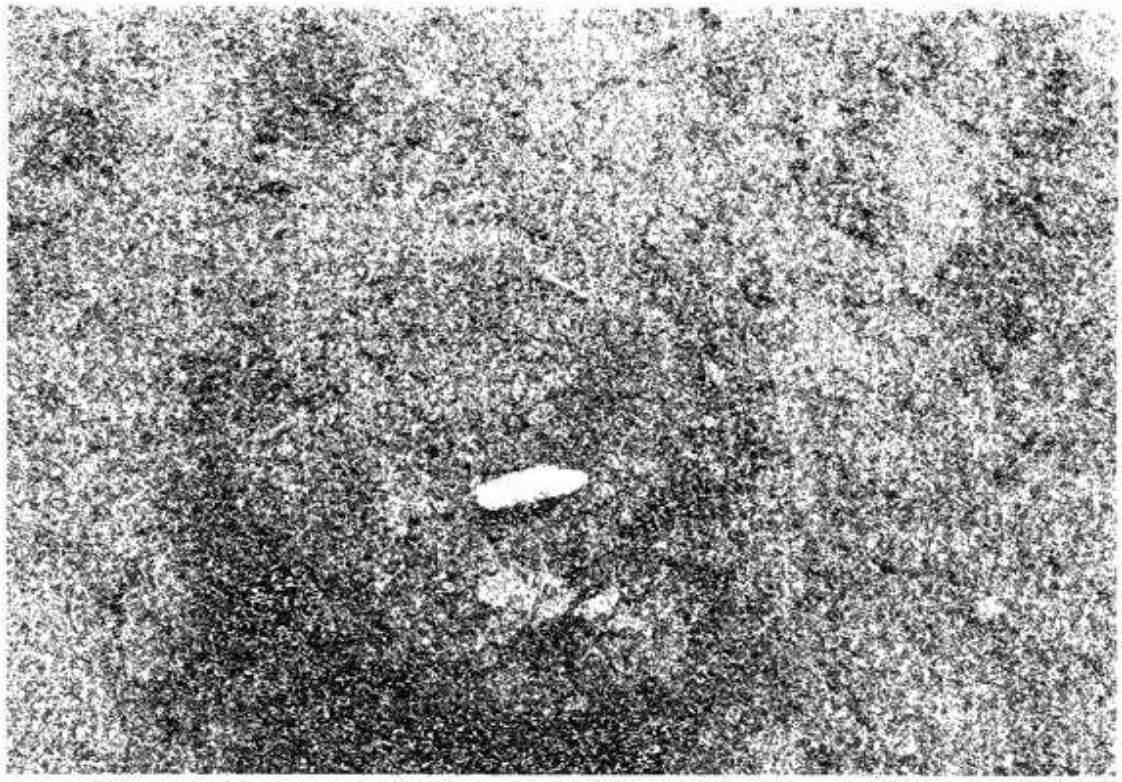


1．石器出土状況

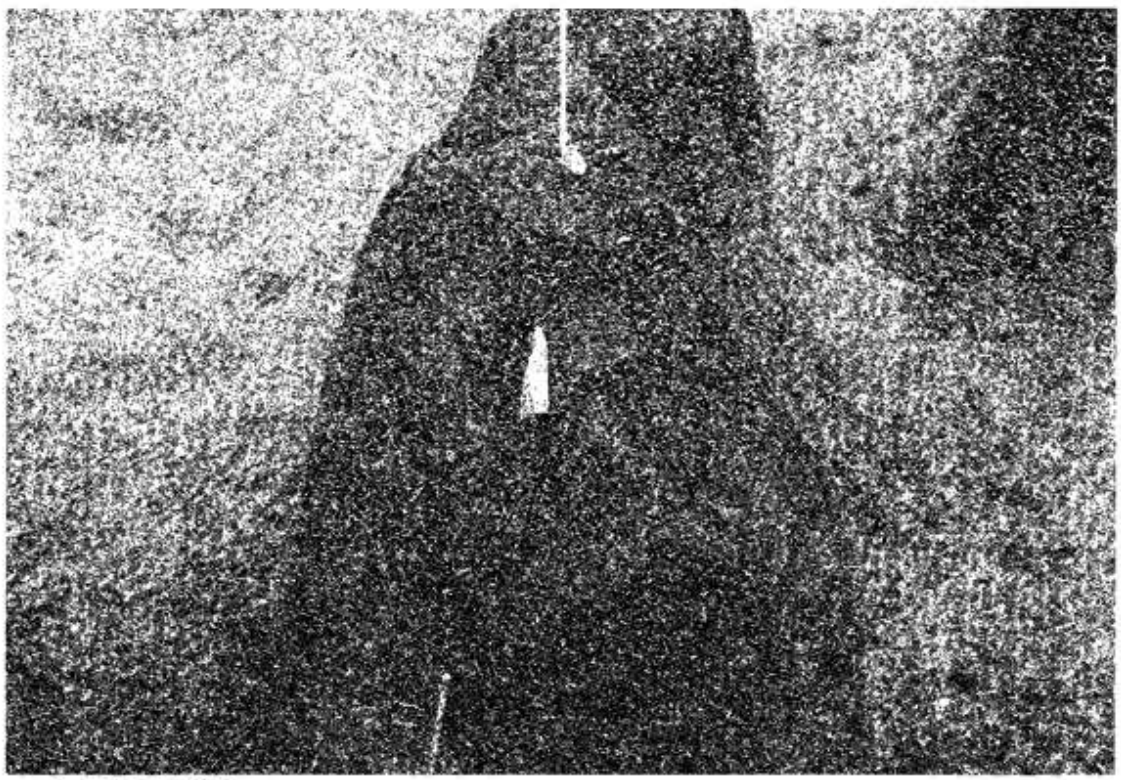


2．石器出土状況

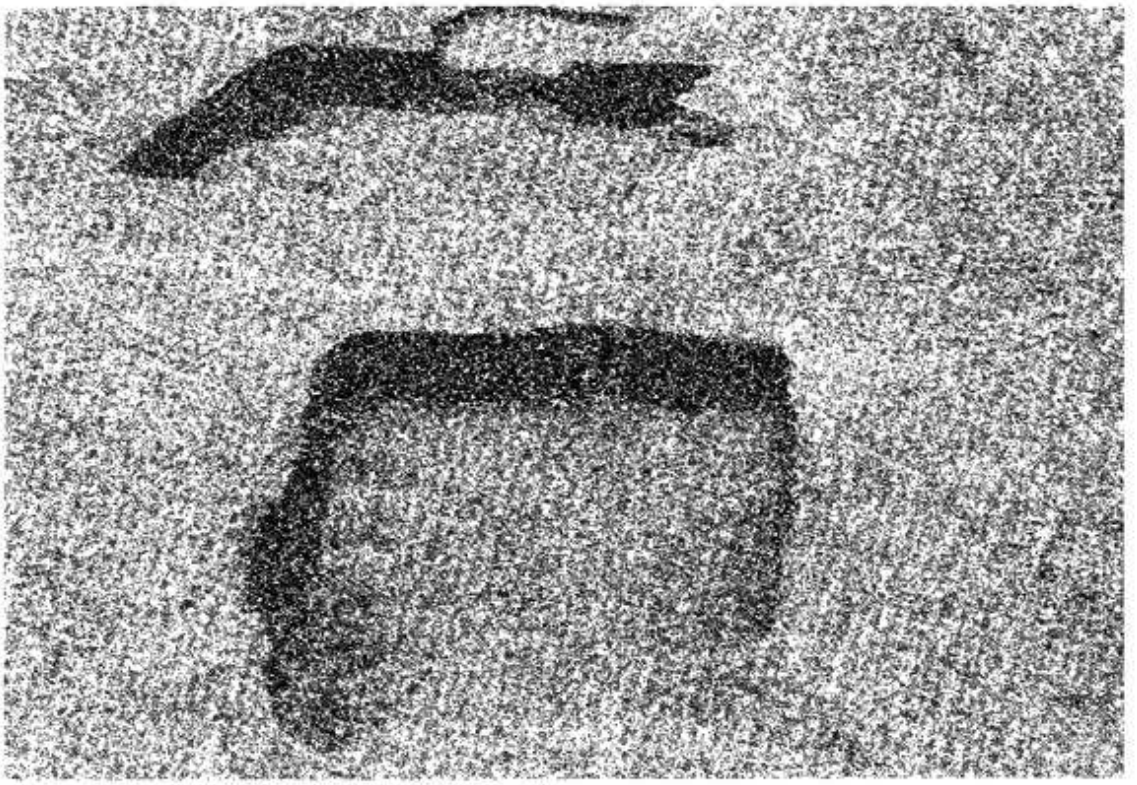
図版6



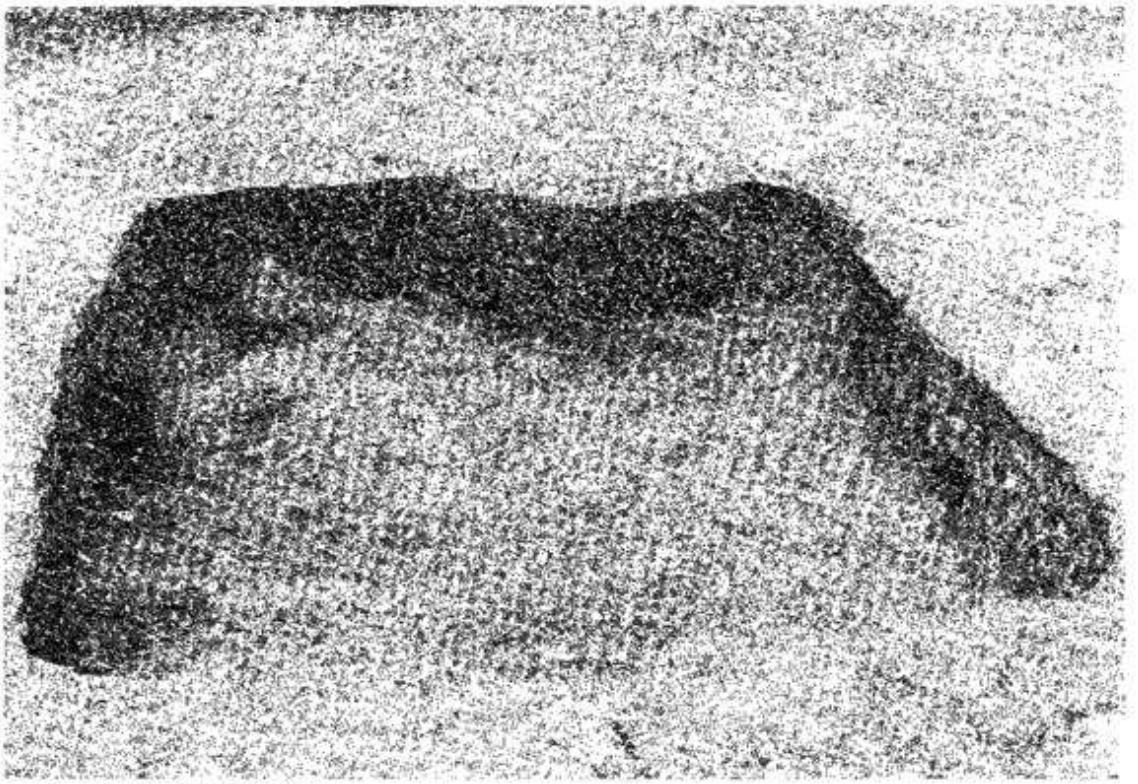
1．石器出土状況



2．石器出土状況

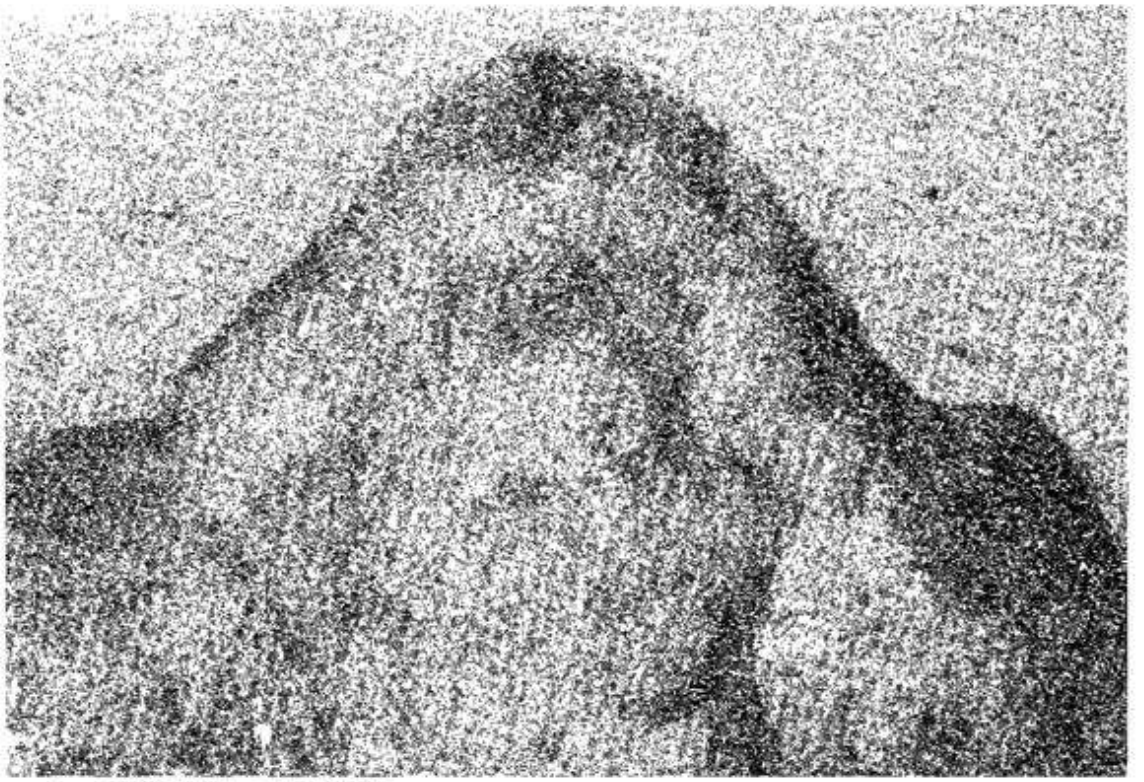


1．1号・2号住居跡関連状況（手前が1号）

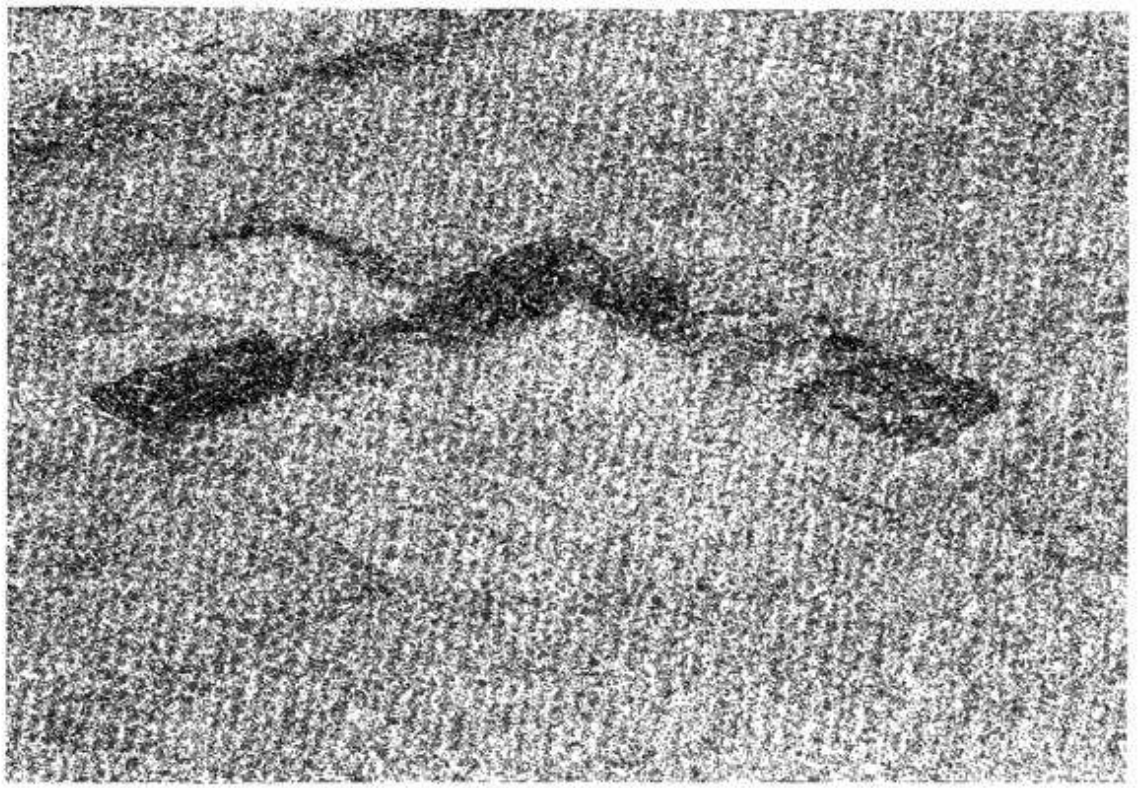


2．1号住居跡完掘状況

図版8

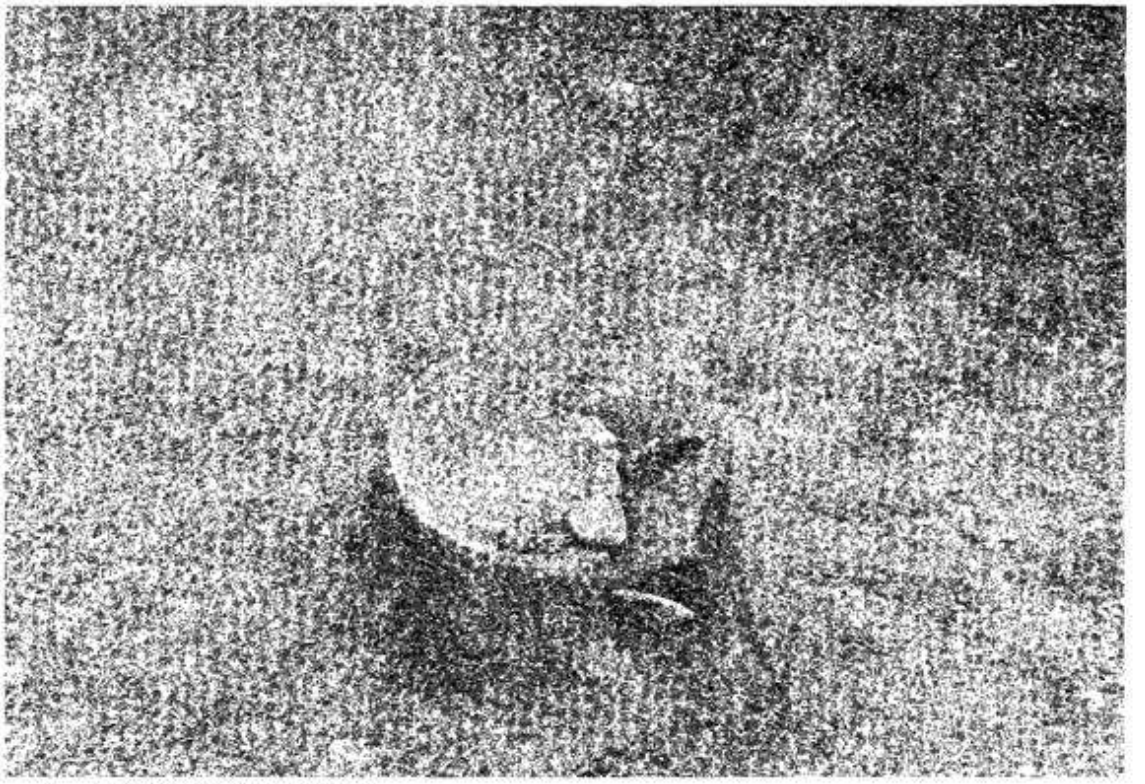


1．1号住居跡カマド完掘状況



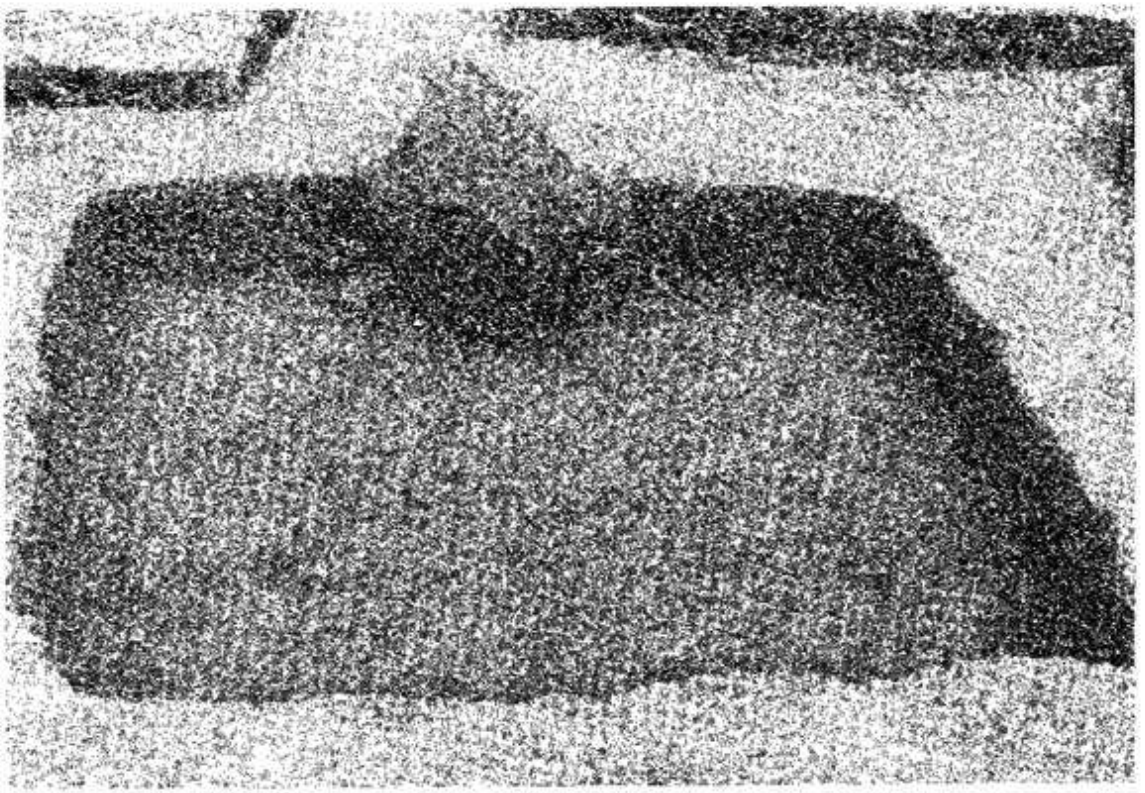
2．2号住居跡・1号遺構完掘状況（左が1号遺構）

1．2号住居跡カマド完掘状況

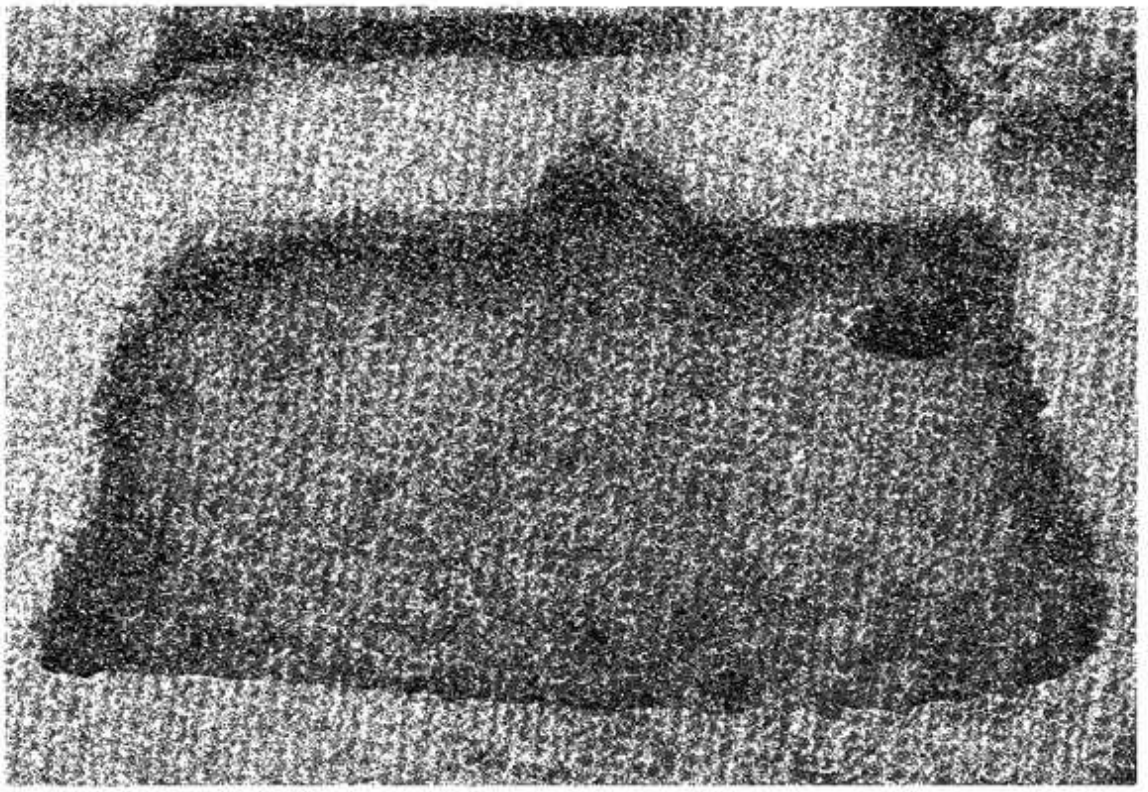


2．2号住居跡遺物出土状況

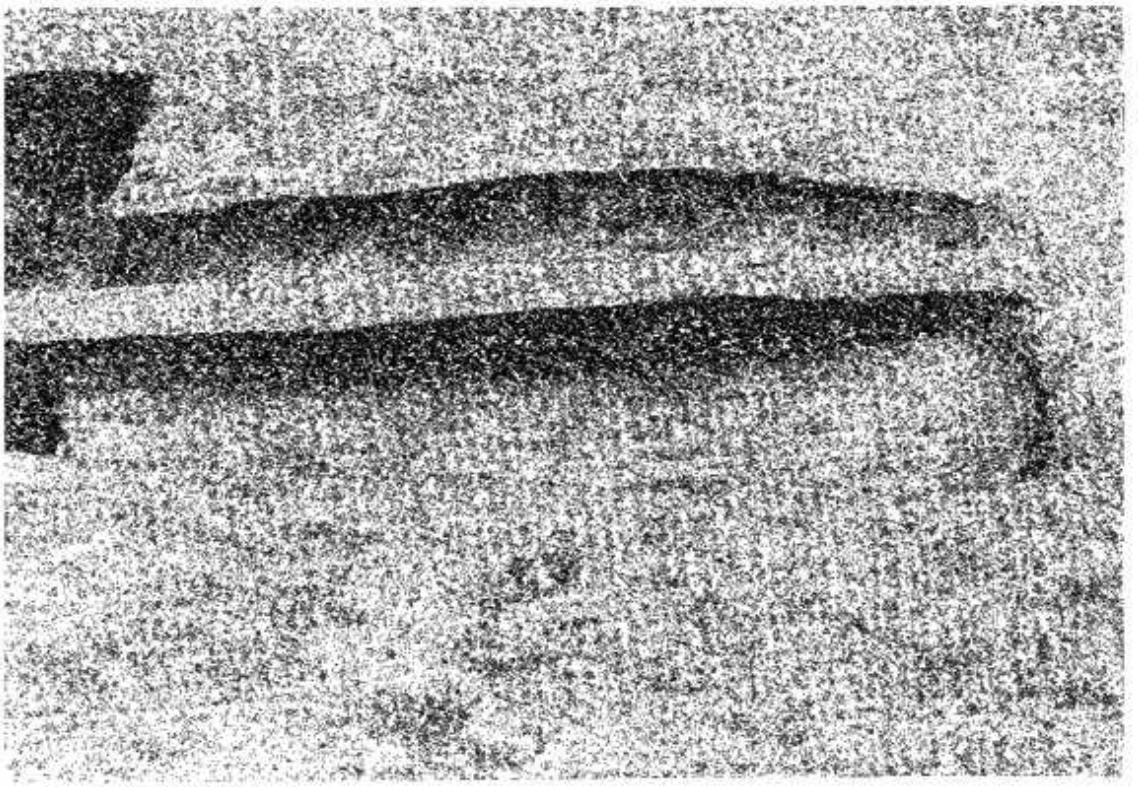
図版10



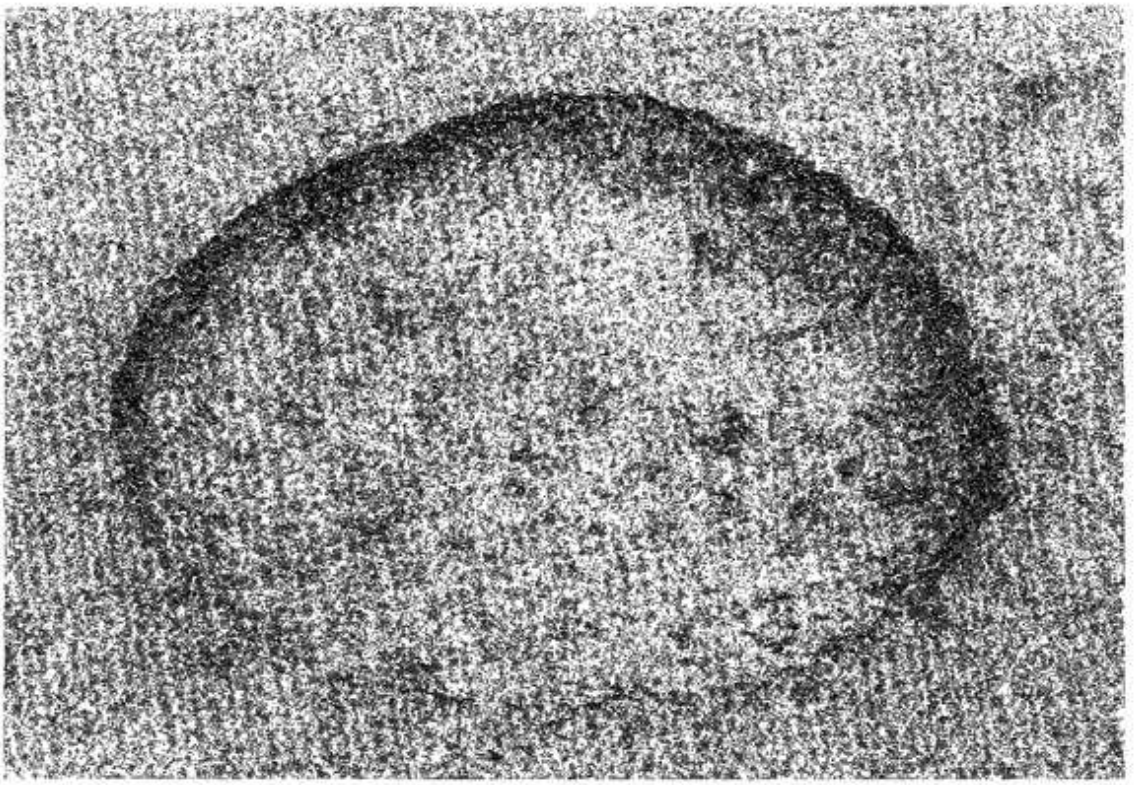
1．3号住居跡完掘状況



2．4号住居跡完掘状況

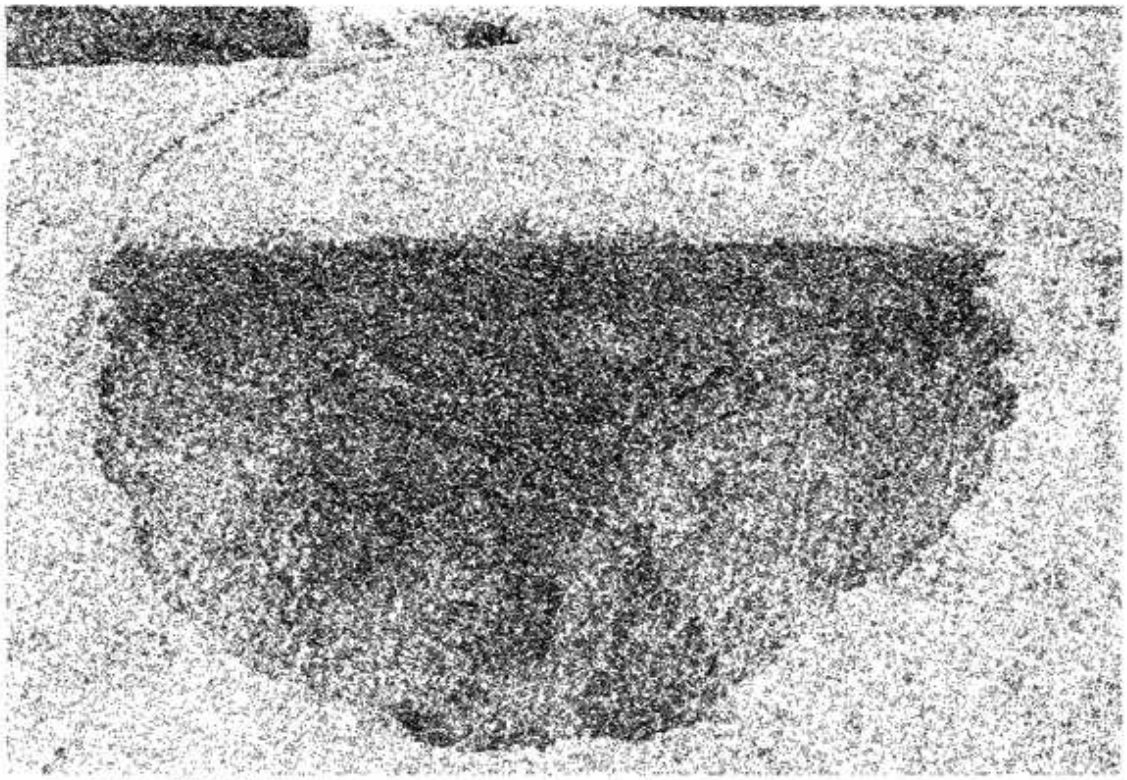


1．1号遺構埋土状況

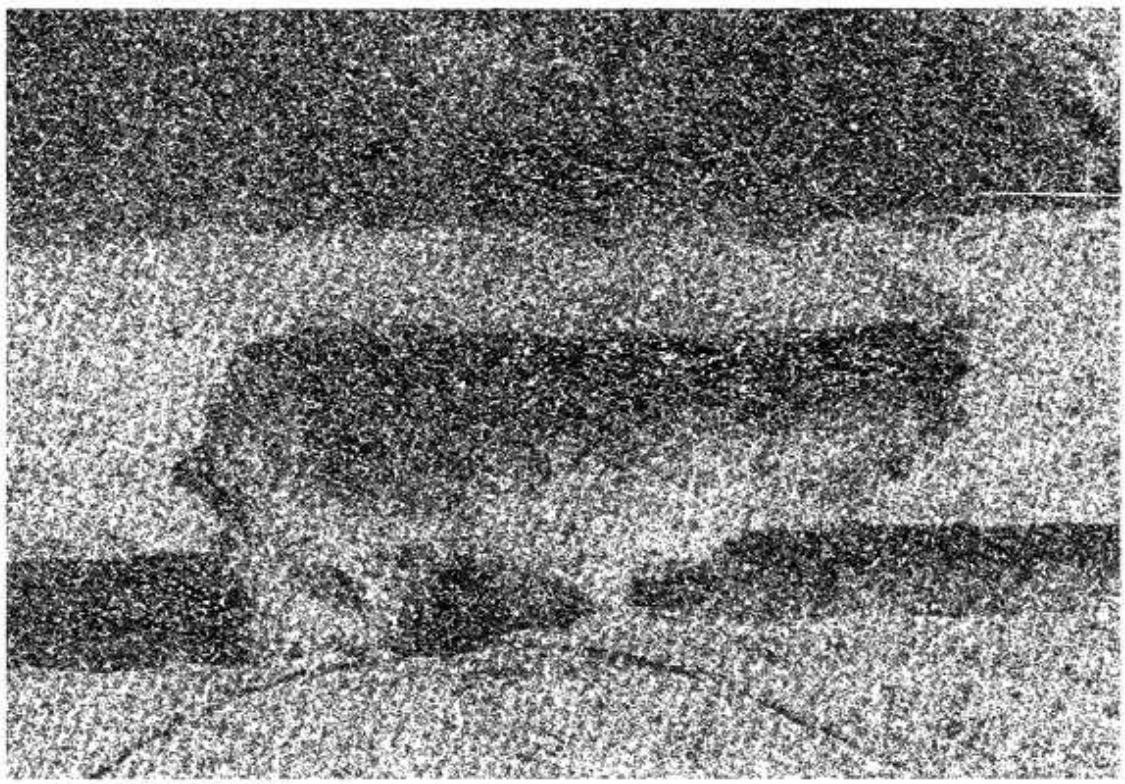


2．1号土壙完掘状況

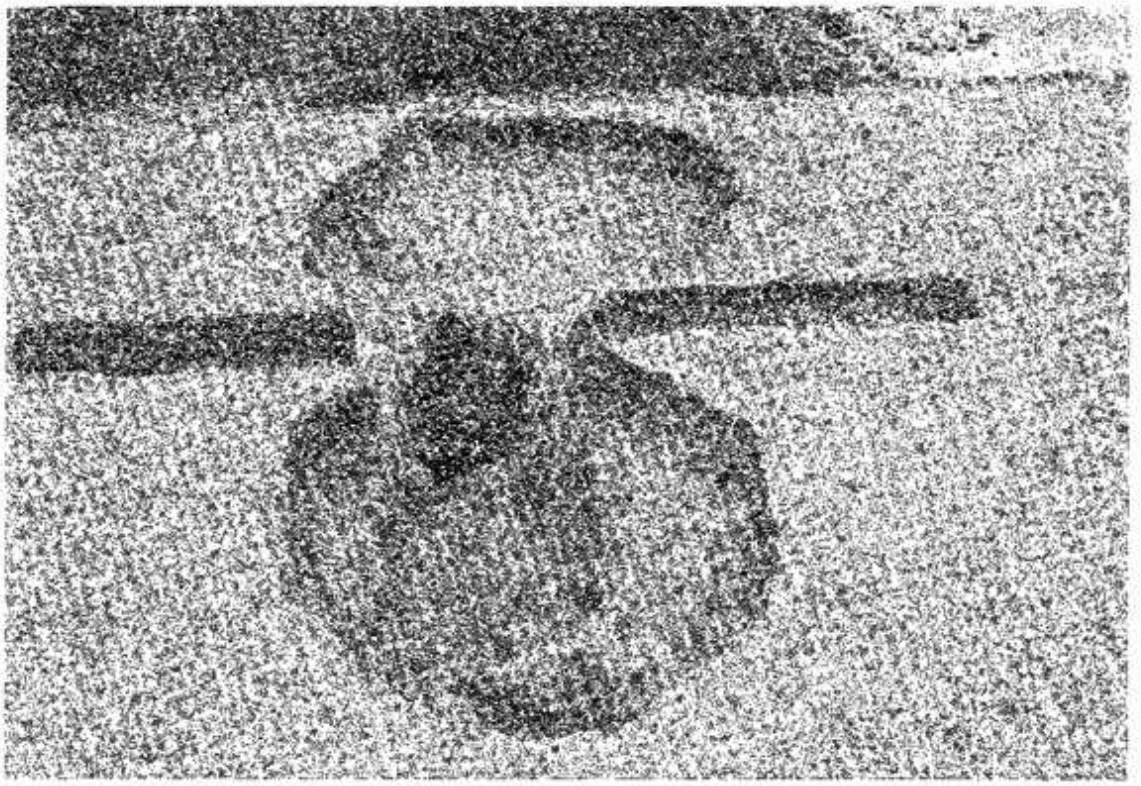
図版12



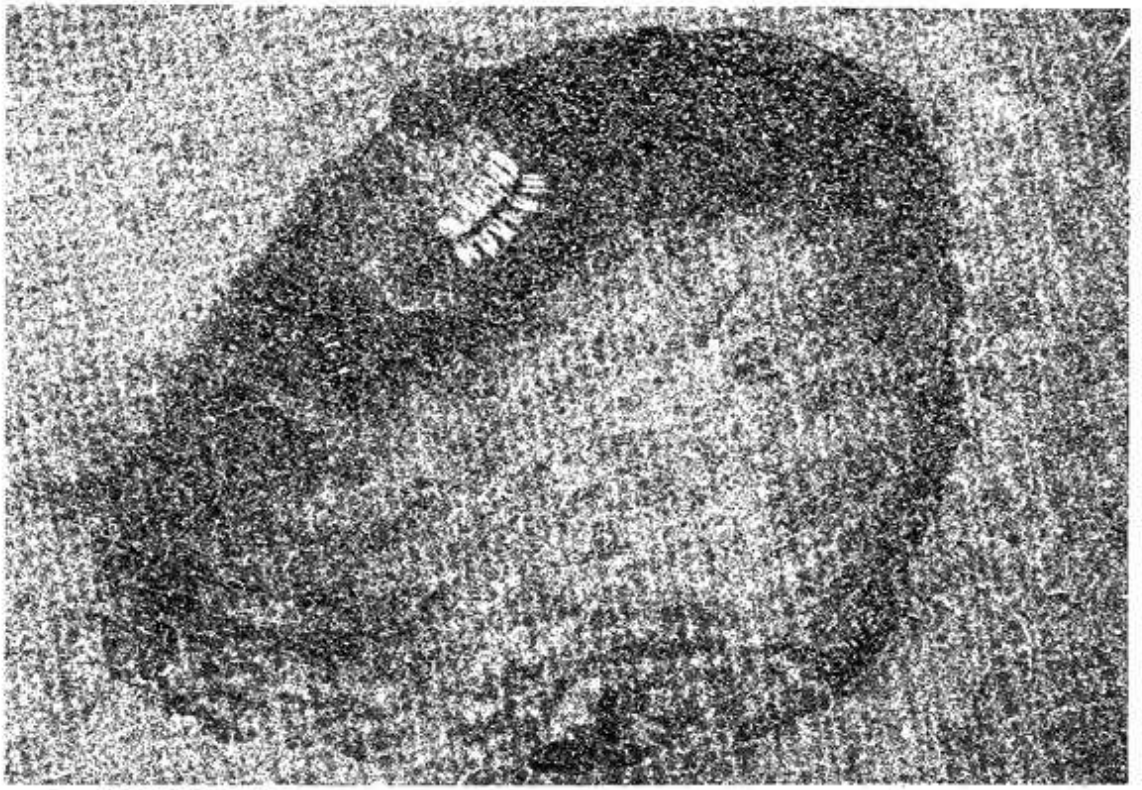
1．2号土壙埋土状況



2．3号土壙埋土状況

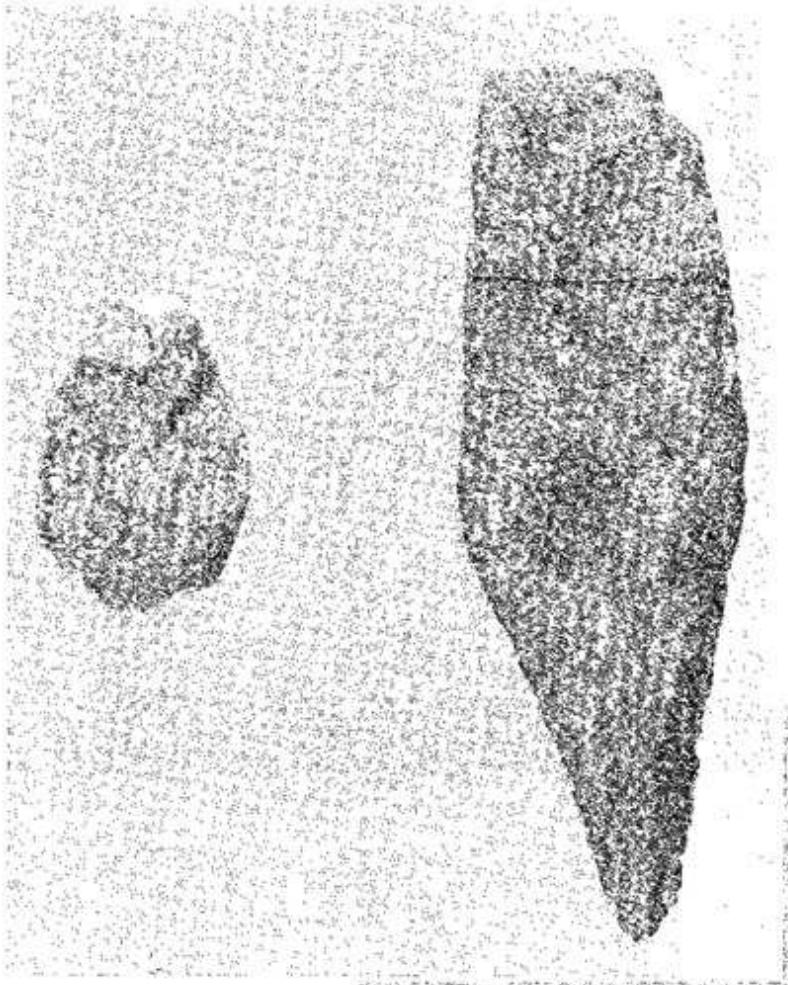


1．2号・3号土壙完掘状況（手前が2号）

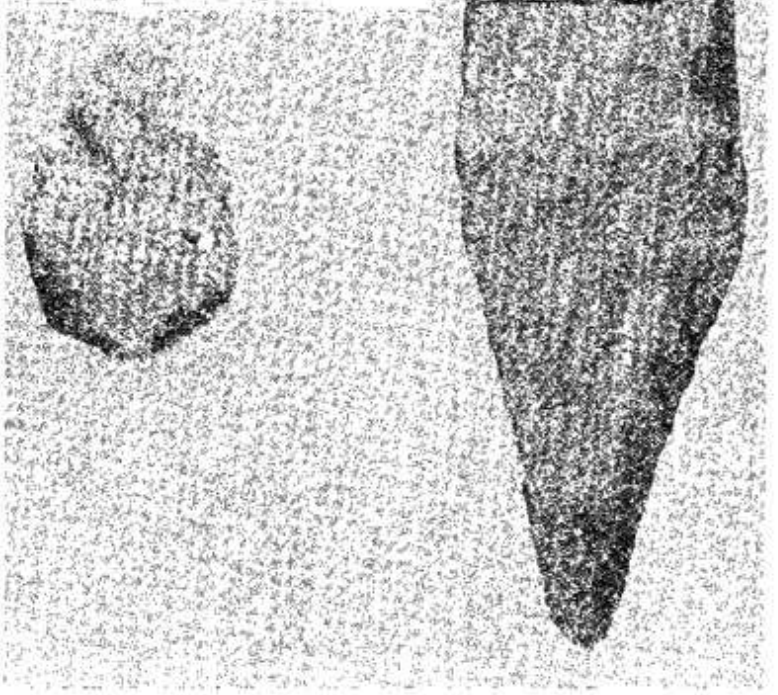


2．4号土壙完掘状況

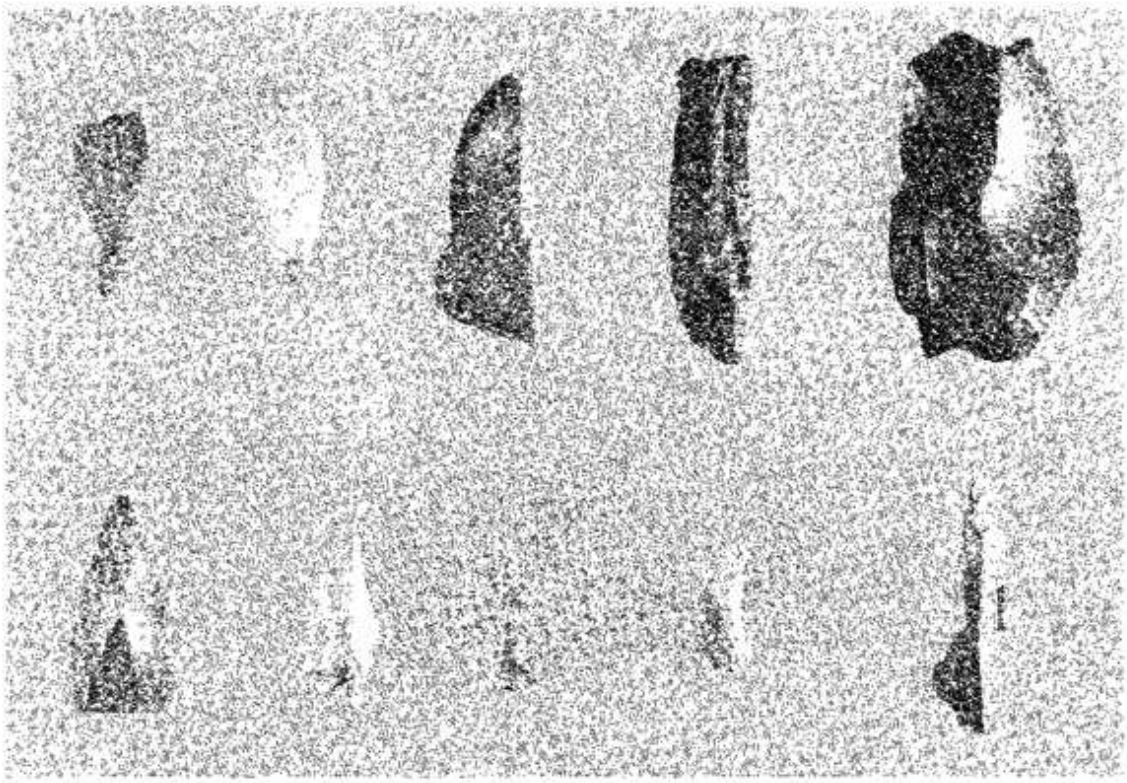
図版14



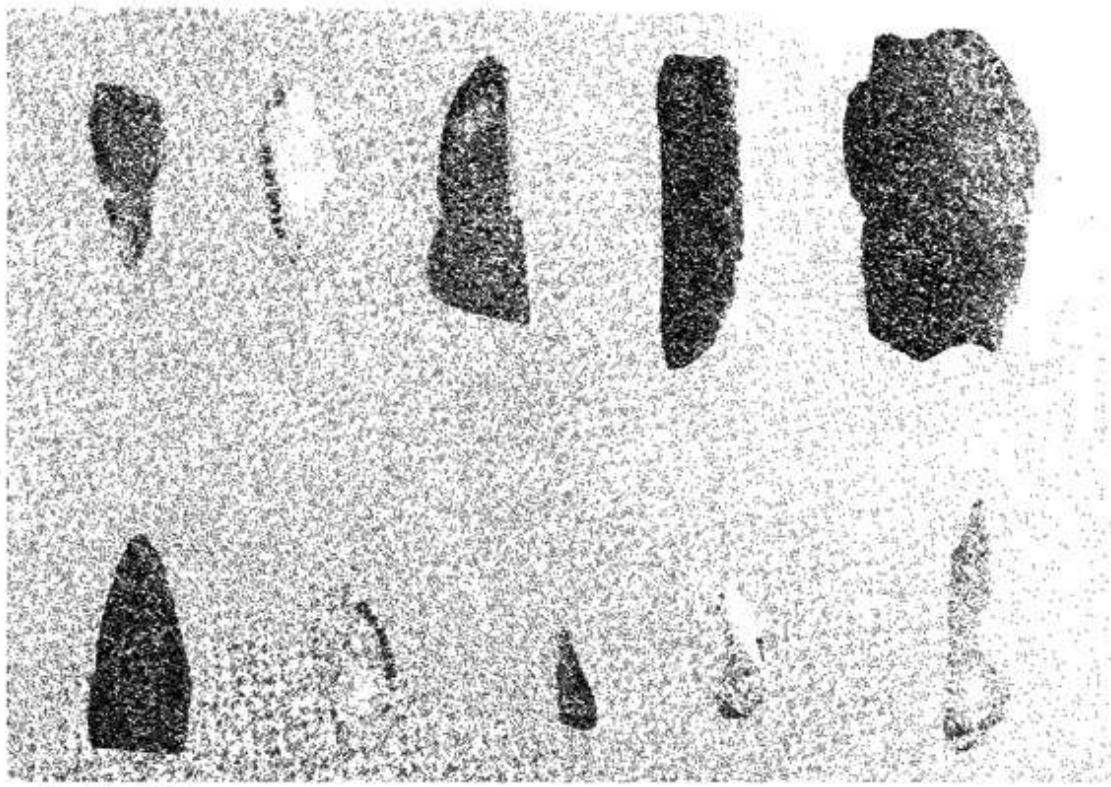
1 表土中出土石器



2 同 裏面

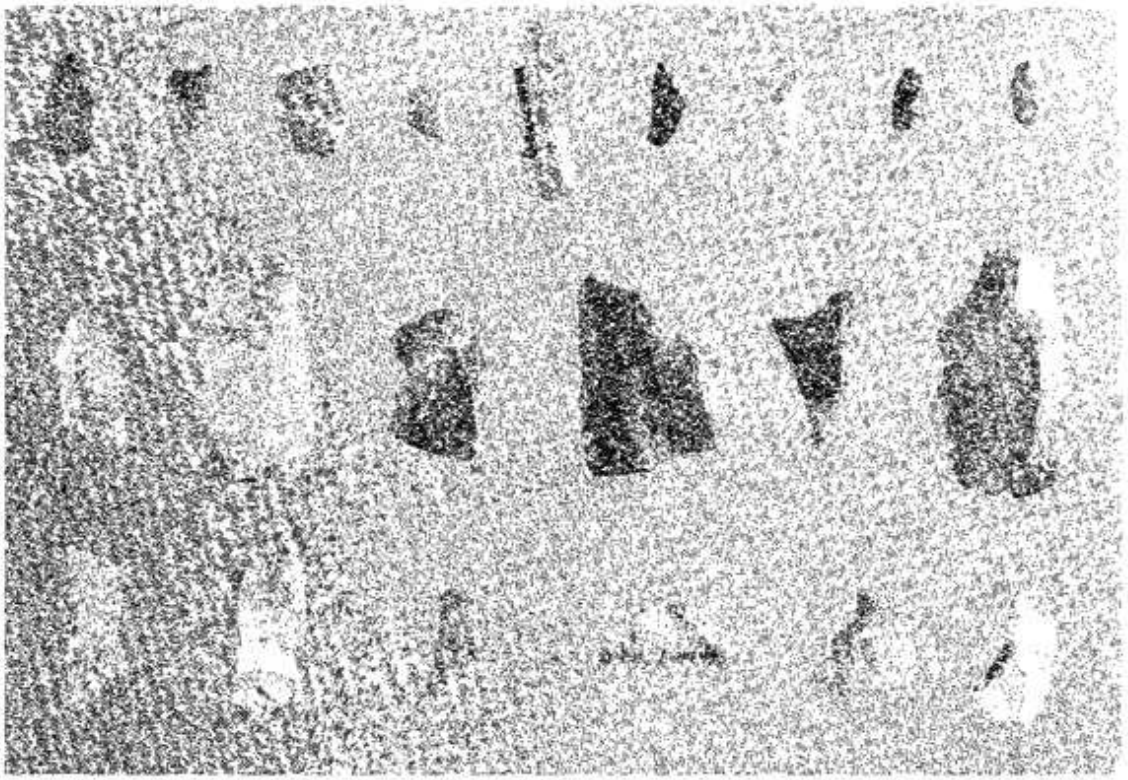


1. 第Ⅰ・第Ⅱブロック出土石器

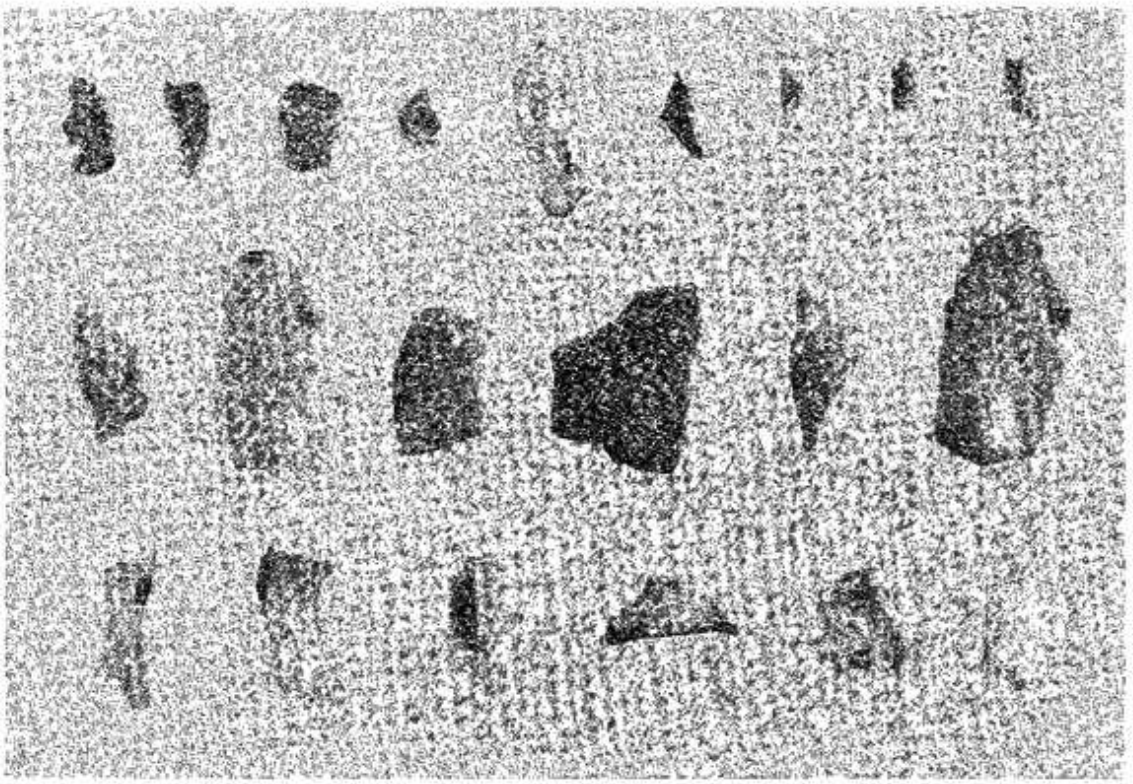


2. 同　裏面

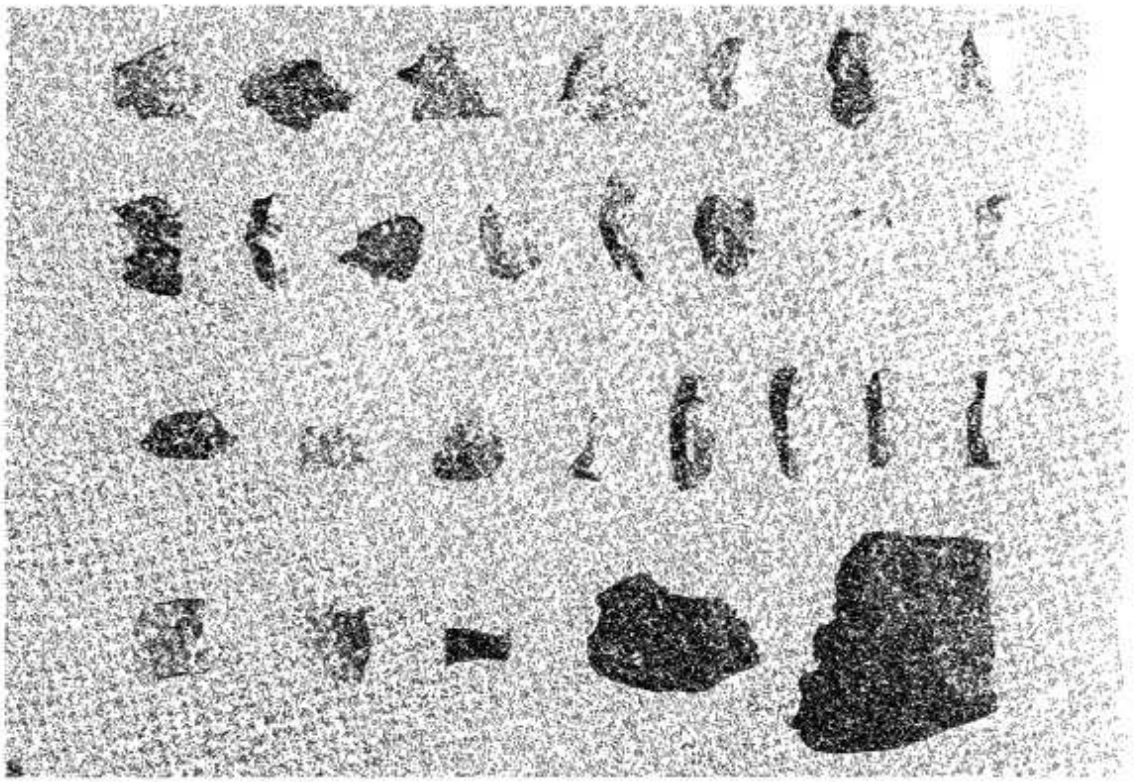
図版16



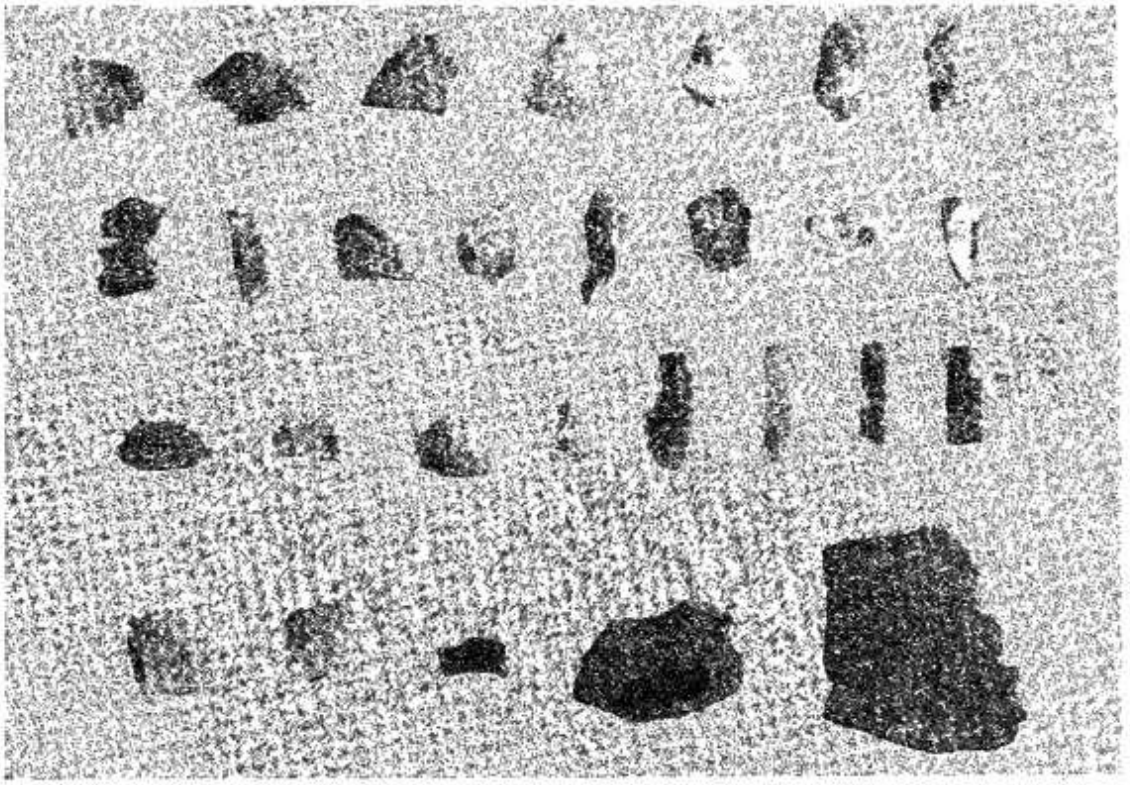
1．第Ⅰ・第Ⅱブロック内出土石器



2．同　裏面

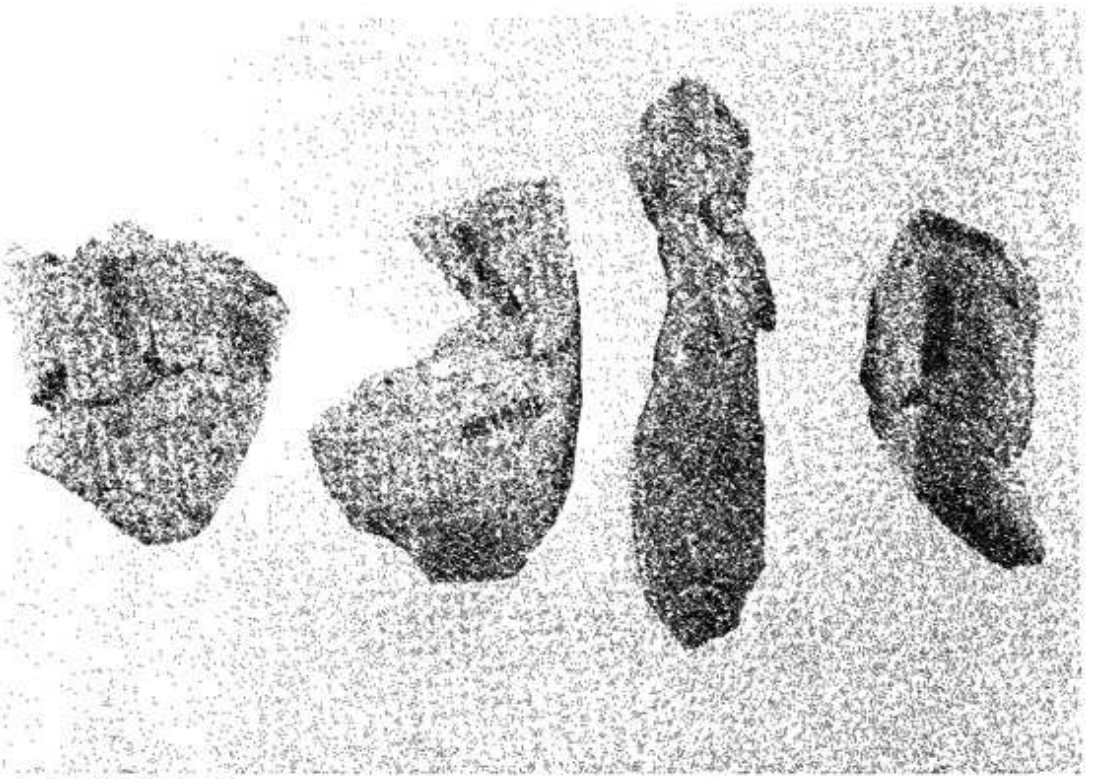


1．第Ⅱブロック内出土石器

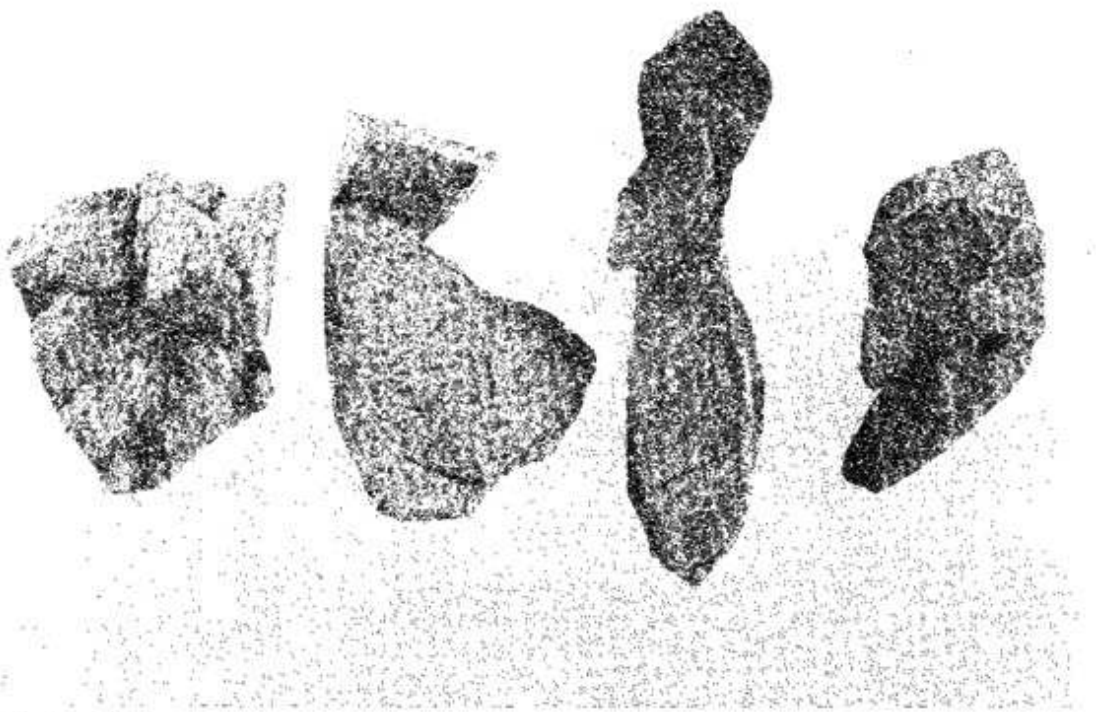


2．同　裏面

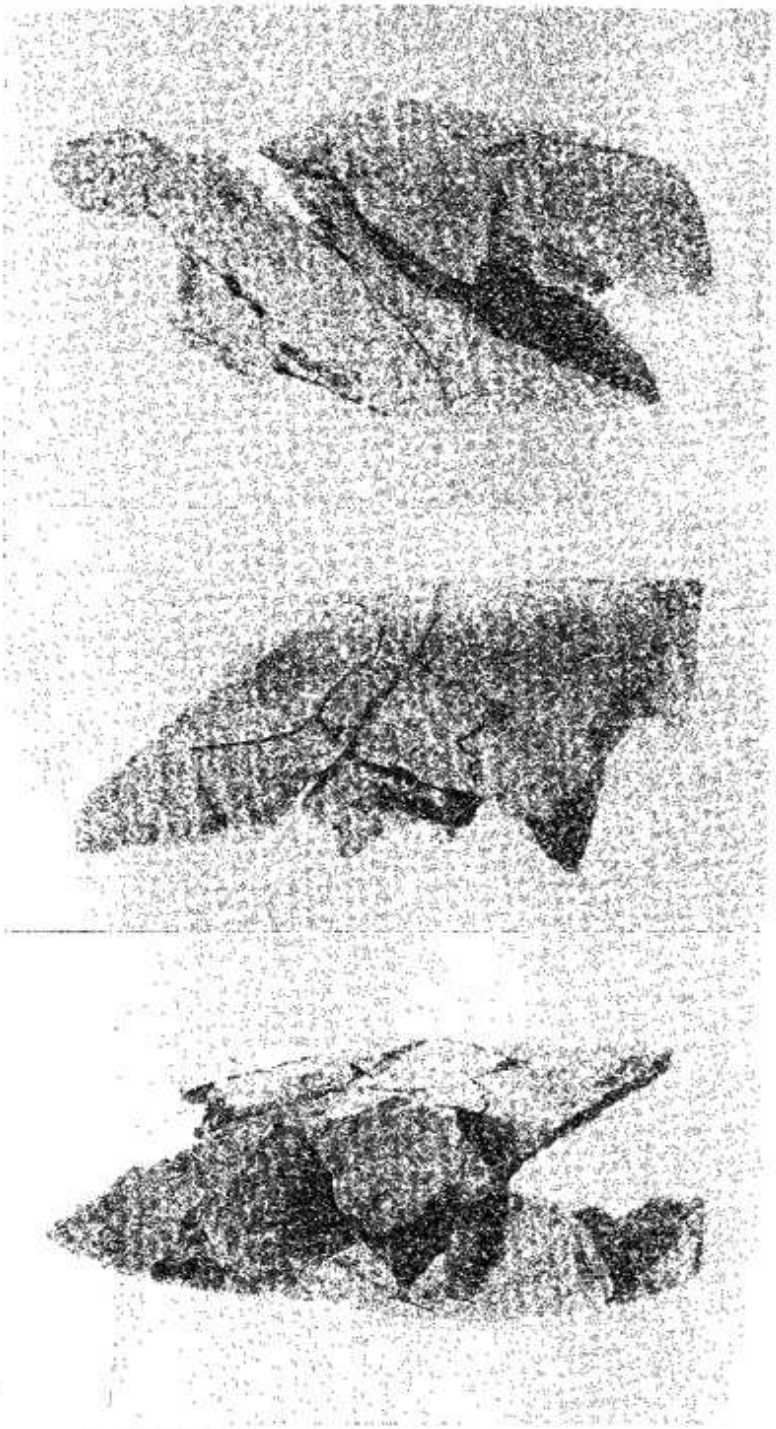
図版18



1．破砕礫接合関係



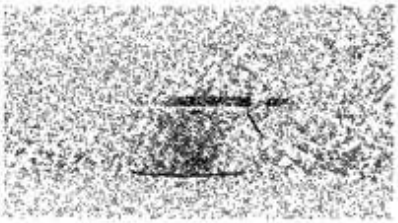
2．同　裏面



1．破砕礫接合関係

図版20

1．2号住居跡出土遺物

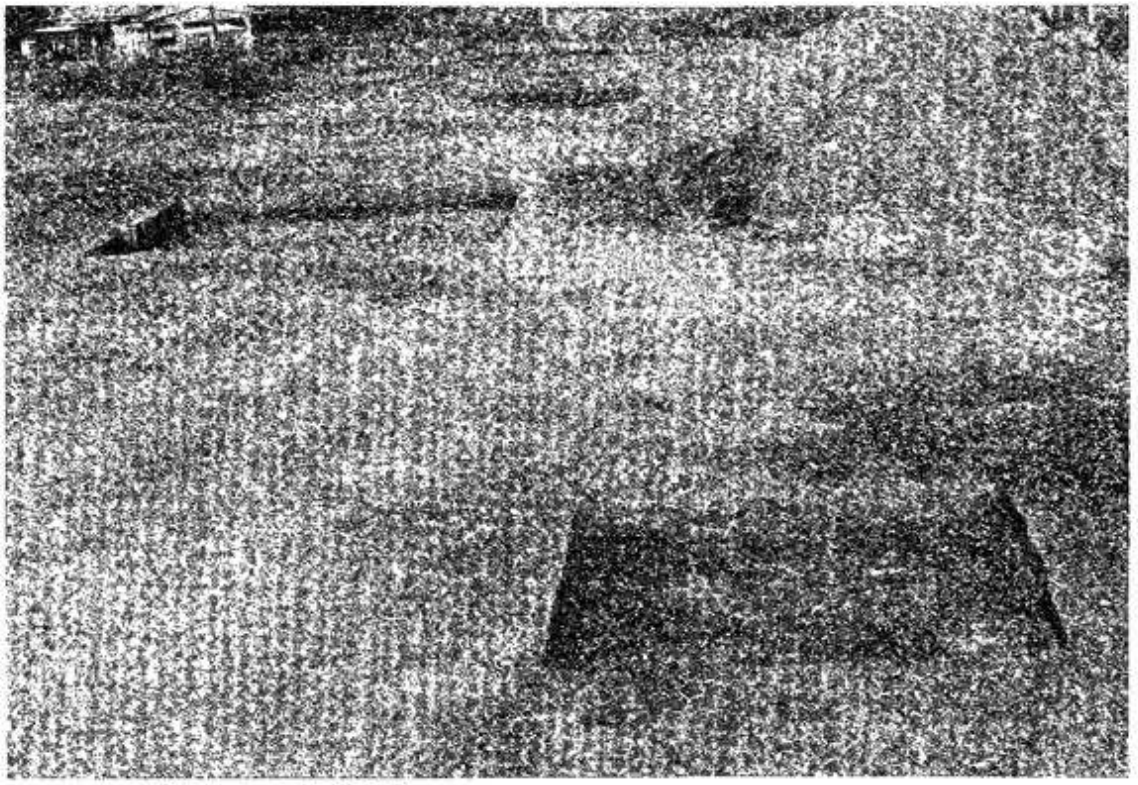


2．2号住居跡出土遺物

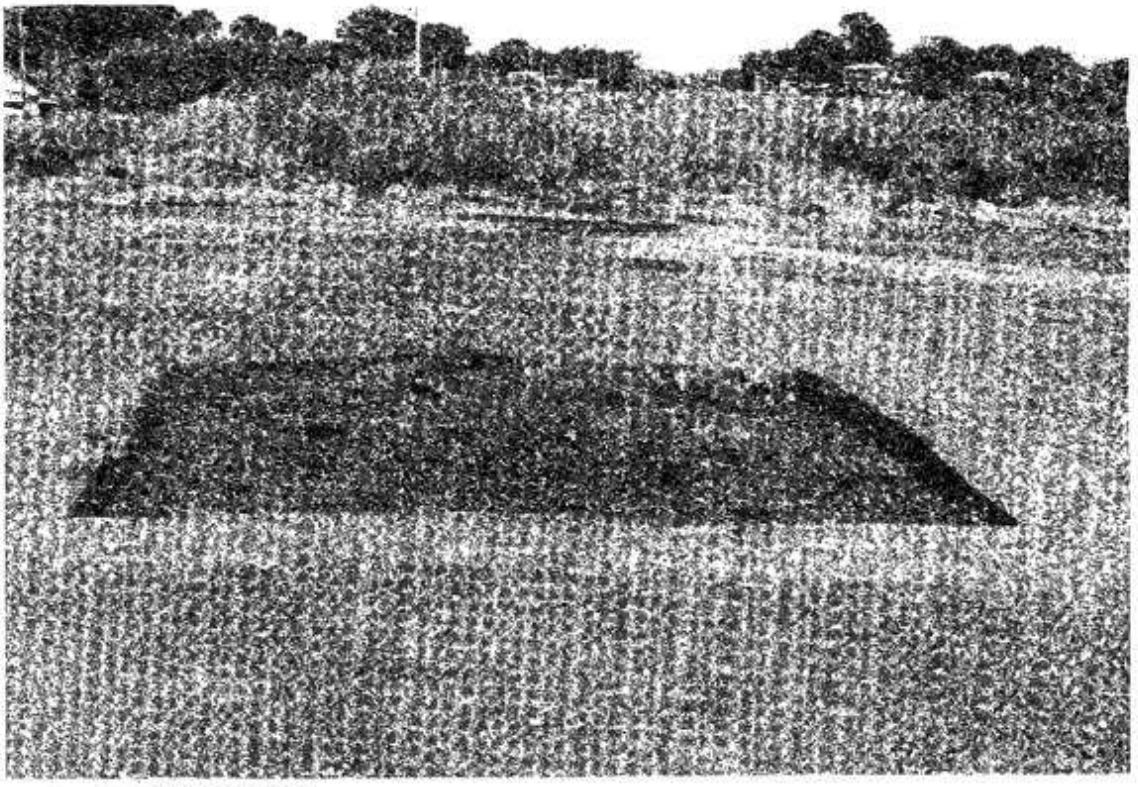
3．トレンチ内出土遺物

4．トレンチ内出土遺物

向野原遺跡

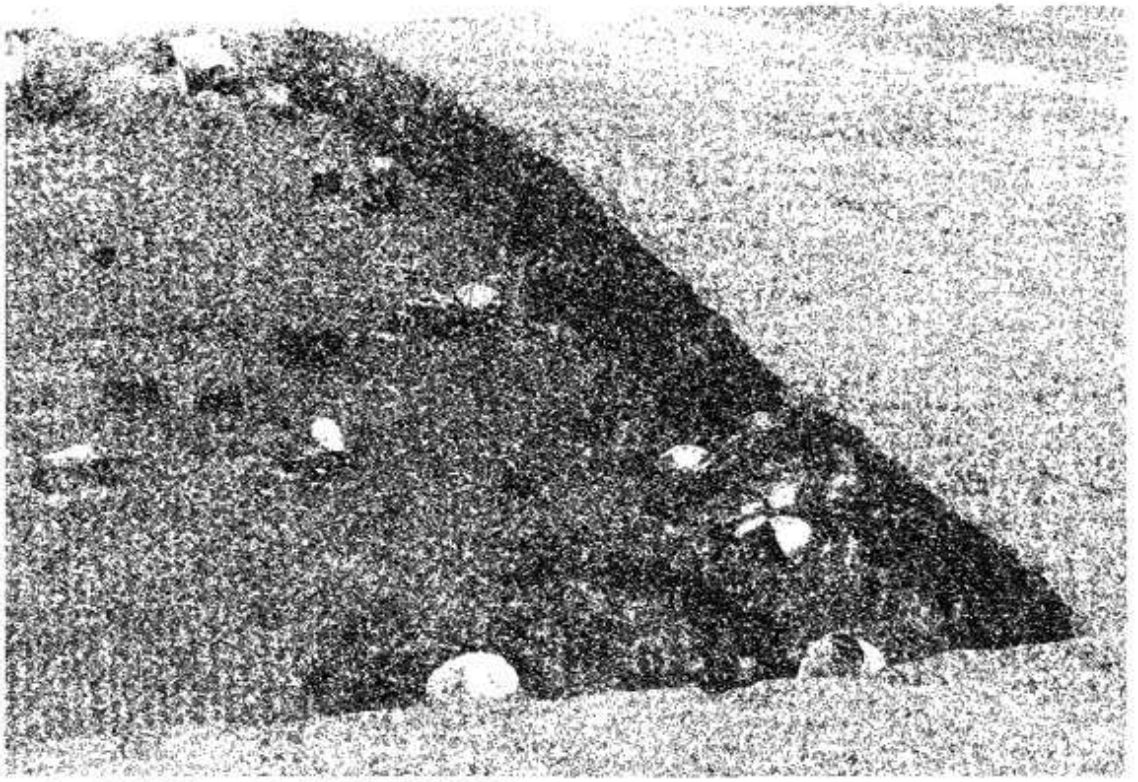


1．SI-01（後方）とSI-02（手前）

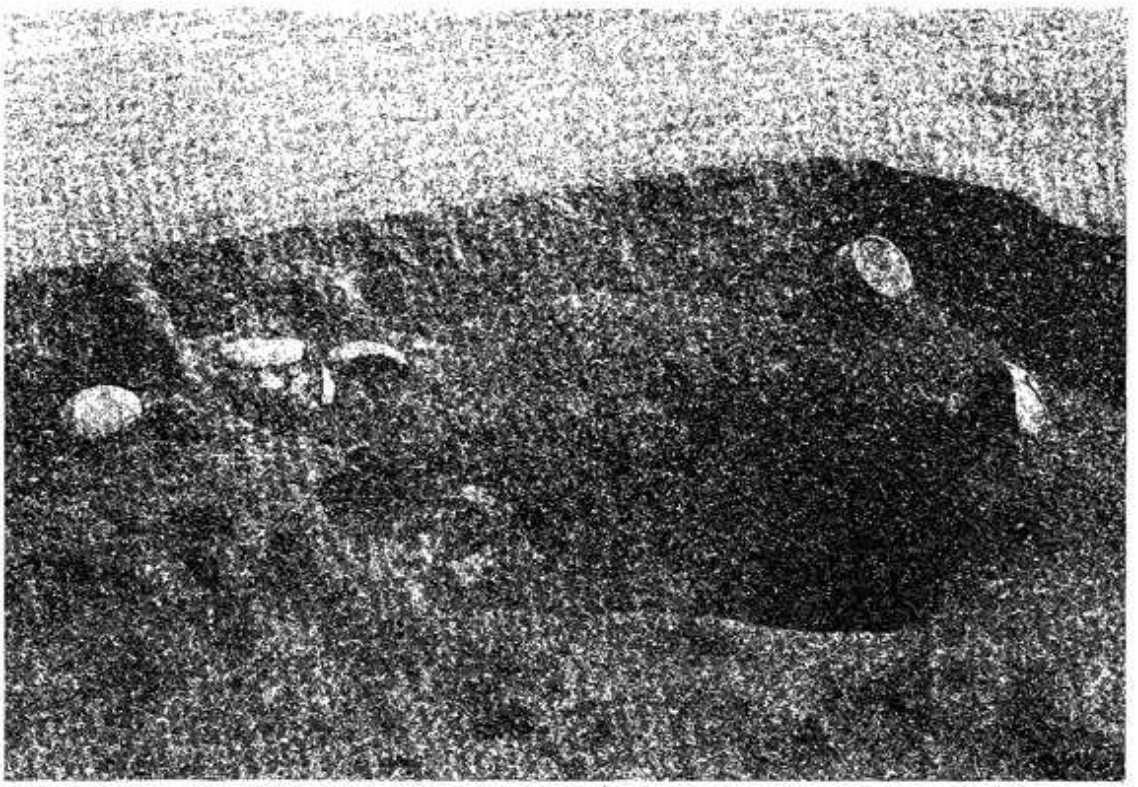


2．SI-01遺物出土状況

図版2



1．SI-01南東コーナー附近出土遺物状況

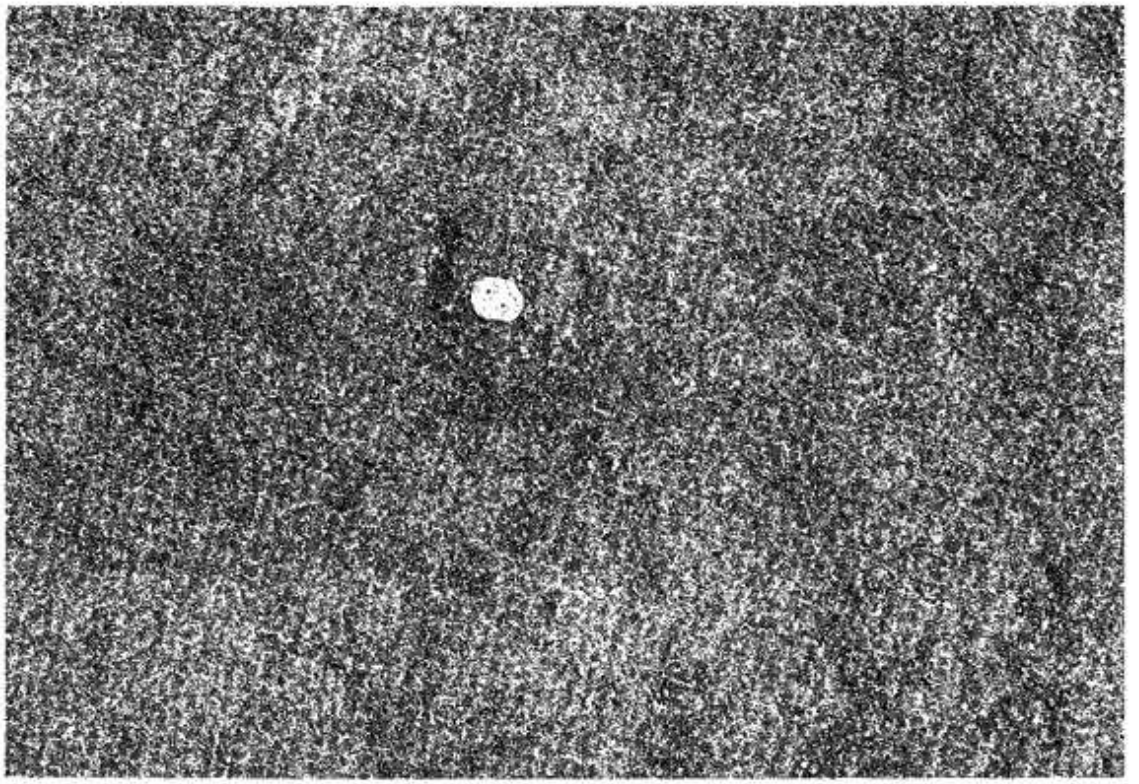


2．SI-01の貯蔵穴と出土遺物状況

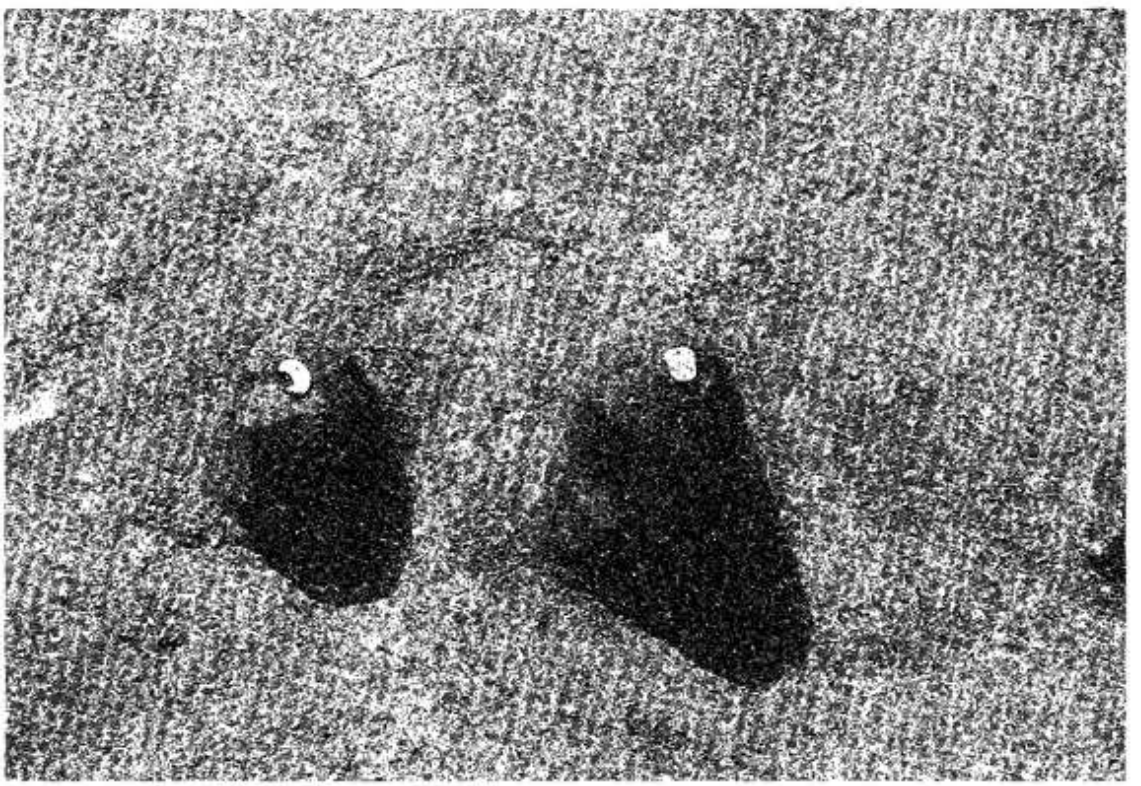
1. SI-01の貯蔵穴と出土遺物状況

2. SI-01出土遺物状況

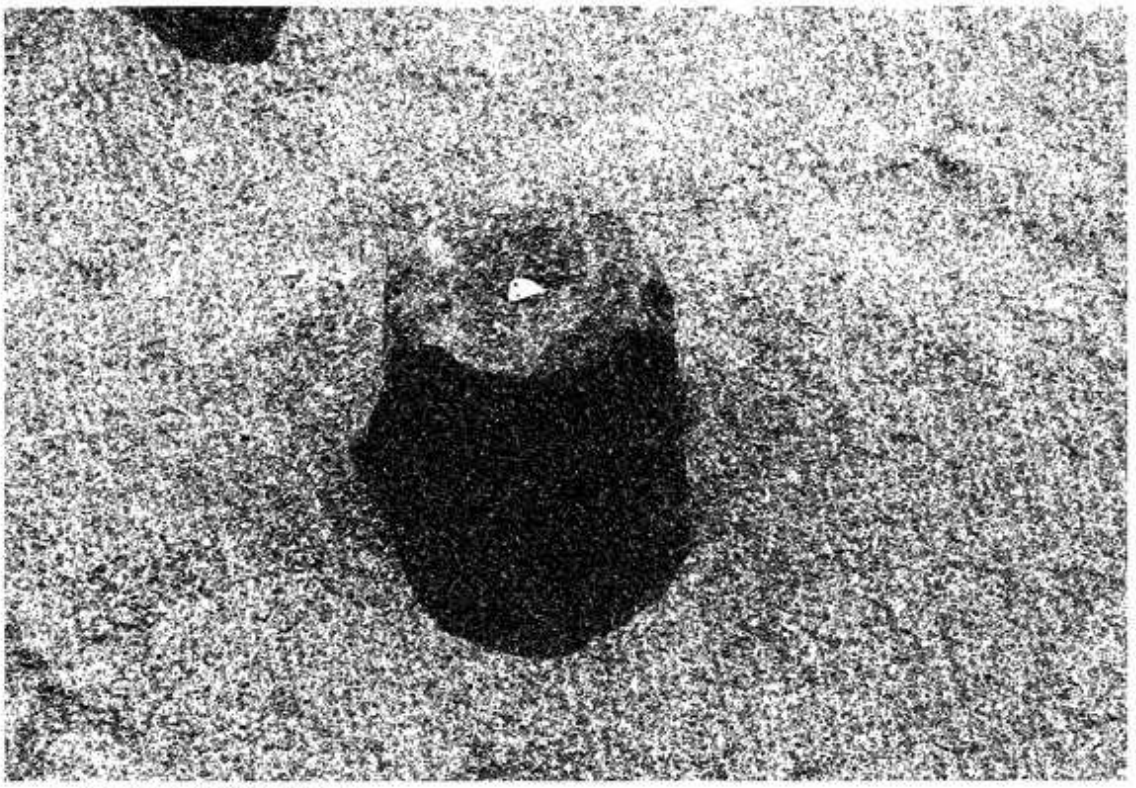
図版4



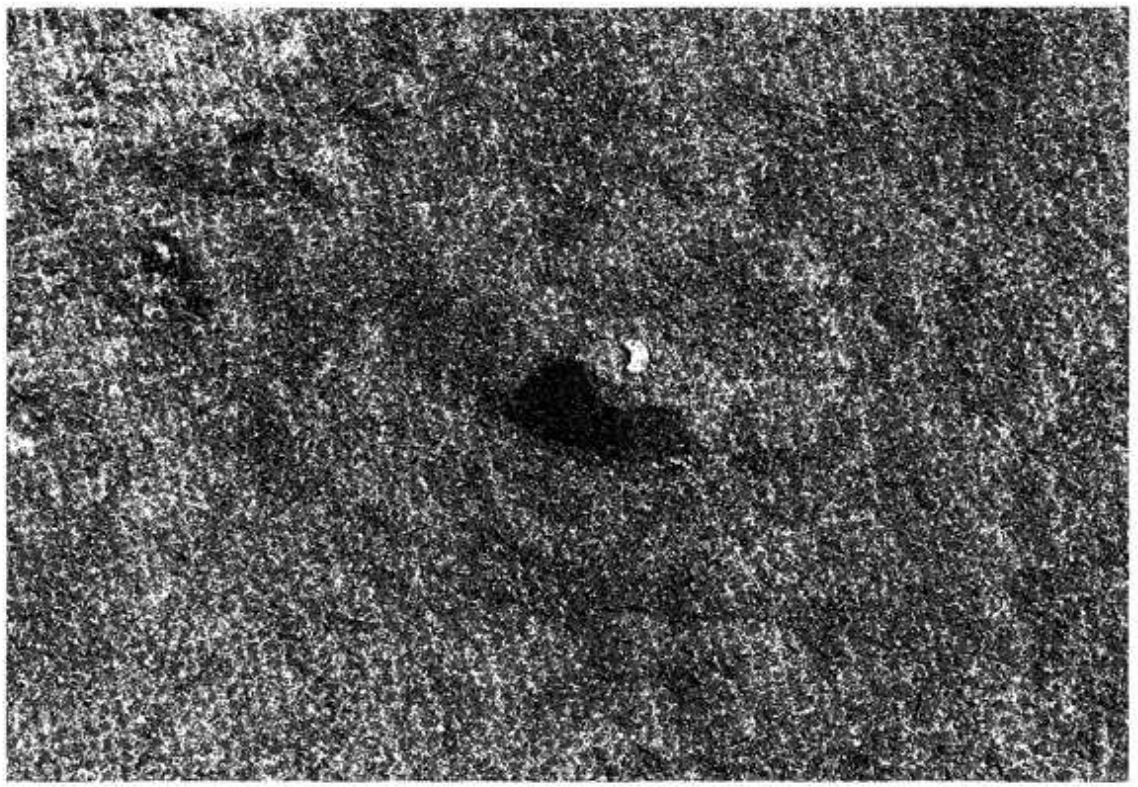
1. SI-01出土遺物状況(有孔円板)



2. SI-01出土遺物状況(勾玉・有孔円板)

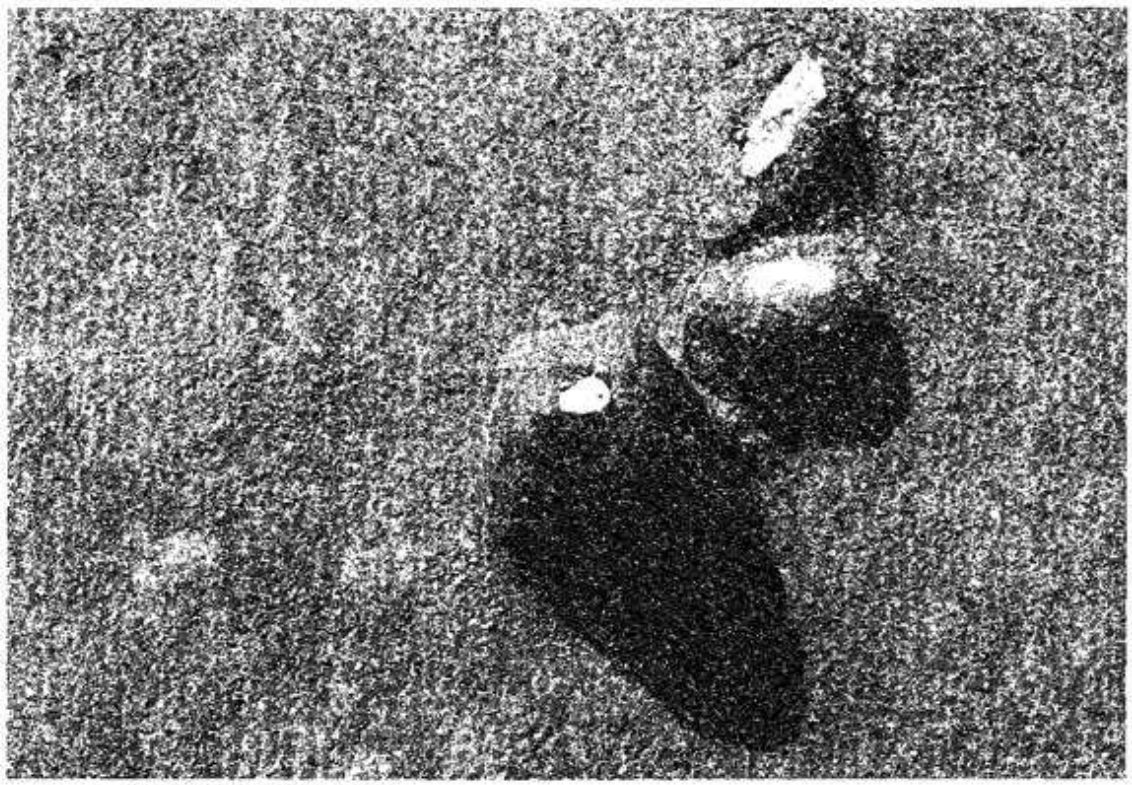


1．SI-01出土遺物状況（剣）

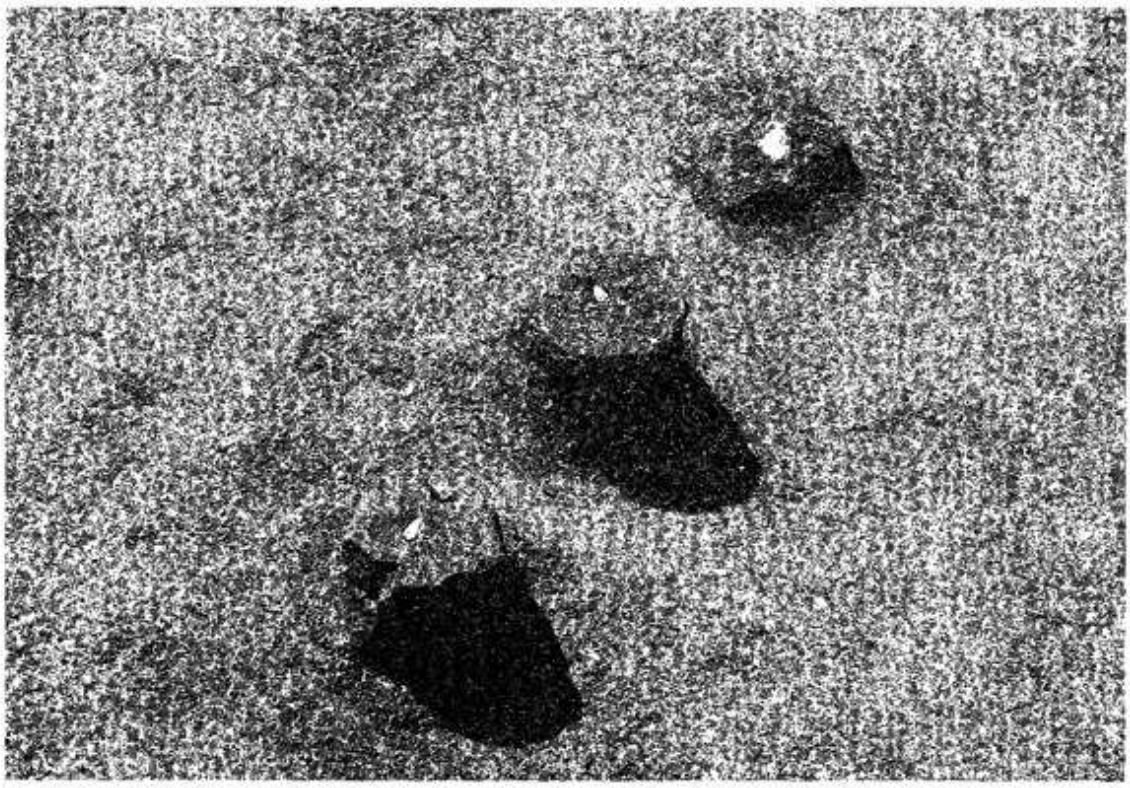


2．SI-01出土遺物状況（勾玉）

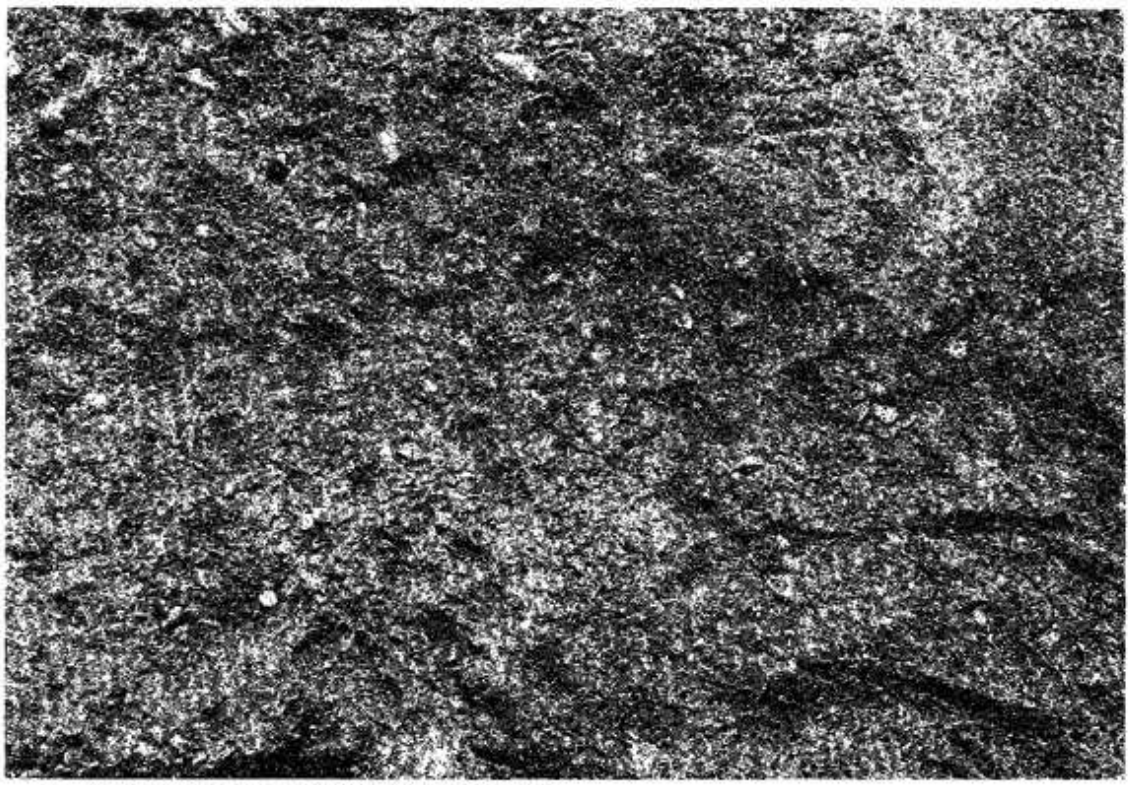
図版6



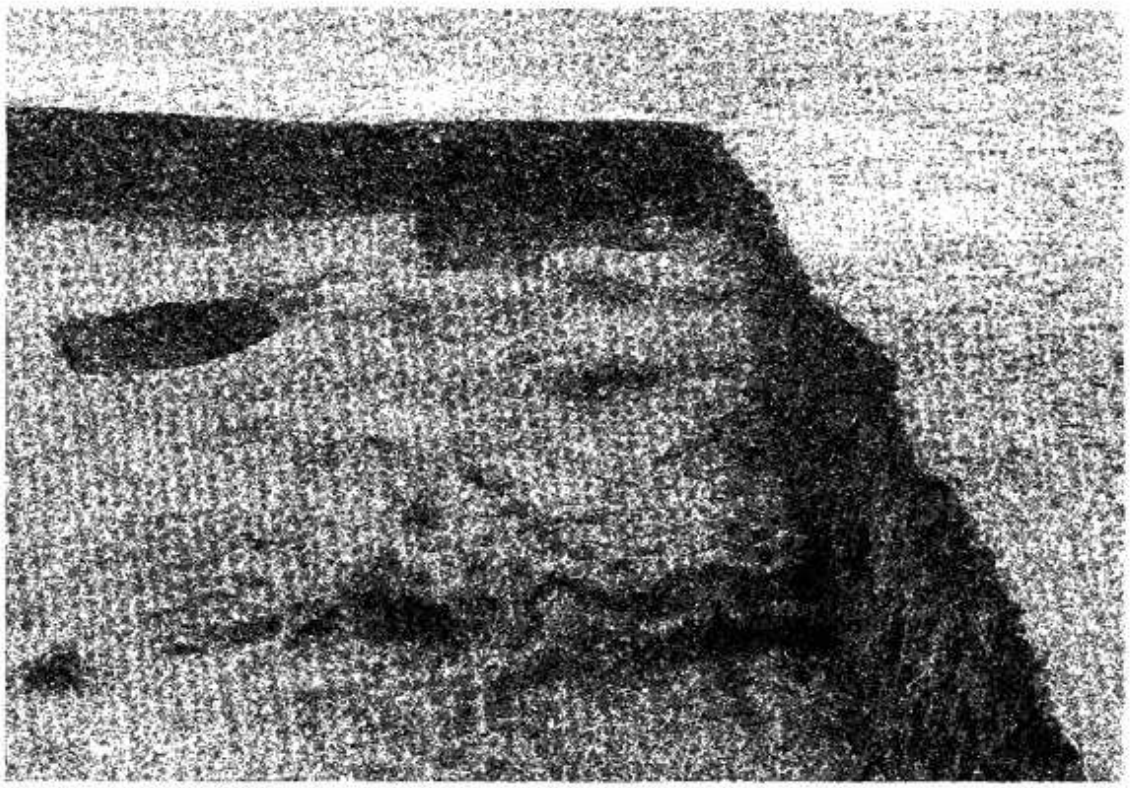
1．SI-01出土遺物状況（勾玉）



2．SI-01出土遺物状況（剣）

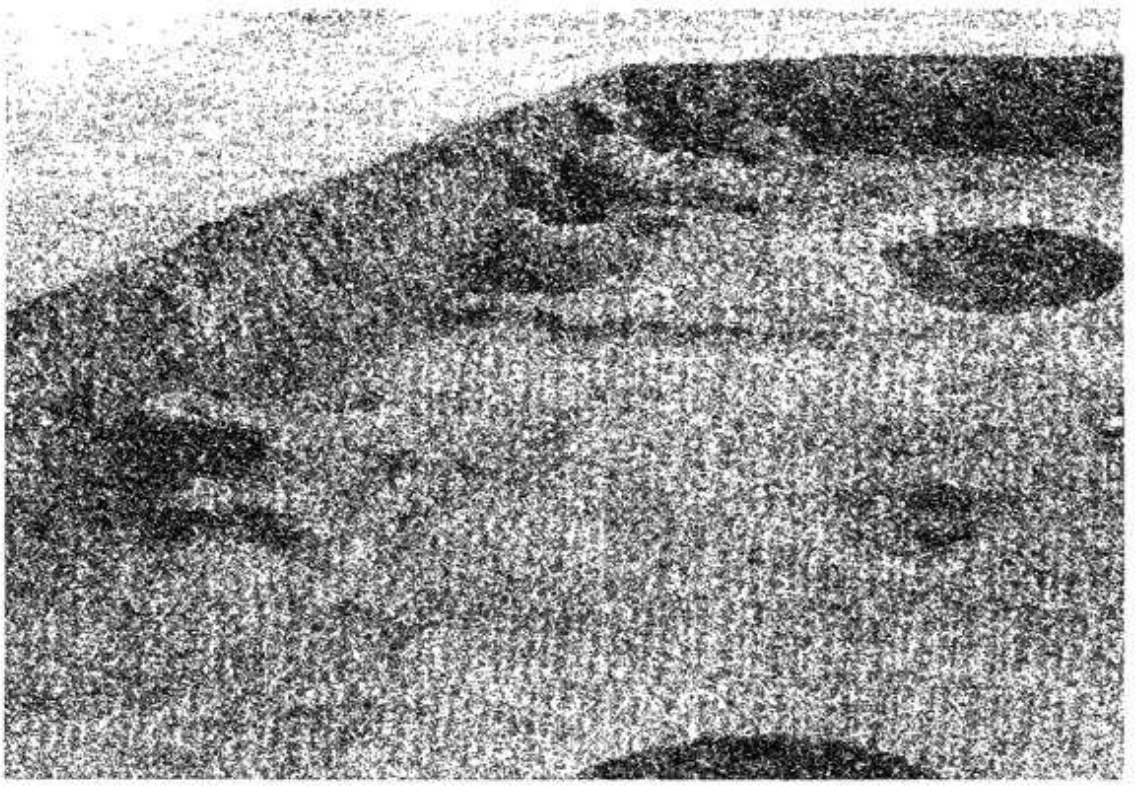


1. SI-01の南壁沿い出土の粘土帯内の滑石片

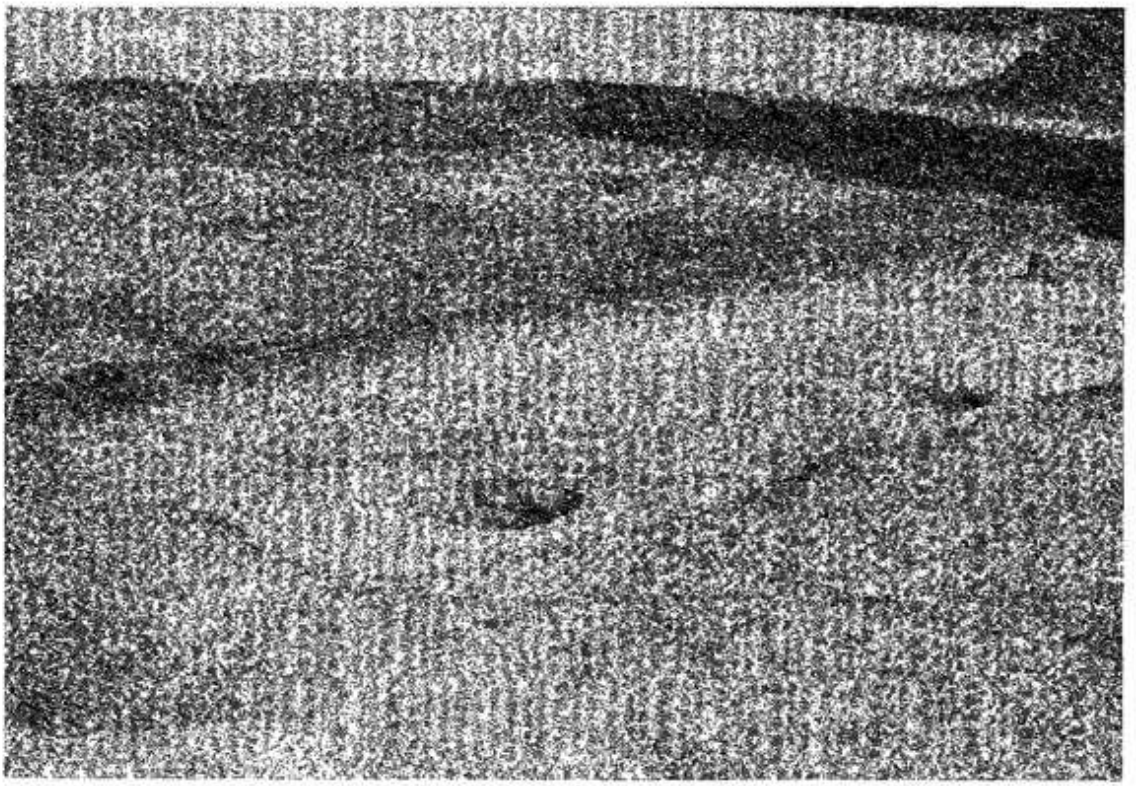


2. SI-01南壁沿いの粘土帯

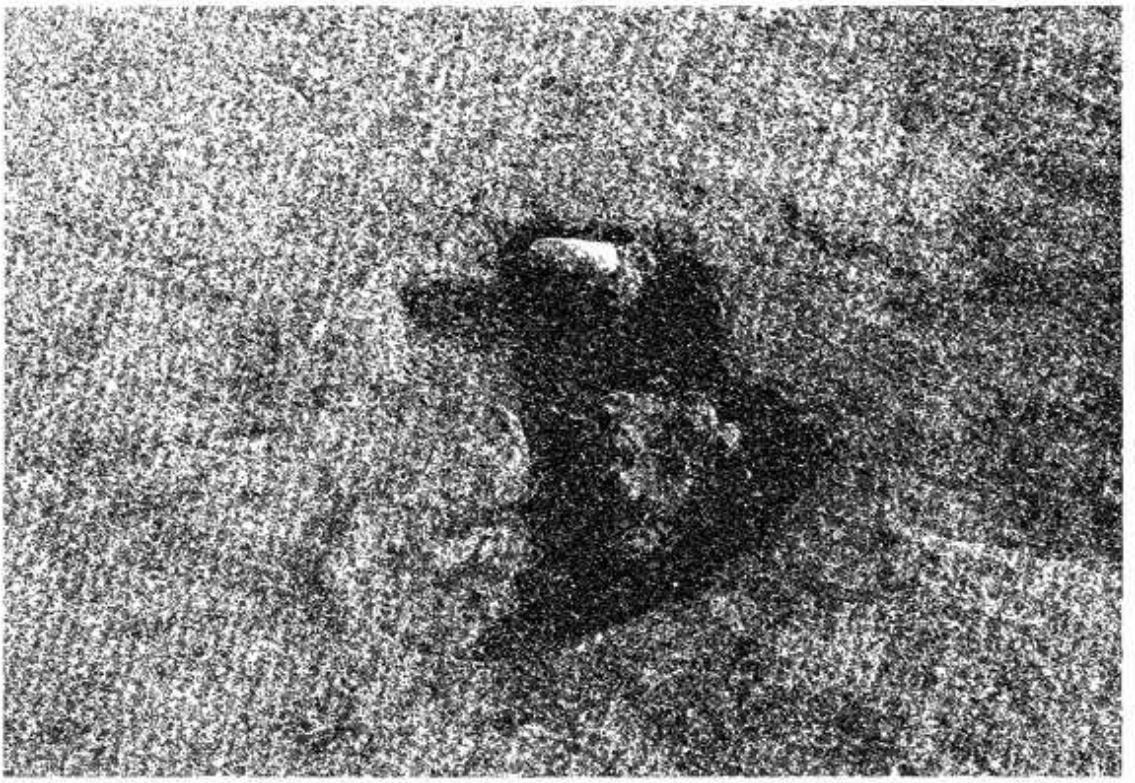
図版8



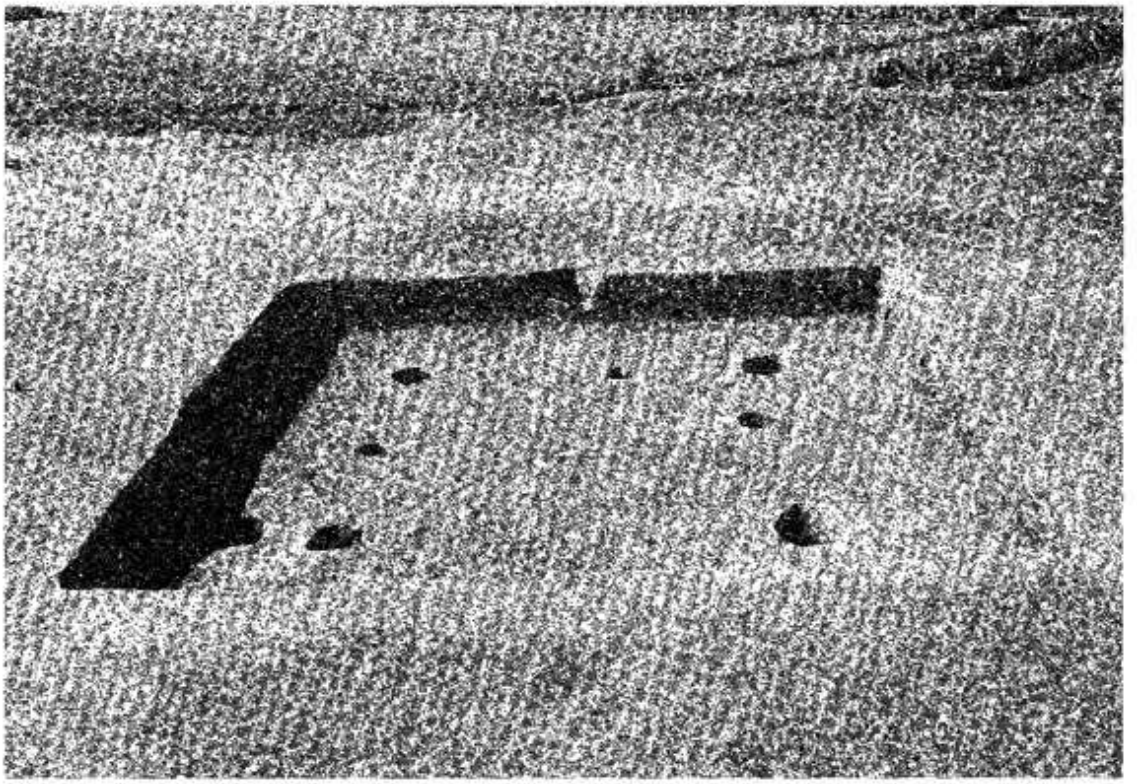
1．SI-01北壁沿いの焼土塊



2．SI-01の貼り床断面

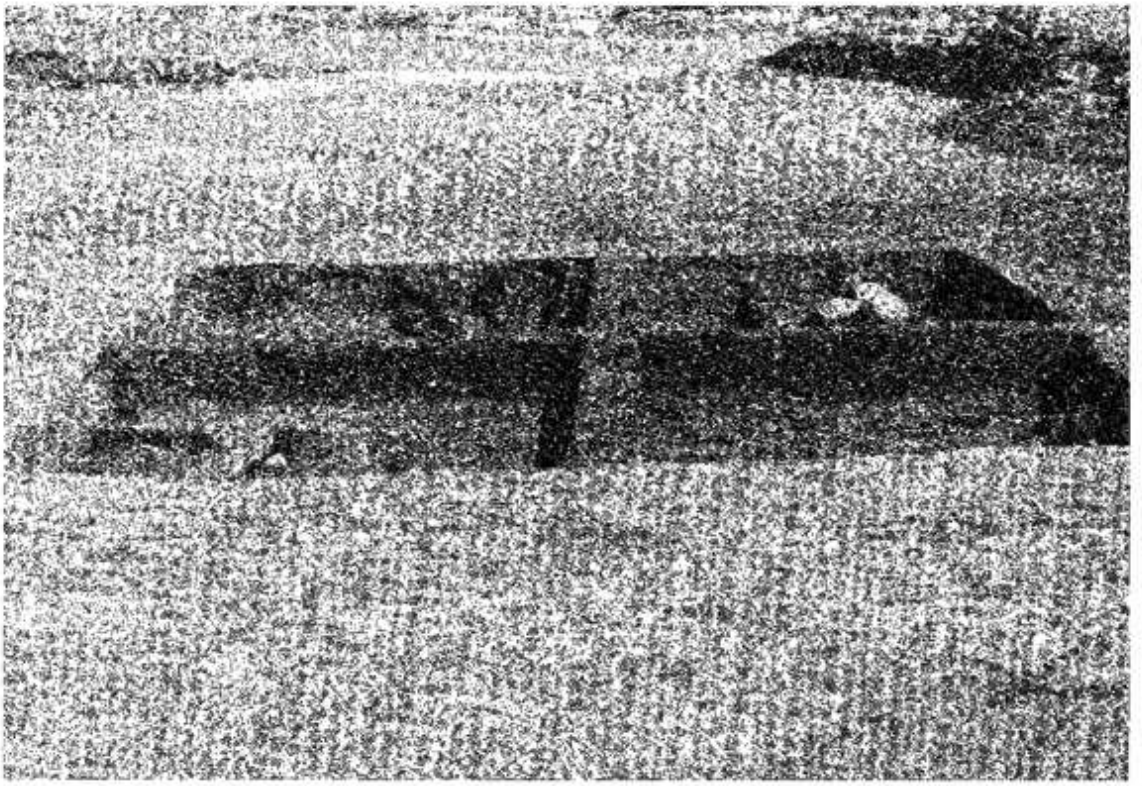


1．SI-01の炉跡

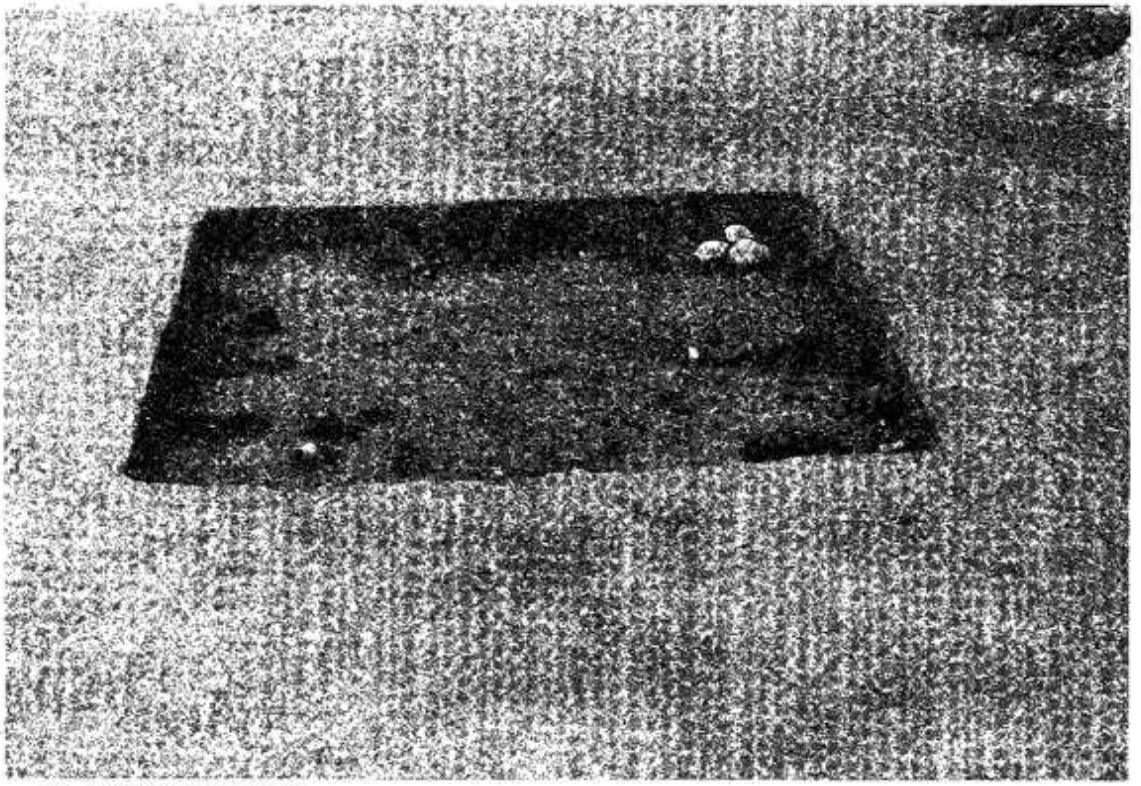


2．SI-01全景（貼り床除去後）

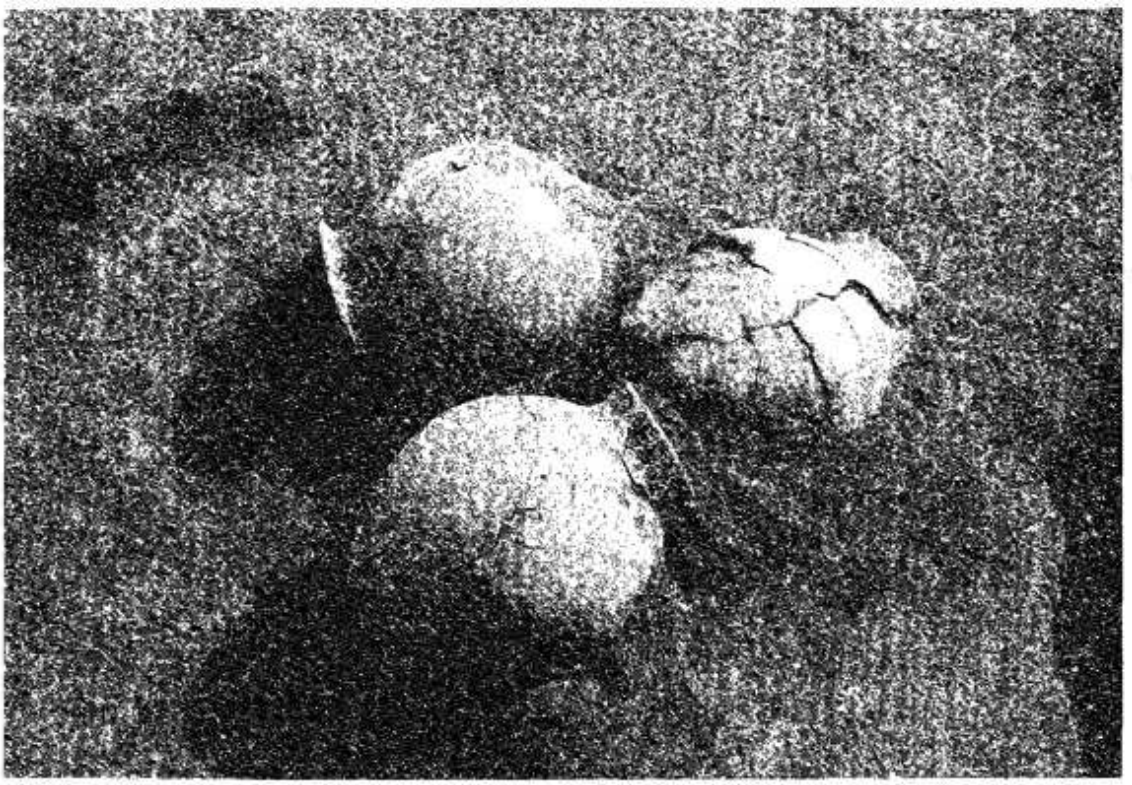
図版10



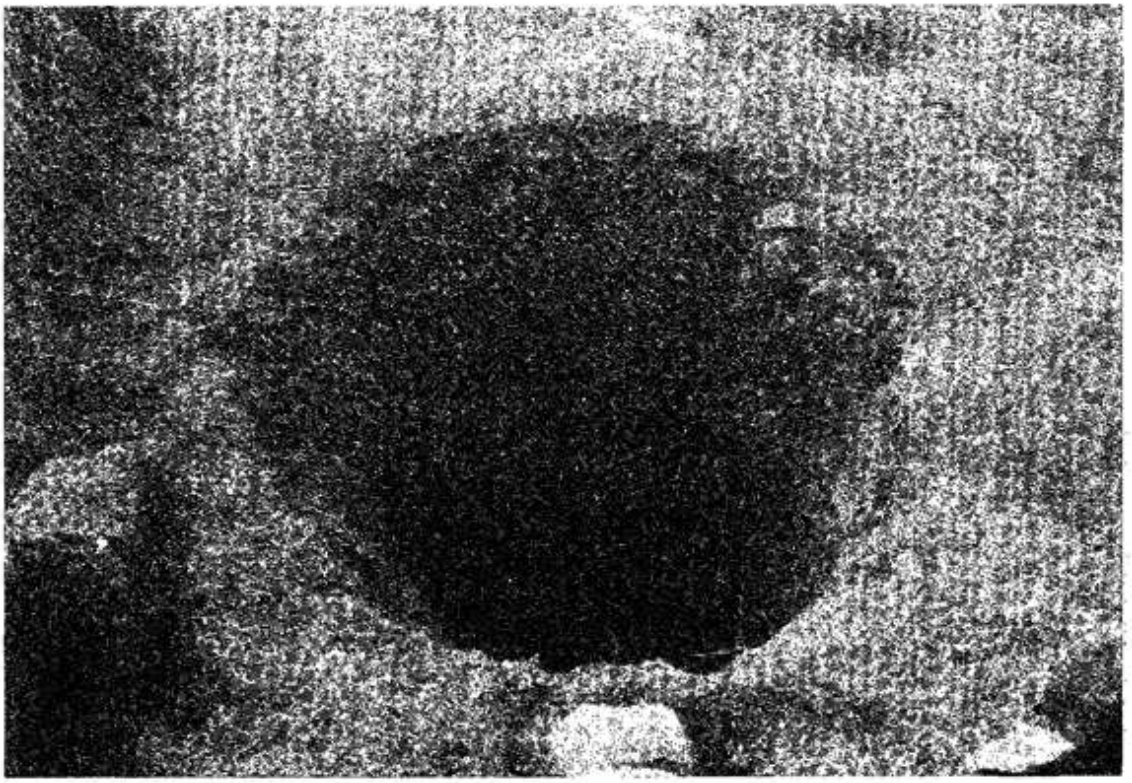
1．SI-02内埋土状況



2．SI-02遺物出土状況

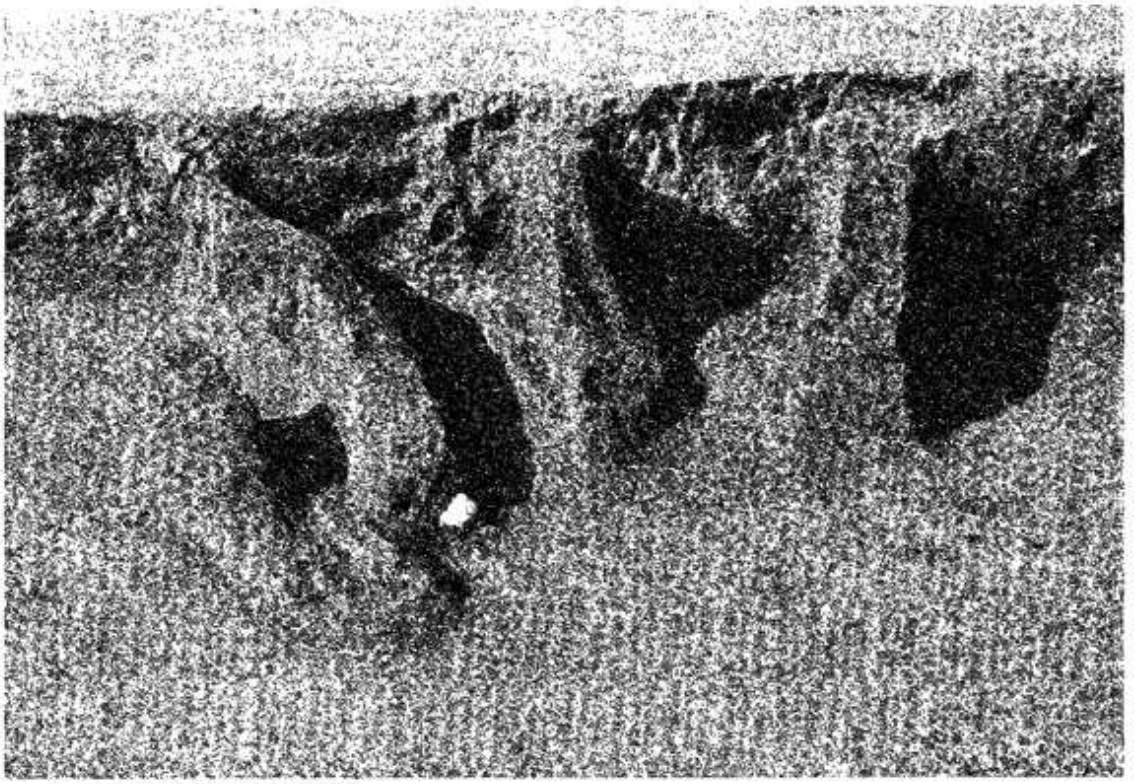


1. SI-02遺物出土状況

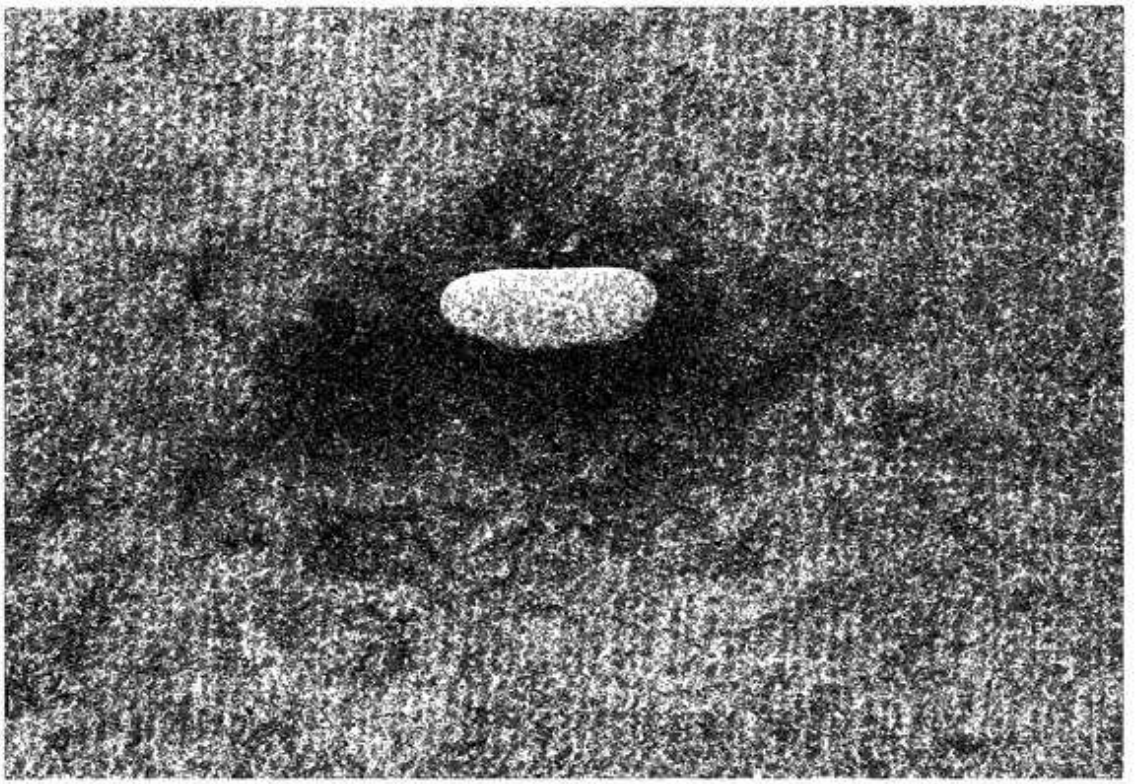


2. SI-02の貯蔵穴

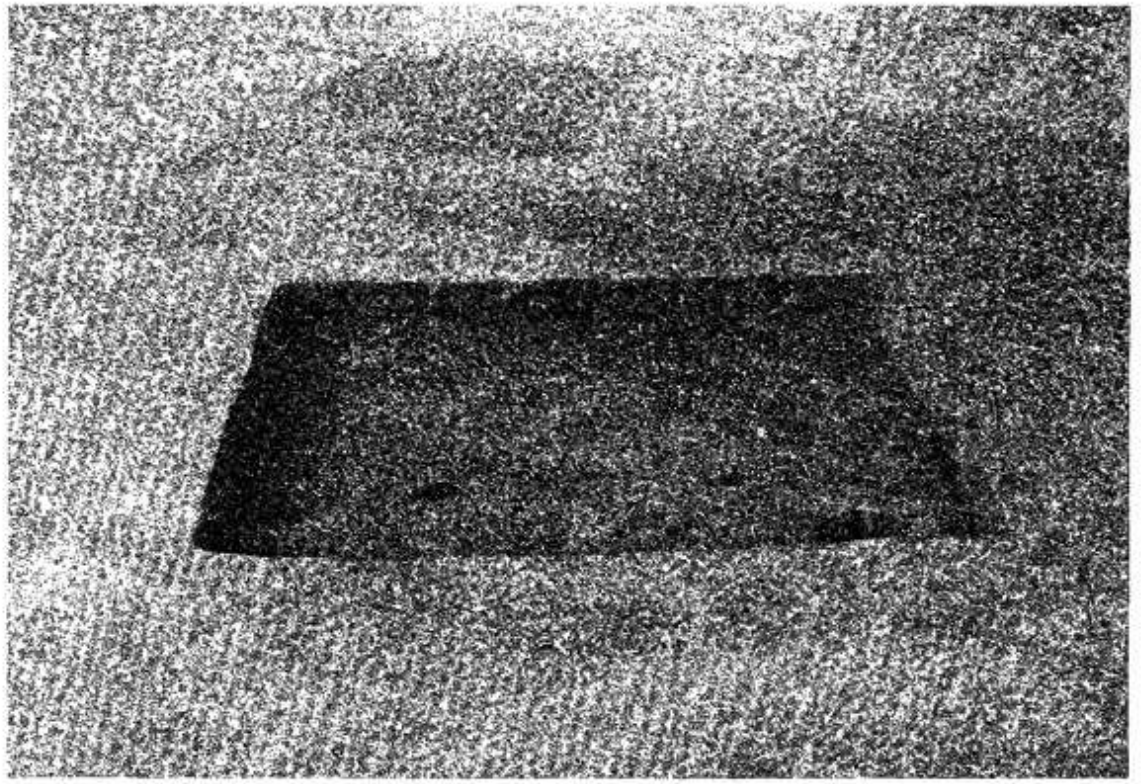
図版12



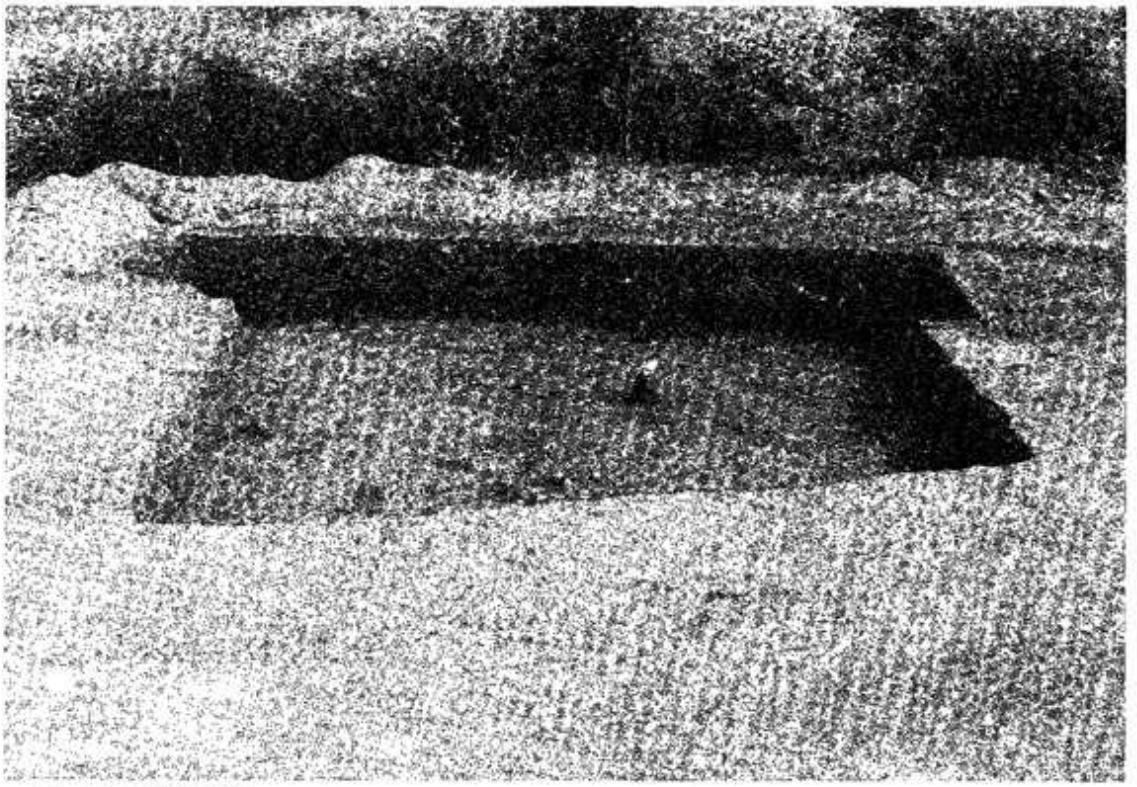
1．SI-02の炭化材出土状況



2．SI-02炉跡

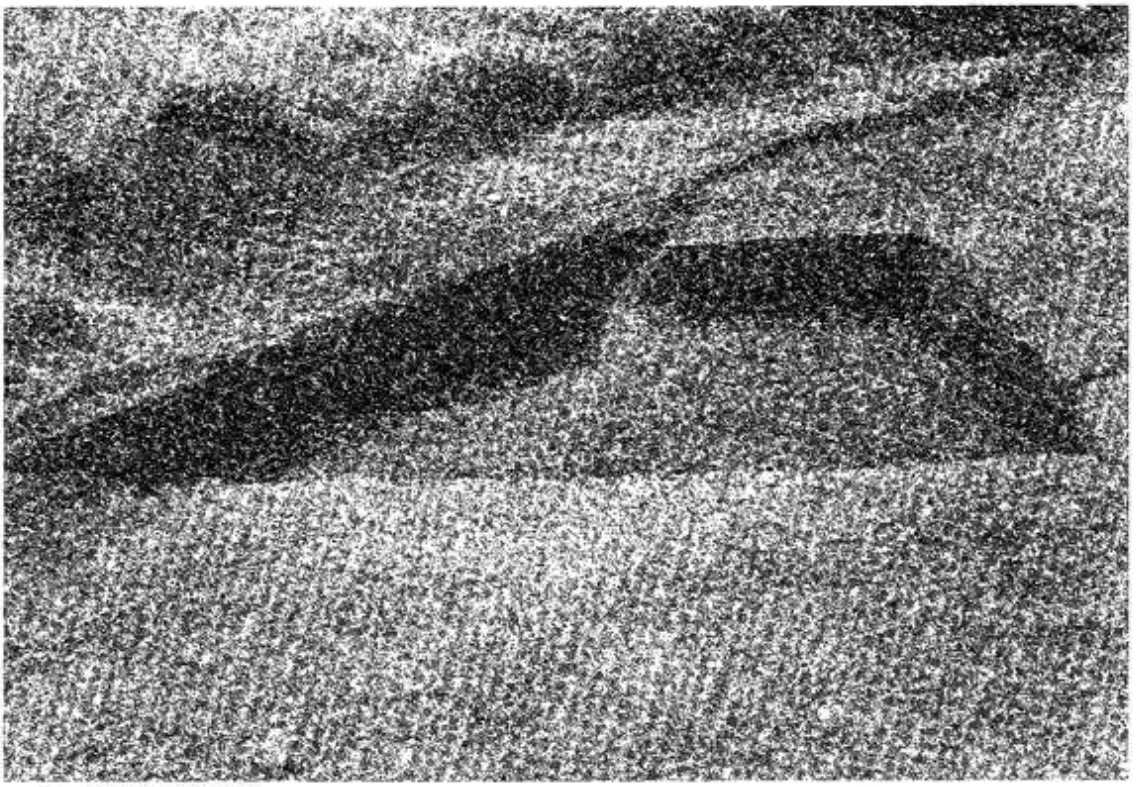


1．SI-02完掘状況

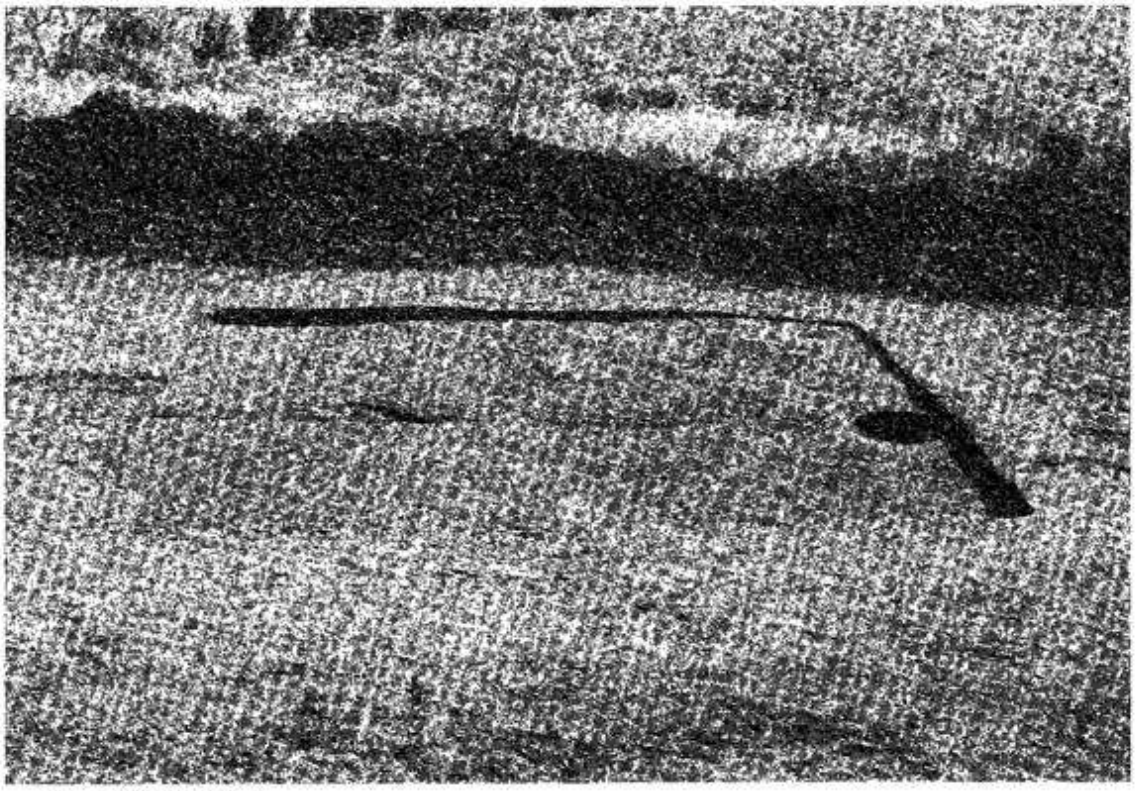


2．SI-04完掘状況

図版14

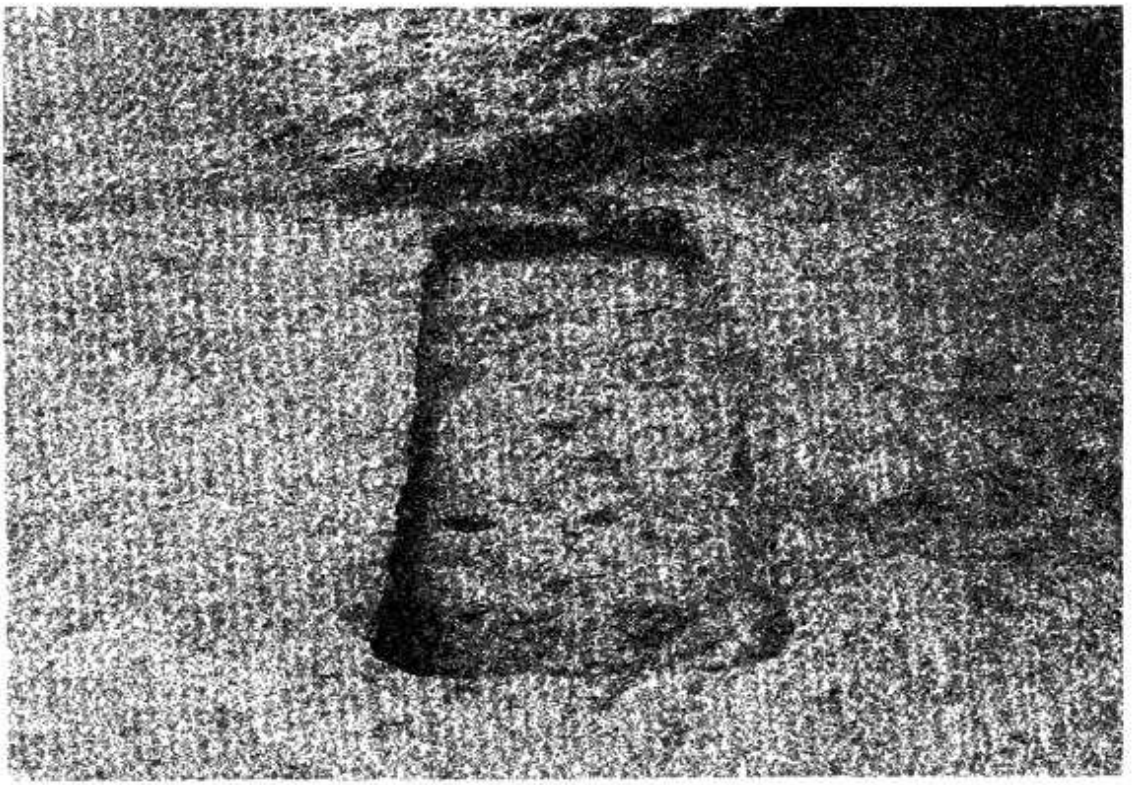


1．SI-05完掘状況



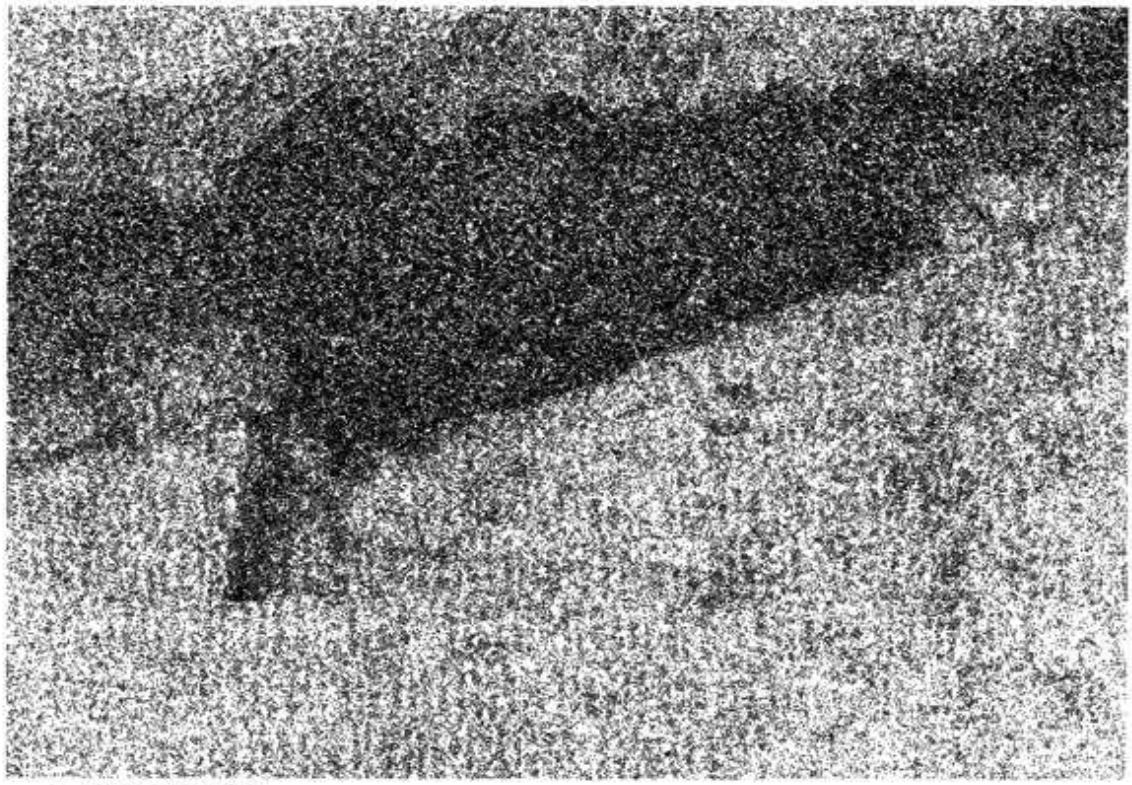
2．SI-06完堀状況

1．土壙群全景

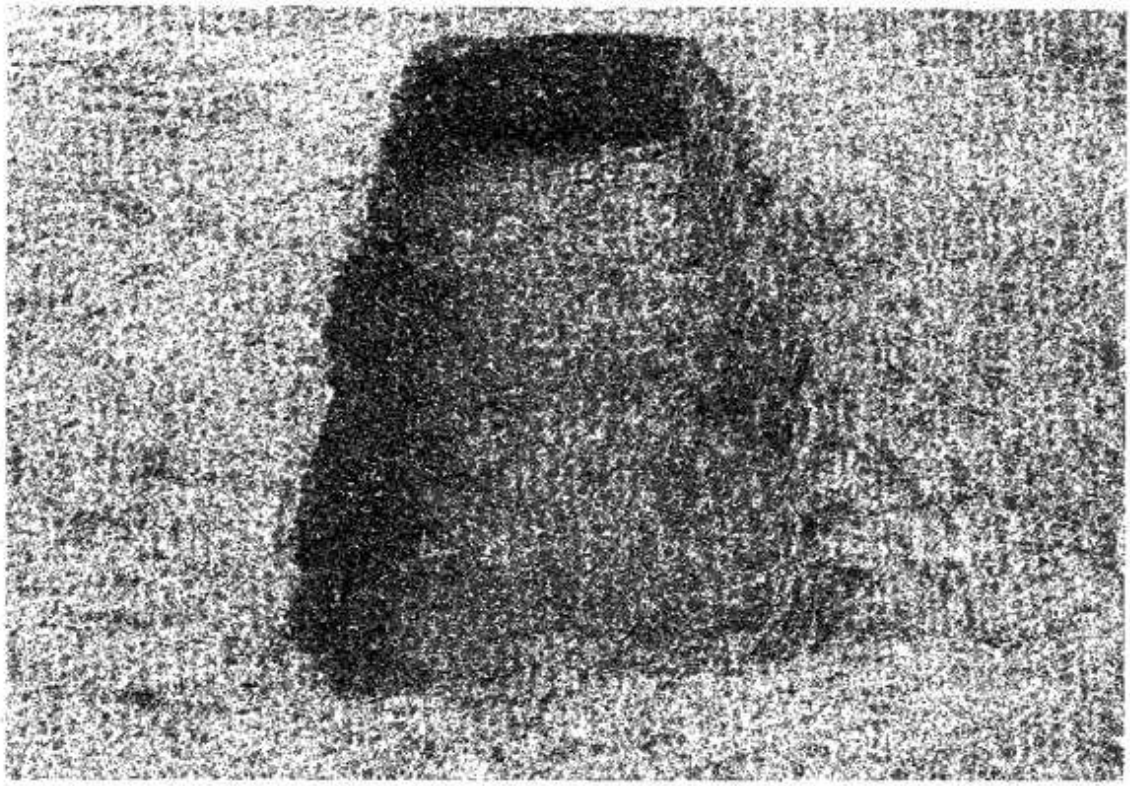


2．SK-01完掘状況

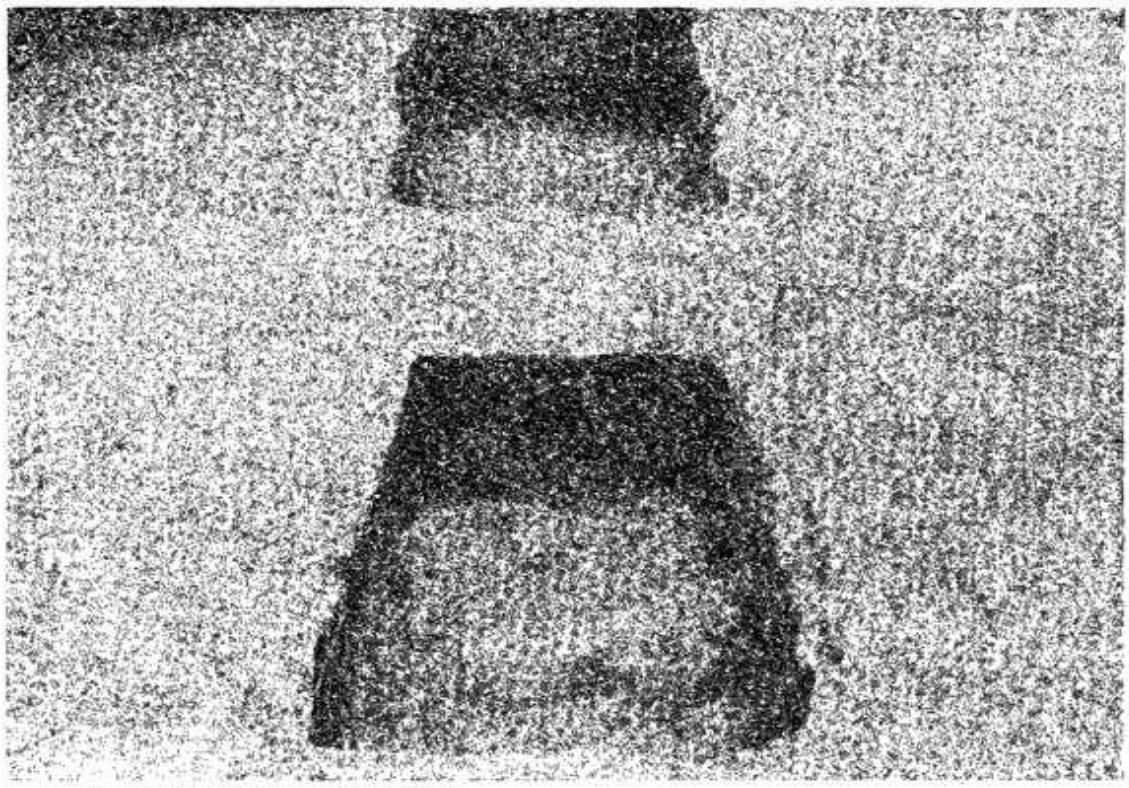
図版16



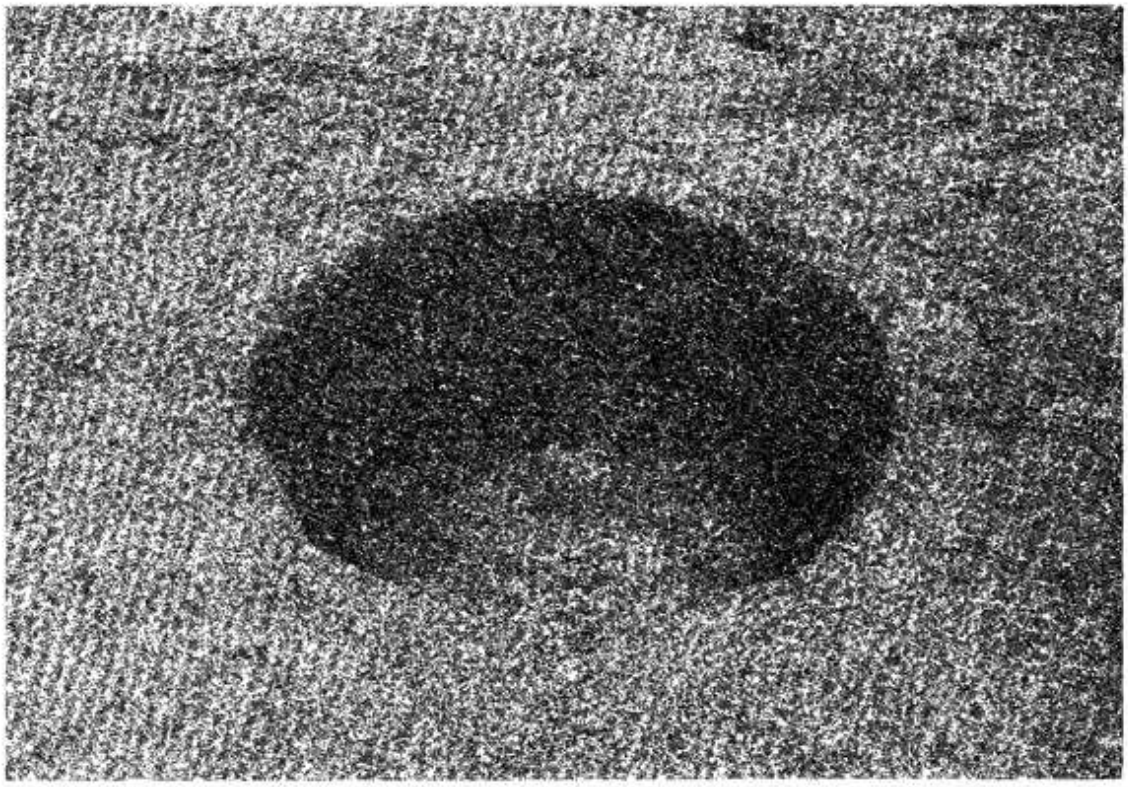
1．SK-02完掘状況



2．SK-03A完掘状況

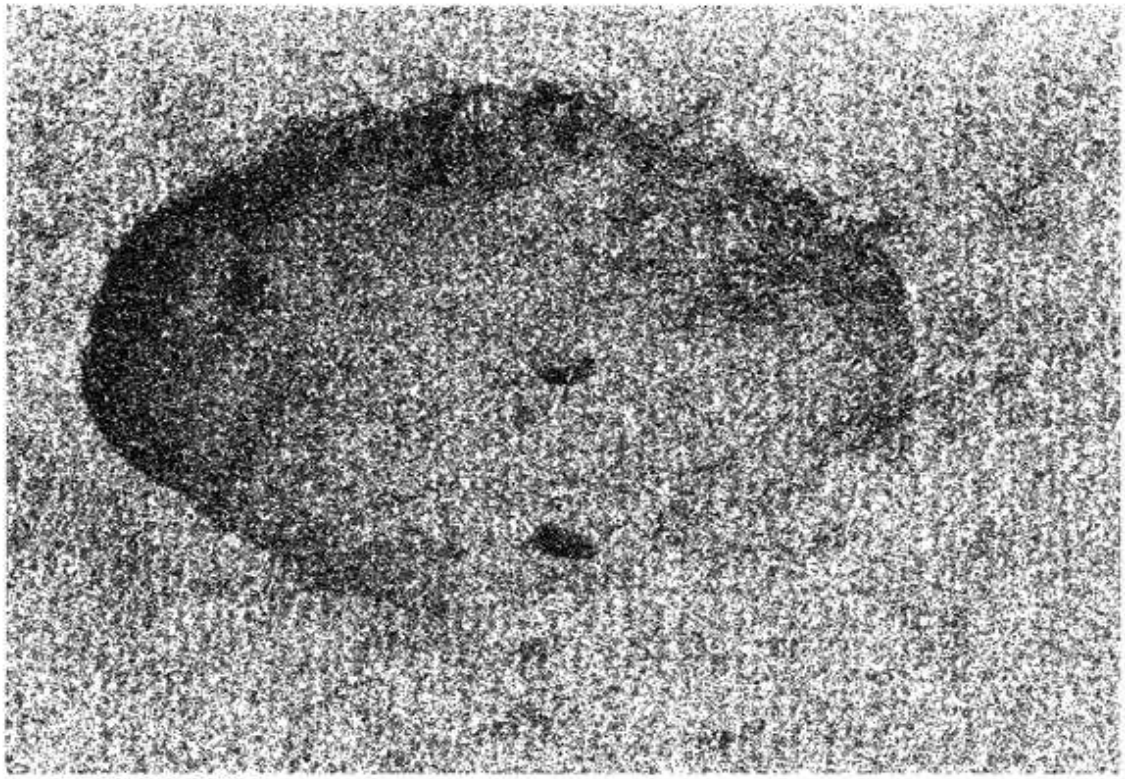


1. SK-04A·05完掘状況（手前が04A）

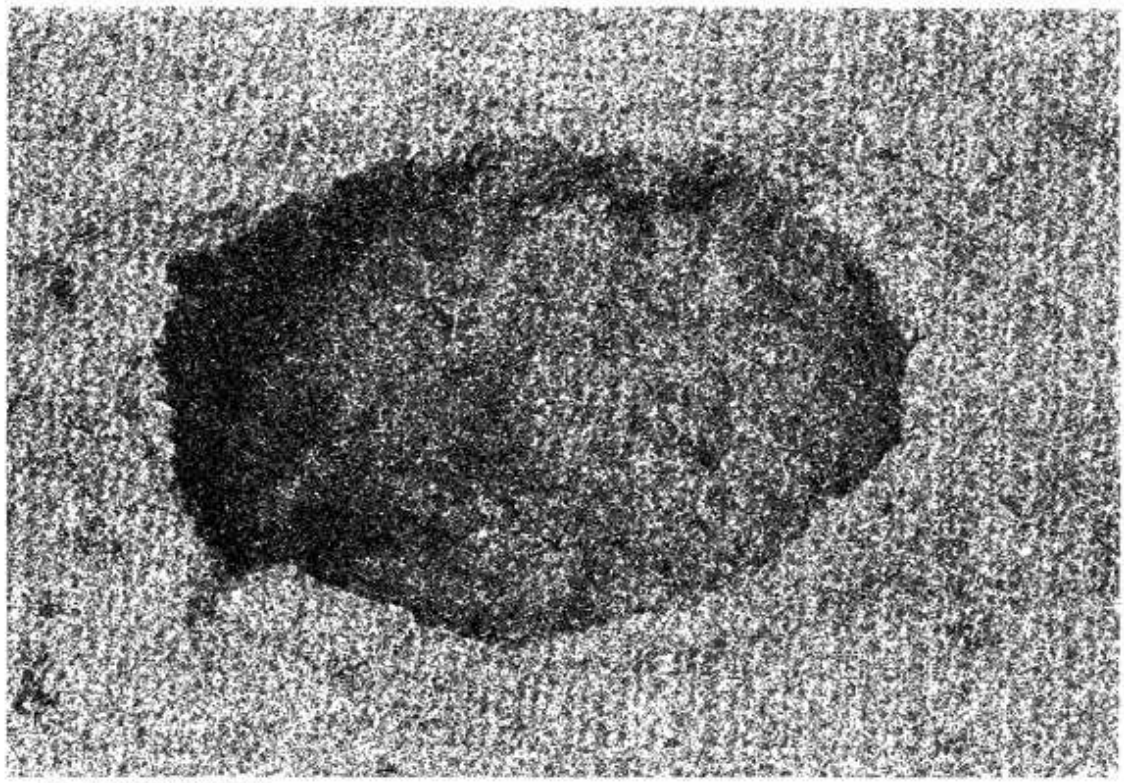


2. SK-04B完掘状況

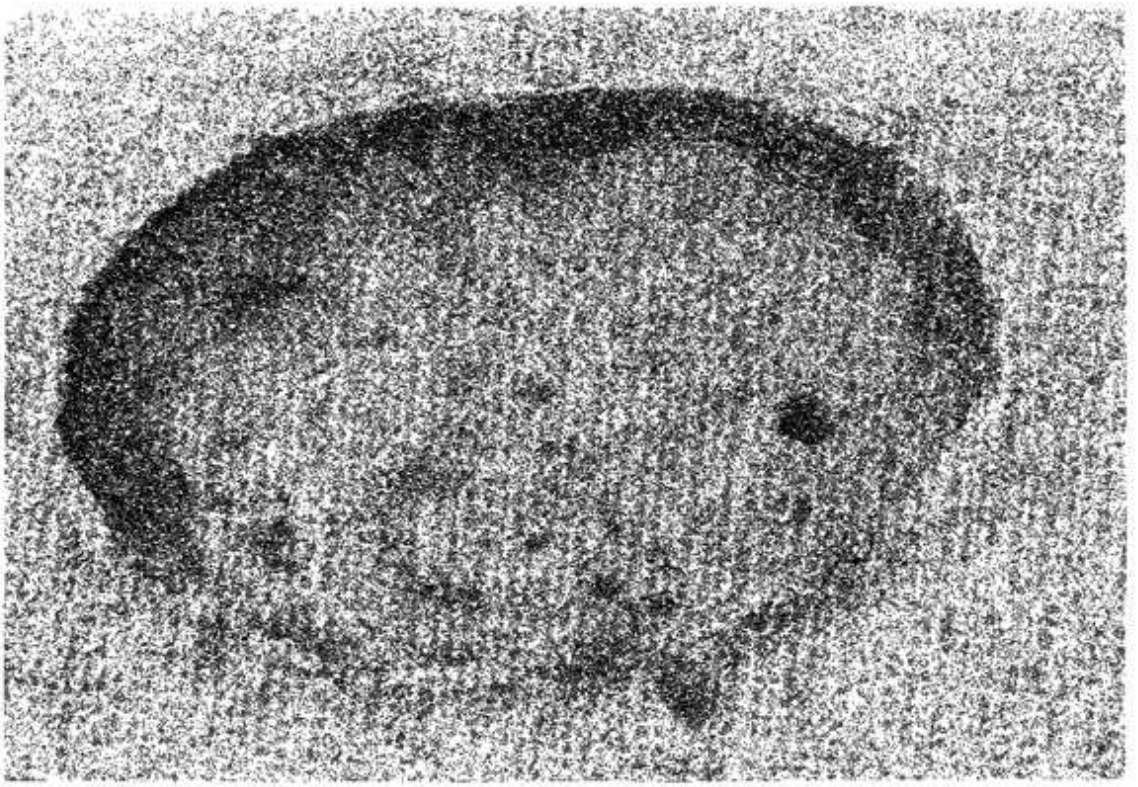
図版18



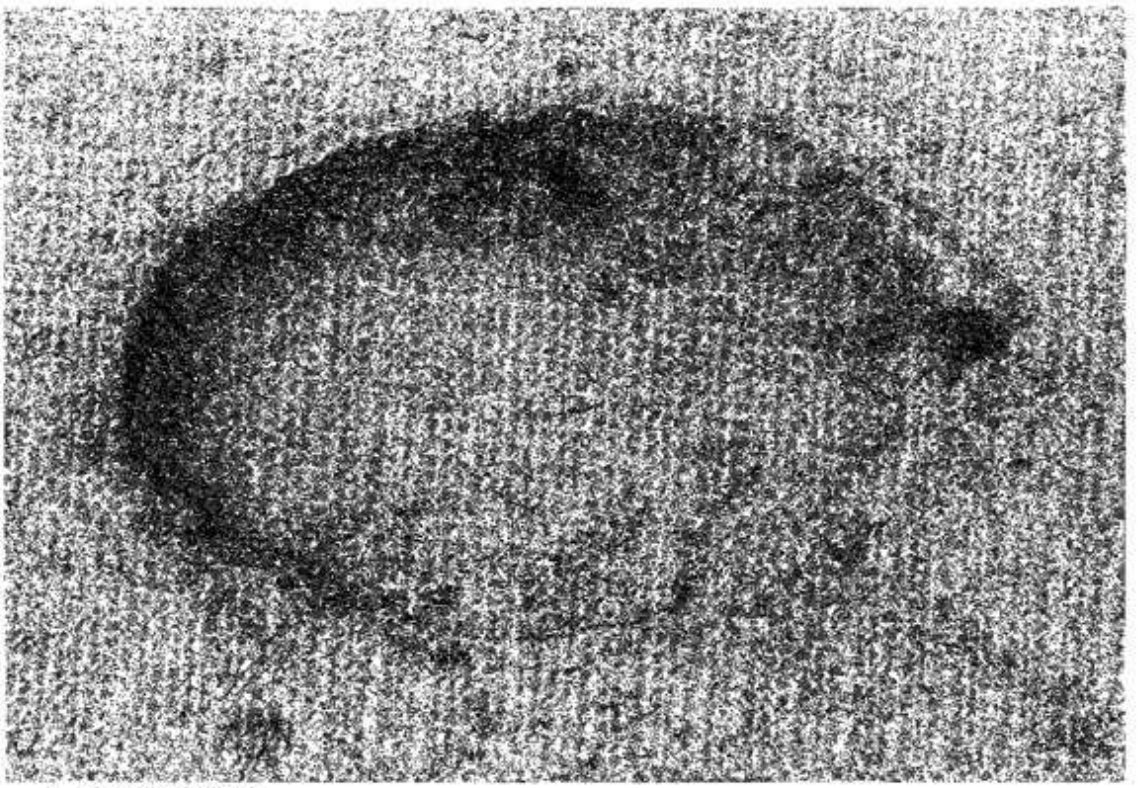
1．SK-06完掘状況



2．SK-07完掘状況

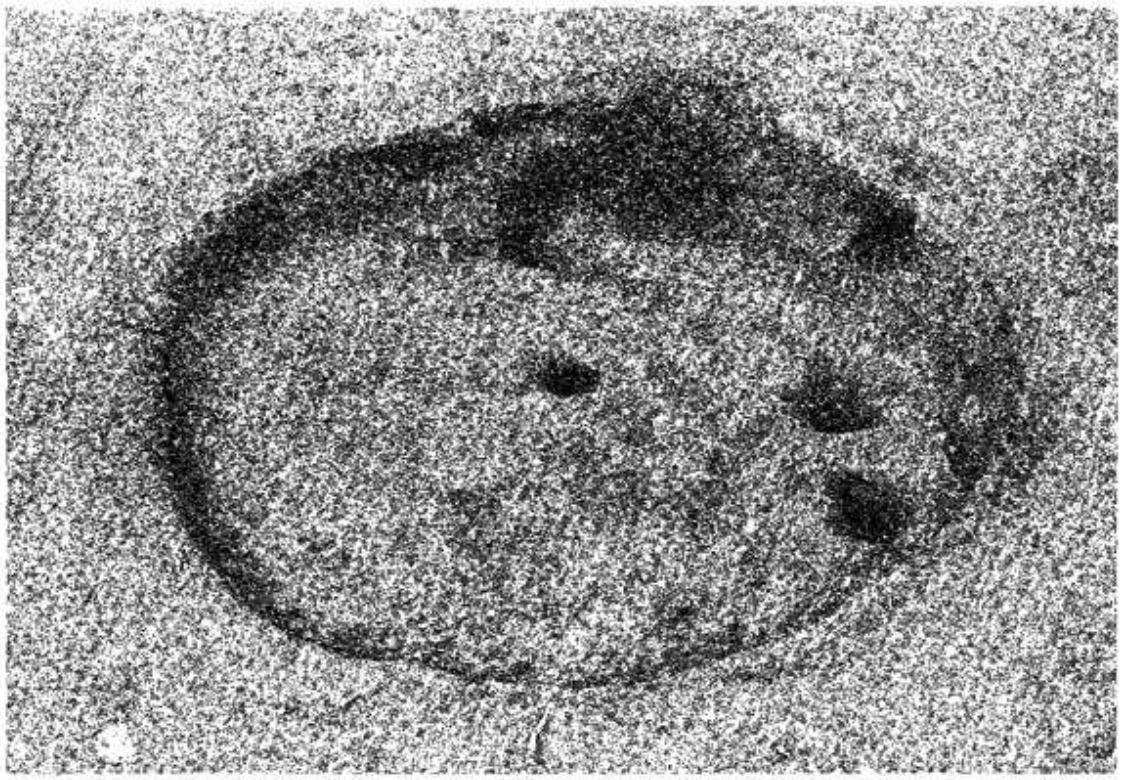


1．SK-08完掘状況

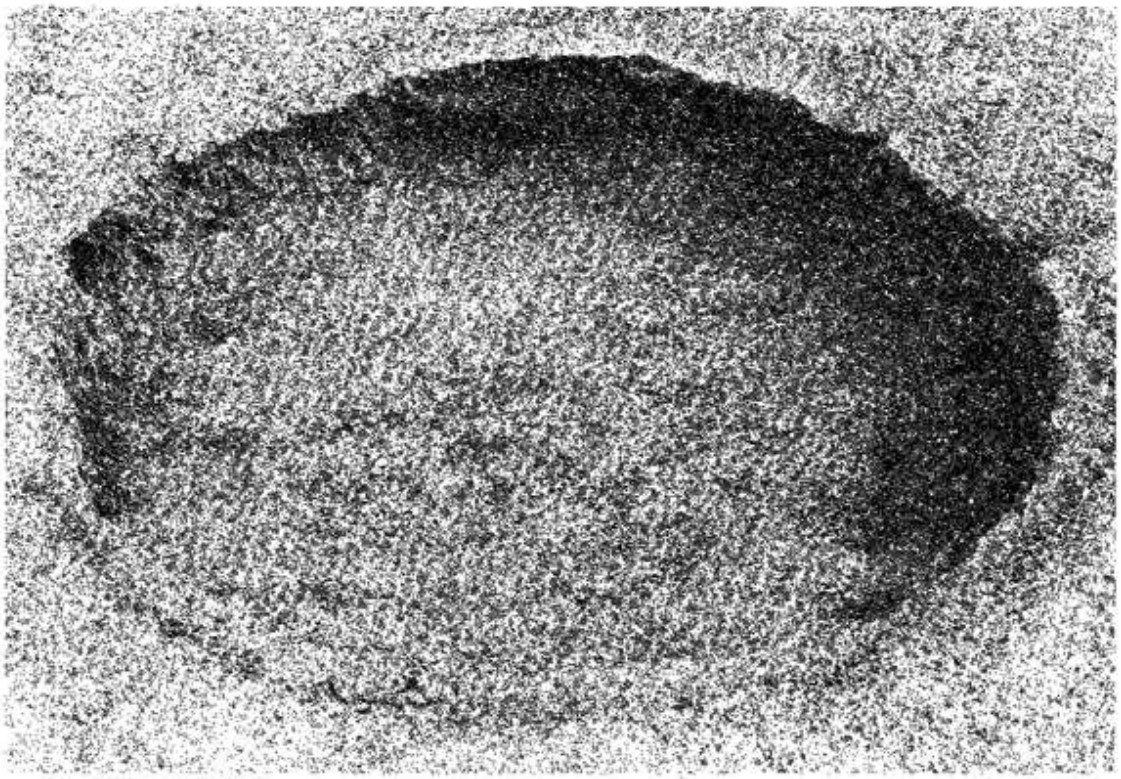


2．SK-09完掘状況

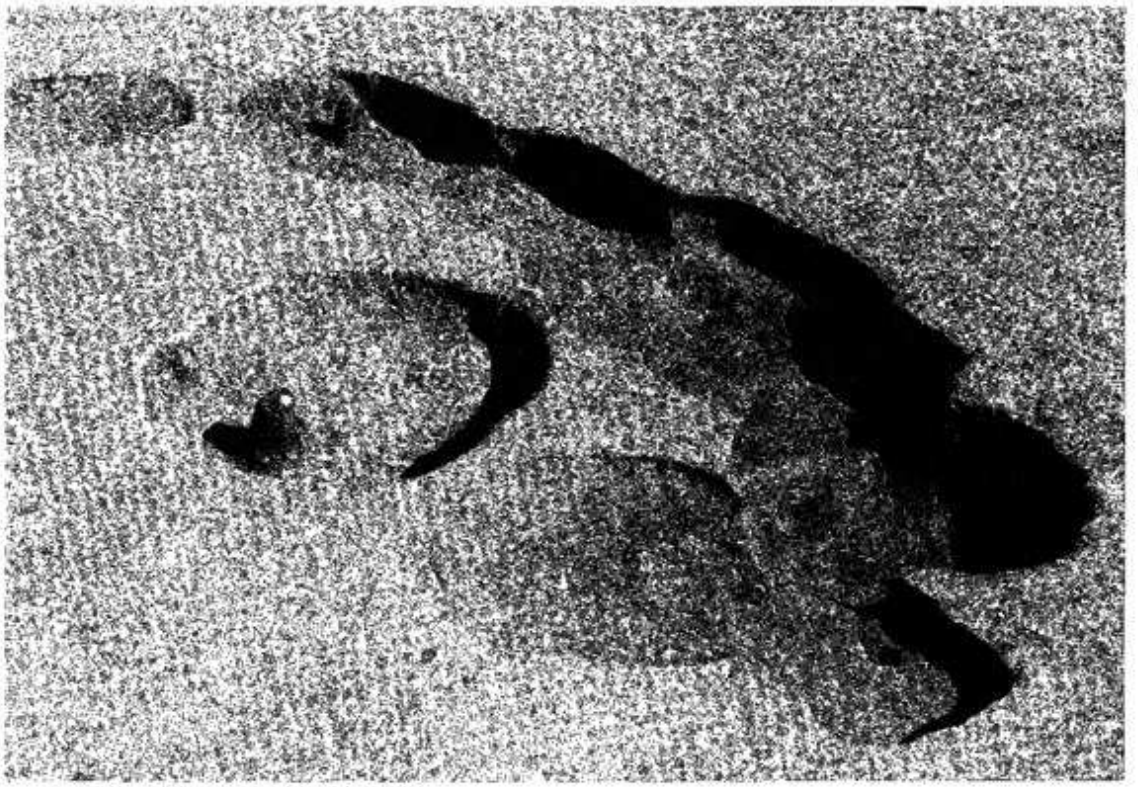
図版20



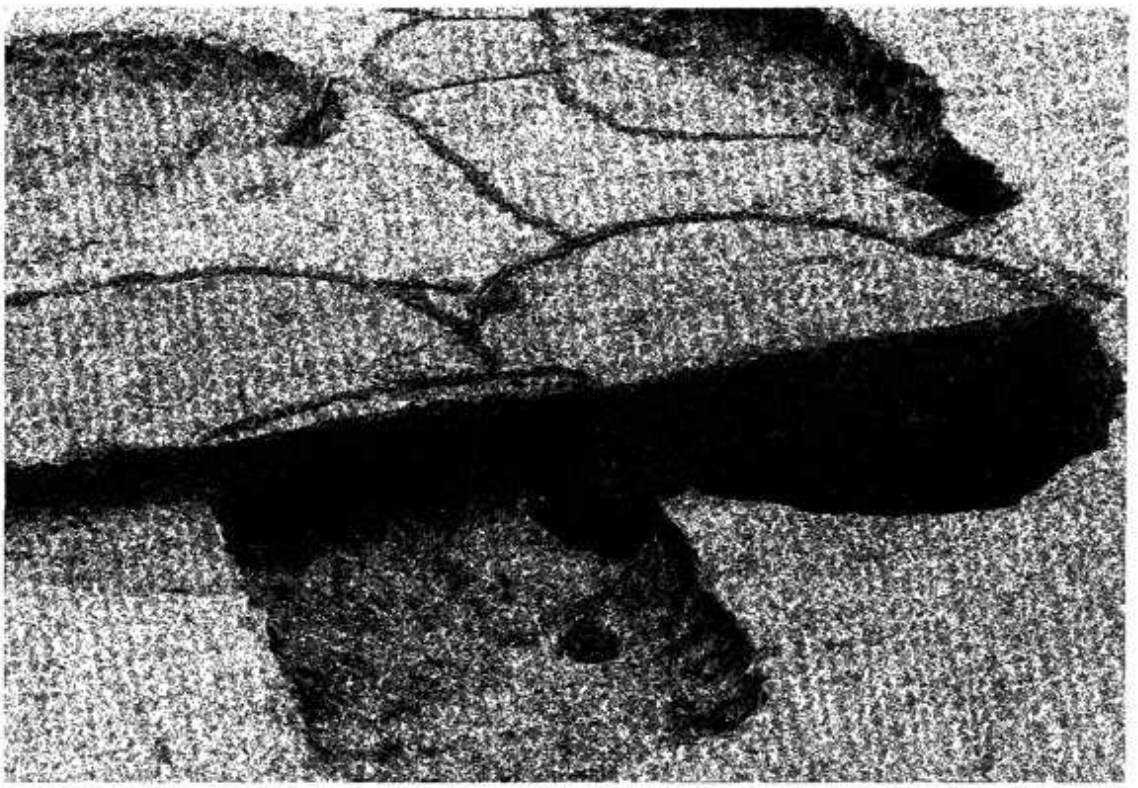
1. SK-10完掘状況



2. SK-11完堀状況

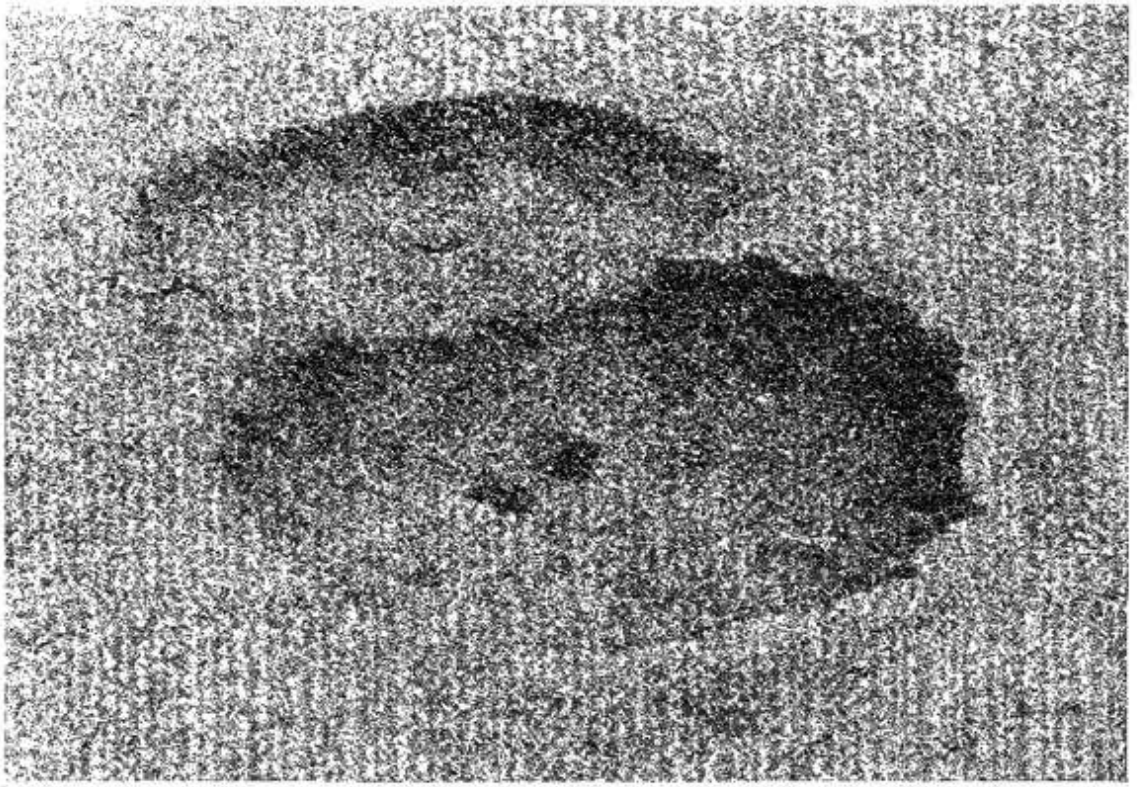


1. SK-13A·13B16～21完掘状況

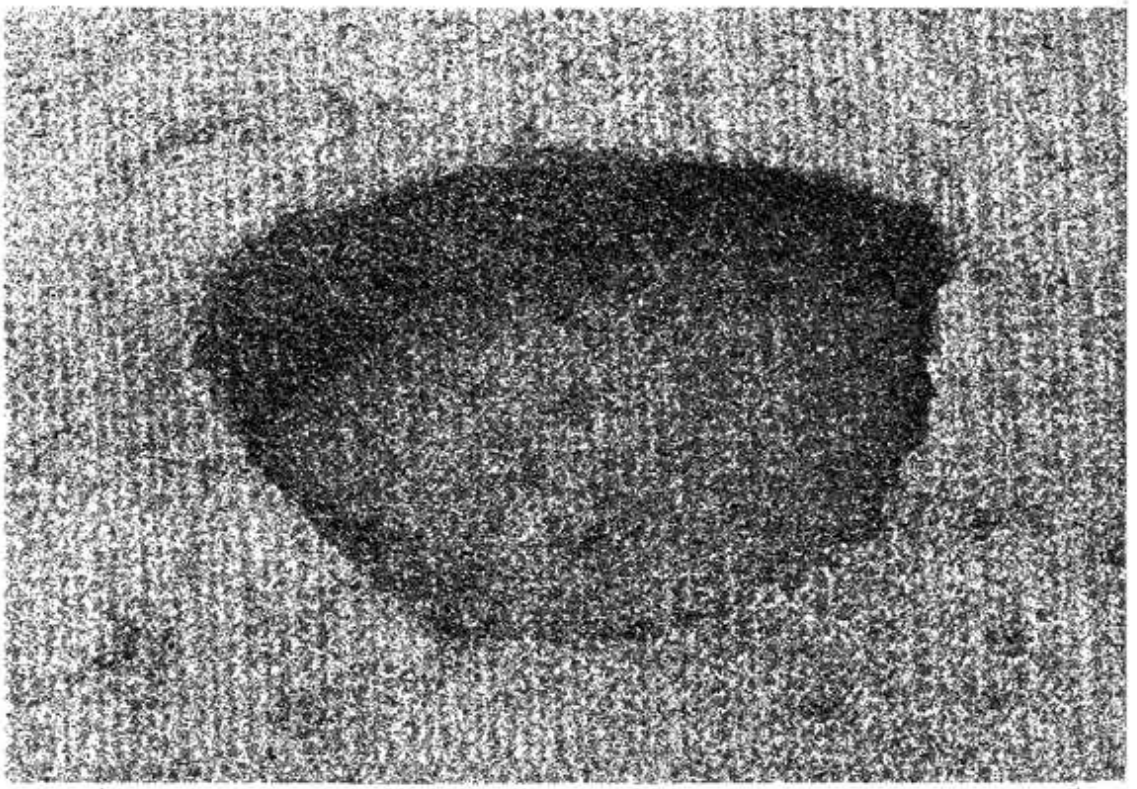


2. SK-14・15・16の切り合い状況

図版22

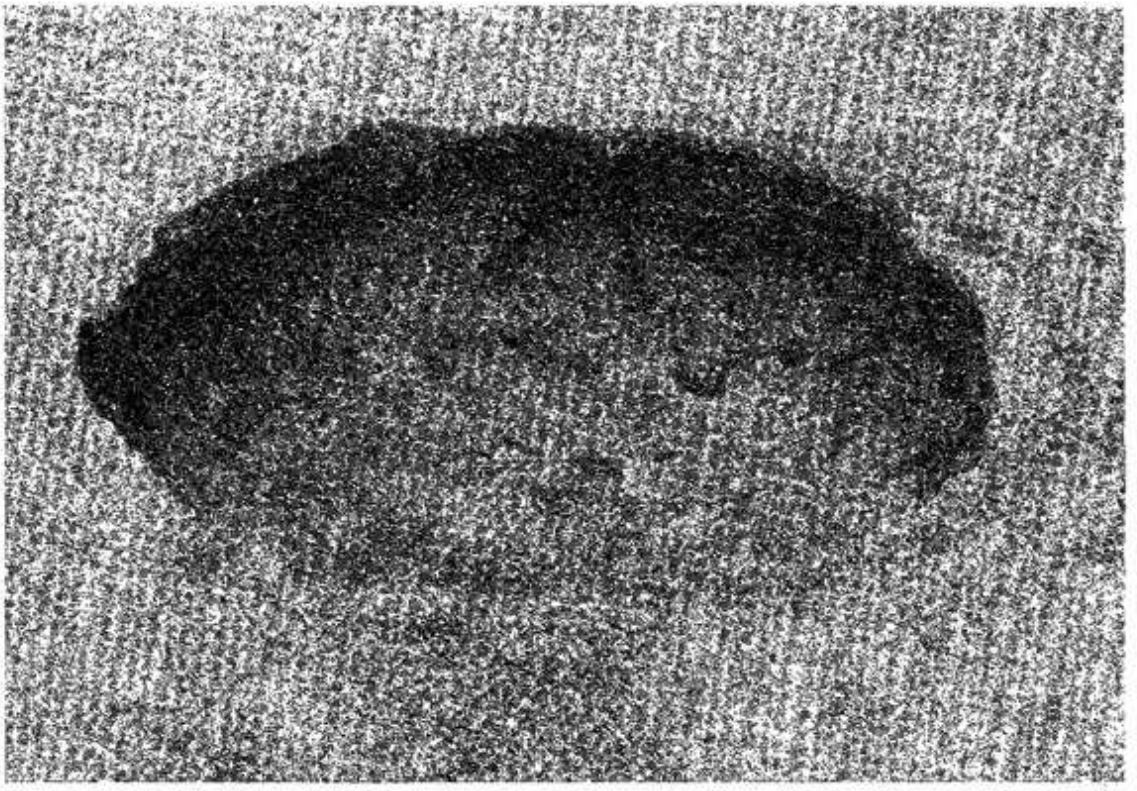


1. SK-22・23完掘状況（手前が23）



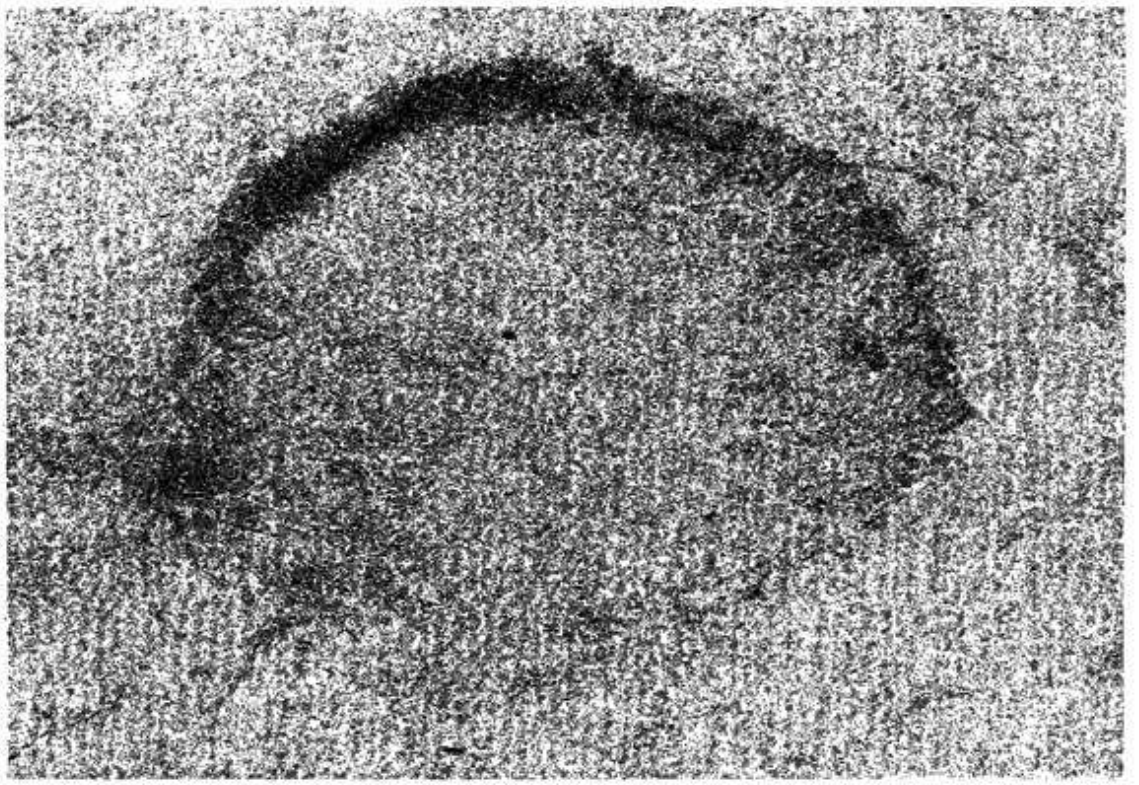
2. SK-24完掘状況

1．SK-25・26完掘状況（手前が26）

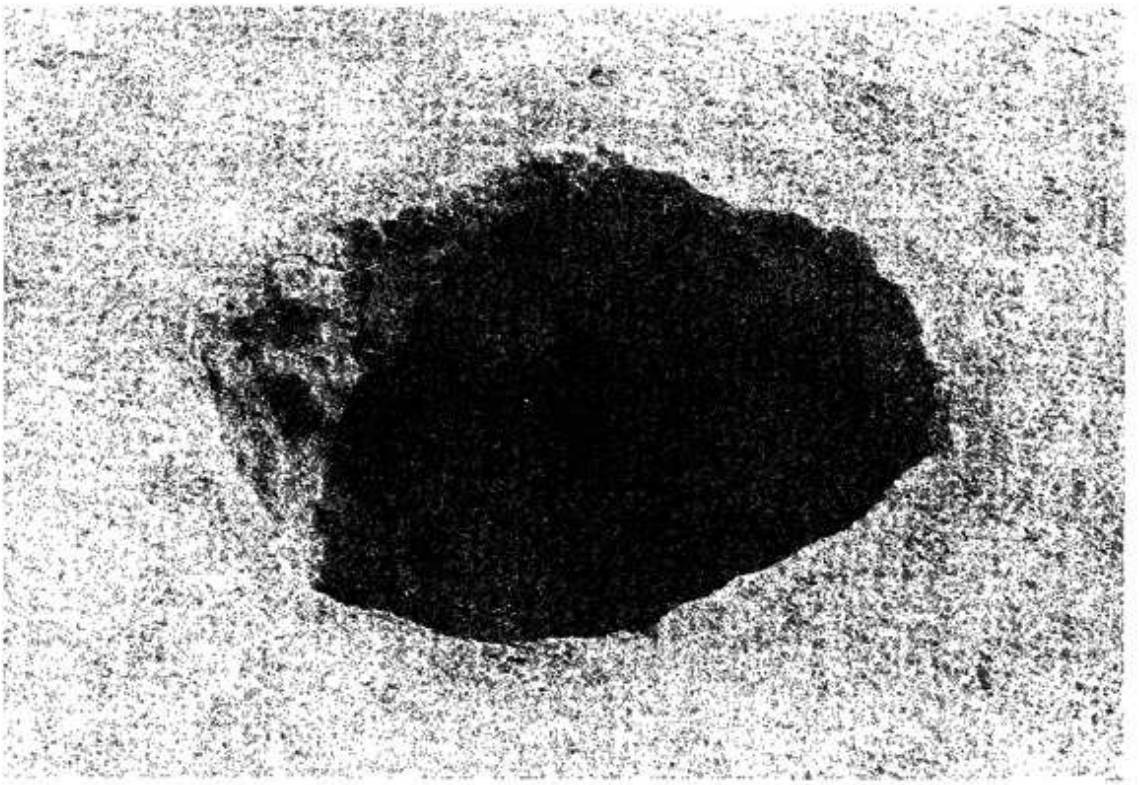


2．SK-27完掘状況

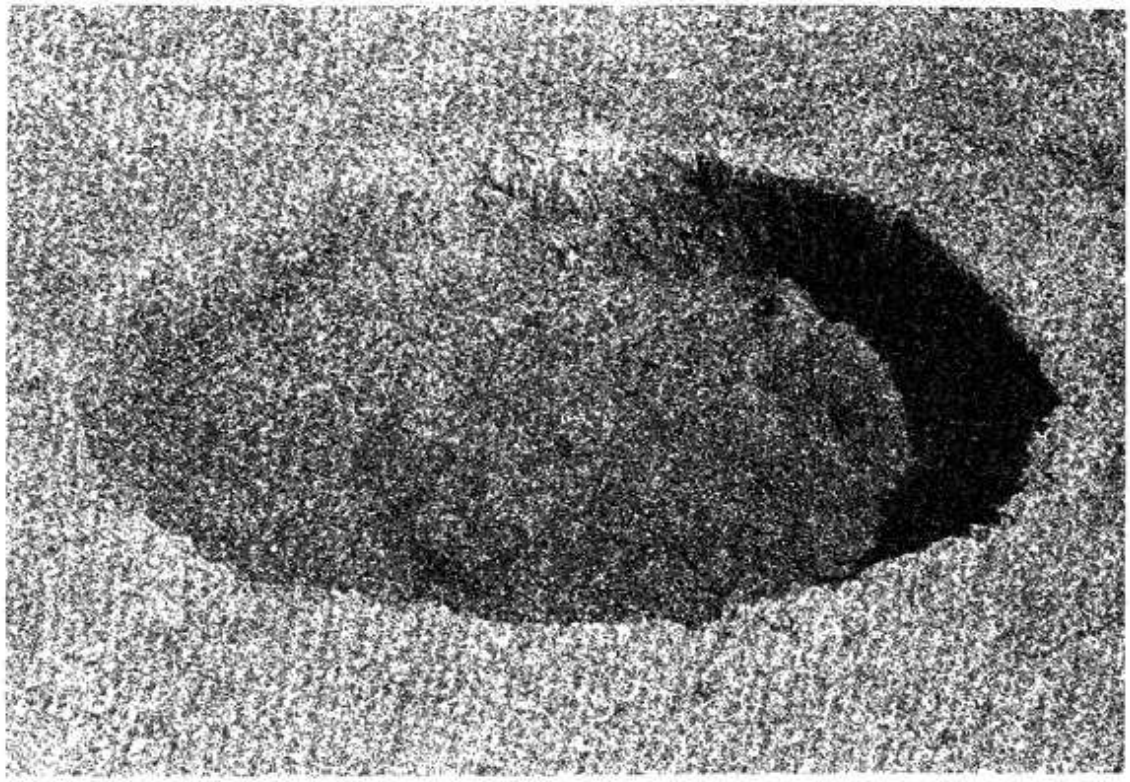
図版24



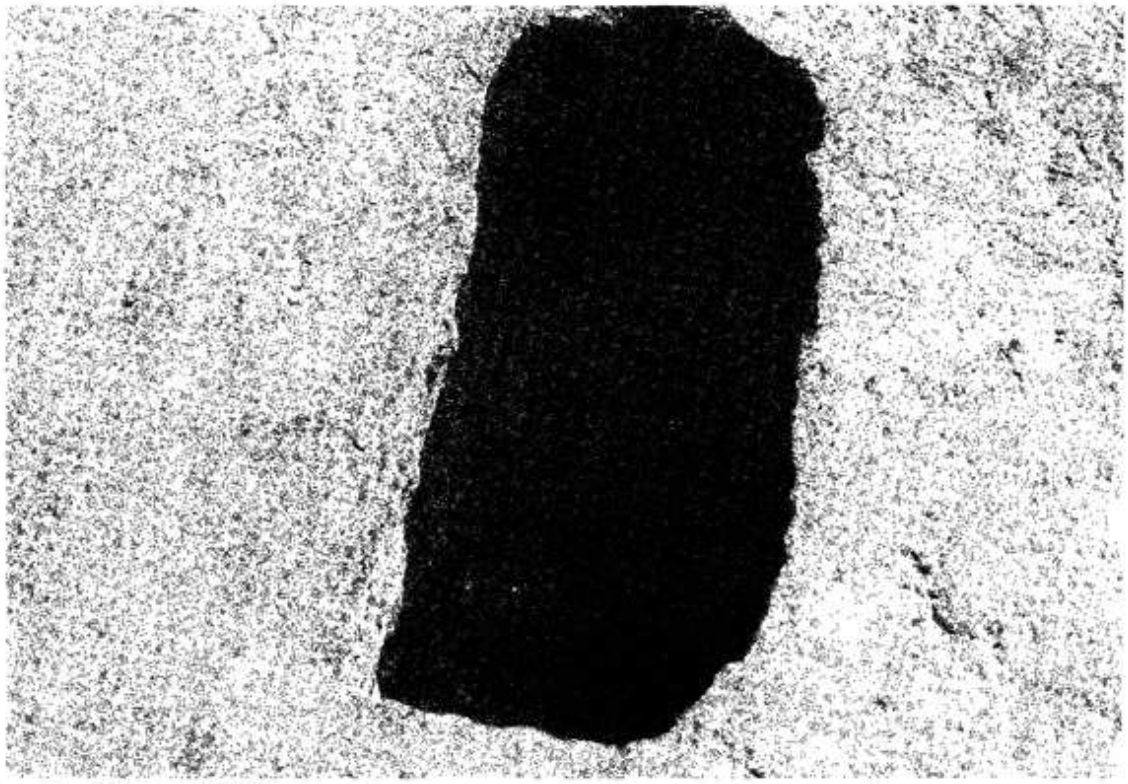
1．SK-28完掘状況



2．SK-29完掘状況

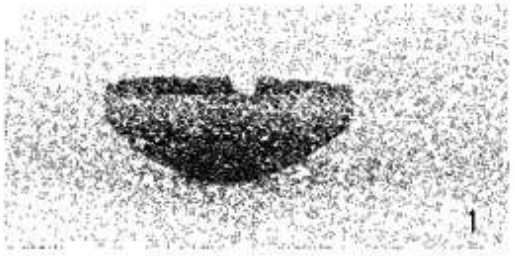


1．SK-03B完掘状況



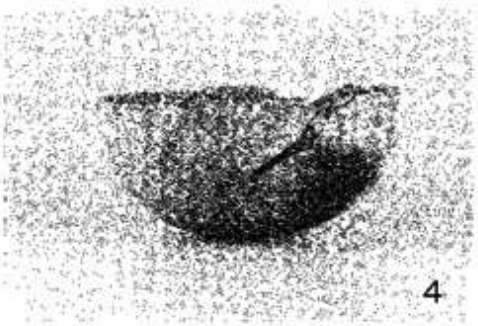
2．SK-31完掘状況

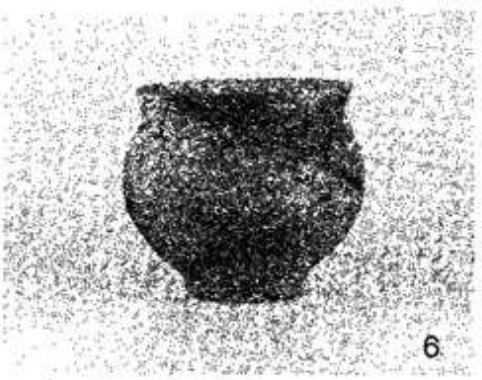
図版26


1

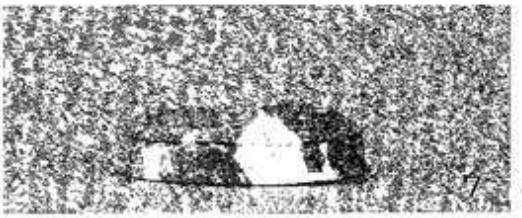
2

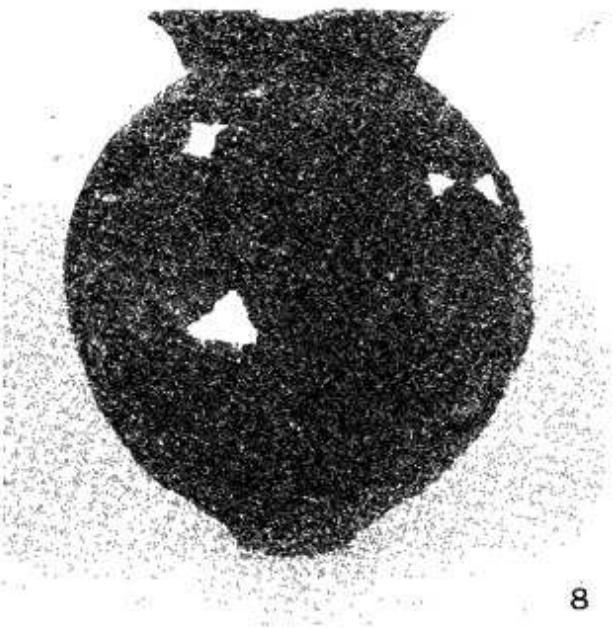
3


4


6

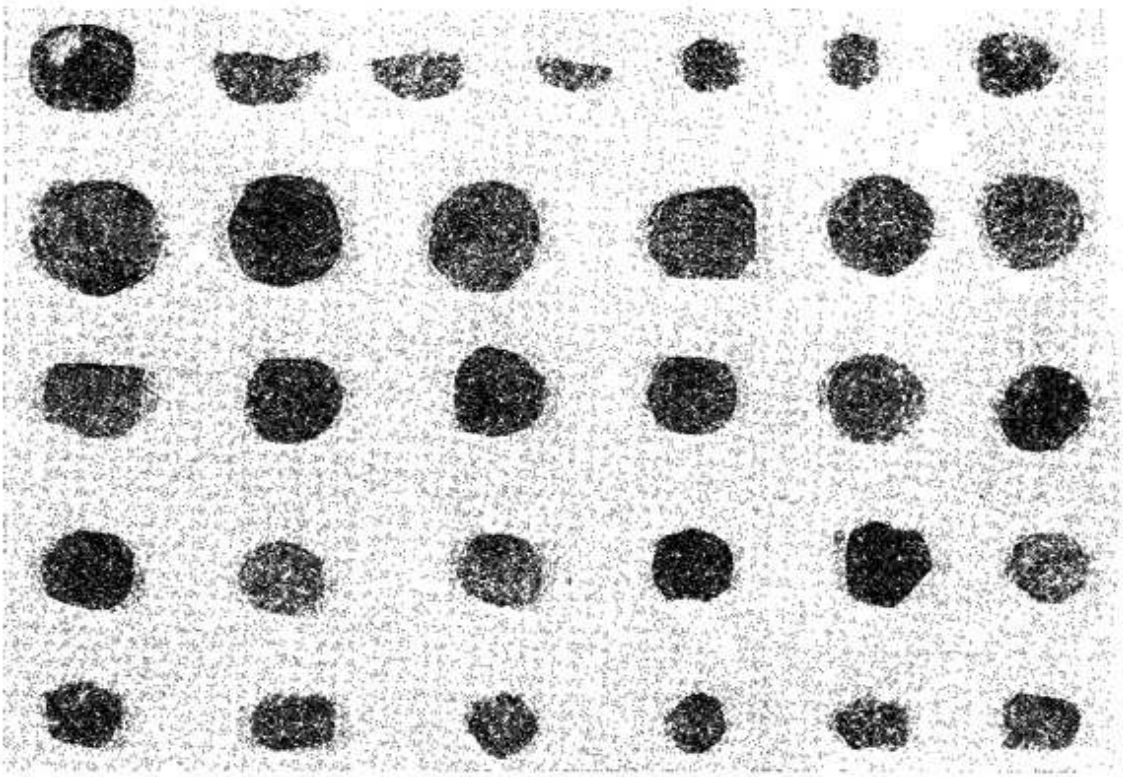
5


7

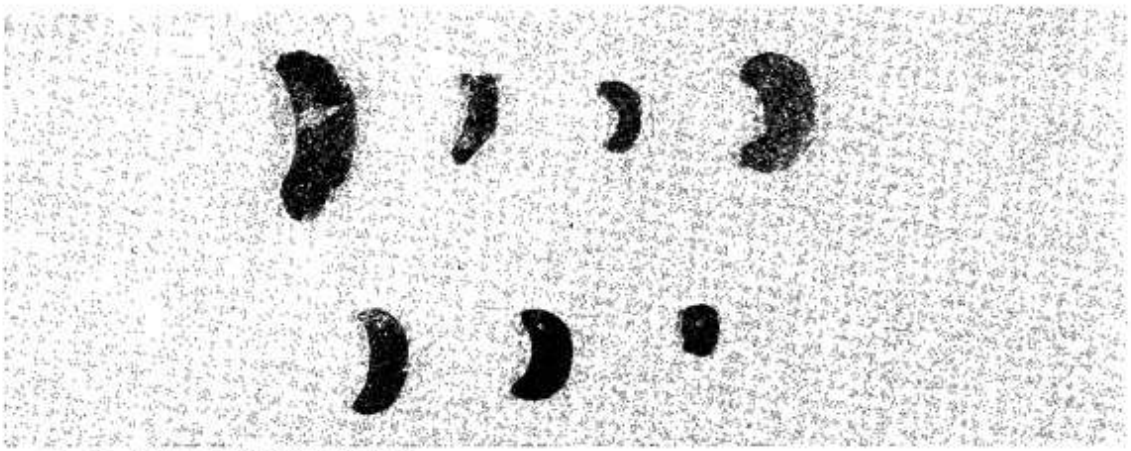

8

1．SI-01出土土器

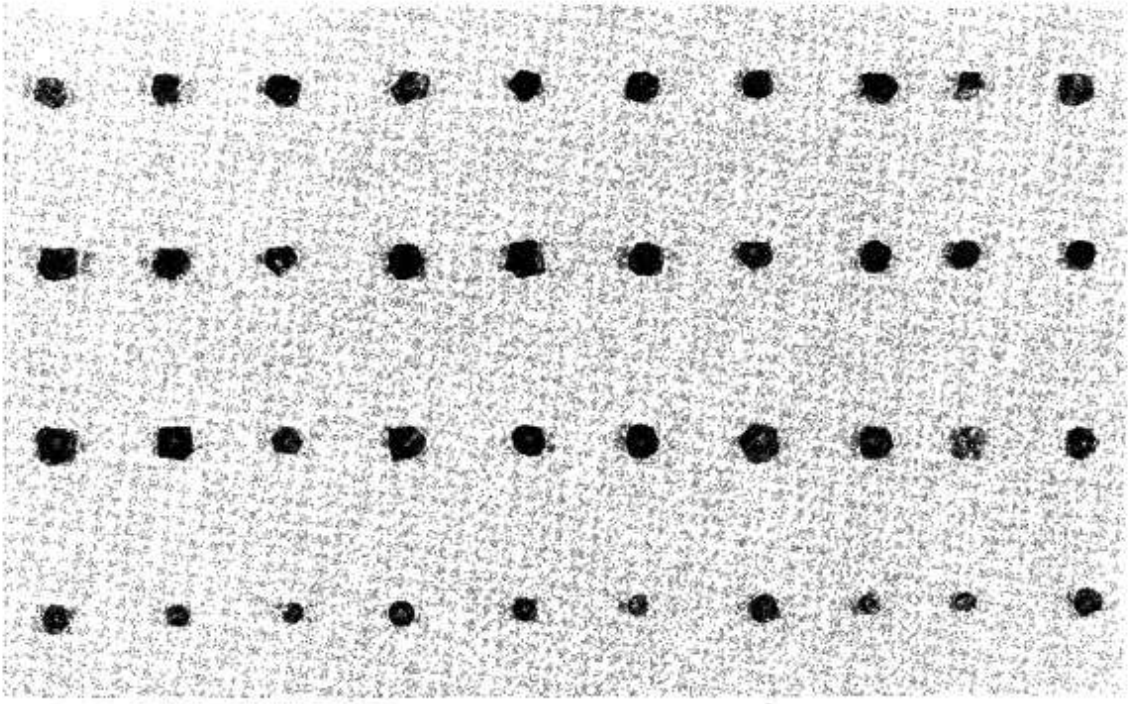
1．SI-01 出土石製模造品（剣）



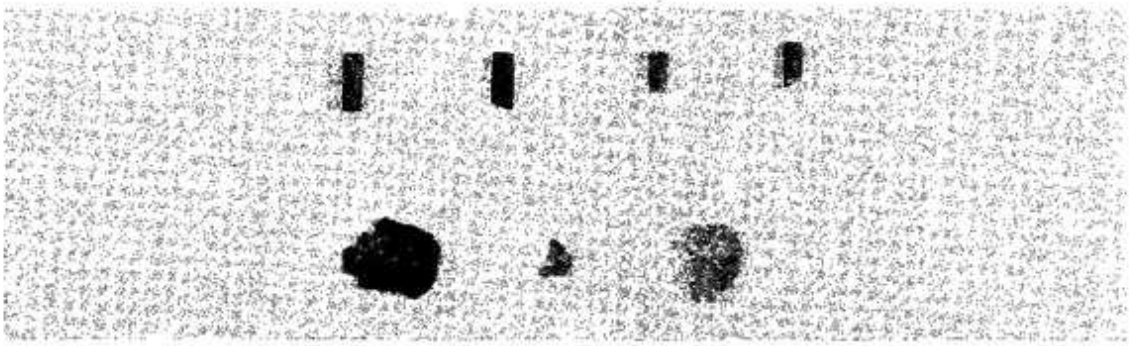
2．SI-01 出土石製模造品（有孔円板）



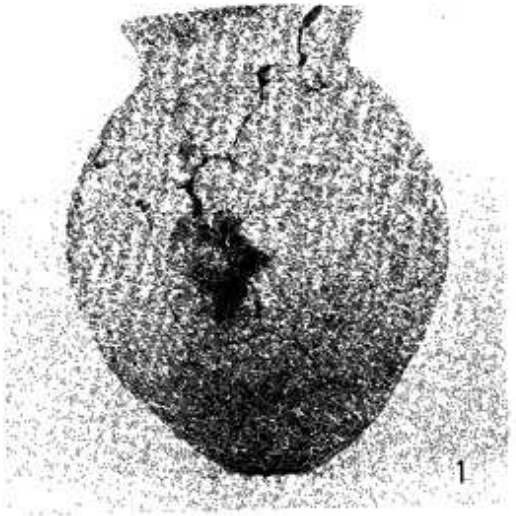
1．SI-01出土石製模造品（勾玉）

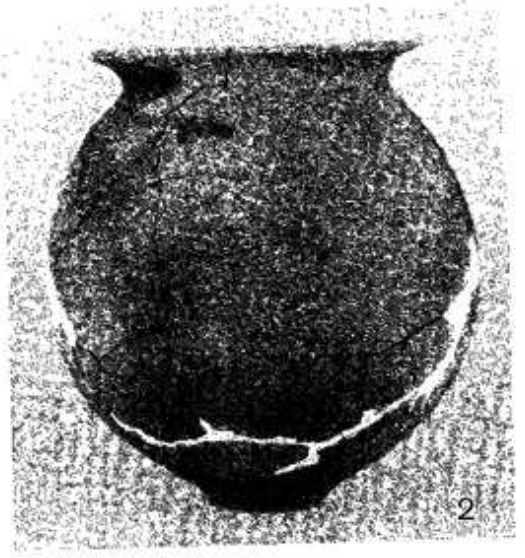


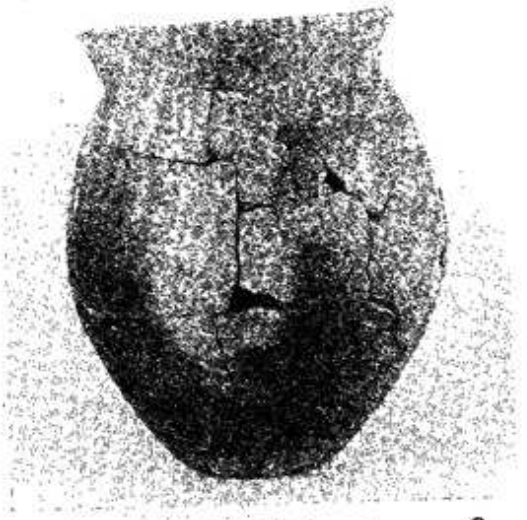
2．SI-01出土石製模造品（臼玉）

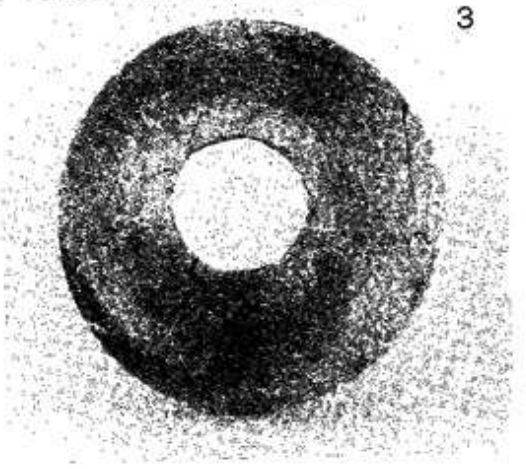


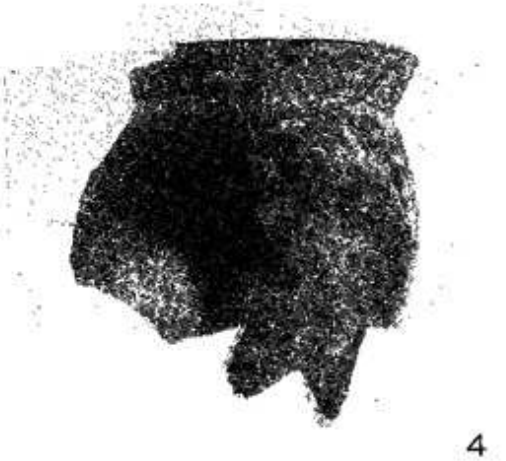
3．SI-01出土石製模造品（上は管玉・下は不明品）


1


2


3

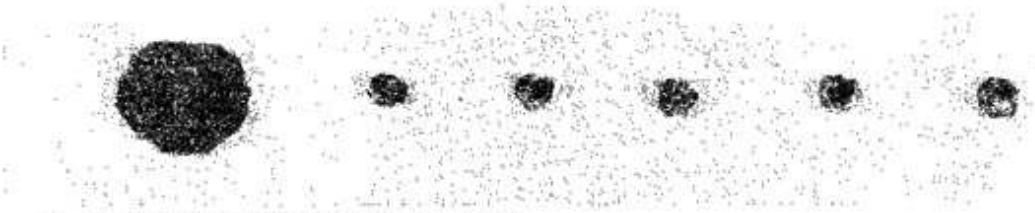



4

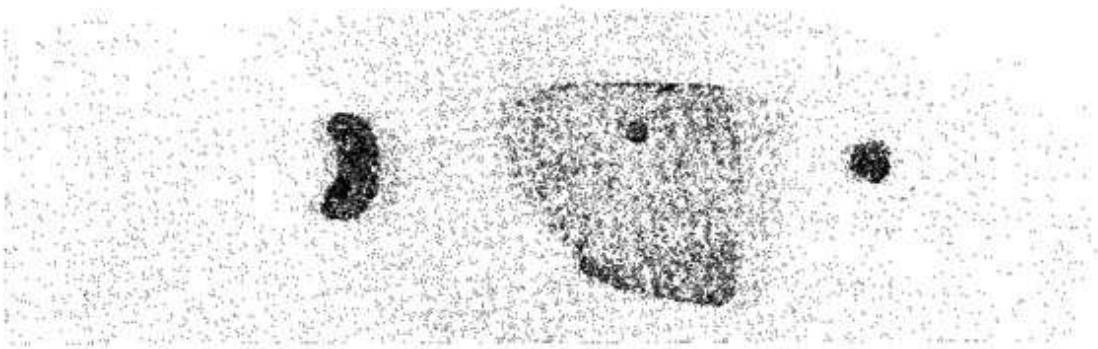
1．SI-02出土土器

図版30

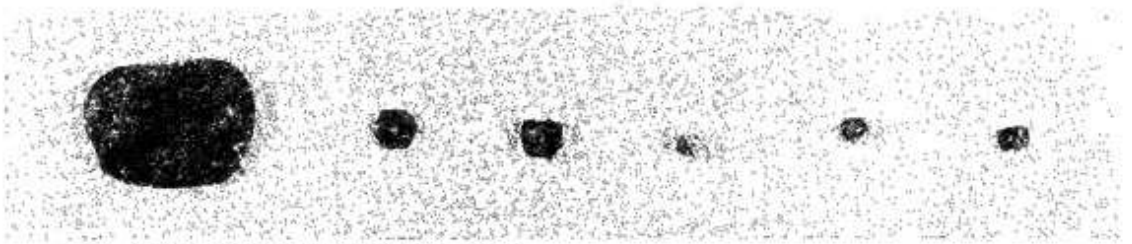
1．SI-02出土滑石の原材



1．SI-02出土石製模造品（有孔円板・臼玉）



2．SI-04出土石製模造品（勾玉・臼玉）と砥石



3．SI-05出土石製模造品（有孔円板・臼玉）

栃木県埋蔵文化財調査報告第70集

一般国道4号（新4号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鷹の巣前遺跡
本郷前遺跡
向野原遺跡

発行　栃木県教育委員会
財栃木県文化振興事業団
昭和60年3月30日
編集　財栃木県文化振興事業団
栃木県宇都宮市桜4-2-2
TEL. 0286(21)1611
印刷　株式会社　泰明印刷
宇都宮市八千代2-15-14
TEL. 0286(58)7780
昭和60年3月29日